

外 町 遺 跡

例 言

1. 本書は、愛知県西春日井郡新川町・清洲町に所在する外町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は愛知県土木部が進めている県道新川・甚目寺線建設に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成3年4月～8月と平成4年5月～8月であり、平成4年度と平成5年度には報告書作成のための整理作業を実施した。調査面積は、平成3年度が1,890㎡であり、平成4年度が680㎡である。
4. 調査担当者は、以下の通りである。

平成3年度 城ヶ谷和広（主査・現愛知県立千種高等学校教諭）・小嶋廣也（調査研究員）・鈴木正貴（同）

平成4年度 鷲見豊（主査・現西春日井郡西春町立西春小学校教諭）・大竹正吾（調査研究員）・小嶋廣也（同）
5. 調査に当たっては次の各関係機関から御指導・御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部名古屋土木事務所・新川町教育委員会
6. 遺物の整理、製図等については次の方々の協力を得た。

河合明美・伊藤直子（調査研究補助員）・木全左奈恵・小西恵子（発掘調査補助員）

石川倫子・加藤ちか子・山本章子・河野実佳子・中島由美子・柵木えみ子・藪田久子（整理補助員）

朝岡恵美子・石黒美佐子・岩田明美・稲垣智子・河村ひろみ・木全淑子・小井節子・斉藤夏美・桜井乃布香・志賀三津子・須田カツミ・関田美千子・中桐信子・久永弘子・福田妙子・堀田可代子・光岡香代子・百瀬詔子・山崎久美子・山之内なつ子・山本衣江（整理作業員）

小里恭子（学生アルバイト）

（以上敬称略）
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
8. 遺構番号は、次のアルファベットによる分類記号と、美濃街道に近いところから通し番号を付して表記している。

S D：溝 S E：井戸 S K：土坑 Pit：柱穴（径50cm以下の土坑も含む）

S X：その他
9. 本書の執筆及び編集は、加藤安信調査課長の指導のもと小嶋が担当したが、第Ⅰ章第2節（1）・第Ⅱ章第1節は大竹正吾、第Ⅲ章第4節（6）・（7）は伊藤直子、第Ⅳ章は(株)バリノ・サーヴェイが分担執筆した。文責は、各文末に示した。
10. 本書をまとめるに当たり、次の各氏の御指導・御協力を得た。

安芸穂子・安藤次子・安藤美恵子・石井莊男・遠藤才文・大橋康二・尾野善裕・金子健一・金田 勉・小谷定男・千葉孝弥・前川嘉宏・村上伸之・新田 洋

（五十音順、敬称略）
11. 調査記録は本センターで保管している。
12. 出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯 … 1	
2. 調査の経過 … 2	
第2節 立地と歴史的環境	4
1. 立地 … 4	
2. 歴史的環境 … 5	

第Ⅱ章 遺 構

第1節 基本層序	7
第2節 中世～江戸時代中期の遺構	9
1. 概要 … 9	
2. 溝 … 10	
3. 礎石群 … 11	
4. 土坑 … 12	
5. 井戸 … 12	
第3節 江戸時代後期の遺構	13
1. 概要 … 13	
2. 溝 … 15	
3. 土坑 … 15	
4. 井戸 … 17	
5. 畝状遺構と用水 … 18	
6. 水田 … 19	

第Ⅲ章 遺 物

第1節 出土遺物の概要	23
第2節 古代の遺物	23
第3節 中世の遺物	25
第4節 近世の遺物	26
1. 概要 … 26	
2. 分類 … 26	
3. 統計方法 … 32	
4. 陶磁器類 … 33	
5. 加工円盤 … 87	
6. 瓦類 … 91	
7. 人形・ミニチュア類 … 96	
8. 木製品 … 100	
9. 金属製品 … 103	
10. 石・ガラス製品 … 104	

第Ⅳ章 科学分析

第1節 ¹⁴ C年代測定	107
第2節 出土木製品の樹種	108
第3節 胎土重鉍物分析	110

第Ⅴ章 結 語

第1節 グリッド別遺物出土状況	117
第2節 遺物組成	118
第3節 まとめ	121

図版目次

- | | | |
|-------|--|---|
| 図版 1 | 遺構配置図 (1)
91 A 区・91 B 区 | 区東端
92 B 2 区調査区西半 |
| 図版 2 | 遺構配置図 (2)
91 C 区・92 A 区・92 B 1 区東半 | 図版 11 |
| 図版 3 | 遺構配置図 (3)
91 D 1 区・92 B 1 区西半 | 遺構 (6)
92 B 2 区調査区西端・調査区中央・
S K 240・S K 241・S K 299・S
K 261・S K 260 遺物出土状態 |
| 図版 4 | 遺構配置図 (4)
91 D 2 区・92 B 2 区西半 | 図版 12 |
| 図版 5 | 調査区周辺 | 近世の遺物 (1)
供膳具 (椀) |
| 図版 6 | 遺構 (1)
91 A 区調査区全景・S D 035・調査
区東半
91 B 区調査区全景・S D 025 | 図版 13 |
| 図版 7 | 遺構 (2)
91 C 区調査区全景
91 D 1 区調査区全景・S K 036・S
K 025遺物出土状態 | 近世の遺物 (2)
供膳具 (椀・小椀・皿) |
| 図版 8 | 遺構 (3)
91 D 2 区調査区西半・調査区西端・
S K 230・S K 231・調査区中央・
調査区全景 | 図版 14 |
| 図版 9 | 遺構 (4)
92 A 区調査区全景・ピット列・東壁
セクション
92 B 1 区調査区全景・S K 075・S
K 062遺物出土状態 | 近世の遺物 (3)
供膳具 (皿) |
| 図版 10 | 遺構 (5)
92 B 1 区 S D 014・S D 011・調査 | 図版 15 |
| | | 近世の遺物 (4)
供膳具 (皿・鉢) |
| | | 図版 16 |
| | | 近世の遺物 (5)
調理具・貯蔵具 |
| | | 図版 17 |
| | | 近世の遺物 (6)
貯蔵具・灯火具・火具 |
| | | 図版 18 |
| | | 近世の遺物 (7)
火具・化粧具・神仏具・喫煙具・
調度具 |
| | | 図版 19 |
| | | 近世の遺物 (8)
調度具・蓋類・金属製品・加工円
盤・瓦類 |
| | | 図版 20 |
| | | 近世の遺物 (9)
人形類・石製品・木製品
古代・中世の遺物 |

挿図目次

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|--------|---|
| 第 1 図 | 調査区位置図…………… 1 | 第 8 図 | 92 B 2 区東半平面図・断面図…………… 10 |
| 第 2 図 | 発掘調査・整理作業に参加して
いただいた皆さん…………… 3 | 第 9 図 | S D 035平面図・断面図…………… 10 |
| 第 3 図 | 外町遺跡周辺の自然堤防分布図…………… 4 | 第 10 図 | 92 B 2 区調査区西端検出状況…………… 11 |
| 第 4 図 | 外町遺跡周辺の遺跡分布図…………… 6 | 第 11 図 | 92 B 2 区調査区中央検出状況…………… 11 |
| 第 5 図 | 土層セクション図①…………… 7 | 第 12 図 | S K 240・S K 241, S K 259,
Pit 272平面図・断面図…………… 11 |
| 第 6 図 | 土層セクション図②…………… 8 | 第 13 図 | S K 260・S K 261平面図・断面
図…………… 12 |
| 第 7 図 | 下層主要遺構配置図…………… 9 | | |

第14図	S E 201平面図・断面図……………12	第53図	近世の遺物 (13) S K 260 ……48
第15図	上面主要遺構配置図……………14	第54図	S K 289出土陶磁器類の用途組成…49
第16図	S D 002北壁セクション図……………15	第55図	近世の遺物 (14) S K 289 ……50
第17図	S K 186平面図・断面図……………15	第56図	S K 228出土陶磁器類の用途組成…51
第18図	S K 025平面図・断面図……………16	第57図	近世の遺物 (15) S K 228① ……52
第19図	S K 061・S K 062平面図・断面 図……………16	第58図	近世の遺物 (16) S K 228② ……53
第20図	S K 068平面図・断面図……………17	第59図	S K 223出土陶磁器類の用途組成…54
第21図	91D1 区畝状遺構平面図・断面図…18	第60図	近世の遺物 (17) S K 223① ……54
第22図	91C 区畝状遺構平面図・断面図…18	第61図	近世の遺物 (18) S K 223② ……55
第23図	S D 025東壁セクション図……………18	第62図	その他の土坑 (下面) 合計陶磁器 類の用途組成……………56
第24図	S D 014平面図・断面図……………19	第63図	近世の遺物 (19) その他の土坑 (下 面) ①……………57
第25図	92A 区東壁セクション図……………19	第64図	近世の遺物 (20) その他の土坑 (下 面) ②……………58
第26図	古代の遺物……………24	第65図	その他の土坑 (上面) 合計陶磁器 類の用途組成……………59
第27図	中世の遺物……………25	第66図	近世の遺物 (21) その他の土坑 (上 面) ①……………60
第28図	近世陶磁器類分類図 (1) ……27	第67図	近世の遺物 (22) その他の土坑 (上 面) ②……………61
第29図	近世陶磁器類分類図 (2) ……29	第68図	近世の遺物 (23) その他の土坑 (上 面) ③……………62
第30図	近世陶磁器類分類図 (3) ……31	第69図	近世の遺物 (24) その他の土坑 (上 面) ④……………63
第31図	近世出土陶磁器類の用途組成…33	第70図	その他の遺構合計陶磁器類の用途 組成……………64
第32図	井戸合計陶磁器類の用途組成…34	第71図	近世の遺物 (25) その他の遺構①…64
第33図	近世の遺物 (1) 井戸合計 ……34	第72図	近世の遺物 (26) その他の遺構②…65
第34図	S D 035出土陶磁器類の用途組成…35	第73図	近世の遺物 (27) その他の遺構③…66
第35図	近世の遺物 (2) S D 035 ……35	第74図	整地層出土陶磁器類の用途組成…67
第36図	S D 209出土陶磁器類の用途組成…36	第75図	近世の遺物 (28) 整地層①……………68
第37図	近世の遺物 (3) S D 209 ……36	第76図	近世の遺物 (29) 整地層②……………69
第38図	S D 202出土陶磁器類の用途組成…37	第77図	近世の遺物 (30) 整地層③……………70
第39図	近世の遺物 (4) S D 202 ……37	第78図	近世の遺物 (31) 整地層④……………71
第40図	S D 025出土陶磁器類の用途組成…38	第79図	近世の遺物 (32) 整地層⑤……………72
第41図	近世の遺物 (5) S D 025① ……39	第80図	近世の遺物 (33) 整地層⑥……………73
第42図	近世の遺物 (6) S D 025② ……40	第81図	近世の遺物 (34) 整地層⑦……………74
第43図	近世の遺物 (7) S D 025③ ……41	第82図	近世の遺物 (35) 整地層⑧……………75
第44図	近世の遺物 (8) S D 025④ ……42	第83図	近世の遺物 (36) 整地層⑨……………76
第45図	S D 002出土陶磁器類の用途組成…43	第84図	近世の遺物 (37) 整地層⑩……………77
第46図	近世の遺物 (9) S D 002① ……43		
第47図	近世の遺物 (10) S D 002② ……44		
第48図	その他の溝合計陶磁器類の用途組 成……………45		
第49図	近世の遺物 (11) その他の溝 ……46		
第50図	S K 240出土陶磁器類の用途組成…47		
第51図	近世の遺物 (12) S K 240 ……47		
第52図	S K 260出土陶磁器類の用途組成…48		

第85図	近世の遺物 (38) 整地層⑪……………78	第103図	近世の遺物 (53) 人形・ミニチュア類② 99
第86図	近世の遺物 (39) 整地層⑫……………79	第104図	近世の遺物 (54) 木製品①……………100
第87図	検出陶磁器類の用途組成……………80	第105図	近世の遺物 (55) 木製品②……………101
第88図	近世の遺物 (40) 検出①……………81	第106図	近世の遺物 (56) 木製品③……………102
第89図	近世の遺物 (41) 検出②……………82	第107図	近世の遺物 (57) 金属製品①……………103
第90図	その他陶磁器類の用途組成……………83	第108図	近世の遺物 (58) 金属製品②……………103
第91図	近世の遺物 (42) その他①……………84	第109図	近世の遺物 (59) 石製品①……………104
第92図	近世の遺物 (43) その他②……………85	第110図	近世の遺物 (60) 石製品②……………105
第93図	近世の遺物 (44) その他③……………86	第111図	近世の遺物 (61) 石製品③……………106
第94図	加工円盤材質・転用遺物組成図……………87	第112図	材の顕微鏡写真……………109
第95図	近世の遺物 (45) 加工円盤①……………88	第113図	分析遺物実測図……………113
第96図	近世の遺物 (46) 加工円盤②……………89	第114図	試料の胎土重鉍物組成……………116
第97図	近世の遺物 (47) 加工円盤③……………90	第115図	グリッド別遺物出土状況図……………117
第98図	近世の遺物 (48) 瓦類①……………91	第116図	遺構別出土遺物の器種組成図……………119
第99図	近世の遺物 (49) 瓦類②……………92	第117図	遺構別出土遺物の材質組成図……………120
第100図	近世の遺物 (50) 瓦類③……………94	第118図	地籍図……………122
第101図	近世の遺物 (51) 瓦類④……………95	第119図	「須ヶ口古図」……………122
第102図	近世の遺物 (52) 人形・ミニチュア類①・98		

表 目 次

第1表	発掘調査・整理作業工程表……………3	第19表	S K 228出土陶磁器類集計表……………51
第2表	遺構一覧表 (1) ……………20	第20表	S K 223出土陶磁器類集計表……………54
第3表	遺構一覧表 (2) ……………21	第21表	その他の土坑 (下面) 合計陶磁器類集計表……………56
第4表	遺構一覧表 (3) ……………22	第22表	その他の土坑 (上面) 合計陶磁器類集計表……………59
第5表	近世陶磁器類分類表 (1) ……………26	第23表	その他の遺構合計陶磁器類集計表……………64
第6表	近世陶磁器類分類表 (2) ……………28	第24表	整地層出土陶磁器類集計表……………67
第7表	近世陶磁器類分類表 (3) ……………30	第25表	検出陶磁器類集計表……………80
第8表	近世出土陶磁器類集計表……………33	第26表	その他陶磁器類集計表……………83
第9表	井戸合計陶磁器類集計表……………34	第27表	加工円盤出土遺構一覧表……………87
第10表	S D 035出土陶磁器類集計表……………35	第28表	人形・ミニチュア類観察表……………97
第11表	S D 209出土陶磁器類集計表……………36	第29表	木製品出土遺構一覧表……………100
第12表	S D 202出土陶磁器類集計表……………37	第30表	金属製品出土遺構一覧表……………103
第13表	S D 025出土陶磁器類集計表……………38	第31表	石製品出土遺構一覧表……………104
第14表	S D 002出土陶磁器類集計表……………43	第32表	分析遺物観察表……………112
第15表	その他の溝合計陶磁器類集計表……………45	第33表	胎土重鉍物分析結果表……………115
第16表	S K 240出土陶磁器類集計表……………47		
第17表	S K 260出土陶磁器類集計表……………48		
第18表	S K 289出土陶磁器類集計表……………50		

第I章 調査概要



第 I 章 調査概要 目次

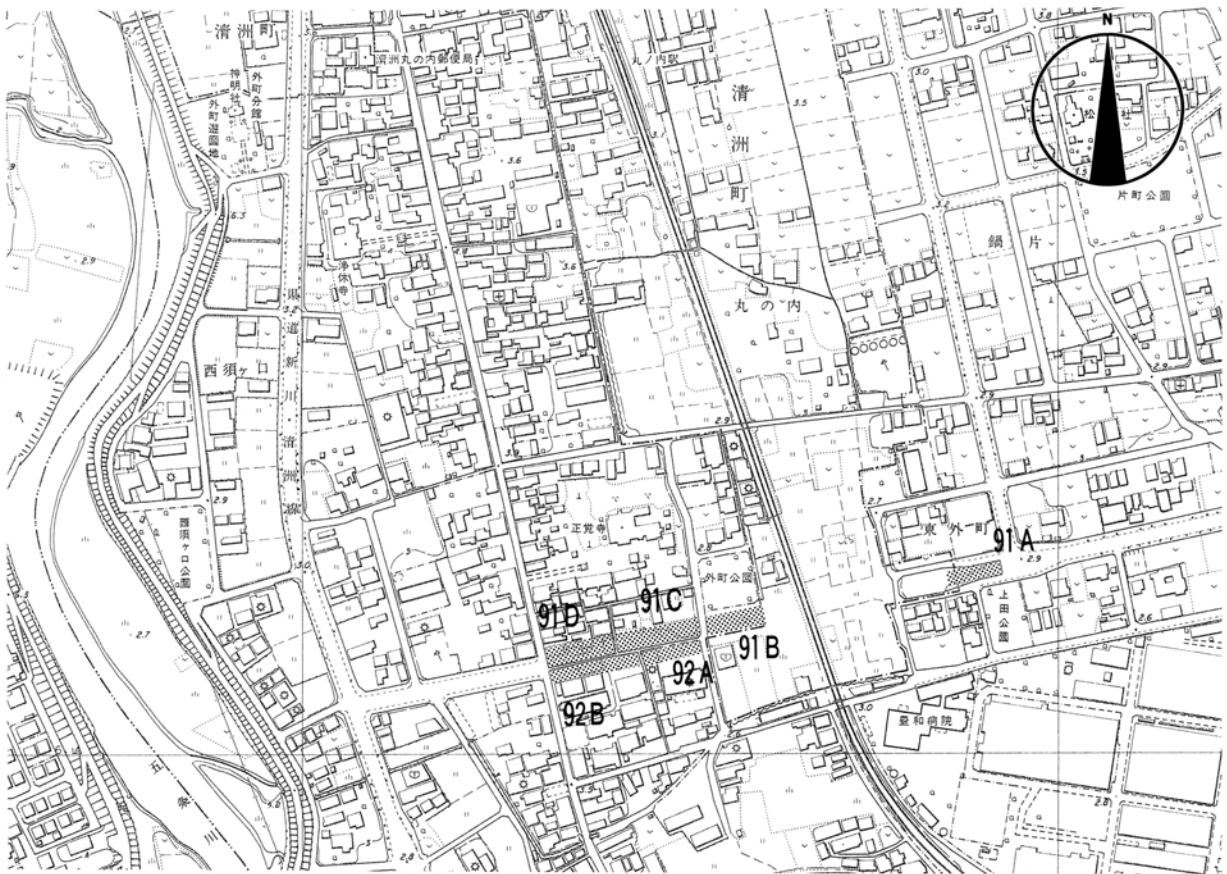
第 1 節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
第 2 節 立地と歴史的環境	4
1. 立地	4
2. 歴史的環境	5

第 1 節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

外町遺跡は、愛知県西春日井郡新川町大字須ヶ口字下外町・東外町と、同郡清洲町大字清洲字御船頭に所在する江戸時代を中心とした遺跡である。外町地区は、新川町の北西部にあたり隣接する清洲町との境界付近に位置し、現在は周辺に水田の点在する閑静な住宅地域となっている。遺跡は、尾張平野の中央部を南流する五条川の左岸に位置し、標高は約 3 m 前後を測り、東になだらかに傾斜している。今回の調査区は中世以来の美濃街道に面しており、北方には清洲城下町遺跡が広がっている。

愛知県土木部名古屋土木事務所では、県道新川・甚目寺線建設を計画したが、その予定用地内に外町遺跡が所在しており、事前に発掘調査を実施し記録保存する必要性が認められた。このため、遺跡の発掘調査が計画され、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査については、平成 2 年 10 月に実施した範囲確認調査による線引きに基づいて、本調査を平成 3 年度と平成 4 年度の 2 ヶ年に分けて実施した。発掘調査面積は、平成 3 年度 1,890㎡、平成 4 年度 680㎡で総計 2,570㎡に及ぶ。調査区は、各年度毎に廃土置き場、諸条件などを勘案して分割し、平成 3 年度には A 区～D 区の 4 ヶ所、平成 4 年度には A 区・B 区の 2 ヶ所を設定した。



第 1 図 調査区位置図 (1/5000)

2. 調査の経過

発掘調査は、各調査区ともバックホウにより、現地表面から表土を除去する作業から開始した。その後、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5 mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削し遺構を検出する方法をとった。各調査区は、包含層が薄かったり、旧水田耕作土である黒灰色粘質土があらわれたりしてすぐにベース面が検出され、基本的には1面調査のみであった。しかし、美濃街道に面した調査区である91D区・92B区においては、整地層部分が確認され2度の生活面が想定されたため、2面調査を実施した。このため、本書では、表現上必要な場合のみ調査区名にアラビア数字を付け、上層検出面（以下上面）に1、下層検出面（以下下面）に2を付与して表現している。住宅移転に伴う攪乱が激しかったり、発掘調査の時期が梅雨や地下水位の上昇期にあたり夥しい湧水に悩まされ、作業は難航した。

遺構の測量については、ヘリコプター又はクレーンによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50・1/100・1/200基本平面図を作成したほか、91A区・91D2区・92B2区については1/50基本平面図を、また重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。

各調査区より出土した遺物は、2年分を合わせると27ℓ入りコンテナ約300箱に及ぶ。その大半は、近世陶磁器類や瓦類で占められているが、その他に木製品や金属製品、石製品、中世の山茶碗類、古代の須恵器・灰釉陶器などが見られる。出土遺物の整理については、発掘調査に継続して洗浄作業や出土地点の注記作業を実施した。平成4年度からは、発掘調査と並行して報告書作成に向けて、遺物実測図の作成や口縁部計測法によるカウントなどの整理作業を実施した。 (小嶋 廣也)

また、発掘調査の参加者は以下の通りである。

発掘作業員

荒木優美子・飯田 弘子・石原八重子・伊藤 栄・伊藤 とよ・猪子とし子・猪子みよ子・
宇佐美秋子・江川 新・江本タケ子・大丸ひろ子・加藤 生代・加藤 信子・川口 絹代・
川崎 愛子・桑山 静江・黒谷日佐子・小出 艶子・後藤 恒一・後藤 久子・小西 恵子・
木場 哲・近藤 輝子・近藤 秀子・近藤 瑞子・佐藤富貴子・繁野なつ子・柴山江津子・
下谷 皆二・新海 澄子・園田 正利・滝川かすみ・田中 富子・棚橋 豊子・津川喜代子・
戸田 のぶ・内藤 春枝・長井 ちゑ・中沢 節子・中野 絹枝・中野 泰子・丹羽美代子・
波田野明美・服部三枝子・早川 茂子・早川 光雄・福尾かね子・福田 一子・堀田 方子・
松居 ヨキ・水野たつゑ・宮崎美穂子・三輪 君子・迎 廣・森川 富子・柳生 亘子・
山本真紀子・吉川 光子・吉野 加代・米丸 清子・若松 里美

学生アルバイト

伊藤 香代・大平 明夫・加藤久美子・苗村 明美・林 由香子・日榮 智子

(五十音順・敬称略)

<参考文献>

- 『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成2年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成3年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992
- 『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成4年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1993

工程		時期											91											92											93											94		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3											
発掘	A区	□																																														
	B区	□ 空撮 5/23																																														
	C区	□ 空撮 7/3																																														
	D1区	□ 空撮 7/23																																														
	D2区	□																																														
調査	92 A区												□ 空撮 5/29																																			
	B1区												□ 空撮 5/29																																			
	B2区												□																																			
整理	基礎整理	▨											▨											▨											▨													
	報告書作成												■											■											■													
		洗浄・注記											洗浄・注記											接合 分類											カウント													
													年報刊行											年報刊行											報告書刊行													
													遺物実測																																			

第1表 発掘調査・整理作業工程表

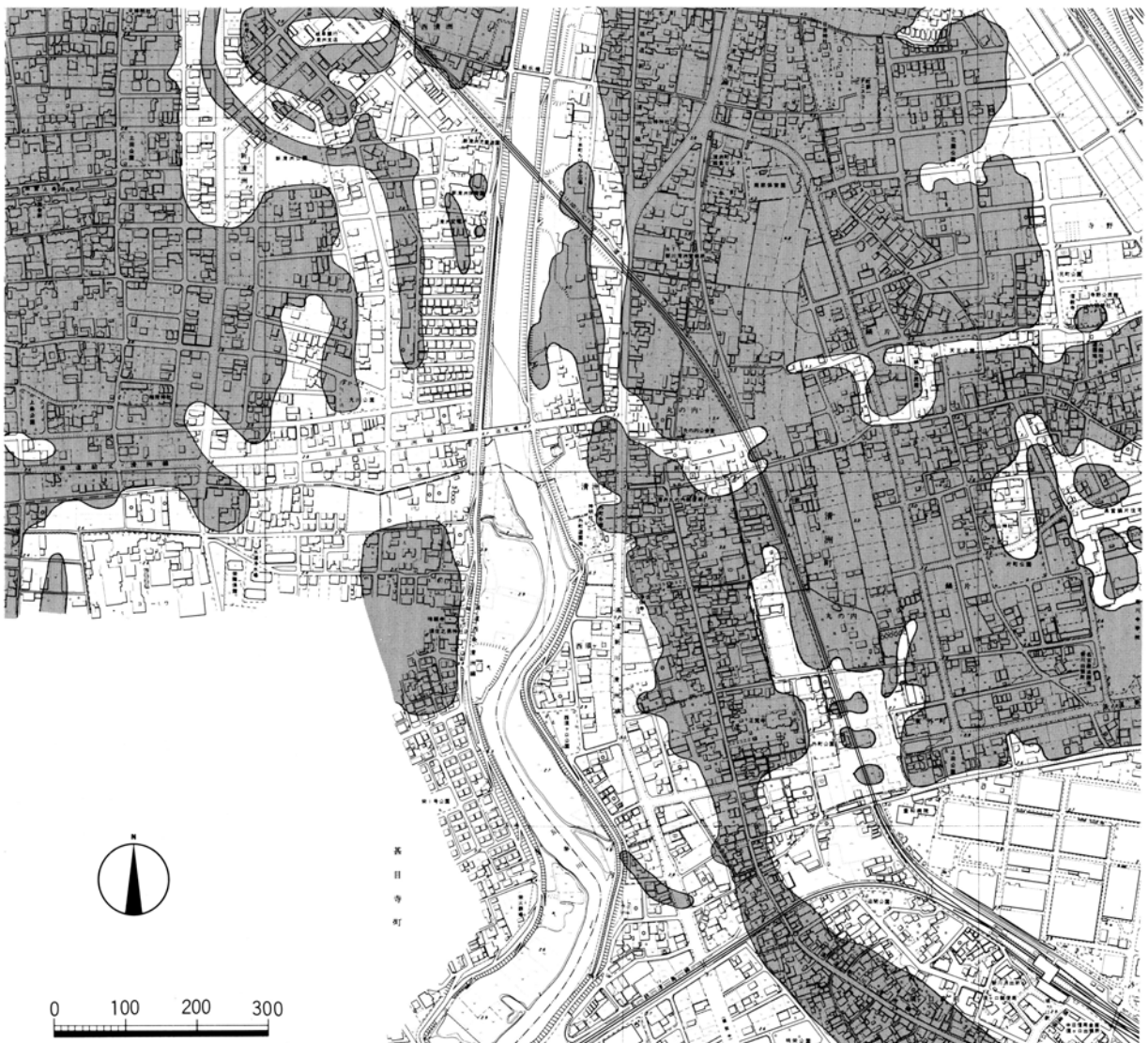


第2図 発掘調査・整理作業に参加していただいた皆さん

第2節 立地と歴史的環境

1. 立地

濃尾平野は、主に木曾川・長良川・揖斐川によって形成された沖積平野である。この地域の人々は、三川と深い結び付きを持って生活してきた。外町遺跡周辺の人々も庄内川水系の五条川と関わりを持ってきた。五条川は、現在、庄内川の水系となっているが、「御囲堤」の築堤により木曾川からの流入を閉鎖され、その上流部を1609年に放棄されるまで、木曾川の分流として犬山から、一之枝川として犬山扇状地、濃尾平野の南東部を流れていた。木曾川からの大量の土砂の流入によって、河道に沿って自然堤防が形成され、この微高地を利用し美濃街道が設置されている。街道沿いにある外町遺跡は、主としてこの自然堤防上に展開している。調査区は、五条川左岸の自然堤防とその後背湿地上に位置し、現地表面の標高は2m～3mである。西端の91D、92B区付近が最も高く、東へなだらかに傾斜している。91A、91B、91C、92A区付近は、後背湿地上に位置する。 (大竹正吾)



第3図 外町遺跡周辺の自然堤防分布図 (国土地理院土地条件図を改変・1:5000)

2. 歴史的環境

今回の発掘調査で、初めて先人の生活した痕跡が認められたのは、鎌倉時代中頃である。この時代の溝や土坑などの遺構と山茶碗類の遺物が確認されている。その後やや空白の時期があり、戦国時代後期から再び人々の居住が確認され、以後江戸時代を通じて現在に至っている。目をもう少し広げてみると、縄文時代末以来、この地域と周辺に連綿と人々が分散したり集中したりして生活していた様子を窺うことができる。

外町遺跡では、鎌倉時代以前の遺構は確認されていないが、遺物として須恵器や灰釉陶器などが遺構埋土や包含層などから出土している。遺跡基盤は砂層で、低湿地かつ脆弱な地盤の上に構築された遺構であるため、五条川や庄内川の水 flow や堆積によって破壊された可能性があると思われる。しかし、この周辺に人々が生活していたであろうことは十分に推定することができる。周辺の遺跡としては、弥生時代では、濃尾平野の拠点的な集落である朝日遺跡をはじめとして、阿弥陀寺遺跡・月繩手遺跡、古墳時代では、廻間遺跡や土田遺跡・月繩手遺跡・貴生町遺跡、古代では、大淵遺跡・甚目寺・尾張国分寺、中世では、方領遺跡・森南遺跡・清林寺遺跡・土田遺跡・廻間遺跡・朝日西遺跡・清洲城下町遺跡など、数多くの遺跡をみるることができる。しかし、その集落構造までは明らかにされておらず、本遺跡もこの時期の人々の生活痕を確認しただけで、詳しいことはわかっていない。これからの調査成果を待たざるを得ないといえよう。

織田信長の居城地として知られる清須城は、本遺跡の北方に位置し、その周囲には下津城・岩倉城・小牧山城・那古野城などがある。清須城とその城下町は、信長以後、織田信雄・豊臣秀次・福島正則・松平忠吉・徳川義直と有力大名が次々と配される要地として、この地方の中心都市として機能し、慶長年間の「清須越」の頃には人口数万を擁した全国でも屈指の城下町となっていた。本遺跡においても、この時期に再び人々の生活の痕跡が現れてくるようになったことは先に述べた通りである。しかし、調査面積が狭く、全体を捉えることはできなかった。だが、この時期の遺構・遺物が確認されたことにより、清洲城下町の南のこの地域に外町が形成されていたことが明らかとなった。

清洲城下町も、慶長15年(1610)から3年の歳月をかけて行われた「清須越」により名古屋の地へと移り、城下町は解体された。そしてその後は美濃街道沿いの「清須宿」と周囲に展開する農村へと大きく変化していく。このため、この地も街道沿いに町屋が並び、周囲には田園風景が広がっていたものと思われる。美濃街道とは、熱田・佐屋の渡しを避けて、東海道宮の宿から名古屋城下を抜け(名古屋街道)清洲・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣宿を通り垂井付近で中山道に合流する街道のことであるが、将軍の上洛時や朝鮮通信使・琉球王の通行に利用されたことからみても、単なる地方の支線というよりも主要幹線の一つであったと思われる。成立年代は明らかではないが、清洲城下町の成立・発展と無関係であったとは考えにくい。「清須越」によって失われてしまった活気も、清洲宿が成立し街道に多くの人々が往来することによって、街道沿いの町屋は息を吹き返していったのではないだろうか。その1つの地点として、本遺跡を位置づけることができるといえよう。(小嶋廣也)

<参考文献>

- 『愛知県歴史の道調査報告書Ⅳ -美濃街道・岐阜街道-』 愛知県教育委員会 1990
- 『清洲城下町遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 『清洲城下町遺跡Ⅱ』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992



- | | | | | | | |
|----------|-------------|------------|-----------|------------|-------------|---------|
| 1. 外町遺跡 | 8. 九ノ坪城 | 15. 松ノ木遺跡 | 22. 法性寺遺跡 | 29. 田端城 | 35. 浅野長勝邸跡 | 42. 五条橋 |
| 2. 重吉城 | 9. 平田城 | 16. 廻間遺跡 | 23. 大湖遺跡 | 30. 押切城 | 36. 増田長盛邸跡 | 43. 高札場 |
| 3. 岩倉城 | 10. 月繩手遺跡 | 17. 土田遺跡 | 24. 甚目寺 | 31. 名古屋城 | 37. 清洲宿本陣正門 | 44. 問屋 |
| 4. 伝法寺廃寺 | 11. 貴生町遺跡 | 18. 方領遺跡 | 25. 清林寺遺跡 | 32. 名古屋城 | 38. 外町一里塚道標 | |
| 5. 尾張国府 | 12. 朝日遺跡 | 19. 森南遺跡 | 26. 坂井戸城 | 三の丸遺跡 | 39. 須ヶ口一里塚 | |
| 6. 下津城 | 13. 朝日西遺跡 | 20. 屋敷遺跡 | 27. 小田井城 | 33. 長東正家邸跡 | 40. 美濃路道標 | |
| 7. 野崎城 | 14. 清洲城下町遺跡 | 21. 阿弥陀寺遺跡 | 28. 名塚砦 | 34. 清洲代官所跡 | 41. 江川一里塚跡 | |

第4図 外町遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25000)

第Ⅱ章 遺 構



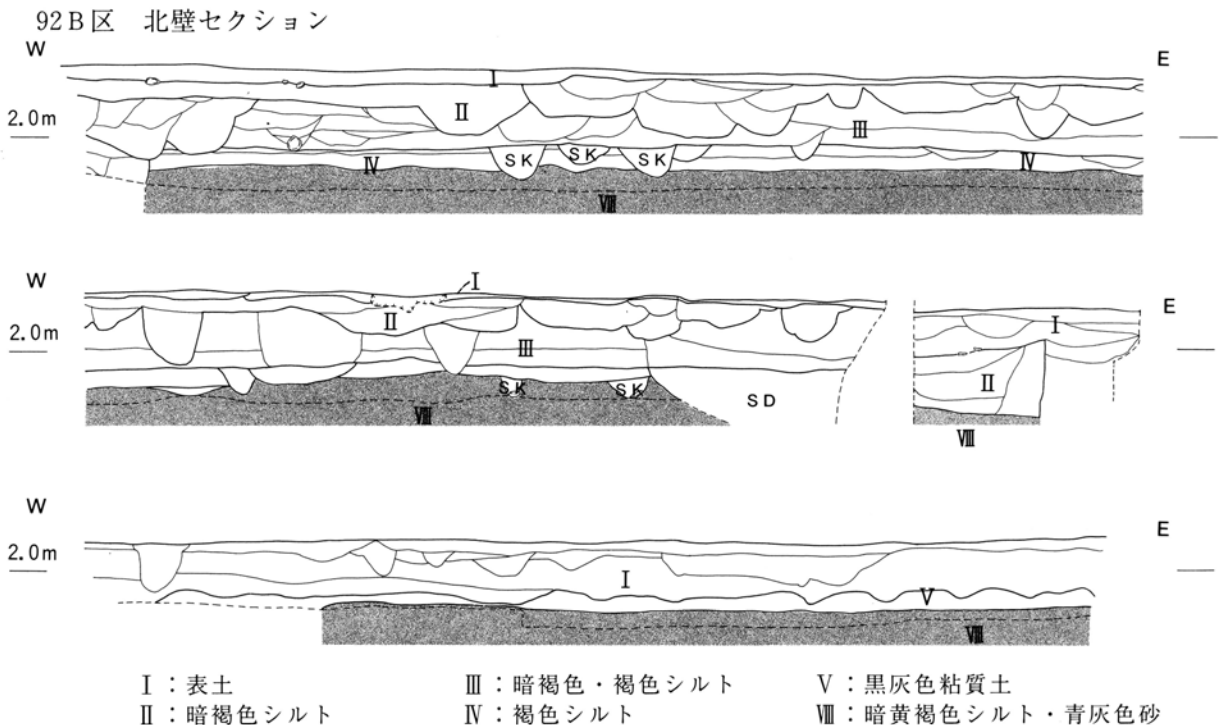
第Ⅱ章 遺構 目次

第1節 基本層序	7
第2節 中世～江戸時代中期の遺構 ...	9
1. 概要	9
2. 溝	10
3. 礎石群	11
4. 土坑	12
5. 井戸	12
第3節 江戸時代後期の遺構	13
1. 概要	13
2. 溝	15
3. 土坑	15
4. 井戸	17
5. 畝状遺構と用水	18
6. 水田	19
遺構一覧表	20

第1節 基本層序

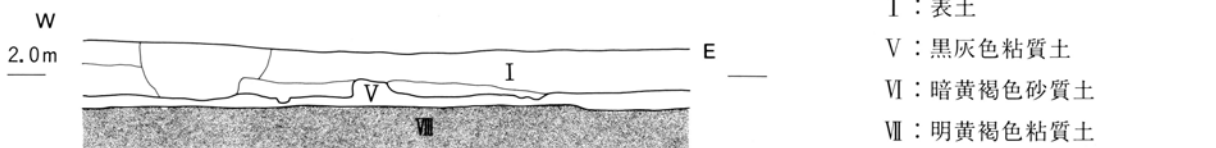
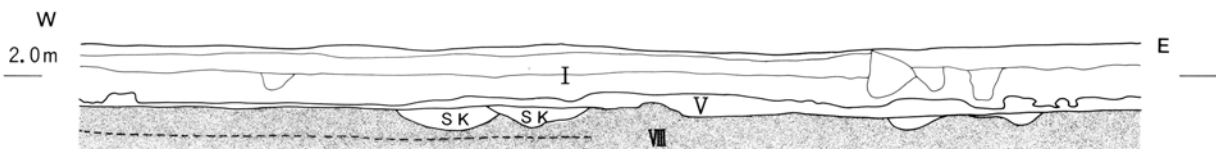
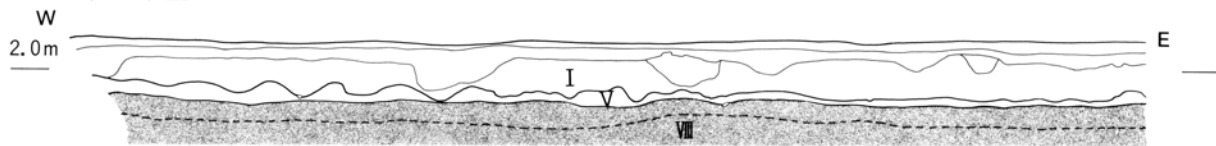
今回の調査区は東西方向に広がっていて、西側の自然堤防上と東側の後背湿地上では、土層が大きく異なり、西側では5層、東側では3ないし4層に分けられる。西側では、第I層は表土で、灰黒色土が薄く広がっている。その下の第II層は暗褐色シルトで、江戸時代後期の遺物を多く含む包含層である。第III層は、暗褐色及び褐色シルトから成り、この上面より江戸時代後期から幕末期の遺構が掘り込まれており、当時の生活面と考えられる。上面の遺構検出はこの高さで行った。出土遺物などから18世紀末から19世紀初頭の整地層と考えられる。第IV層は褐色シルトで、この上面から江戸時代中期の遺構が掘り込まれている。江戸時代前期から中期までの遺物が含まれている。下面の遺構検出はこの高さである。第VIII層は地山で、褐色粘質土と青灰色砂から成る。褐色粘質土は砂が多く、自然堤防形成堆積物と思われる。

東側では、第I層は表土であるが、1 m以上の盛土（現代）になっている。その下に、第V層の旧水田耕作土である黒灰色粘質土がある。92A区の西側と92B区の東側では、畝状になっている。この旧水田は層序の前後関係・出土遺物などから、江戸時代から明治時代まで使われていたと推定できる。91B区では、第VI層は暗黄褐色砂質土から成り、江戸時代中期の遺物が含まれる。91A区では、第VII層は明黄褐色粘質土から成り、この上面で城下町後期の溝が掘り込まれている。部分的に、第VI・VII層が存在しない所もある。そして、第VIII層として地山である暗黄褐色シルト及び青灰色砂になる。一部では、砂の代わりに粘質土から成り、地形的な落ち込みであると見られる。第VIII層の上面から1 m程下には、植物片を多く含む暗赤灰色粘質土層が堆積している。この層の前後に流木が含まれ、放射性炭素（¹⁴C）年代測定の結果、縄文時代晩期後半に相当することが判明した。（大竹正吾）



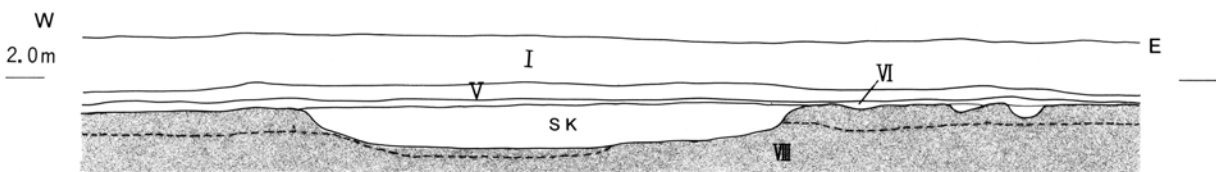
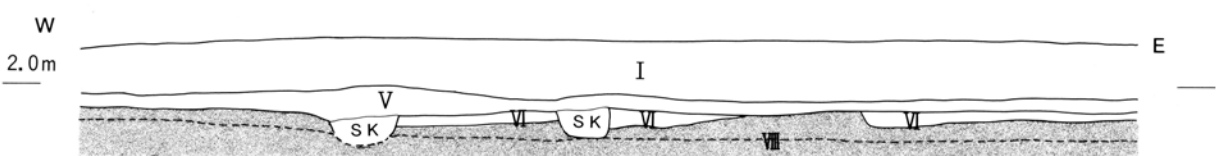
第5図 土層セクション図① (1/100)

92A区 北壁セクション

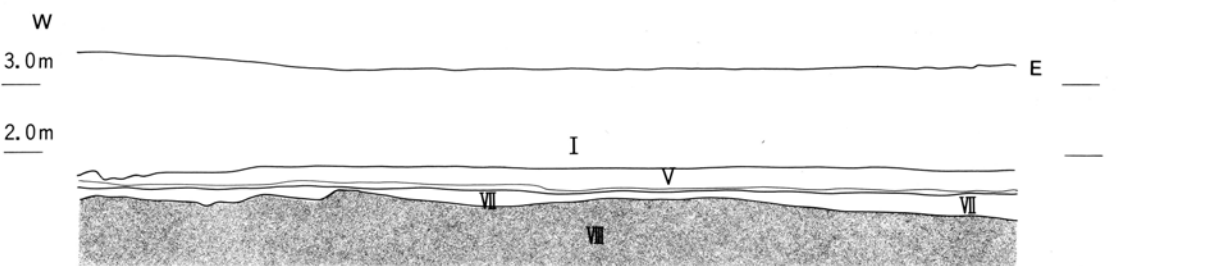
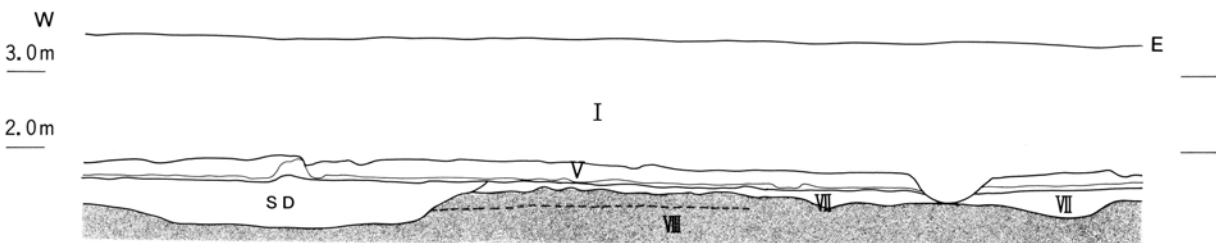


- I : 表土
- V : 黒灰色粘質土
- VI : 暗黄褐色砂質土
- VII : 明黄褐色粘質土
- VIII : 暗黄褐色シルト・青灰色砂

91B区 北壁セクション



91A区 北壁セクション



第6図 土層セクション図② (1/100)

第2節 中世～江戸時代中期の遺構

1. 概要

中世（鎌倉時代中頃）～江戸時代中期（18世紀末）までの遺構が存在する調査区は、91D2区・92B1区・92B2区・92A区・91A区の5調査区である。各調査区の概要をここにまとめておきたい。ただし、検出面の標高が、そのまま当時の生活面ではないということを最初に断わっておく。

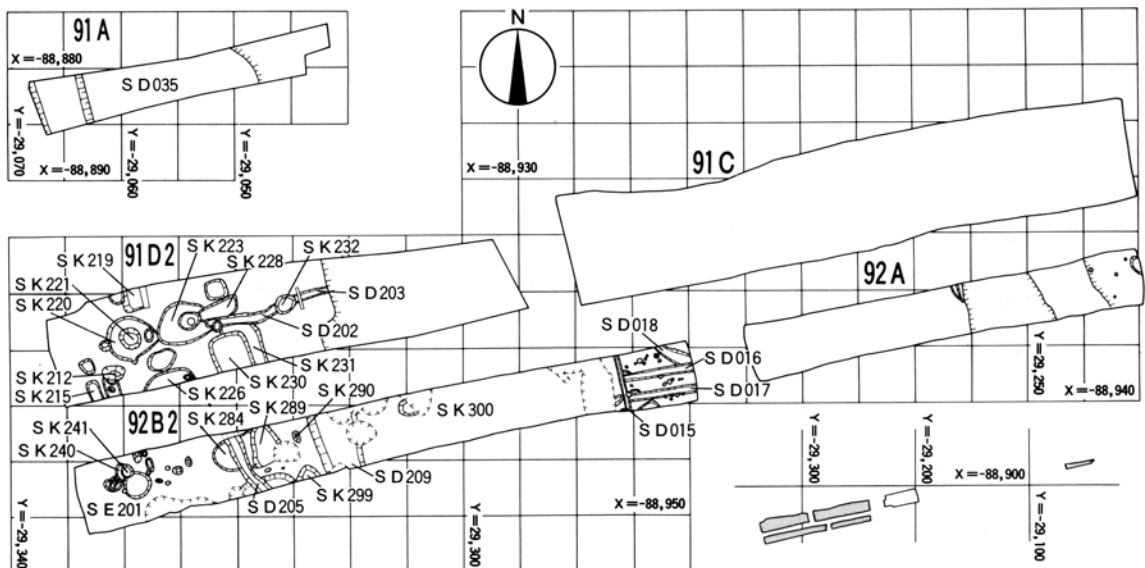
91A区 今回の調査区で最も東端に位置している。現地表より検出面まで約2mあり、かなりの削平を受けている。表土を剥すと旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れ、この層の下から遺構を検出した。標高は約1.4m前後で、ここでは城下町期末の溝を1条（SD035）確認した。

91D2区 美濃街道に面した調査区の下層で、上面の検出面より約60cmの整地層を掘り下げて、標高約1.6m前後で遺構を検出した。時期は、出土遺物などから鎌倉時代中頃（13世紀中葉）～江戸時代中期（18世紀末）と思われる。居住域であったと考えられるが、建物跡などの明確な遺構を検出することはできなかった。

92A区 91C区の南側の調査区で、表土を剥すと、旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土と灰白色砂が現れた。これを剥した標高約1.4～1.5m前後で遺構を検出したが、遺物の出土量が少ないため時期を確定することができなかった。

92B1区東半 上層の遺構は、92A区と全く同じ状況であった。標高約1.5m前後で検出された溝やピットなどから、少量ではあるが山茶碗類が出土している。このことから、鎌倉時代中頃（13世紀中葉）と考えられ、92A区の遺構も同様の時期が想定される。この部分では、下層の遺構面は確認されなかった。

92B2区 91D区の南側に位置する美濃街道に面した調査区の下層で、上面の検出面より約40cmの整地層を掘り下げて、標高約1.5～1.7m前後で遺構を検出した。居住域に関連すると思われる廃棄土坑や井戸、礎石群が検出されたが、明確な建物配置は捉えられなかった。出土遺物などから、城下町期末～江戸時代初頭（17世紀初～中葉）と江戸時代中期（18世紀中葉～末）の2時期が考えられる。



第7図 下層主要遺構配置図

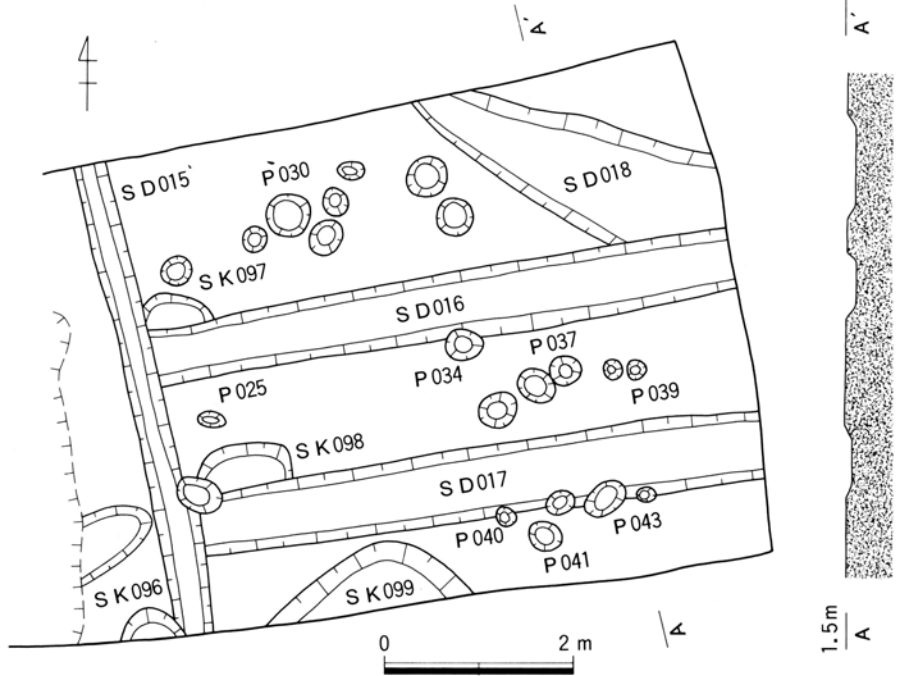
2. 溝

SD 015 92B1 区の東端部分で検出された南北 (N-14°-W) に走る溝で、幅約0.35~0.45m、深さは約 0.1mと浅く、上部の水田により削平されているものと考えられる。出土遺物はなく時期は不明であるが、SD 016とSD 017を切っており、これらよりも新しい時期と思われる。

SD 016 SD 015と直交し、SD 017と並行する (E-10°-N) 溝で、幅約0.75m、深さ約 0.1mを測る。第7型式 (13世紀中葉) の山茶碗類の小皿が出土しており、遺構の時期は鎌倉時代中頃と考えられる。

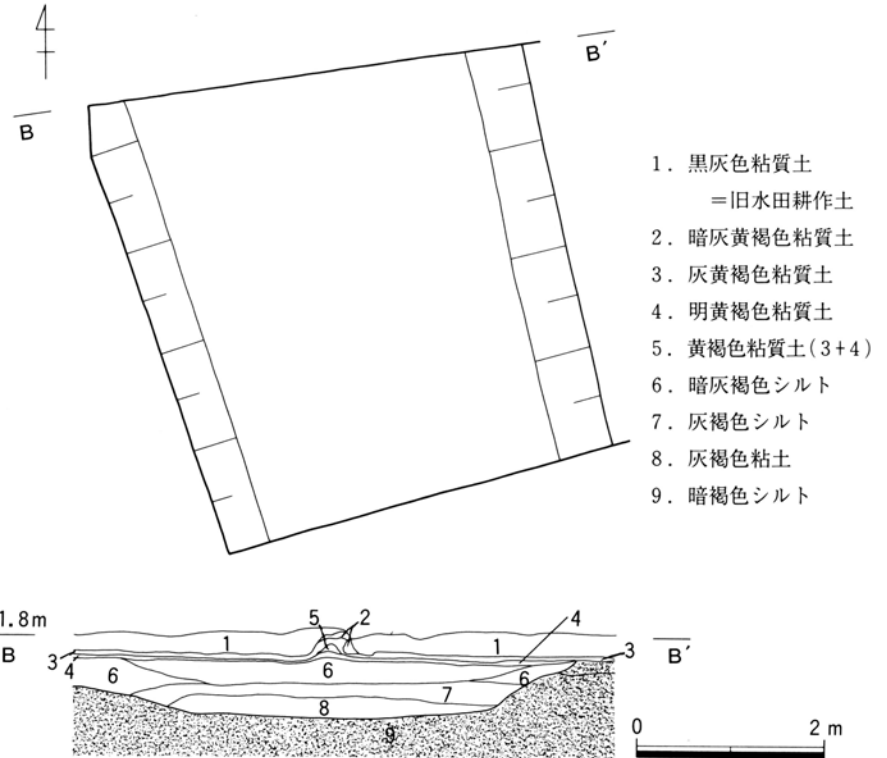
SD 017 SD 016と方向・規模が全く同じである。出土遺物はないが、SD 016と同じ時期が考えられる。

SD 018 上記3条の溝とは方向性が異なる (E-25°-S) 溝で、幅約0.65m、深さ0.07mと浅く、出土遺物はない。SD 016に切られており、これより古い時期が想定される。



第8図 92B2 区東半平面図・断面図 (1:80)

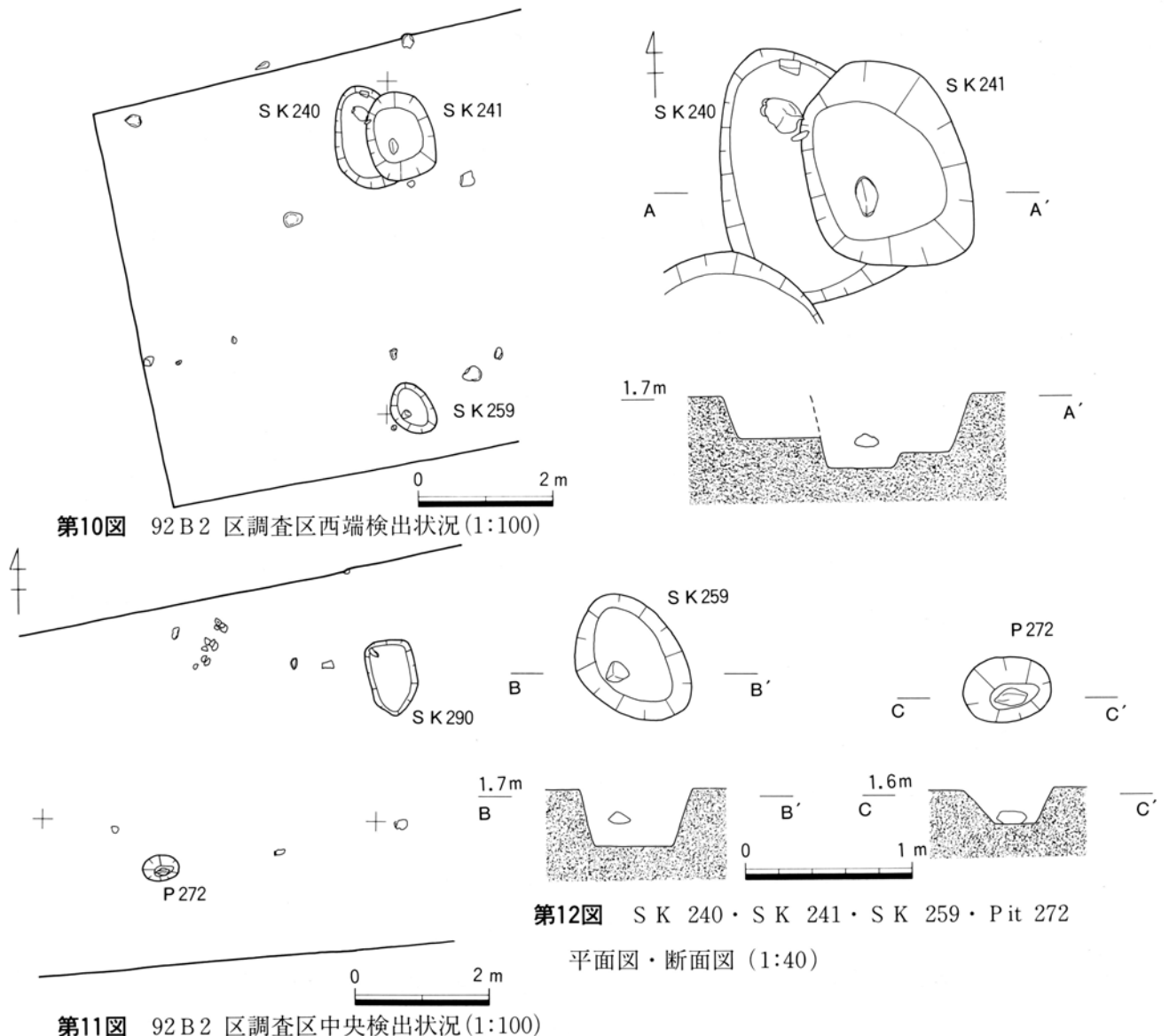
SD 035 91A区で検出された溝で、N-22°-Wの方向性を持ち、幅約 4.5m、深さ約 0.6mを測る。備前の播鉢が出土しており、17世紀初頭には埋められたと考えられる。年代的に、清須城の外町を形成していた時期の区画溝と想定される。また、溝は上部の水田によりかなり削平されている可能性が高い。



第9図 SD 035平面図・断面図 (1:80)

3. 礎石群

発掘調査に入る前から、建物跡が検出される可能性のある調査区として、中世以来の美濃街道に面している91D区と92B区の2調査区を想定していたが、調査区が狭く、しかも中央に「御船頭道」と呼ばれる古い道が存在し調査不能であったため、全容を明らかにすることは難しかった。91D区では上層・下層ともに確認されず、92B2区の調査区の西端部分と中央部分で、僅かに清須城の外町を形成していた時期か江戸時代前期頃と思われる礎石群を検出することができた。調査区西端部分では、礎石が検出面と土坑の中から検出されたものに分けられるが、両者とも建物としては並ばず、礎石建物を想定するに至らなかった。中央部分から検出された礎石群についても同様で、あるいは柵列を想定した方が良くかもしれない。ただ、礎石群の主軸がE-13°-Nとなっており、美濃街道や御船頭道に合っていること、礎石群の周辺の井戸や土坑から近世陶磁器類などの遺物が出土していることから見て、建物が存在していた可能性が高いと考えられる。数回にわたる建物の建て替えが行われ、また調査区が屋敷地の隅であることから建物自体が南側の調査区外に展開していたのではないかと想定される。



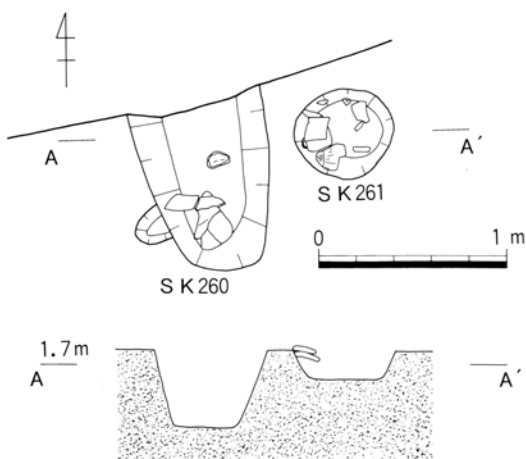
S K 240・241 S K 240は、92B2 区西端部分で検出され、長径約 1.7m、深さ約 0.4mの楕円形を呈した土坑である。出土した礎石の下から、志野の小椀や織部の椀が確認されたことから、時期は17世紀初頭の城下町期末と思われる。S K 240に隣接し、これを切っているS K 241は、長径約 1.5m、短径約 1.0m、深さ 0.5mの楕円形をした土坑である。出土遺物が少なく、時期の確定はできないが、S K 240との切り合い関係から、江戸時代初頭～中期と想定される。

S K 259 S K 259は、92B2 区西端部分の南側で検出され、長径 0.8m、短径約 0.7m、深さ約 0.4 mのほぼ円形を呈した土坑である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、礎石と思われる石を検出している。

Pit 272 Pit 272は、92B2 区中央部分に位置し、長径 0.5m、短径 0.4m、深さ 0.2mのほぼ円形を呈した柱穴である。ここでも出土遺物はなく、時期は不明であるが、礎石と思われる石を検出している。

4. 土坑

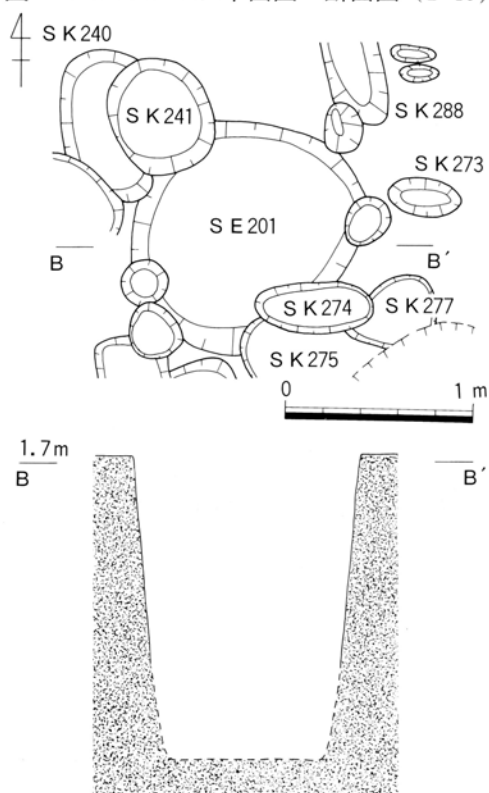
S K 260・261 S K 260は、92B2 区の西端部分の北壁付近で検出され、長径約 1.0m、短径約 0.7 m、深さ約 0.4mの楕円形を呈した土坑である。出土遺物として、17世紀中葉と思われる内耳鍋があり、この頃の時期と考えられる。また、S K 261は、S K 260に隣接し、長径約 0.7m、短径 0.5m、深さ約 0.2mを測る円形の土坑である。時期は、出土した播鉢などから、18世紀



第13図 S K 260・261平面図・断面図 (1:40)

5. 井戸

S E 201 S E 201は、92B2 区西端部分の中央に位置しており、長径 2.6m、短径推定約 2.3m、深さ推定約 1.6mのほぼ円形の掘り形をしている。湧水が激しく、さらに掘り下げて構造物を確認することはできなかった。出土遺物が少なく、時期を決定することはできないが、隣接するS K 240・S K 241等の遺構に切られていることから、17世紀初頭以前の清須城の城下町後期と考えられる。(小嶋廣也)



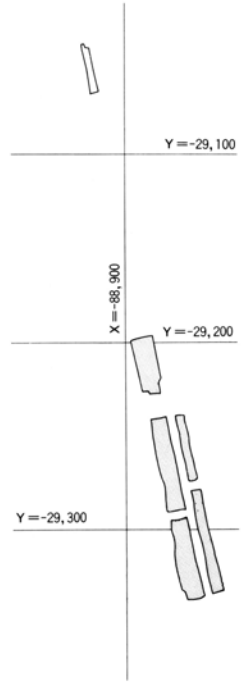
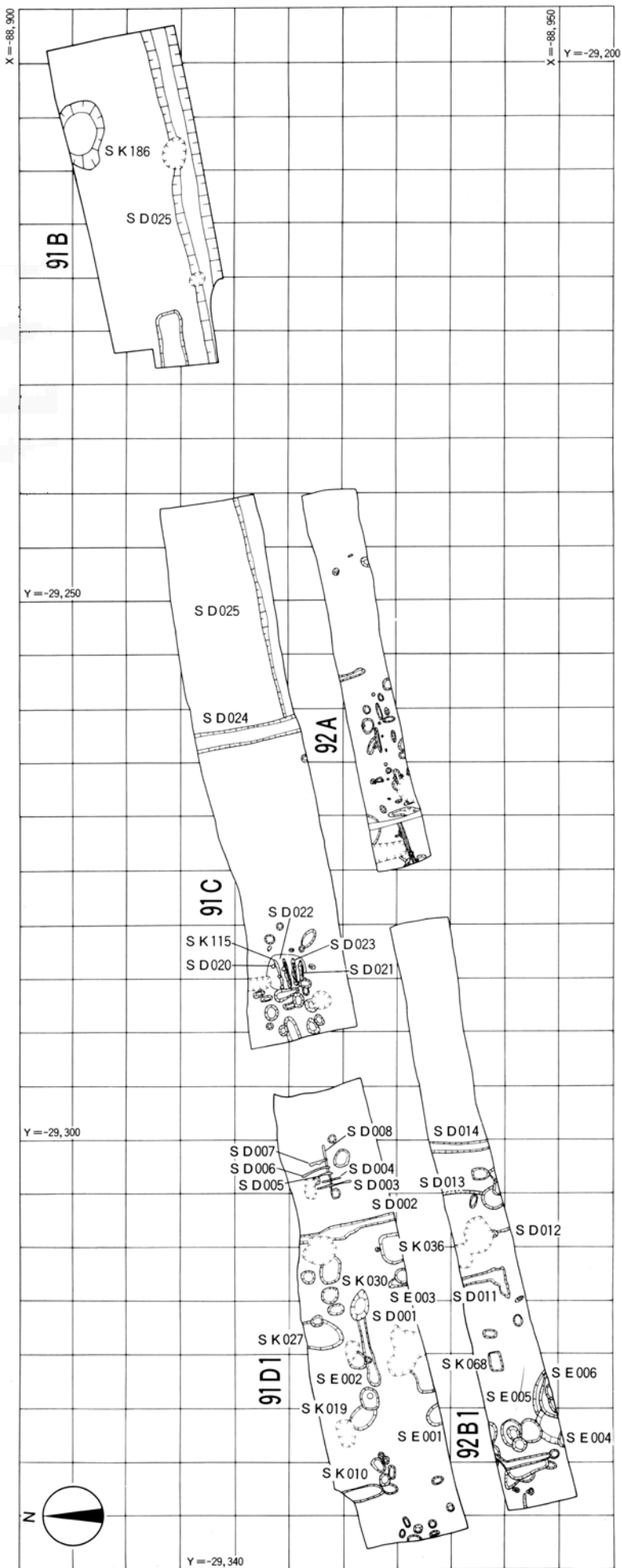
第14図 S E 201平面図・断面図 (1:40)

第3節 江戸時代後期の遺構

1. 概要

江戸時代後期（19世紀代）の遺構は、全ての調査区から検出されている。まず、各調査区の概要を予めまとめておきたい。ただし、前述の通り、検出面の標高がそのまま当時の生活面ではないこと、明治に入ってから埋められた遺構もいくつか含まれていることを断っておく。

- 91A区** 今回の調査区の中では、最東端に位置する。前述したように、表土の下から旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れたことから、水田が広がっていたと考えられる。
- 91B区** 隣接する5つの調査区の中では、東側に位置している。ここでも、表土の下から旧水田耕作土が現れ、水田であったことが確認された。注目すべき遺構としては、用水と思われる溝SD 025とSK 186があげられる。遺構検出面の標高は、約1.5m前後である。
- 91C区** 遺構がはっきりせず、性格が分かりにくかった調査区であるが、91B区からつづいているSD 025とそれに直交するSD 024が、切り合い関係は不明であるものの意味をもっている。個々の遺構の性格については不明であるが、SD 024以東の部分は、SD 025と旧水田耕作土が現れたことから水田であると考えられ、一方SD 024以西の部分はSK 115の上で検出された畝状遺構により畑地であったと想定される。遺構検出面の標高は、SD 024以西の部分で約1.9m前後、SD 024以東の部分では旧水田耕作土を除去したため約1.6m前後となった。
- 91D1区** 美濃街道に面した調査区の上層で、遺構検出面は標高約1.9～2.2m前後で、西側が高く東に向かって緩やかに下がっていく。住居移転に伴う攪乱が多いが、大まかに性格を掴むことができた。調査区中央より西側には、居住域に関連する井戸や廃棄土坑がみられ、東端部分には畑地に関連する畝状遺構が分布している。この居住域と畑地を区画しているのが、SD 002と考えられる。しかし、居住域からは、建物跡と思われる遺構は確認されなかった。
- 92A区** 前述の通り、表土の下から旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れたことから、水田であったと考えられる。この耕作土を剝した検出面（標高約1.5m）において、西端部分で少数の遺構が検出された。小規模のものが多く、また攪乱も激しいことから、遺構の性格については不明な点が多い。
- 92B1区** 美濃街道に面した調査区の上層で、遺構検出面の標高は、調査区の西端では約2.0mと高く、東に向かって次第に低くなり中央部分では約1.8m前後となっている。また、東端部分では、旧水田耕作土の黒灰色粘質土を取り除いて検出したため、一段低くなり標高は約1.5m前後となっている。住居移転に伴う攪乱が多いが、調査区の西半部分からは、建物跡に関連する礎石群や、井戸、廃棄土坑などが検出された。しかし、礎石群は散在的で建物にはならず、その性格を確認することはできなかった。また、東半部分には、畑地と水田が広がるようであるが、その境目ははっきりとしていない。91D1区で確認されたSD 002に連なるとみられる溝はSD 013で、これが居住域と畑地を区画するものと考えられる。また、その東側で検出された板組みの溝SD 014は、用水の役割を果たしていたようであり、ここで、畑地と水田が区分されていたと思われる。従って江戸時代後期には、美濃街道に面した部分に屋敷が並び、その裏手には溝で区画された畑地と水田が広がっているという景色が想定される。

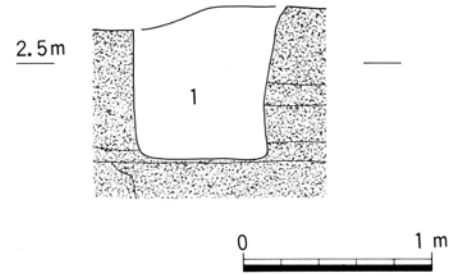


第15図 上層主要遺構配置図

2. 溝

S D 001 S D 001は、91D1 区の中央部分で検出された、幅 0.8～ 1.2m、深さ約 0.3mの溝で、美濃街道に直交、御船頭道に並行の方向性 (E-12°-N) を持つ。溝の西側にはS E 001が、東側にはS K 030がある。このことから、これは排水用の溝と考えられ、S K 030は、その水を染み込ませるための汚水溜りのな性格を持つものと考えられる。時期は、出土遺物などから、19世紀中葉と思われる。

S D 002 S D 002は、91D1 区の中央部分で検出された溝で、幅 0.7～ 1.3m、深さ約 0.4mを測り、美濃街道とほぼ並行 (N-16°-W) である。上部は後世の削平を受けていると思われる。街道に面した屋敷とその裏側に広がる畑地とを区画する溝で、時期は、出土遺物から19世紀中葉と思われる。



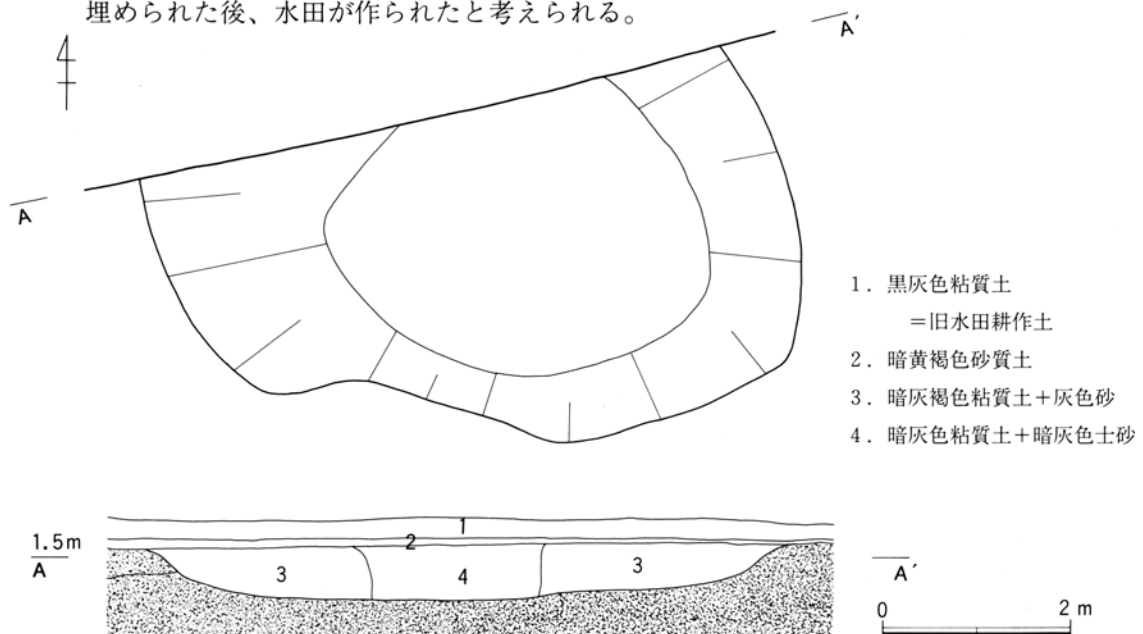
1. 青灰色粘質土

第16図 S D 002北壁セクション図 (1:40)

S D 013 S D 013は、92B1 区のほぼ中央部分で検出され、幅約 0.4m、深さ 0.2mと浅く、N-11°-Wの方向性を持つ溝である。すぐ北側に隣接する 91D1 区のS D 002に連なり、屋敷地と畑地とを区画している溝と思われる。出土遺物が極少量であるため、時期を特定することはできないが、S D 002と同様の時期 (19世紀初頭～中葉) が想定される。

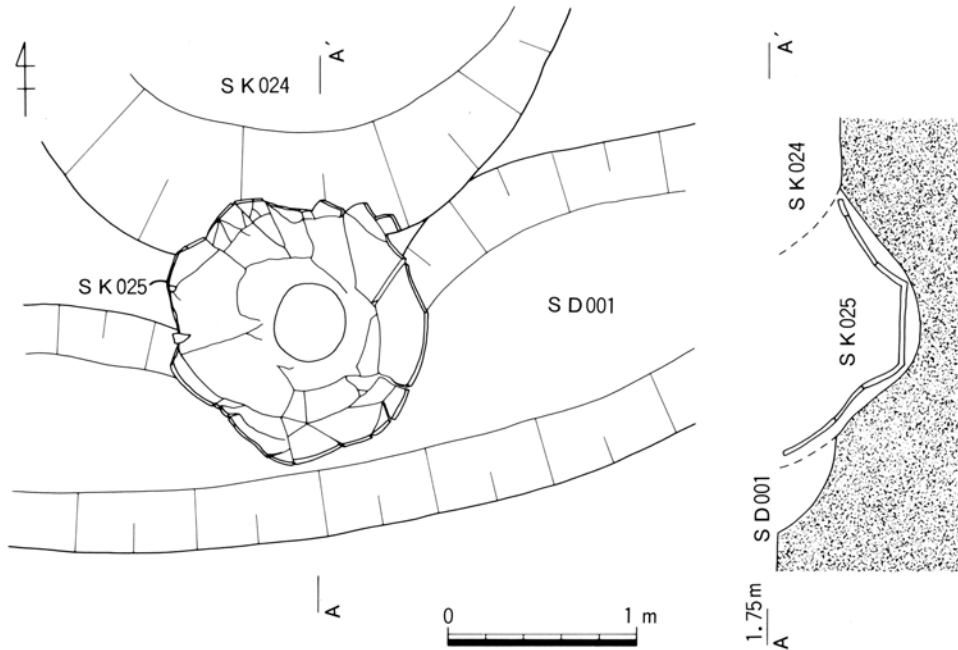
3. 土坑

S K 186 S K 186は、91B 区の東半部分の北壁付近で検出された、長径約 6.0m、短径約 4.0m、深さ約 0.6mの不定形をした土坑である。旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土の下で検出されたため、水田以前の遺構であると考えられ、水田がいつからつくられているのかを知る上で重要な遺構となった。出土遺物から、時期は19世紀初頭と想定され、従ってこの土坑が埋められた後、水田が作られたと考えられる。



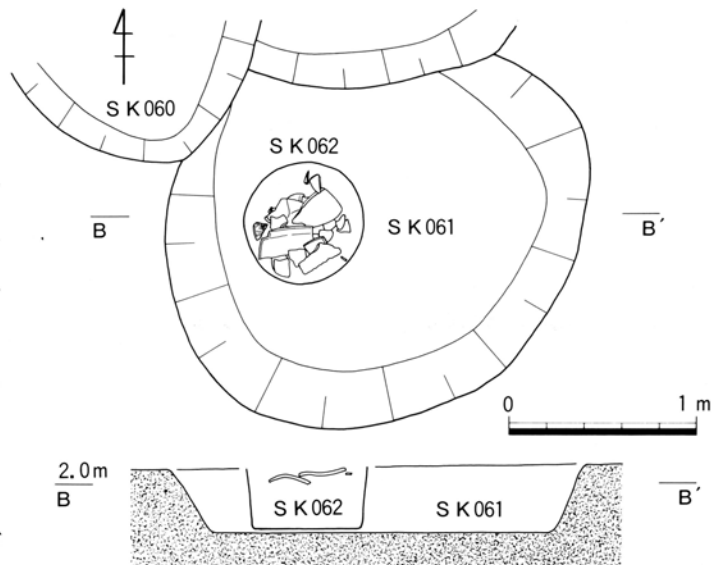
第17図 S K 186平面図・断面図 (1:80)

S K 025 S K 025は、91D1 区の中央部分で検出された、径約 0.6mの円形の土坑で、深さは約 0.3mを測る。この土坑には、常滑産の甕が埋められており、すぐ西隣にS E 002が在ることから、井戸水を貯めておく水甕を設置した土坑と推定される。甕は18世紀後葉の製品と思われるが、この土坑が、隣接するS D 001を切りS K 024に切られているため、時期を決定する上で重要な意味を持っている。S D 001は、S E 002の排水溝と思われるが、出土遺物より18世紀後葉、S K 024は19世紀中葉から、ほぼ18世紀末～19世紀初頭が推定される。



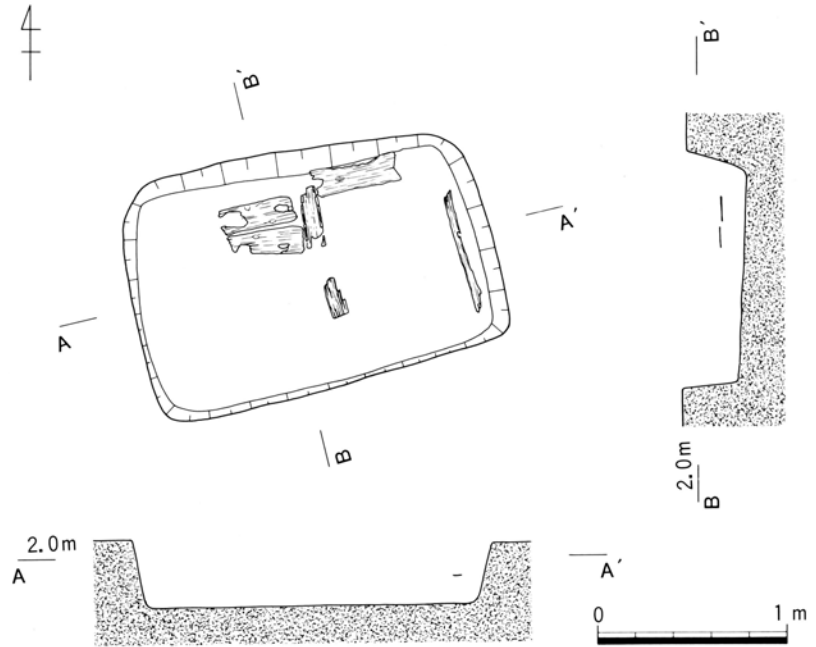
第18図 S K 025平面図・断面図 (1:40)

S K 061・062 S K 061は、92B1 区の西端部分の中央より検出された、径約 2.2m程のほぼ円形を呈した土坑であり、深さは約 0.4mである。また、S K 062は、92B1 区のS K 061内の中央部分より検出された、径0.65m、深さ約 0.4mを測る、円形の土坑である。S K 062では、瓦類や近世陶磁器類が集中して出土したため、検出段階で井戸ではないかと考えていたが、実際に掘り下げてみるとすぐに底が見えてしまったので、掘りかけて中断した井戸ではないかと想像される。時期は、出土遺物から19世紀代と思われるが、詳しい年代決定をするまでに至っていない。遺構の切り合い関係から想定してみると、周辺の遺構（19世紀後葉と思われるS K 058やS K 060など）に切られていることからして、19世紀初頭～中葉と考えられる。また、S K 062が、S K 061の埋土を切っていることから、こちらの方に新しい年代が与えられる。



第19図 S K 061・062平面図・断面図 (1:40)

S K 068 S K 068は、92B1 区のほぼ中央部分の北側で検出された、長径 1.8m、短径約 1.3m、深さ 0.4mを測る、隅丸方形の土坑である。検出した段階から炭を多く含んでおり、はっきりと検出することができた。近世陶磁器類などの遺物とともに、木片が出土している。この木片は、強度と厚さを持っていなかったために取り上げることはできなかった。これが、どのような性格を持つ遺構であるのか分かっていないが、風呂のようなものが想像される。また、時期は、出土遺物から19世紀中～後葉が想定される。



第20図 S K 068平面図・断面図 (1:40)

4. 井戸

S E 001・002 S E 001は、91D1 区の南側で検出された、径約 2.0mの円形の掘り形を持つ井戸である。S E 002は、91D1 区の中央で検出された、長径2.15m、短径1.75mの楕円形の掘り形を持つ井戸である。2基の井戸ともに、中央に漆喰の井戸枠が据えられてはいるが、江戸時代から使用されていたことが他の遺構や出土遺物などから想定される。湧水が激しかったため、下位の構造物や底を確認することはできなかった。

S E 003 S E 003は、91D1 区の中央部分の南壁付近で検出された、径約 1.5mの円形の掘り形を持つ井戸である。出土遺物から19世紀代と考えられる。井戸枠などの構造物や底は確認できなかった。

S E 004 S E 004は、92B1 区の南側で検出された、径約 3.5mの円形の掘り形を持つ井戸である。井戸枠などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀中葉と思われる。

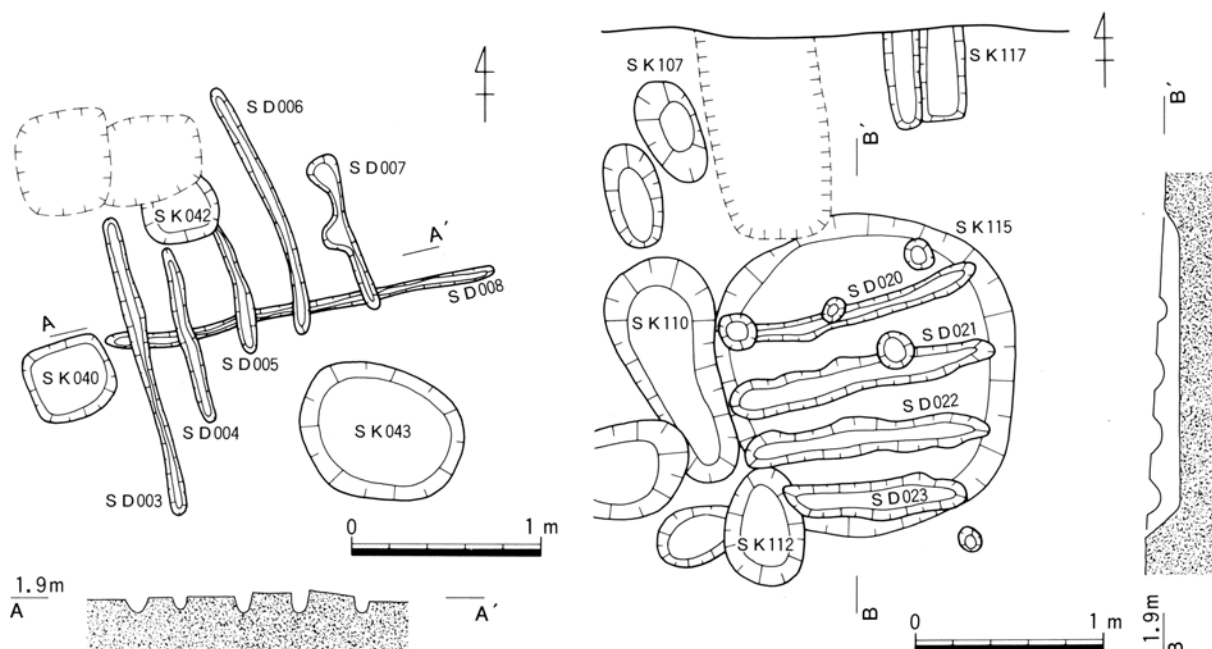
S E 005 S E 005は、92B1 区の南側で検出された、径約 1.5mの井戸である。径約 4.0mのほぼ円形の掘り形を持っている。井戸枠などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀前葉と推定される。

S E 006 S E 006は、92B1 区の南側で検出された、径約 1.5mの井戸である。径約 4.0mのほぼ円形の掘り形を持っている。井戸枠などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀後葉と推定される。

5. 畝状遺構と用水

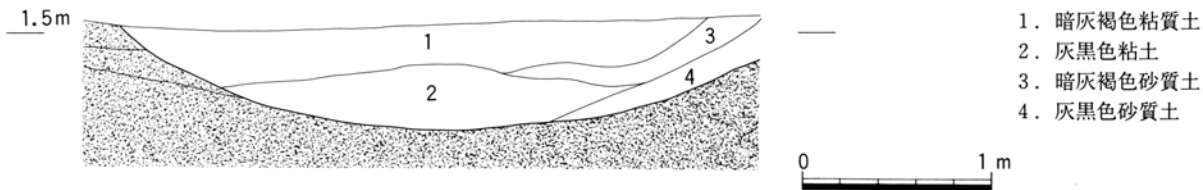
畝状遺構 91D1区と91C区の2つの調査区において、畑の畝と思われる浅い溝状遺構が検出された。

91D1区の東端部分では、SD 003～SD 008の6条が検出され、それぞれ、長さ約2～4m、幅0.1～0.2m、深さ0.1m前後と浅く、うち5条はほぼ美濃街道と同じ方向性(N-13°-W)を持ち、SD 008の1条だけが、これらと直交する方向性(E-11°-N)を持っている。また、91C区の西端部分からは、SK 115の上面よりSD 020～SD 023の4条が検出された。それぞれ、長さ約2～3m、幅0.2～0.4m、深さ約0.1mと浅く、91D1区のSD 008と同じ方向性(E-11°-N)を持っている。これらの浅い溝が、実用性のある溝とは考え難く、畑に伴う畝跡と見られ、この部分が畑地であったことが想定される。時期は、出土遺物が乏しくて確定することはできないが、切り合い関係からほぼ19世紀前葉と思われる。



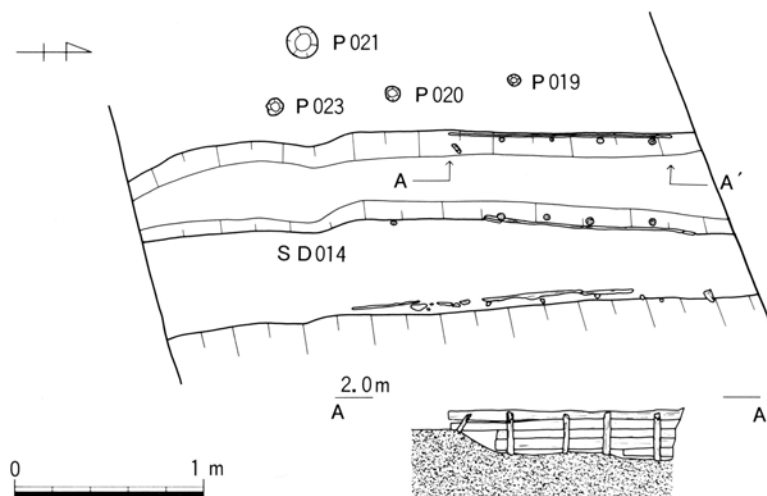
第21図 91D1区畝状遺構平面図・断面図(1:40) 第22図 91C区畝状遺構平面図・断面図(1:40)

SD 025 SD 025は、91B区の調査区全体の南側と91C区の東半部分の南側で検出された、幅約3.6m、深さ0.4～0.6mで西から東に向かって深くなり、E-10°-Nの方向性を持つ溝である。本遺構は、すぐ北側に広がる水田に水を引くための溝と考えられる。出土遺物には、18世紀代のもも含まれるが、19世紀初頭～中葉が中心であるため、この頃の時期と想定される。また、本遺構埋土の中から、8世紀代の須恵器、9～11世紀代の灰釉陶器などが集中して出土しているが、遺構の時期とは無関係で、SD 025廃絶前後に、周囲に分布していたそれらが埋土に混入されたものと考えられる。



第23図 SD 025東壁セクション図(1:40)

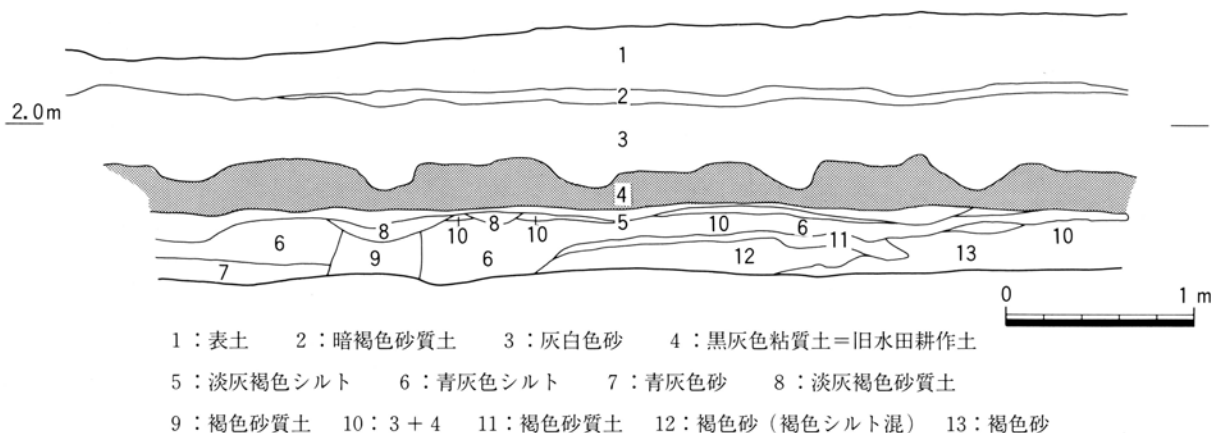
SD 014 SD 014は、92B1 区の中央部分で検出された、幅 0.9m、深さ 0.2mで、ほぼ南北（N-2°-E）に方向性を持つ溝である。この溝の両脇から、木組み遺構が確認されている。薄い板を縦に5枚ほど積み立て、それを押さえつけるように内側から杭が打ち込まれる構造になっている。さらに、その西側には、柵列のようなピット列がある。ここは、屋敷の裏手で畑地との境にあたり、畑へ水を引く用水とも、また、屋敷地からの排水溝とも考えられる。時期は、出土遺物から19世紀中～後葉と想定されるが、19世紀初頭の遺物も見られることから、溝の設置時期はさらに遡ることが考えられる。



第24図 SD 014平面図・断面図（1:40）

6. 水田

全ての調査区において、旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が検出されている。この粘質土層は、植物遺体を含んでおり、鉄斑やマンガン斑も多くみられた。しかし、遺物はほとんど含まれていない。美濃街道に面した部分（91D区・92B区）には、古い時期から現在に至るまで人々が生活していた様子を窺うことができるが、その他の調査区（91A区・91B区・91C区・92A区）では、中世や清洲城下町期（17世紀初頭）までの遺構分布が認められるものの、それ以後の江戸時代になると遺構が希薄になっていくため、水田が広がっていったように思われる。（小嶋廣也）



第25図 92A区東壁セクション図（1:40）

<註>

江戸時代の時代区分については、本報告書では、説明の都合上、17世紀代を前期、18世紀代を中期、19世紀代を後期に便宜的に区分した。

上層の遺構

溝 (S D)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S D001	91D1区	S D02	(865)	120	(28)	江戸後期	S D019	91C区	S D07	(100)	10	17	-
S D002	91D1区	S D01	(670)	100	(36)	江戸後期	S D020	91C区	S D06	(260)	20	9	-
S D003	91D1区	S D03	325	18	(10)	-	S D021	91C区	S D05	290	35	8	-
S D004	91D1区	S D04	195	15	(9)	-	S D022	91C区	S D04	260	40	10	江戸後期
S D005	91D1区	S D05	(140)	15	(12)	-	S D023	91C区	S D03	195	30	12	-
S D006	91D1区	S D06	280	15	(13)	-	S D024	91C区	S D02	(780)	170	30	江戸後期
S D007	91D1区	S D07	175	25	(11)	-	S D025	91C区	S D01	(2070)	(200)	36	江戸後期
S D008	91D1区	S D08	425	10	(7)	-		91B区	S D01	(3045)	300	56	江戸後期
S D009	92B1区	S D01	(140)	25	9	-	S D026	91C区	S D08	(350)	40	9	-
S D010	92B1区	S D02	(530)	55	10	-	S D027	91C区	S D09	165	40	7	-
S D011	92B1区	S D04	(605)	115	23	江戸後期	S D028	91C区	S D10	(255)	70	16	江戸後期
S D012	92B1区	S D05	(120)	15	6	江戸後期	S D029	92A区	S D06	(105)	20	4	-
S D013	92B1区	S D03	(425)	35	16	江戸後期	S D030	92A区	S D05	(75)	20	5	-
S D014	92B1区	S D06	(540)	90	20	江戸後期	S D031	92A区	S D04	(390)	45	10	江戸中期
S D015	92B1区	S D09	(485)	40	10	中世	S D032	92A区	S D01	255	40	8	-
S D016	92B1区	S D07	(580)	75	10	中世	S D033	92A区	S D02	170	40	8	-
S D017	92B1区	S D08	(565)	75	10	中世	S D034	92A区	S D03	95	35	12	中世
S D018	92B2区	S D108	(220)	65	(7)	中世	S D035	91A区	S D01	(435)	450	62	城下町後期

柱穴 (P i t)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
P it001	92B1区	P it02	30	10	6	江戸後期	P it038	92B1区	P it17	20	15	7	-
P it002	92B1区	P it01	65	40	8	江戸後期	P it039	92B1区	P it18	20	20	7	-
P it003	92B1区	P it03	(35)	35	11	江戸後期	P it040	92B1区	P it19	20	20	5	-
P it004	92B1区	P it04	60	45	11	江戸後期	P it041	92B1区	P it20	35	30	3	-
P it005	92B1区	P it05	60	45	14	江戸後期	P it042	92B1区	P it21	30	25	5	-
P it006	92B1区	P it06	(10)	10	4	-	P it043	92B1区	P it22	45	35	4	-
P it007	92B1区	P it07	10	10	5	-	P it044	92B1区	P it23	20	15	4	-
P it008	92B1区	S K33	45	40	12	-	P it045	91C区	S K30	40	40	18	-
P it009	92B1区	P it08	(30)	25	16	-	P it046	91C区	S K42	25	20	5	-
P it010	92B1区	P it09	35	30	11	江戸後期	P it047	91C区	S K41	35	30	10	-
P it011	92B1区	S K41	(65)	(30)	9	-	P it048	91C区	S K29	40	40	12	-
P it012	92B1区	S K38	50	(30)	14	-	P it049	91C区	S K18	30	25	8	-
P it013	92B1区	S K39	(35)	25	14	江戸後期	P it050	91C区	S K33	50	35	7	-
P it014	92B1区	S K40	50	(25)	6	江戸後期	P it051	91C区	S K31	(40)	30	3	-
P it015	92B1区	S K44	40	25	21	江戸後期	P it052	92A区	S K35	50	15	6	-
P it016	92B1区	S K35	(45)	50	16	江戸後期	P it053	92A区	S K38	(40)	25	6	-
P it017	92B1区	S K64	50	(25)	8	-	P it054	92A区	P it14	35	20	3	-
P it018	92B1区	P it28	(50)	(22)	7	江戸後期	P it055	92A区	P it15	60	30	5	-
P it019	92B1区	P it10	10	10	5	江戸後期	P it056	92A区	P it01	25	25	9	-
P it020	92B1区	P it11	15	15	12	-	P it057	92A区	P it02	30	25	8	-
P it021	92B1区	P it13	35	30	13	江戸後期	P it058	92A区	P it03	30	25	8	-
P it022	92B1区	P it29	32	30	5	江戸後期	P it059	92A区	P it04	30	30	8	-
P it023	92B1区	P it12	15	15	9	-	P it060	92A区	P it05	25	20	7	-
P it024	92B1区	P it14	30	20	5	-	P it061	92A区	P it07	35	30	7	-
P it025	92B1区	P it30	45	45	3	江戸後期	P it062	92A区	P it08	(25)	20	5	-
P it026	92B1区	P it31	40	40	5	江戸後期	P it063	92A区	S K06	35	15	3	-
P it027	92B1区	P it24	30	20	4	-	P it064	92A区	P it09	25	25	4	-
P it028	92B1区	P it25	30	25	5	-	P it065	92A区	S K24	30	25	9	-
P it029	92B1区	P it32	40	30	6	江戸後期	P it066	92A区	P it10	25	20	4	-
P it030	92B1区	P it26	45	45	6	江戸後期	P it067	92A区	P it06	35	25	5	-
P it031	92B1区	P it27	30	25	3	-	P it068	92A区	S K28	40	25	9	-
P it032	92B1区	P it33	50	40	3	江戸後期	P it069	92A区	P it16	35	30	5	-
P it033	92B1区	P it34	40	40	3	江戸後期	P it070	92A区	P it13	30	25	5	-
P it034	92B1区	P it15	40	35	5	-	P it071	92A区	P it12	30	25	4	-
P it035	92B1区	P it35	40	35	7	江戸後期	P it072	92A区	P it11	15	15	5	-
P it036	92B1区	P it36	40	30	6	江戸後期	P it073	91B区	P it02	25	20	5	-
P it037	92B1区	P it16	30	30	3	-	P it074	91B区	P it01	60	55	10	江戸後期

井戸 (S E)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S E001	91D1区	S E03	195	(100)	-	江戸後期	S E004	92B1区	S K14	(350)	(175)	(179)	江戸後期
S E002	91D1区	S E02	215	175	-	江戸後期	S E005	92B1区	SK42-59	(430)	(190)	-	江戸後期
S E003	91D1区	S E01	(60)	145	-	江戸後期	S E006	92B1区	SK47-48	(425)	(135)	-	江戸後期

土坑 (S K)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K001	91D1区	S K28	(40)	45	25	江戸後期	S K028	91D1区	S K07	125	105	25	江戸後期
S K002	91D1区	S K27	85	60	32	-	S K029	91D1区	S K05	160	115	32	江戸後期
S K003	91D1区	S K25	110	50	40	江戸後期	S K030	91D1区	S K02	295	175	33	江戸後期
S K004	91D1区	S K26	30	25	15	江戸後期	S K031	91D1区	S K06	130	125	12	江戸後期
S K005	91D1区	S K24	135	(55)	5	-	S K032	91D1区	S K04	160	165	30	江戸後期
S K006	91D1区	S K23	85	70	38	江戸後期	S K033	91D1区	S K03	(250)	195	34	江戸後期
S K007	91D1区	S K22	90	55	9	江戸後期	S K034	91D1区	S K01	(135)	130	22	江戸後期
S K008	91D1区	S K21	85	80	20	江戸後期	S K035	91D1区	S K41	40	40	4	-
S K009	91D1区	S K36	(65)	65	37	江戸後期	S K036	91D1区	S K43	(150)	290	(5)	江戸後期
S K010	91D1区	S K30	(390)	140	30	江戸後期	S K037	91D1区	S K46	(300)	(235)	-	-
S K011	91D1区	S K31	(150)	(105)	28	江戸後期	S K038	91D1区	S K18	75	500	11	江戸後期
S K012	91D1区	S K32	120	105	28	江戸後期	S K039	91D1区	S K17	(140)	(80)	18	江戸後期
S K013	91D1区	S K34	110	65	8	江戸後期	S K040	91D1区	S K13	135	120	10	江戸後期
S K014	91D1区	S K33	140	90	20	江戸後期	S K041	91D1区	S K42	210	205	20	江戸後期
S K015	91D1区	S K35	75	60	11	江戸後期	S K042	91D1区	S K40	(80)	(65)	10	-
S K016	91D1区	S K39	65	55	14	江戸後期	S K043	91D1区	S K08	180	145	20	江戸後期
S K017	91D1区	S K19	115	80	6	江戸後期	S K044	91D1区	S K47	(70)	(70)	-	-
S K018	91D1区	S K20	95	75	31	江戸後期	S K045	91D1区	S K45	90	85	6	江戸後期
S K019	91D1区	S K37	(270)	(200)	30	江戸後期	S K046	91D1区	S K44	(145)	(85)	17	江戸後期
S K020	91D1区	S K10	(270)	(85)	38	江戸後期	S K047	92B1区	S K36	(100)	(160)	21	江戸後期
S K021	91D1区	S K16	(340)	(190)	30	江戸後期	S K048	92B1区	S K37	(155)	(35)	17	江戸後期
S K022	91D1区	S K14	285	150	24	江戸後期	S K049	92B1区	S K21	385	(115)	28	江戸後期
S K023	91D1区	S K12	60	55	6	-	S K050	92B1区	S K32	(160)	(150)	33	江戸後期
S K024	91D1区	S K11	(140)	165	15	江戸後期	S K051	92B1区	S K07	(170)	110	16	江戸後期
S K025	91D1区	S K48	65	60	31	江戸後期	S K052	92B1区	S K63	(75)	70	3	江戸後期
S K026	91D1区	S K09	(240)	(140)	(18)	江戸後期	S K053	92B1区	S K46	(145)	(170)	42	江戸後期
S K027	91D1区	S K15	(350)	265	23	江戸後期	S K054	92B1区	S K06	95	70	12	江戸後期

第2表 遺構一覧表 (1)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K 055	92B 1区	S K 05	95	80	30	江戸後期	S K 122	91C 区	S K 19	65	40	9	江戸後期
S K 056	92B 1区	S K 45	180	(45)	5	江戸後期	S K 123	91C 区	S K 09	70	65	13	江戸後期
S K 057	92B 1区	S K 03	(195)	(65)	21	江戸後期	S K 124	91C 区	S K 08	95	75	12	—
S K 058	92B 1区	S K 25	(275)	205	35	江戸後期	S K 125	91C 区	S K 05	(680)	(485)	20	江戸後期
S K 059	92B 1区	S K 10	(120)	120	35	江戸後期	S K 126	91C 区	S K 07	215	195	9	—
S K 060	92B 1区	S K 09	130	125	25	江戸後期	S K 127	91C 区	S K 04	(990)	(370)	15	江戸後期
S K 061	92B 1区	S K 20	(200)	220	35	江戸後期	S K 128	91C 区	S K 02	120	50	21	江戸後期
S K 062	92B 1区	S K 24	65	65	36	江戸後期	S K 129	91C 区	S K 03	65	55	18	—
S K 063	92B 1区	S K 08	(160)	(55)	18	江戸後期	S K 130	91C 区	S K 06	60	55	13	—
S K 064	92B 1区	S K 62	(95)	65	31	江戸後期	S K 131	91C 区	S K 01	195	145	17	江戸後期
S K 065	92B 1区	S K 28	100	55	29	江戸後期	S K 132	91C 区	S K 51	-70	(60)	(29)	江戸後期
S K 066	92B 1区	S K 27	160	(45)	32	江戸後期	S K 133	91C 区	S K 35	(265)	(220)	8	江戸後期
S K 067	92B 1区	S K 15	(135)	80	35	江戸後期	S K 134	91C 区	S K 36	(95)	80	5	—
S K 068	92B 1区	S K 02	180	125	40	江戸後期	S K 135	91C 区	S K 39	(55)	50	28	—
S K 069	92B 1区	S K 11	80	75	28	城下町期か	S K 136	91C 区	S K 40	60	45	12	江戸後期
S K 070	92B 1区	S K 12	(90)	60	25	江戸後期	S K 137	91C 区	S K 37	(65)	40	12	—
S K 071	92B 1区	S K 13	90	70	25	江戸後期	S K 138	91C 区	S K 38	95	55	13	江戸後期
S K 072	92B 1区	S K 58	(70)	65	12	江戸後期	S K 139	91C 区	S K 32	(95)	(90)	13	—
S K 073	92B 1区	S K 43	(165)	245	22	江戸後期	S K 140	91C 区	S K 34	70	65	16	江戸後期
S K 074	92B 1区	S K 60	(165)	(65)	42	江戸後期	S K 141	91C 区	S K 28	140	40	11	江戸後期
S K 075	92B 1区	S K 01	125	75	26	江戸後期	S K 142	92A 区	S K 42	(255)	(60)	15	—
S K 076	92B 1区	S K 61	55	50	3	—	S K 143	92A 区	S K 37	(85)	(20)	6	—
S K 077	92B 1区	S K 16	110	90	36	江戸後期	S K 144	92A 区	S K 34	60	45	6	—
S K 078	92B 1区	S K 04	(105)	145	38	江戸後期	S K 145	92A 区	S K 33	70	55	11	江戸後期
S K 079	92B 1区	S K 17	95	40	25	江戸後期	S K 146	92A 区	S K 36	(105)	(25)	6	—
S K 080	92B 1区	S K 18	(85)	40	24	江戸後期	S K 147	92A 区	S K 39	80	45	6	江戸後期
S K 081	92B 1区	S K 22	(40)	65	46	江戸後期	S K 148	92A 区	S K 41	(265)	55	6	江戸後期
S K 082	92B 1区	S K 34	(70)	(25)	8	江戸後期	S K 149	92A 区	S K 40	(90)	35	6	—
S K 083	92B 1区	S K 23	(85)	75	34	江戸後期	S K 150	92A 区	S K 07	(60)	(30)	10	—
S K 084	92B 1区	S K 49	130	65	34	江戸後期	S K 151	92A 区	S K 08	(60)	(55)	10	—
S K 085	92B 1区	S K 57	70	(20)	4	—	S K 152	92A 区	S K 18	60	(35)	9	—
S K 086	92B 1区	S K 19	(190)	215	93	江戸後期	S K 153	92A 区	S K 19	65	45	11	—
S K 087	92B 1区	S K 26	(120)	(75)	79	江戸後期	S K 154	92A 区	S K 21	65	65	6	—
S K 088	92B 1区	S K 50	155	(60)	26	江戸後期	S K 155	92A 区	S K 20	90	(40)	5	—
S K 089	92B 1区	S K 31	165	115	90	江戸後期	S K 156	92A 区	S K 01	(140)	55	9	—
S K 090	92B 1区	S K 30	(140)	(65)	15	江戸後期	S K 157	92A 区	S K 02	(65)	(25)	8	—
S K 091	92B 1区	S K 56	105	(40)	25	江戸後期	S K 158	92A 区	S K 09	(115)	(50)	11	—
S K 092	92B 1区	S K 65	70	45	5	江戸後期	S K 159	92A 区	S K 22	(75)	(35)	7	—
S K 093	92B 1区	S K 66	(140)	(30)	5	江戸後期	S K 160	92A 区	S K 10	(55)	40	7	—
S K 094	92B 1区	S K 53	50	35	7	—	S K 161	92A 区	S K 11	105	(40)	10	—
S K 095	92B 1区	S K 29	75	45	11	江戸後期	S K 162	92A 区	S K 23	(170)	60	8	—
S K 096	92B 1区	S K 52	(30)	(65)	7	—	S K 163	92A 区	S K 25	145	(115)	6	—
S K 097	92B 1区	S K 55	75	(40)	4	—	S K 164	92A 区	S K 03	(55)	65	9	—
S K 098	92B 1区	S K 54	100	(45)	8	江戸後期	S K 165	92A 区	S K 04	110	(50)	7	—
S K 099	92B 1区	S K 51	220	(70)	10	城下町期か	S K 166	92A 区	S K 05	120	40	7	—
S K 100	91C 区	S K 27	70	70	24	—	S K 167	92A 区	S K 26	85	70	10	—
S K 101	91C 区	S K 23	110	85	25	江戸後期	S K 168	92A 区	S K 27	120	50	10	—
S K 102	91C 区	S K 54	(235)	115	26	江戸後期	S K 169	92A 区	S K 12	70	40	6	—
S K 103	91C 区	S K 53	165	115	25	—	S K 170	92A 区	S K 13	75	45	11	—
S K 104	91C 区	S K 26	120	80	30	—	S K 171	92A 区	S K 16	(215)	60	8	江戸後期
S K 105	91C 区	S K 22	155	120	13	江戸後期	S K 172	92A 区	S K 44	(125)	(52)	10	—
S K 106	91C 区	S K 44	115	60	12	江戸後期	S K 173	92A 区	S K 17	(140)	(40)	18	—
S K 107	91C 区	S K 43	120	60	13	江戸後期	S K 174	92A 区	S K 29	100	35	11	—
S K 108	91C 区	S K 52	(105)	60	30	江戸後期	S K 175	92A 区	S K 14	110	(75)	6	—
S K 109	91C 区	S K 50	150	100	22	—	S K 176	92A 区	S K 15	(55)	40	6	—
S K 110	91C 区	S K 57	245	80	22	江戸後期	S K 177	92A 区	S K 32	70	65	15	江戸後期
S K 111	91C 区	S K 56	70	60	41	—	S K 178	92A 区	S K 31	55	15	2	—
S K 112	91C 区	S K 55	125	85	31	江戸後期	S K 179	92A 区	S K 30	(95)	(40)	18	江戸後期
S K 113	91C 区	S K 49	130	(70)	70	—	S K 180	92A 区	S K 43	(140)	(45)	5	—
S K 114	91C 区	S K 59	290	(165)	4	江戸後期	S K 181	91B 区	S K 05	(475)	255	15	江戸後期
S K 115	91C 区	S K 58	345	300	12	江戸後期	S K 182	91B 区	S K 06	285	(170)	10	—
S K 116	91C 区	S K 16	(60)	35	18	—	S K 183	91B 区	S K 02	115	95	12	江戸後期
S K 117	91C 区	S K 15	(55)	50	15	—	S K 184	91B 区	S K 03	150	90	27	江戸後期
S K 118	91C 区	S K 14	55	40	11	—	S K 185	91B 区	S K 04	325	300	18	江戸後期
S K 119	91C 区	S K 13	95	85	11	—	S K 186	91B 区	S K 01	(600)	(310)	58	江戸後期
S K 120	91C 区	S K 46	70	60	9	—	S K 187	91B 区	S K 07	100	80	15	—
S K 121	91C 区	S K 47	(185)	120	43	江戸後期	—	—	—	—	—	—	

その他の遺構 (S X)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S X 001	91D 1区	S X 01	(735)	(520)	14	江戸後期	S X 003	91C 区	S X 01	890	395	12	江戸後期
S X 002	91C 区	S X 02	(560)	370	15	江戸後期	S X 004	91A 区	S X 02	440	(430)	8	—

下層の遺構

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S D 201	91D 2区	S D 102	165	40	21	—	S D 206	92B 2区	S D 106	255	50	25	江戸中期
S D 202	91D 2区	S D 101	(655)	100	25	江戸中期	S D 207	92B 2区	S D 101	92	20	5	—
S D 203	91D 2区	S D 103	(245)	40	18	江戸中期	S D 208	92B 2区	S D 102	64	18	4	江戸中期
S D 204	92B 2区	S D 103	(110)	40	10	江戸中期	S D 209	92B 2区	S D 104	(485)	(425)	30	江戸中期
S D 205	92B 2区	S D 105	(430)	110	30	江戸中期	—	—	—	—	—	—	—

柱穴 (P i t)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
P i t 201	91D 2区	S K 125	20	20	12	—	P i t 212	92B 2区	S K 158	30	25	6	—
P i t 202	91D 2区	S K 121	45	40	8	—	P i t 213	92B 2区	S K 157	25	20	3	江戸中期
P i t 203	91D 2区	S K 116	30	35	13	—	P i t 214	92B 2区	P i t 126	30	30	4	—
P i t 204	91D 2区	S K 120	45	45	13	—	P i t 215	92B 2区	P i t 137	20	17	7	—
P i t 205	91D 2区	P i t 101	25	25	19	江戸中期	P i t 216	92B 2区	S K 173	40	35	6	—
P i t 206	91D 2区	P i t 102	25	20	12	江戸中期	P i t 217	92B 2区	S K 148	(35)	50	24	—
P i t 207	91D 2区	S K 126	50	45	12	—	P i t 218	92B 2区	P i t 113	(20)	20	8	—
P i t 208	91D 2区	S K 112	30	30	25	—	P i t 219	92B 2区	P i t 122	15	10	3	—
P i t 209	91D 2区	S K 119	20	15	—	—	P i t 220	92B 2区	S K 195	40	20	5	—
P i t 210	91D 2区	S K 106	45	(20)	7	—	P i t 221	92B 2区	P i t 134	(10)	(5)	3	江戸中期
P i t 211	92B 2区	S K 205	(50)	(45)	7	江戸中期	P i t 222	92B 2区	P i t 135	20	15	18	江戸中期

第3表 遺構一覧表 (2)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
Pit223	92B2区	Pit121	15	10	5	—	Pit253	92B2区	Pit107	25	20	3	—
Pit224	92B2区	Pit123	20	15	18	江戸中期	Pit254	92B2区	S K183	40	20	3	—
Pit225	92B2区	Pit120	15	10	4	—	Pit255	92B2区	S K106	50	45	7	—
Pit226	92B2区	S K165	40	(25)	10	—	Pit256	92B2区	S K109	45	35	10	—
Pit227	92B2区	S K171	30	25	28	江戸中期	Pit257	92B2区	S K153	(24)	24	7	—
Pit228	92B2区	S K164	50	30	21	—	Pit258	92B2区	S K152	(22)	44	10	—
Pit229	92B2区	S K151	(28)	44	8	—	Pit259	92B2区	S K154	(32)	32	7	—
Pit230	92B2区	S K166	(45)	35	19	—	Pit260	92B2区	S K127	50	50	4	—
Pit231	92B2区	Pit118	15	10	18	—	Pit261	92B2区	Pit114	30	25	5	—
Pit232	92B2区	S K163	50	10	8	—	Pit262	92B2区	Pit115	(25)	25	7	—
Pit233	92B2区	Pit117	15	15	21	—	Pit263	92B2区	S K199	(35)	25	6	—
Pit234	92B2区	S K168	(25)	15	11	—	Pit264	92B2区	S K116	20	15	4	—
Pit235	92B2区	Pit138	(15)	10	2	—	Pit265	92B2区	Pit110	20	10	5	—
Pit236	92B2区	S K169	45	40	27	江戸中期	Pit266	92B2区	S K118	(45)	(15)	7	—
Pit237	92B2区	Pit136	(30)	25	28	—	Pit267	92B2区	Pit111	20	15	2	—
Pit238	92B2区	Pit119	15	15	17	—	Pit268	92B2区	S K202	40	20	5	—
Pit239	92B2区	Pit125	10	10	18	—	Pit269	92B2区	Pit112	35	30	7	—
Pit240	92B2区	S K172	(35)	25	10	—	Pit270	92B2区	S K187	40	35	35	江戸中期
Pit241	92B2区	Pit116	10	10	12	—	Pit271	92B2区	S K189	20	20	11	—
Pit242	92B2区	Pit140	(45)	(35)	13	—	Pit272	92B2区	S K190	50	40	20	—
Pit243	92B2区	Pit139	25	20	24	—	Pit273	92B2区	Pit131	15	10	16	—
Pit244	92B2区	S K170	(30)	50	20	—	Pit274	92B2区	Pit132	20	20	5	—
Pit245	92B2区	S K197	(45)	(20)	29	江戸中期	Pit275	92B2区	Pit133	30	20	12	—
Pit246	92B2区	Pit127	(15)	20	8	—	Pit276	92B2区	S K192	30	20	30	—
Pit247	92B2区	S K181	(20)	30	10	—	Pit277	92B2区	Pit134	40	15	5	—
Pit248	92B2区	S K117	(25)	(45)	8	—	Pit278	92B2区	Pit135	15	15	5	—
Pit249	92B2区	Pit128	20	15	5	—	Pit279	92B2区	S K114	45	20	8	—
Pit250	92B2区	Pit129	45	35	4	—	Pit280	92B2区	S K113	50	25	6	—
Pit251	92B2区	Pit130	20	15	3	—	Pit281	92B2区	S K203	50	20	14	—
Pit252	92B2区	S K182	50	20	2	—							
井戸 (S E)													
遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期							
S E201	92B2区	S K175	260	(225)	(164)	城下町後期							
土坑 (S K)													
遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K201	91D2区	S K122	(115)	30	22	江戸中期	S K251	92B2区	S K131	70	(30)	14	江戸中期
S K202	91D2区	S K118	70	30	38	江戸中期	S K252	92B2区	S K130	(95)	60	38	江戸中期
S K203	91D2区	S K115	(75)	80	20	江戸中期	S K253	92B2区	S K155	60	45	18	—
S K204	91D2区	S K113	85	(20)	12	—	S K254	92B2区	S K104	120	40	15	江戸中期
S K205	91D2区	S K128	130	(60)	17	江戸中期	S K255	92B2区	S K133	60	45	20	江戸中期
S K206	91D2区	S K131	85	65	10	江戸中期	S K256	92B2区	S K162	65	15	12	江戸中期
S K207	91D2区	S K123	100	25	22	—	S K257	92B2区	S K207	60	30	20	—
S K208	91D2区	S K133	65	50	21	江戸中期	S K258	92B2区	S K208	(52)	(45)	14	—
S K209	91D2区	S K132	85	70	18	江戸中期	S K259	92B2区	S K105	80	65	35	—
S K210	91D2区	S K129	105	95	29	江戸中期	S K260	92B2区	S K140	(95)	65	42	江戸初頭
S K211	91D2区	S K114	140	110	20	江戸中期	S K261	92B2区	S K174	65	50	17	江戸中期
S K212	91D2区	S K105	190	125	28	江戸中期	S K262	92B2区	S K134	(135)	(65)	20	江戸中期
S K213	91D2区	S K110	95	40	16	江戸中期	S K263	92B2区	S K150	(60)	(80)	37	江戸中期
S K214	91D2区	S K109	60	85	15	江戸中期	S K264	92B2区	S K179	(85)	(35)	8	—
S K215	91D2区	S K104	(140)	125	19	江戸中期	S K265	92B2区	S K180	(95)	(30)	2	江戸中期
S K216	91D2区	S K139	95	75	28	江戸中期	S K266	92B2区	S K135	135	35	43	江戸中期
S K217	91D2区	S K108	(155)	140	16	江戸中期	S K267	92B2区	S K136	56	32	20	江戸中期
S K218	91D2区	S K111	(60)	60	—	江戸中期	S K268	92B2区	S K107	85	80	33	江戸中期
S K219	91D2区	S K134	(170)	(150)	27	江戸中期	S K269	92B2区	S K143	(76)	54	39	江戸中期
S K220	91D2区	S K127	445	(440)	28	江戸中期	S K270	92B2区	S K142	92	54	37	—
S K221	91D2区	SK127F	215	185	24	江戸中期	S K271	92B2区	S K209	85	(60)	34	—
S K222	91D2区	S K138	125	50	19	江戸中期	S K272	92B2区	S K141	52	32	25	江戸中期
S K223	91D2区	S K101	(485)	375	18	江戸中期	S K273	92B2区	S K126	80	40	12	—
S K224	91D2区	S K107	270	200	30	江戸中期	S K274	92B2区	S K144	116	52	6	—
S K225	91D2区	S K117	100	(30)	—	—	S K275	92B2区	S K145	120	(80)	7	—
S K226	91D2区	S K103	(435)	(90)	36	江戸中期	S K276	92B2区	S K156	(65)	65	21	—
S K227	91D2区	S K136	190	165	26	江戸中期	S K277	92B2区	S K129	105	(65)	7	—
S K228	91D2区	S K135	(365)	120	32	江戸中期	S K278	92B2区	S K124	(40)	60	6	—
S K229	91D2区	S K124	100	(35)	17	—	S K279	92B2区	S K125	80	(65)	20	—
S K230	91D2区	S K102	(310)	335	23	江戸中期	S K280	92B2区	S K206	(110)	(75)	23	—
S K231	91D2区	S K130	(350)	(350)	17	江戸中期	S K281	92B2区	S K198	(120)	(75)	30	江戸中期
S K232	91D2区	S K137	175	165	22	—	S K282	92B2区	S K115	100	45	7	—
S K233	92B2区	S K185	(115)	(55)	32	江戸中期	S K283	92B2区	S K108	90	60	5	—
S K234	92B2区	S K147	60	50	22	江戸中期	S K284	92B2区	S K122	(355)	355	24	江戸中期
S K235	92B2区	S K184	(60)	(40)	9	江戸中期	S K285	92B2区	Pit104	46	38	18	江戸中期
S K236	92B2区	S K139	80	25	13	—	S K286	92B2区	Pit103	50	34	27	—
S K237	92B2区	S K138	95	30	24	—	S K287	92B2区	S K177	(60)	(35)	50	江戸中期
S K238	92B2区	S K121	(90)	60	14	江戸中期	S K288	92B2区	S K178	75	20	19	江戸中期
S K239	92B2区	S K146	(90)	50	35	—	S K289	92B2区	S K123	(350)	260	20	江戸中期
S K240	92B2区	S K101	170	(85)	36	城下町後期	S K290	92B2区	S K188	110	75	11	江戸中期
S K241	92B2区	S K102	130	105	47	江戸初頭	S K291	92B2区	S K210	65	(52)	15	—
S K242	92B2区	S K159	(85)	(35)	20	江戸中期	S K292	92B2区	S K191	65	30	16	—
S K243	92B2区	S K160	95	(45)	20	江戸中期	S K293	92B2区	S K204	(470)	(125)	57	—
S K244	92B2区	S K193	100	55	20	江戸中期	S K294	92B2区	S K103	(88)	76	21	江戸中期
S K245	92B2区	S K194	(80)	(80)	10	江戸中期	S K295	92B2区	Pit106	84	50	25	江戸中期
S K246	92B2区	S K120	(145)	(120)	20	—	S K296	92B2区	Pit105	56	28	28	—
S K247	92B2区	S K137	110	40	34	—	S K297	92B2区	Pit102	56	36	14	江戸中期
S K248	92B2区	S K196	60	25	14	—	S K298	92B2区	Pit101	52	30	8	—
S K249	92B2区	S K161	60	35	28	江戸中期	S K299	92B2区	S K167	(130)	230	30	江戸中期
S K250	92B2区	S K132	(70)	(40)	13	—	S K300	92B2区	S K176	(125)	180	6	江戸中期
その他の遺構 (S X)													
遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期	遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模 (cm)			時 期
S X201	91D2区	S X101	—	—	—	江戸中期	S X202	92B2区	S X101	—	—	—	江戸中期

第4表 遺物一覧表(3)

第三章 遺物



第Ⅲ章 遺物 目次

第1節 出土遺物の概要	23
第2節 古代の遺物	23
第3節 中世の遺物	25
第4節 近世の遺物	26
1. 概 要	26
2. 分 類	26
3. 統計方法	32
4. 陶磁器類	33
5. 加工円盤	87
6. 瓦 類	91
7. 人形・ミニチュア類	96
8. 木 製 品	100
9. 金属製品	103
10. 石 製 品	104

第1節 出土遺物の概要

今回の発掘調査で、各調査区より出土した遺物は、27ℓ入りコンテナにして約300箱に及んだ。その大多数を占めているのは、近世陶磁器類と瓦類である。その他に、銭・煙管などの金属製品や、椀・箸などの木製品、加工円盤、人形・ミニチュア類など、多種多様である。詳しくは後述することにするが、その出土状況を見てみると、遺構より出土しているものもあるが、3分の1近くが整地層と思われる土層中より出土している。従って、これらの大量の遺物は、おそらく整地という大規模な土木事業の時期を示していると思われる。大まかにいえば、整地以前の下面では18世紀末までの遺構・遺物が確認され、整地後の上面では19世紀代の遺構・遺物が検出されている。このことから、19世紀初頭に、この大規模で人為的な造成が行われていたことが窺えるのである。

また、近世陶磁器類以外にも、中世（鎌倉時代中葉）の山茶椀類や古代（奈良時代末～平安時代）の須恵器・灰釉陶器などが少量ながら出土している。山茶椀類については、整地層や遺構の埋土に見られることもままあるが、極僅かながら遺構の時期を決定する資料としての出土も見られる。この時期に、この地に人々が生活していたことが想定される。須恵器や灰釉陶器については、整地層や遺構の埋土からしか出土しておらず、この時期の遺構を確認することはできなかった。特に古代の遺物が、近世の遺構である91B区のS D 025の埋土の中から集中して出土していることは特筆される。

第2節 古代の遺物

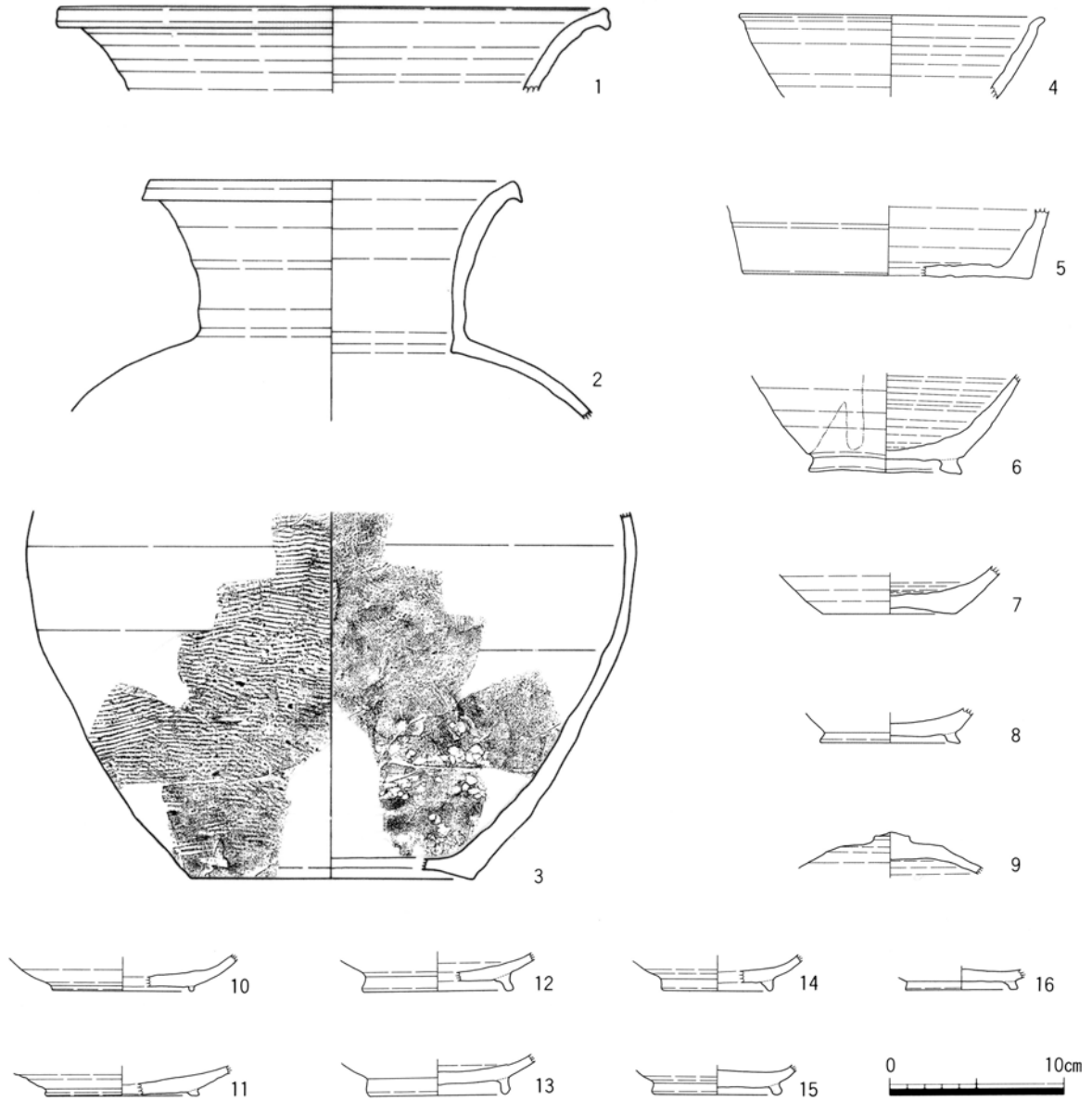
出土状況は第1節の通りであり、古代の遺構については確認できなかったが、遺物は破片点数にして272点出土している。その47.4%に当たる129点が、91B区で検出されたS D 025の埋土の中から出土している。S D 025は19世紀代の用水で、この時期まで遡ることは決してないことから、幕末の頃にこの遺構を埋めた土の中に含まれていたものと思われる。なお、このような理由により、細かな分類や口縁部計測法による遺物の集計については、今回は実施していない。

古代遺物の内訳は、須恵器が252点（92.6%）、灰釉陶器が20点（7.4%）である。遺物全体に占める割合は極めて低いが、見過ごすわけにはいかない数量である。須恵器の破片数252点の内、66.3%（167点）を占めているのが8世紀を中心とした甕であり、17.9%（45点）8世紀代の杯、8世紀後半を中心とした杯蓋や長胴壺、長頸瓶などのその他のものが15.9%（40点）となっている。そのほとんどが、猿投で生産された製品と思われる。また、灰釉陶器の破片数20点の内、椀が70.0%（14点）、皿が30.0%（6点）となっている。時期は、K-14～H-72（9世紀後葉～11世紀前葉）頃を中心としており、猿投や美濃で生産されたものである。

これらの遺物から、遅くとも8世紀後葉には、この地の周辺に人々が生活をしてきた集落が存在していたことが想定できる。

<参考文献>

『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ） 尾北地区・三河地区』 愛知県教育委員会 1983



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	時期	備考	登録 番号
	調査区	遺構	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
1	91B	SD 025	須恵器	甕	-	31.1	-	-	ナデ	ナデ	猿投	7世紀末?		E-001
2	〃	〃	〃	〃	-	20.7	-	-	〃	タタキ	〃	8世紀末?	内外面に自然釉, 3と同一個体	E-002
3	〃	〃	〃	〃	-	-	-	-	〃	〃	〃	8世紀末?	外面に自然釉, 2と同一個体	E-003
4	〃	〃	〃	有台椀	-	17.4	-	-	〃	ナデ	〃	8世紀後半		E-004
5	〃	〃	〃	長胴壺	-	-	-	16.5	〃	ケズリ	〃	7世紀後半		E-005
6	〃	〃	〃	長頸瓶	-	-	-	8.7	〃	〃	〃	8世紀後半	0-10	E-006
7	〃	〃	〃	壺か	-	-	-	7.6	-	-	猿投か	8世紀後半	底部回転糸切痕	E-007
8	〃	〃	〃	有台杯身	-	-	-	7.9	-	-	〃	8世紀後半	色調 赤紫色	E-008
9	〃	〃	〃	杯蓋	-	-	-	-	-	-	〃	8世紀後半	色調 暗灰褐色	E-009
10	〃	〃	灰釉陶器	椀	-	-	-	8.0	灰釉	ケズリ	猿投	9世紀中葉	K-14	E-010
11	〃	〃	〃	〃	-	-	-	8.7	〃	〃	猿投か	9世紀中葉	K-14	E-011
12	〃	〃	〃	〃	-	-	-	8.4	-	-	猿投	5世紀後半 ~10世紀前半	内面に自然釉, K-90?	E-012
13	〃	〃	〃	〃	-	-	-	7.8	-	ケズリ	美濃	10世紀前半-後半	K-90~0-53	E-013
14	〃	〃	〃	〃	-	-	-	6.2	-	ケズリ・ナデ	〃	11世紀前半	H-72	E-014
15	〃	〃	〃	〃	-	-	-	7.1	灰釉	灰釉	猿投	11世紀前半	底部回転糸切痕, H-72	E-015
16	〃	〃	〃	皿	-	-	-	6.3	-	-	美濃か	11世紀前半	底部回転糸切痕, H-72	E-016

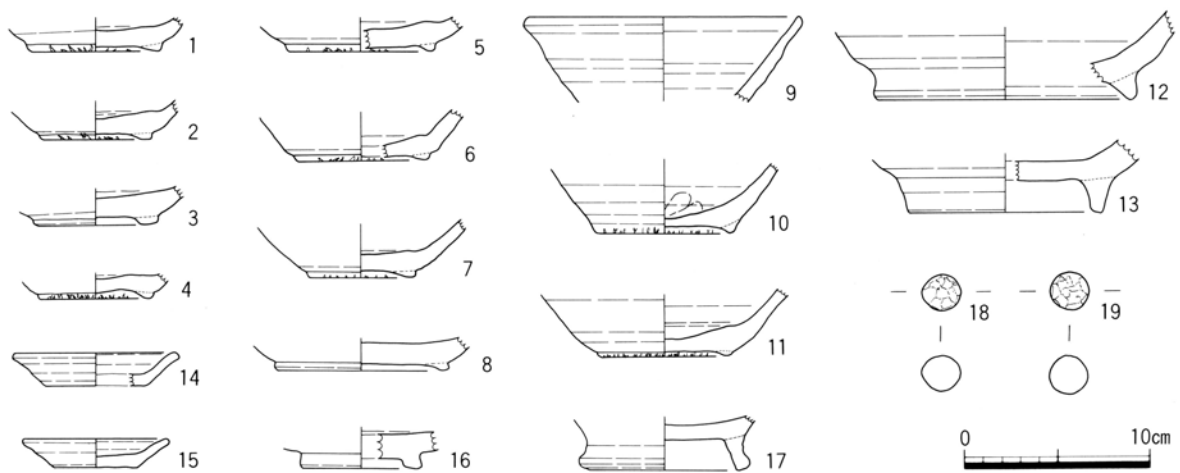
第26図 古代の遺物 (1:4)

第3節 中世の遺物

遺構より出土した遺物は少なく、整地層や遺構の埋土から破片点数で 662点が出土している。その内訳は、山茶碗類が 660点（99.6%）と圧倒的な数を占めており、他に施釉陶器の壺（古瀬戸の四耳壺）と青磁の碗の破片が各 1 点ずつ（各 0.2%）出土しているのみである。山茶碗類については、碗が 435点（65.9%）と多く、次いで皿 208点（31.5%）、鉢が14点（ 2.1%）、陶丸などのその他のものが3点（ 0.5%）となっている。時期は、生産地の編年によると第7型式（13世紀中葉）のものが多く、13世紀代と思われる。また、生産地としては、猿投・瀬戸の他に常滑や渥美のものまでみることができ、当時の流通網の発達の様子を窺うことができる。なお、古代の遺物と同様に、分類・口縁部計測法による集計は実施していない。

<参考文献>

藤沢良祐 「瀬戸地区の北部系山茶碗」 『尾呂 本文編』 瀬戸市教育委員会 1990



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	時期	備考	登録 番号
	調査区	遺構	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
1	91B	SD 025	山茶碗類	碗	-	-	-	6.7	自然釉	-	常滑	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-017
2	〃	〃	〃	〃	-	-	-	5.6	-	-	瀬戸	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-018
3	〃	〃	〃	〃	-	-	-	6.4	-	-	常滑	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-019
4	〃	〃	〃	〃	-	-	-	5.9	指ナデ	圧痕	瀬or猿	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-020
5	〃	〃	〃	〃	-	-	-	7.6	自然釉	自然釉	渥or常	13世紀代	底部回転糸切痕	E-021
6	〃	〃	〃	〃	-	-	-	6.8	〃	-	瀬or猿	13世紀中葉		E-022
7	〃	〃	〃	〃	-	-	-	5.6	〃	-	常滑	13世紀代	底部回転糸切痕	E-023
8	91D2	SK 228	〃	〃	-	-	-	8.8	〃	ナデ	猿or常	13世紀代		E-024
9	〃	SD 202	〃	〃	-	14.4	-	-	ナデ	〃	瀬戸	13世紀中葉		E-025
10	91D	南トレンチ	〃	〃	-	-	-	7.2	指ナデ	指ナデ	〃	13世紀代	高台内外に稜痕	E-026
11	92B2	SK 219	〃	〃	-	-	-	6.5	〃	〃	常滑	13世紀初	底部回転糸切痕, 高台に稜痕・砂痕	E-027
12	91B	南トレンチ	〃	鉢	-	-	-	13.6	ナデ	ナデ	瀬戸	13世紀中葉		E-028
13	〃	SD 025	〃	〃	-	-	-	10.1	-	自然釉	常滑	12世紀か?	内面摩滅	E-029
14	92B1	SK 099	〃	皿	1.8	8.4	-	5.3	指ナデ	指ナデ	〃	13世紀初	底部回転糸切痕	E-030
15	〃	SD 016	〃	〃	1.5	7.4	-	4.4	ナデ	ナデ	瀬戸	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-031
16	91D1	SD 002	青磁	碗	-	-	-	6.1	-	-	中国	13世紀中葉	龍泉窯	E-032
17	91B1	SD 025	施釉陶器	四耳壺	-	-	-	8.2	-	灰釉	瀬戸	13世紀代		E-033
18	91D	南トレンチ	山茶碗類	陶丸	-	-	-	-	-	-	〃	-	長径2.2cm, 短径1.9cm	E-034
19	92B	南 壁	〃	〃	-	-	-	-	-	-	〃	-	長径2.1cm, 短径2.0cm	E-035

第27図 中世の遺物 (1:4)

第4節 近世の遺物

1. 概要

本遺跡より出土した近世の遺物は、多種多様な陶磁器類がその大半を占めており、その他にも瓦類・石製品・金属製品・木製品などがある。本節では、陶磁器類を中心に記述し、本センターの他の近世遺跡との比較・検討ができるように配慮して、用途による分類と口縁部計測法による器種組成を明らかにすることを第一義とする。そこから、各遺構の性格を明確にしていくことを目指したが、遺構出土の遺物量が少なかったため、残念ながら明確にできた遺構は少なかった。まず、はじめに分類と統計方法について述べてから、遺構別に遺物分析を行いたい。

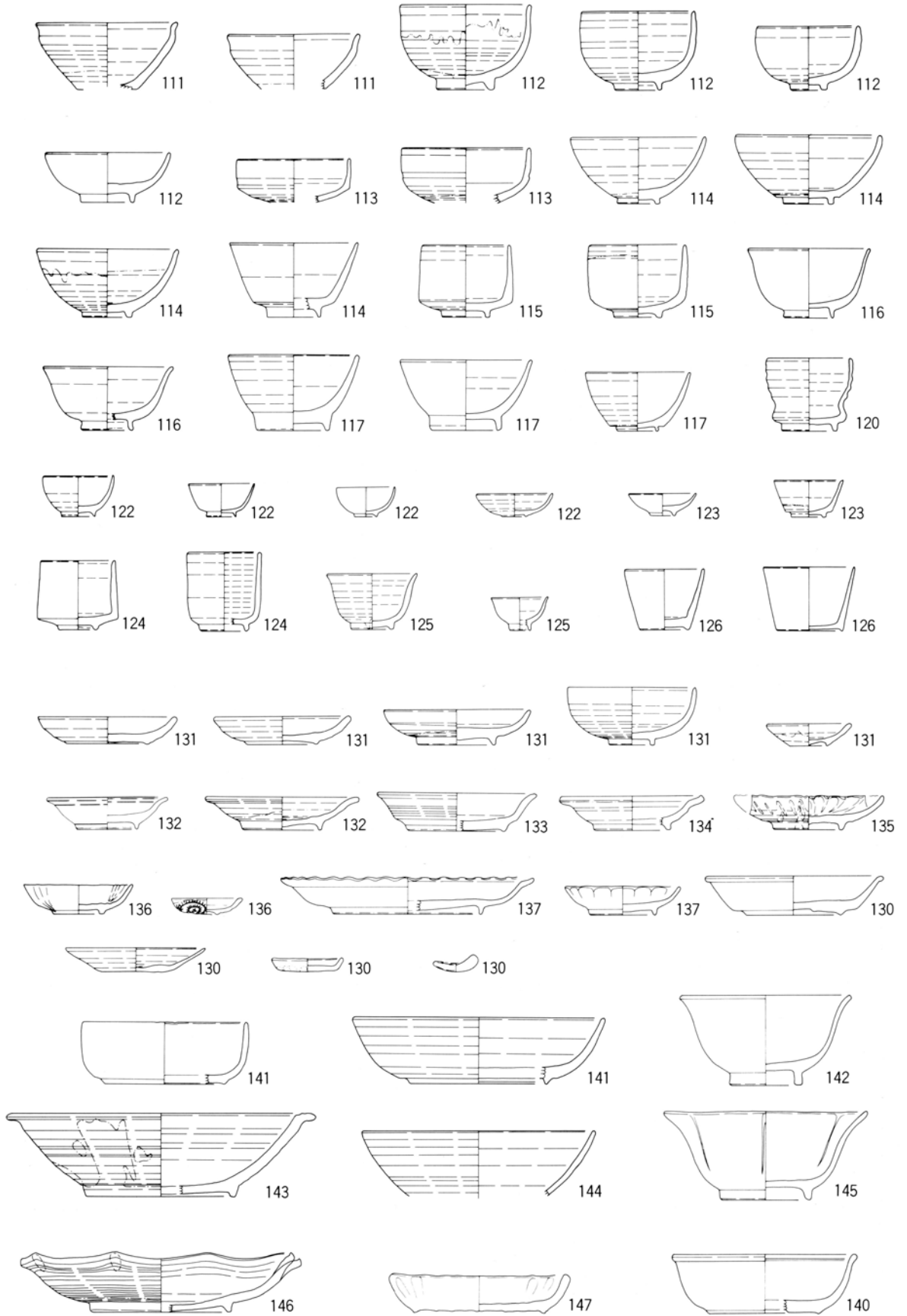
2. 分類

『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』（1993）の分類と同様に、用途による分類を行った。用途については、1－供膳具、2－調理具、3－貯蔵具、4－灯火具、5－火具、6－化粧具、7－神仏具、8－喫煙具、9－調度具、0－その他に分類し、さらにそれぞれに器種・器形を組み合わせることで細分化した。一部は遺物の形態にこだわらず、使用痕の有無を重視し、例えば、皿でも口縁に油煙が付着していれば灯明皿に、火鉢でも口縁部に敲打痕があれば喫煙具に含めるといった方法で、統計処理を行っている。このため、一般に行われている形態による分類と誤差がでてくることを予め断わっておく。

それぞれの用途に基づく分類については、以下の第5表～第7表に示した分類表と第28図～第30図の分類図の通りである。

用途	器種	器形	備考	
1 供膳具	1 椀	1 天目椀	口径8.5cm以上	
		2 丸椀	天目茶椀、段付天目	
		3 腰折椀	尾呂茶椀、御室茶椀	
		4 平椀		
		5 筒椀	柳茶椀	
		6 端反椀		
		7 広東椀	広東椀、小杉椀	
		8 腰鍔椀		
		0 その他		
		2 小椀 小坏 猪口	1 天目椀	口径8.5cm未満
	2 丸椀			
	3 平椀			
	4 筒椀			
	5 端反椀			
	6 そば猪口			
	0 その他			
	3 皿		1 丸皿	
			2 端反皿	
			3 稜皿	
		4 折縁皿		
5 菊皿				
6 型打皿				
7 ひだ、稜花皿				
0 その他		土師質の皿（ロクロ・手捏ね）、玉縁皿など		
4 鉢		1 丸鉢	口径15cm以上	
		2 端反鉢	大平鉢、黄瀬戸鉢	
	3 折縁鉢	笠原鉢		
	4 平鉢			
	5 型打鉢			
	6 稜花鉢			
	7 織部	向付		
	0 その他	玉縁鉢など		
	0 その他			

第5表 近世陶磁器類分類表（1）

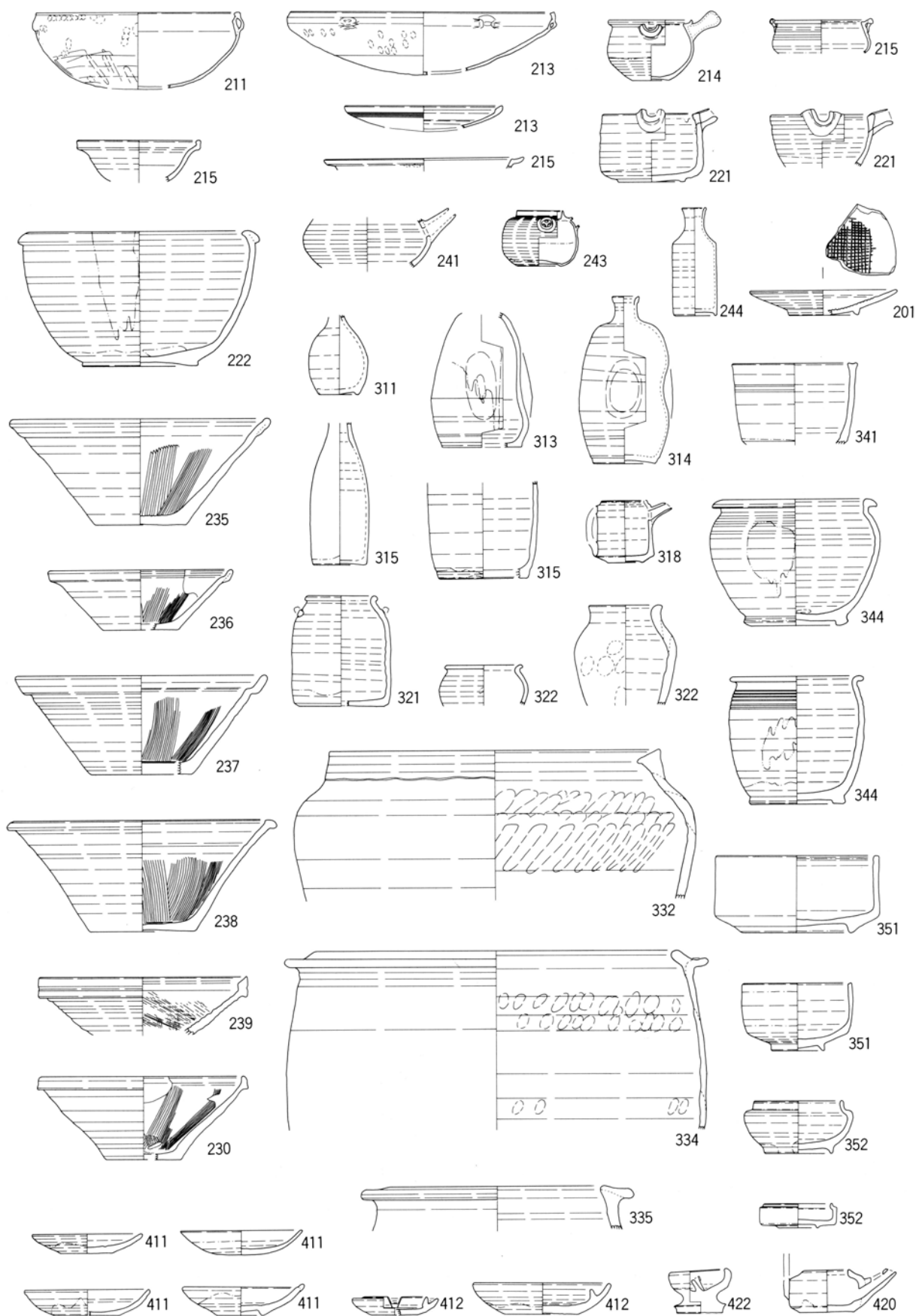


第28圖 近世陶磁器類分類圖(1)

外町遺跡

用途	器種	器形	備考	
2 調理具	1 鍋, 釜	1 内耳鍋		
		2 羽釜		
		3 焙烙		
		4 行平		
		5 鍋	土鍋	
	2 鉢	1 片口		
		2 捏ね鉢		
		0 その他		
		3 播鉢	1 I類	1 6 C
	2 II類		1 6 C	
	3 III類		1 7 C	
	4 IV類		1 7 C 後葉	
	5 V類		1 8 C 前半	
	6 VI類		1 8 C 後半	
	7 VII類		1 8 C 後葉	
	8 VIII類		1 9 C	
	9 IX類		備前播鉢, 堺播鉢	
	4 瓶	0 その他		
		1 土瓶		
		2 銚子		
		3 急須		
		4 爛德利 A		
		5 爛德利 B	ちろり	
	0 その他	0 その他		
		1 卸皿		
	3 貯蔵具	1 瓶	1 德利 A	高台あり
			2 德利 B	平底
			3 德利 C	断面が三角形のもの
			4 德利 D	断面が四角形のもの
			5 德利 E	高田德利など
			6 油德利	
			7 汁次 A	丸型
			8 汁次 B	筒型
			9 汁次 C	その他
			0 その他	しびんなど
		2 壺	1 蓋付壺	
2 無蓋壺				
3 茶壺				
4 茶入				
5 土師壺				
0 その他				
3 甕 A				常滑産
		1 I類	N字口縁	
		2 II類	Y字口縁	
		3 III類	Y字口縁	
		4 IV類	T字口縁	
		5 V類	┐字口縁	
		6 VI類	その他	
4 甕 B		0 その他		
		1 半胴 A		
		2 半胴 B	口縁外反	
		3 銭甕		
		4 甕	胴丸形	
5 鉢		0 その他		
		1 蓋物 A	蓋受け無	
		2 蓋物 B	蓋受け有	
0 その他		0 その他		
		1 皿		
4 灯火具		1 皿	1 灯明皿	口縁部に油煙の付着した皿すべて
			2 灯蓋	受皿
			3 行灯皿	盤形の皿
	0 その他			
	2 秉燭	1 I類	受皿と灯芯たてが接合したもの	
		2 II類	脚付きのもの	
		3 III類	タンコロ	
		4 IV類	窓あきの蓋のつくもの	
		5 V類	軟質陶器系のもの	
		0 その他		
	3 瓦燈	1 瓦燈		
		0 その他		
	4 燭台			蠟燭を乗せる台
		0 その他		

第6表 近世陶磁器類分類表(2)



第29图 近世陶磁器類分類图(2)

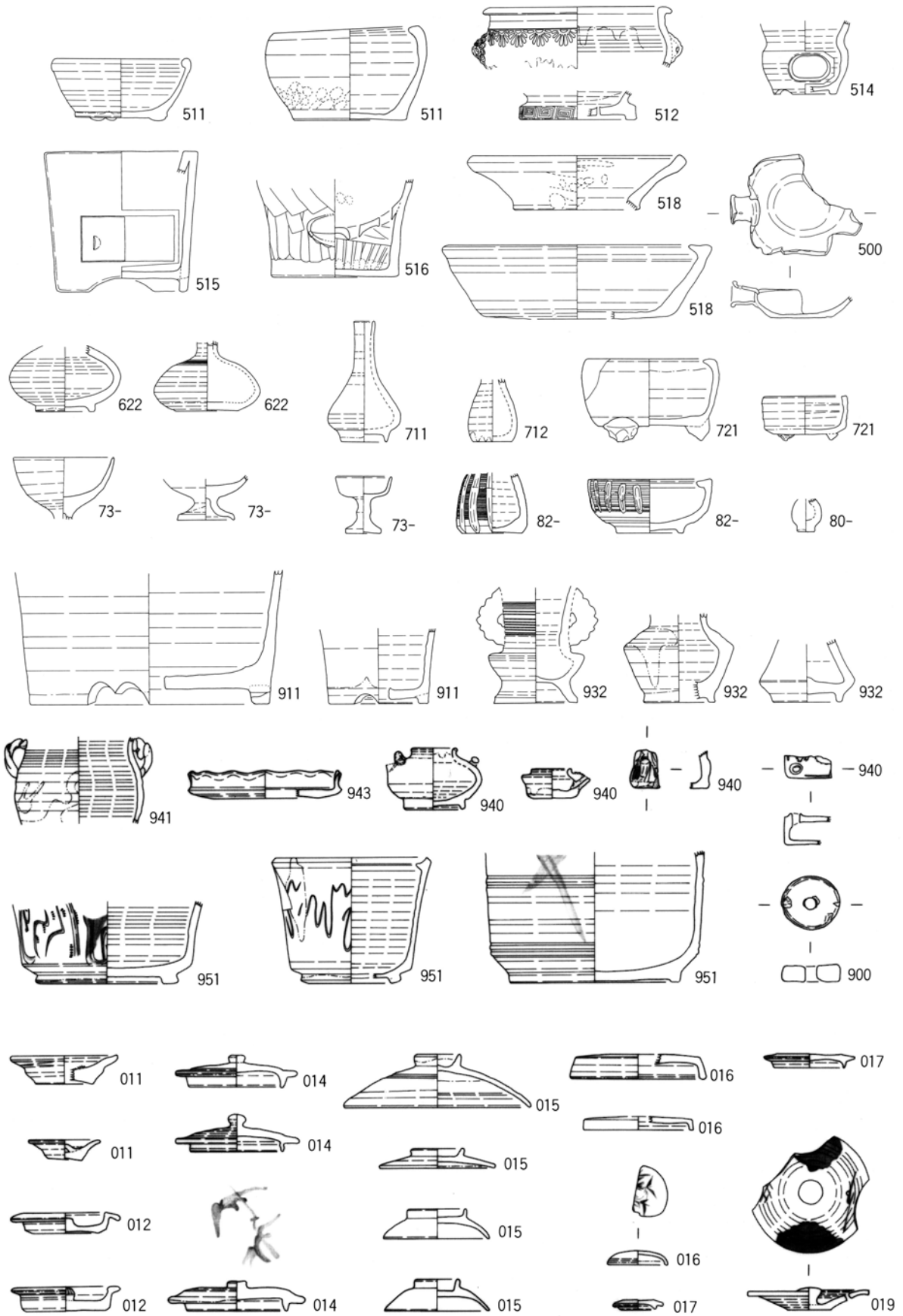
外町遺跡

用途	器種	器形	備考	
5 火具	1 鉢	1 火鉢		
		2 瓶掛		
		3 風炉		
		4 こん炉A	内部構造が一重のもの	
		5 こん炉B	内部構造が二重のもの	
		6 蚊いぶし		
		7 火容	窓付きのもの	
		8 火桶		
		0 その他		
		2 壺	1 火消し壺	蓋付きの火鉢
	0 その他			
	3 くど		1 くどA	口唇部が円筒状のもの
		2 くどB	口唇部がL字に外部へ屈曲するもの	
	0 その他	1 五徳	三脚の環状台	
		0 その他	さな・七厘五徳・十能等	
6 化粧具	1 紅皿	1 お歯黒壺	口縁部の一箇所が鳶口状を呈するもの	
		2 髪油壺		
		3	転用品	
		0 その他		
	3 びんだらい			
		0 その他		
7 神仏具	1 瓶	1 神酒徳利A	鶴首	
		2 神酒徳利B	口唇部外反または玉縁状を呈するもの	
		0 その他		
	2 香炉	1 筒型		
		2 袴腰型		
		0 その他		
	3 仏飯器			蓋物Bの小型製品
		4 香合		
		5 線香筒		
		0 その他		
8 喫煙具	1 火容	1 筒型	口縁部に敲打痕のあるものすべて	
		2 香炉型	小型の火鉢状を呈するもの	
		0 その他		
	2 灰落とし			
		0 その他		鼻煙壺など
9 調度具	1 植木鉢	1 植木鉢		
		2 半胴	半胴型の転用品	
		3 転用	他器種の転用品	
		4 蘭鉢		
		0 その他		
	2 餌鉢	1 餌鉢	環状の摘みのある半筒形の小椀	
		2 餌搦鉢	搦鉢の小型製品	
		0 その他		
	3 花生	1 筒型	体部から口縁にかけて直線的なもの	
		2 壺型	口縁が外反するもの	
		0 その他		
	4 水指	1 水指	壺型で有蓋	
		2 建水	壺型で無蓋	
		3 水盤	浅鉢状で口縁を折り返しているもの	
		0 その他	水注、水滴など	
	5 水甕	1 水甕		
		2 手洗鉢	口縁が外反するもの	
		0 その他		
	6 壺	1 唾壺		
		0 その他		
0 その他		1 柄杓		
		2 筒型		
	3 手桶			
	4 土管			
0 その他	1 蓋	1 蓋A	落し蓋で折り返しのないもの	
		2 蓋B	落し蓋で折り返しのあるもの	
		3 蓋C	偏平蓋でかえりのないもの	
		4 蓋D	偏平蓋でかえりのあるもの	
		5 蓋E	環状の摘みが付きかえしのないもの	
		6 蓋F	摘みがなくかえしのないもの	
		7 蓋G	摘みがなくかえしのあるもの	
		8 蓋H	湾曲した傘状を呈するもの	
		9 蓋I	有孔のものすべて	
		0 その他		

第7表 近世陶磁器類分類表(3)

<分類表・分類図の見方>

分類は前述の通り、用途・器種・器形を3桁の数字で表しており、例えば、天目茶椀は供膳具(1)・椀(1)・天目椀(1)で111となる。



第30图 近世陶磁器類分類図(3)

3. 統計方法

陶磁器類の統計方法には、口縁部計測法を用いた。用途・器種・器形別に口縁部の残存率を計測し、個体数を算出する方法をとった。計測は、残存する口縁を接合した後、12分の1単位で行い、12分の1未満は0、12分の1以上で12分の2未満は1とし、以下順次2、3、……、11、12とカウントした。この集計が、接合後口縁残存率である。個体数は、これを12で割って小数点以下第2位まで求めたもの（小数点第3位を四捨五入）である。ここで注意しなくてはならないのは、個体数が組成分析を目的とした統計上の数値であって、個体識別に基づく数値とは異なっており、実体の個体数ではないということである。この数値を取り扱う際には、この点に留意して用いる必要がある。なお、比較検討のため、接合前の破片点数と総破片数もあわせて集計した。

また、陶磁器類以外の遺物、例えば、瓦類、人形・ミニチュア類、木製品、金属製品、石製品については、計測の方法や遺存状況などに問題があるため、今回は取り上げなかった。

ただし、器種としての蓋については、身となる器種と一体のものであり、組成の統計処理上ダブルカウントとなるため、独立の用途0として1項をたてて集計し、用途組成図および本文中比率は、総出土遺物から蓋を除外した数値を表している。

ここで提示した数値は、あくまでも今回の発掘調査で出土した本遺跡出土の全遺物の比率・割合であって、必ずしも一般的な近世の遺物組成を示しているわけではない。しかし以下の個別遺構の記述に際しては、全体の概要で示した比率・割合（第31図・第8表）を近世遺物群のあり方の平均値と考え、これに対してどのように変化しているかを中心に見ていくことにする。

なお、本節では遺物についての記述を極力おさえ、遺構出土の遺物の組成の検討を中心に記述を行った。このため、個々の遺物についての記述は、各実測図の下の観察表のみに限った。また、各遺物の材質については、各実測図の通番の右側に、D：土器、T：陶器、J：磁器、N：軟質陶器、G：瓦質というアルファベットで表記してある。また、産地では、瀬戸・美濃の製品を瀬・美と略してある。各遺構・遺物の時期決定にあたっては、研究の進んでいる瀬戸・美濃産の陶磁器類や肥前産の陶磁器類などを手掛りとし、それぞれの年代観については各生産地で明らかになっているものによった。

<参考文献>

- 金子健一編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』 財愛知県埋蔵文化財センター 1992
遠藤才文編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』 財愛知県埋蔵文化財センター 1993
『研究紀要V～Ⅷ』 瀬戸市歴史民俗資料館 .1986～1989
『有田町史 古窯編』 有田町史編纂委員会 1988
大橋康二 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989
大橋康二 『別冊太陽 63 古伊万里』 平凡社 1988
井上喜久男 『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社 1992

以上の文献を参考にさせていただいたほか、大橋康二・遠藤才文の両氏には実地に御指導・御助言をいただいた。記して、謝意を表す次第である。

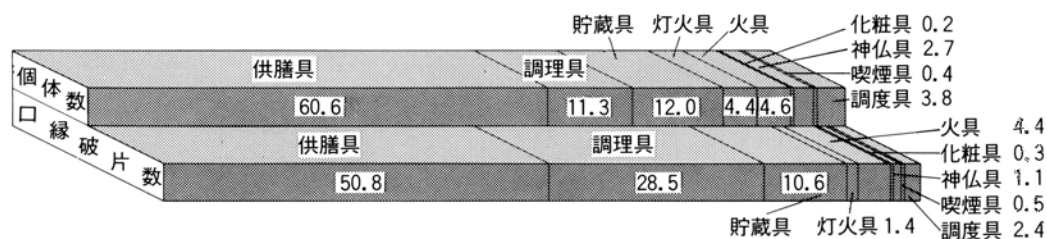
4. 陶磁器類

全体の概要

今回の発掘調査で出土した全近世陶磁器類は、総破片数で34,663点にのぼる。接合前口縁破片数は9,488点であり、総個体数は688.75個体である。数量的には少ないが、名古屋城三の丸遺跡と比較してみると、その概要を次のようにまとめることができる。

近世の土器・陶磁器類における組成の最大の特徴は、名古屋城三の丸遺跡でも指摘されているように、その用途・器種の多さと、土師質製品に比べて陶磁器類の比率が増大することにある。用途については、便宜的に10に分類したが、極少量のものも含め全ての用途において遺物が出土している。また、同一用途内における器種の多様化も見ることができる。比率としては、供膳具が60.6%と圧倒的に多く、次いで貯蔵具、調理具と続き、やはり日常的な生活に関わる遺物群が全体の83.9%を占めており、名古屋城三の丸遺跡（63.3%）よりも高い比率を示している。さらに、副次的な生活を示す遺物群としては、化粧具・神仏具・喫煙具・調度具などがあり、全体の16.1%を占めている。各種の遺物と対応する蓋は、接合前口縁破片数で296点、個体数では65.17個体となっている。

また、土師質製品と陶磁器類の比率を見てみると、土師質製品は9.6%と低く、陶磁器類が陶器製品59.6%・磁器製品30.4%となり、その他の材質とした軟質陶器や瓦質の製品が0.4%となっている。名古屋城三の丸遺跡に比べ、磁器製品の占める割合が高くなっているが、これは瀬戸での磁器生産の影響と見られ、外町遺跡の方により多くの磁器製品が流入していることが確認された。



第31図 近世出土陶磁器類の用途組成

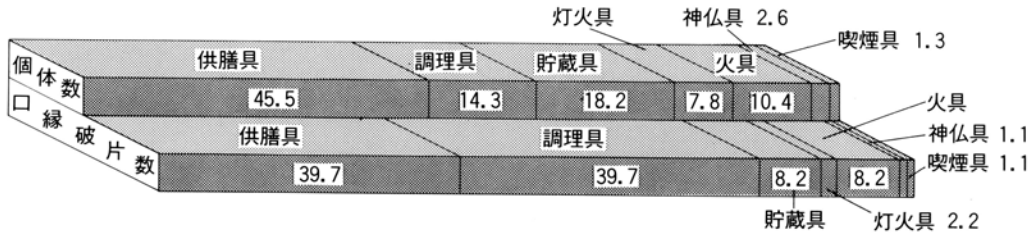
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	0	934	1013	0	1947	0	1508	967	1	2476	0	4769	1894	5	6668
	小椀	0	187	469	0	656	0	170	263	1	434	0	341	783	1	1125
	皿	358	705	474	0	1537	188	892	318	4	1402	674	1904	525	5	3108
	鉢	0	233	154	7	394	0	238	108	6	352	0	867	212	17	1096
	その他	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1	0	14	11	3	28
	小計	358	2062	2110	7	4537	188	2809	1656	12	4665	674	7895	3425	31	12025
調理具	鍋釜	215	93	0	4	312	1378	99	0	26	1503	4180	561	0	66	4807
	鉢	0	203	0	0	203	0	315	0	0	315	0	860	0	0	860
	播鉢	0	197	0	0	197	0	712	0	0	712	0	2121	0	0	2121
	瓶	0	107	21	0	128	0	74	5	0	79	0	378	37	0	415
	その他	0	8	0	0	8	0	11	0	0	11	0	34	1	0	35
	小計	215	608	21	4	848	1378	1211	5	26	2620	4180	3954	38	66	8238
貯蔵具	瓶	0	385	0	0	385	0	61	0	0	61	0	1438	9	1	1448
	壺	1	77	0	0	78	4	65	2	0	71	6	382	12	0	400
	甕A	0	207	0	0	207	0	541	0	0	541	0	8021	0	0	8021
	甕B	1	127	0	0	128	1	219	0	0	220	7	1263	1	0	1271
	鉢	0	64	28	0	92	0	56	12	0	68	0	116	20	0	136
	その他	0	5	0	0	5	0	14	1	0	15	5	24	1	0	30
	小計	2	865	28	0	895	5	956	15	0	976	18	11244	43	1	11306
灯火具		27	281	19	7	327	19	101	5	0	125	39	168	8	0	215
火具		121	214	0	0	342	138	261	1	7	407	342	974	4	12	1332
化粧具		0	3	12	0	15	0	19	9	0	28	0	46	20	0	66
神仏具		0	106	97	0	203	4	62	37	0	103	7	141	113	0	261
喫煙具		3	28	0	0	31	3	44	3	0	50	3	75	6	0	84
調度具		38	223	24	0	285	21	184	12	1	218	60	594	41	3	698
蓋		31	536	201	14	782	27	194	72	3	296	37	300	97	4	438
合計		795	4926	2512	32	8265	1783	5841	1815	49	9488	5360	25391	3795	117	34663

第8表 近世出土陶磁器類集計表

井戸出土遺物合計

本遺跡で検出された井戸から出土した遺物の合計は、総破片数で 594点、接合前口縁破片数が 188点で、総個体数は6.92個体であり、出土量は極めて少ない。この内、供膳具が 2.92個体・45.5%と比率が比較的低く、調理具・貯蔵具はそれぞれ0.92個体・14.3%、1.17個体・18.2%と比率が高い。他に、灯火具と火具・神仏具・喫煙具の比率も高く、それぞれ0.50個体・7.8%、0.67個体・10.4%、0.17個体・2.6%、0.08個体・1.3%を占めている。

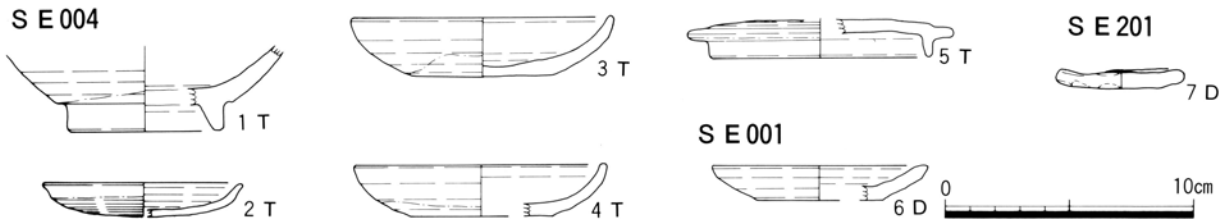
また、土師質製品の占める割合が22.9%と高く、特に土師質の皿が63.2%を占めている点は特筆すべきで、これに対して、陶磁器類の占める割合はそれぞれ65.1%・12.0%と低くなっている。



第32図 井戸合計陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				計	接合前口縁破片数				計	総破片数				計
		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他		土器	陶器	磁器	その他	
供膳具	椀	9	2			11	33	6			39	122	17		139	
	小椀	1	5			6	1	3		4	3	4		7		
	皿	12	4	2		18	4	19	3	26	10	28	6	44		
	鉢					0		4		4		17		17		
	その他					0				0				3	3	
小計	12	14	9	0	35	4	57	12	0	73	10	170	27	3	210	
調理具	鍋、釜	6				6	57			57	100	2		1	103	
	鉢		4			4	6			6	8			8		
	搗鉢		1			1	10			10	45			45		
	瓶					0				0	5			5		
	その他					0				0						
小計	6	5	0	0	11	57	16	0	0	73	100	60	0	1	161	
貯蔵具	瓶	3				3	3			3	18			18		
	壺	5				5	4			4	9			9		
	甕A	1				1	3			3	109			109		
	甕B	1				1	2			2	19			19		
	鉢	4				4	3			3	11			11		
	その他					0				0				0		
小計	0	14	0	0	14	0	15	0	0	15	0	166	0	0	166	
灯火具		6				6	1	3		4	6			6		
火具		0	8			8	1	14		15	4	23		27		
化粧具						0				0	1	1		2		
神仏具		1	1			2	1	1		2	1	3		4		
喫煙具		1				1	2			2	2			2		
調度具						0				0	2	6	1	9		
蓋		1	5			6	1	3		4	7			7		
合計		19	54	10	0	83	64	111	13	0	188	116	442	32	4	594

第9表 井戸合計陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
						器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
1	92B1	SE 004	供膳具	椀	丸椀	-	-	-	6.0	灰釉	灰釉	瀬・美		E-036
2	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	1.5	7.8	-	3.6	鉄釉	鉄釉	〃	見込みに重ね焼きの剥離痕 (径4.2cm)	E-037
3	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	10.3	-	5.6	〃	〃	〃	胎部から底部にかけて焼けた痕	E-038
4	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	10.0	-	5.7	灰釉	灰釉	〃	胎部から底部にかけて焼けた痕	E-039
5	〃	〃	その他	蓋	その他	-	8.8	10.6	-	-	〃	京焼系?		E-040
6	91D1	SE 001	供膳具	皿	その他	1.4	8.6	-	5.1	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形	E-041
7	92B1	SE 201	〃	〃	〃	0.8	4.5	-	-	-	指押え	〃	非ロクロ成形	E-042

第33図 近世の遺物 (1) 井戸合計 (1:3)

溝

S D 035 本遺構の時期は、17世紀初頭に比定される。

91A区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で41点、口縁部破片数で28点、個体数は2.83個体と少量で統計上の処理には不向きであるが、数少ない清須城の城下町期の遺構として注目される。供膳具が2.67個体・94.1%、調理具と喫煙具がそれぞれ0.08個体・2.9%である。供膳具は、手捏ねの小型の土師質の皿のみで、調理具では、備前の播鉢が出土しており年代決定の指標となった。

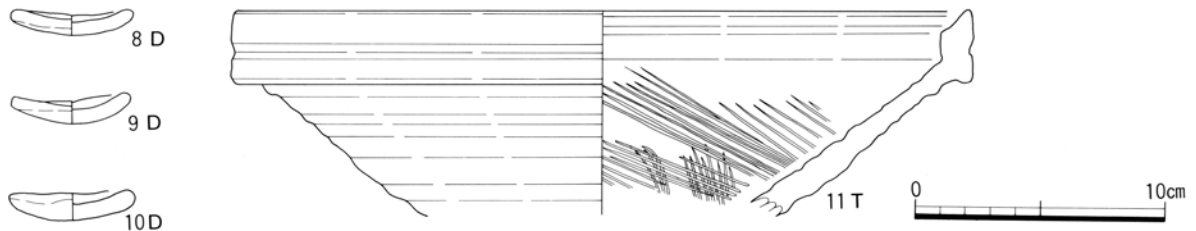
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が94.1%と圧倒的に多く、磁器製品は1点も出土していない。この点が、この遺構を他の近世の遺構と性格を異にしているところである。



第34図 S D 035出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀					0					0					1
	小椀					0					0					0
	皿	32	0			32	23	1			24	25	2			27
	鉢		0			0		1			1	1				1
	その他					0					0					0
小計	32	0	0	0	32	23	2	0	0	25	25	4	0	0	29	
調理具	鍋、釜	0				0	1				1	5				5
	鉢					0					0					0
	播鉢		1			1		1			1		2			2
	瓶					0					0					0
	その他					0					0					0
小計	0	1	0	0	1	1	1	0	0	2	5	2	0	0	7	
貯蔵具	瓶					0					0					0
	壺					0					0					0
	甕A					0					0		4			4
	甕B					0					0					0
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	
灯火具					0					0					0	
火具					0					0					0	
化粧具					0					0					0	
神仏具					0					0					0	
喫煙具			1		1			1		1		1			1	
調度具					0					0					0	
蓋					0					0					0	
合計		32	2	0	0	34	24	4	0	0	28	30	11	0	0	41

第10表 S D 035出土陶磁器類集計表



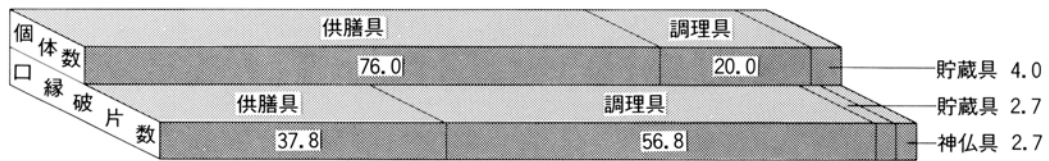
遺物番号	調査地点	遺構	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
				器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
8	91A	SD 035	供膳具	皿	その他	1.1	4.5	-	-	-	板状圧痕	不明	非ロクロ成形	E-043
9	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	4.4	-	-	-	-	〃	非ロクロ成形、外面に焼けた痕	E-044
10	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	4.1	-	-	-	-	〃	非ロクロ成形	E-045
11	〃	〃	調理具	播鉢	Ⅸ類	-	29.0	-	-	-	-	備前	焼き締め	E-046

第35図 近世の遺物 (2) S D 035 (1:3)

S D 209 本遺構の時期は、17世紀中葉に比定される。

92B2 区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で 190点、接合前口縁破片数で38点、個体数は2.50個体と少量で統計上の処理には不向きであるが、江戸時代前期の遺構として注目される。供膳具・調理具・貯蔵具の3用途のみで、供膳具が1.58個体・76.0%、調理具が0.42個体・20.0%、貯蔵具が0.08個体・4.0%、他に蓋類が0.42個体となっている。供膳具として、土師質の皿では手握ねで小型のものとロクロ成形のものが0.58個体、鉢では笠原鉢が0.42個体出土している。椀と皿の比率では、1：2.50と皿が大きく上回っている。

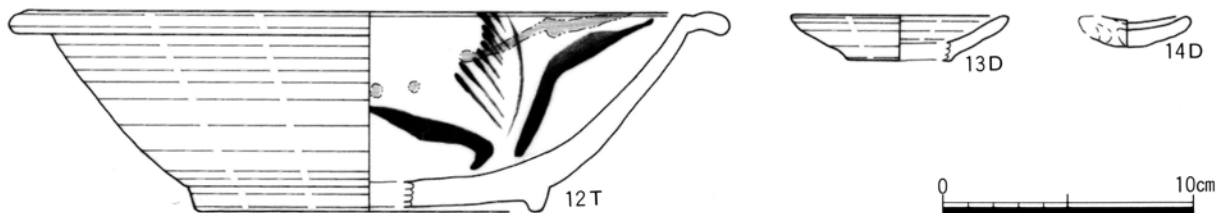
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が36.7%と依然として多く、これに対して陶磁器類の占める割合はそれぞれ56.7%・6.7%となっている。



第36図 S D 209出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数							
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計		
供膳具	椀			3		3			6		6			26	2	28		
	小椀			1		1			1		1			1		1		
	皿	7		1	2	10	3	2	1		6	4	4	1		9		
	鉢			5		5			1		1			3		3		
	その他					0					0					0		
	小計	7	10	2	0	19	3	10	1	0	14	4	34	3	0	41		
調理具	鍋、釜	4				4	17				17	69				69		
	鉢					0					0		1		1			
	播鉢			1		1		4			4		13		13			
	瓶					0					0		1		1			
	その他					0					0				0			
	小計	4	1	0	0	5	17	4	0	0	21	69	15	0	0	84		
貯蔵具	瓶					0					0		1		1			
	壺					0					0		1		1			
	甕A					0					0		55		55			
	甕B			1		1		1			1		5		5			
	鉢					0					0				0			
	その他					0					0				0			
	小計	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	62	0	0	62		
灯火具					0					0					0			
火具					0					0			1		1			
化粧具					0					0					0			
神仏具				0		0			1		1		1		1			
喫煙具					0					0					0			
調度具					0					0					0			
蓋				5		5				1			1		1			
合計				11	17	2	0	30	20	17	1	0	38	73	114	3	0	190

第11表 S D 209出土陶磁器類集計表



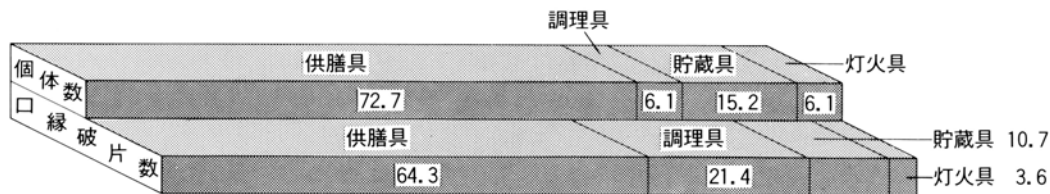
遺物番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号	
						器高	口径	胴径	底径	内面				外面
12	92B2	SD 209	供膳具	鉢	折縁鉢	7.9	27.2	-	13.6	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵、赤文、緑軸筆散らし。見込みと高台内にトチン痕	E-047
13	〃	〃	〃	皿	その他	1.8	8.4	-	4.1	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形、底部回転系切痕か	E-048
14	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	-	-	-	指押え	〃	非ロクロ成形	E-049	

第37図 近世の遺物 (3) S D 209 (1:3)

SD 202 本遺構の時期は、18世紀後葉に比定される。

91D2 区で検出された溝であり、出土した遺物は総破片数で94点、接合前口縁破片数で29点、個体数は 2.75個体と少量であるが、江戸時代中期の遺構として注目される。供膳具が2.00個体・72.7%と多く、次いで貯蔵具が0.42個体・15.2%、調理具と灯火具がそれぞれ0.17個体・6.1%となっている。

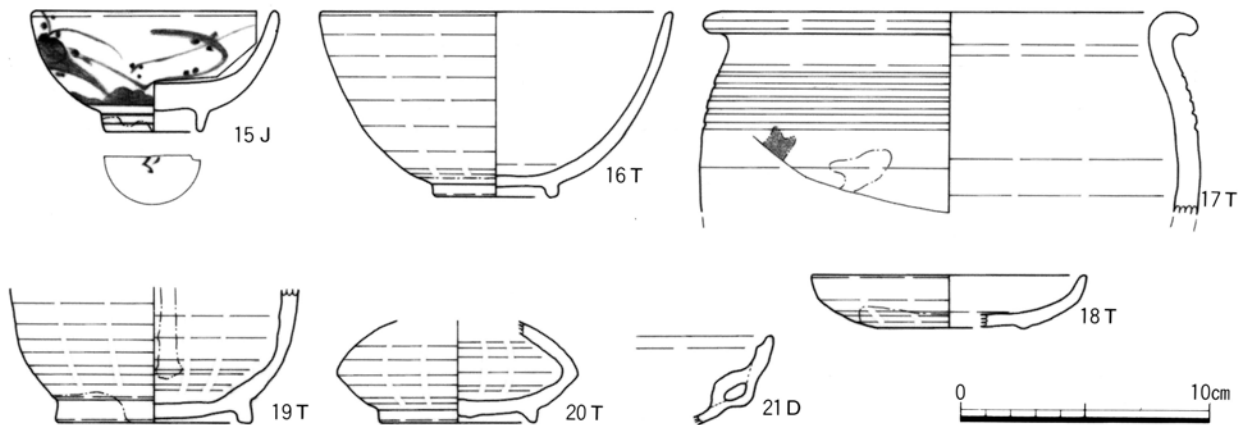
また、土師質製品と陶磁器類の割合についても、土師質製品が 3.0%と極少量となり、これに対し陶磁器類がそれぞれ78.8%・18.2%と増加していることが確認される。



第38図 SD 202出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他		
供膳具	椀		15	6			11	1			24	1			
	小椀				0				0				0		
	皿		3		3		5				9		9		
	鉢		0		0		1				2		2		
	その他				0								0		
小計		0	18	6	0	24	0	17	1	0	18	0	35		
調理具	鍋、釜	1				1	3				3	14		14	
	鉢				0						0	1		1	
	搦鉢		1		1			3			3	9		9	
	瓶				0						0	1		1	
	その他				0						0			0	
小計		1	1	0	0	2	3	3	0	0	6	14	11	0	
貯蔵具	瓶壺				0						0	2		2	
	甕A		5		5			2			2	2		2	
	甕B		0		0			1			1	20		20	
	鉢				0						0			0	
	その他				0						0	1		1	
小計		0	5	0	0	5	0	3	0	0	3	0	26	0	
灯火具			2		2			1			1	1		1	
化粧具					0						0	1		1	
神仏具					0						0			0	
喫煙具					0						0			0	
調度具					0						0	2		2	
蓋			0		0			1			1	1		1	
合計			1	26	6	0	33	3	25	1	0	29	14	79	1

第12表 SD 202出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査区	遺構	用途		器形	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号	
			用途	器種		器高	口径	胴径	底径	内面				外面
15	91D2	SD 202	供膳具	椀	丸椀	4.8	9.3	-	3.8	-	-	肥前	染付, 岩に梅樹文, 18世紀後半	E-050
16	〃	〃	〃	〃	〃	7.4	13.8	-	4.4	灰釉	灰釉	瀬・美		E-051
17	〃	〃	貯蔵具	甕B	甕	-	18.0	-	-	〃	〃	〃	鉄絵	E-052
18	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	2.1	10.8	-	5.8	〃	〃	〃	碁笥底, 胎部から底部に油煙付着	E-053
19	〃	〃	貯蔵具	壺	その他	-	-	-	7.6	ナデ	鉄釉	〃	高台内に砂融着	E-054
20	〃	〃	化粧具	壺	髪油壺	-	-	9.5	6.0	〃	灰釉	〃		E-055
21	〃	〃	調理具	鍋・釜	焙烙	28.1	-	-	-	-	指押え	不明	外面に煤付着	E-056

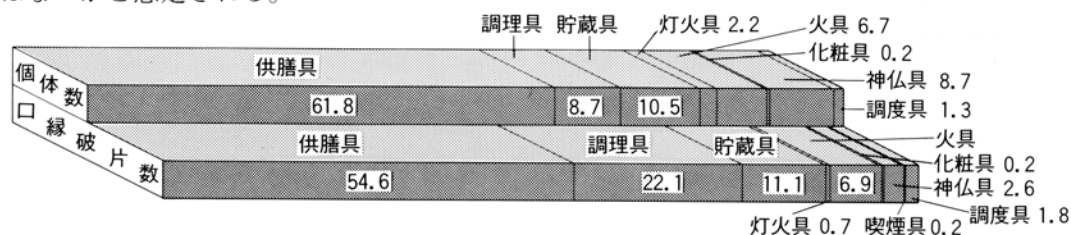
第39図 近世の遺物 (4) SD 202 (1:3)

S D 025 本遺構の時期は、19世紀中葉に比定される。

91B区と91C区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で2,564点、接合前口縁破片数では648点、個体数62.83個体である。供膳具が32.50個体・61.8%、調理具が4.58個体・8.7%、貯蔵具が5.50個体・10.5%、灯火具が1.17個体・2.2%、火具が3.50個体・6.7%、化粧具が0.08個体・0.2%、神仏具が4.58個体・8.7%、喫煙具は0.00個体、調度具が0.67個体・1.3%、蓋が10.25個体となっている。これを、近世の用途組成の平均値(P33)と比較してみると、供膳具・化粧具はよく似た数値をしているが、調理具・貯蔵具・灯火具などの日常生活用具は減少しており、副次的な生活用具である火具・神仏具がそれぞれ1.5倍・3.2倍に増加している。

器種別にみても、供膳具では椀対皿の比率が2.25:1と2倍程の比率差となっており、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構ほどではないが、椀対皿の比率が逆転することが確認された。調理具では、鍋・釜類の占める割合が38.2%と増加しており、貯蔵具では、徳利などの瓶類が66.7%と高くなっていることがこの遺構の特徴といえる。

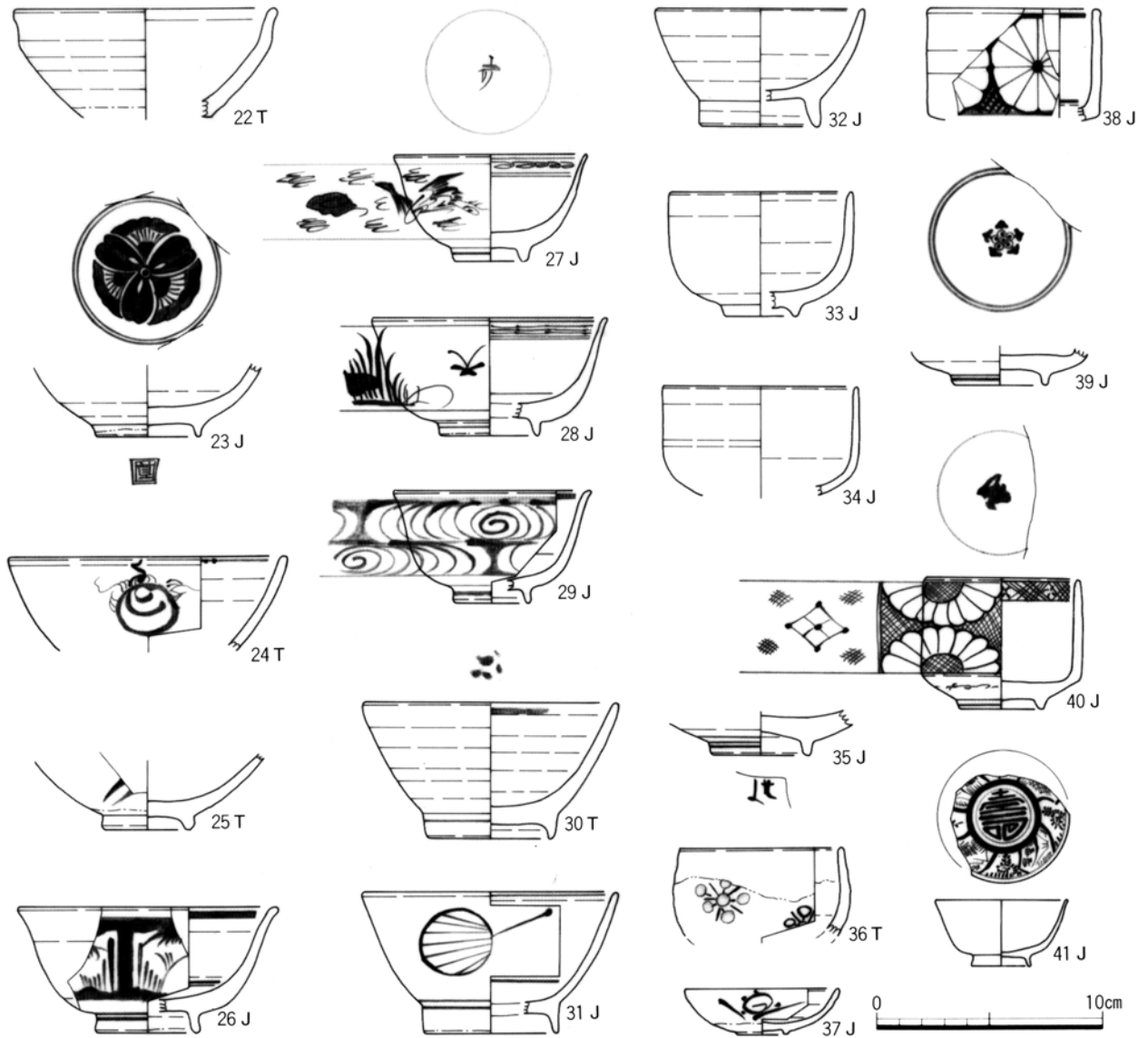
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が2.8%と18世紀代に比べて少量となり、これに対して陶磁器類では、陶器製品が54.0%であるが、磁器製品が43.2%と平均値(30.4%)を越えて増加していることが確認される。これは、18世紀末頃から瀬戸・美濃地方の諸窯において磁器生産が開始されており、この影響が少なからずこの数値に反映しているであろうと考えられる。この数値を、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構と比較してみると、磁器製品の占める割合が2倍程に増加していることがわかる。このため、瀬戸・美濃産の磁器製品は、武士階級よりも町人層に広く浸透していったのではないかと想定される。



第40図 S D 025出土陶磁器類の用途組成

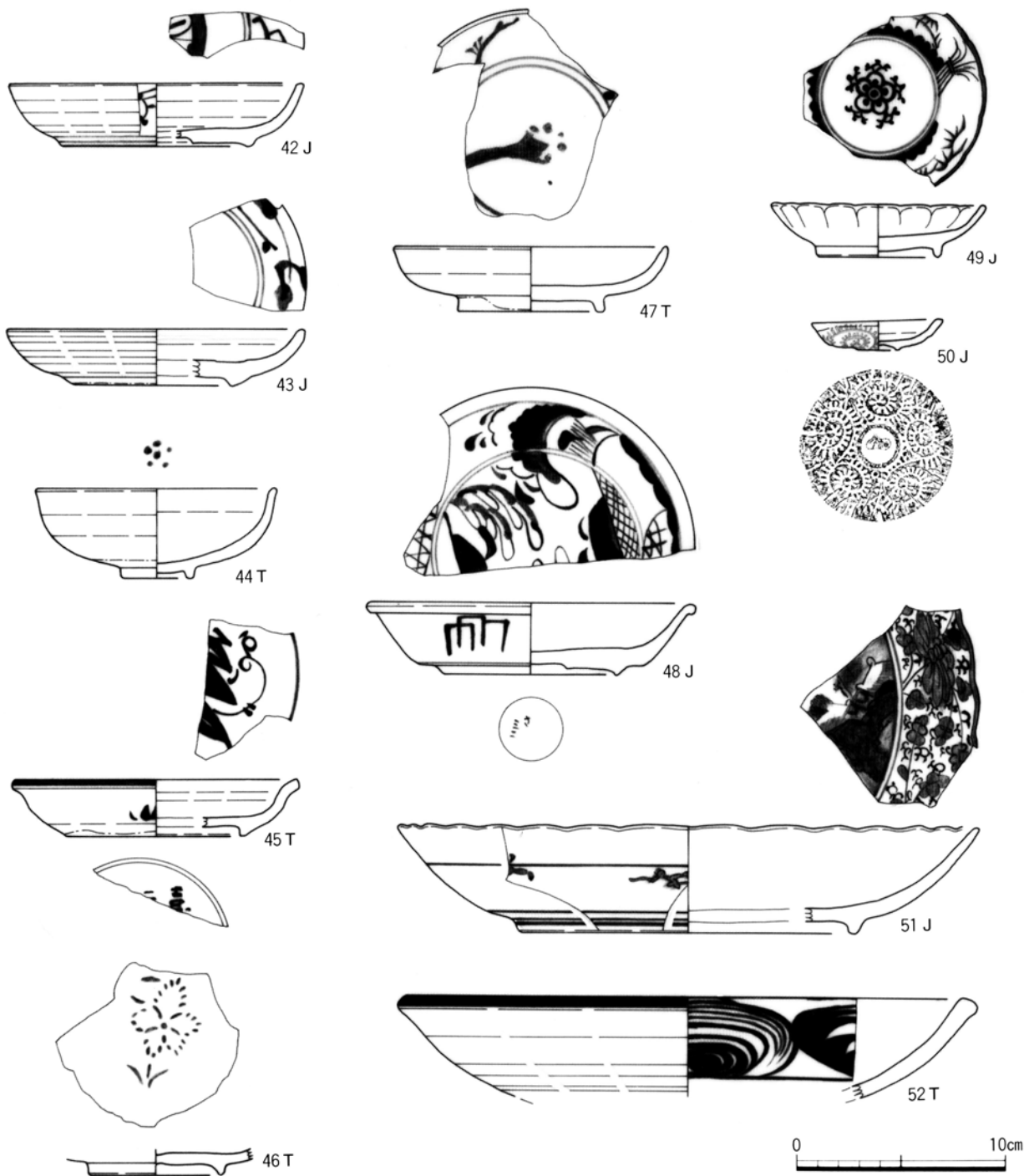
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	35	105			140	83	79			162	354	162		1	517
	小椀	23	69			92	23	29			52	33	38		71	
	皿	3	59	41		103	3	62	19		84	34	149	38	221	
	鉢		19	36		55		20	16		36		50	20	70	
	その他					0					0		3		3	
	小計	3	136	251	0	390	3	188	143	0	334	34	589	258	1	882
調理具	鍋 釜	15	6			21	22	7			29	138	37		1	176
	鉢		14			14		44			44		90		90	
	播鉢		10			10		52			52		171		171	
	瓶		10			10		10			10		22	2	24	
	その他					0					0		5		5	
	小計	15	40	0	0	55	22	113	0	0	135	138	325	2	1	466
貯蔵具	瓶		44			44		5			5	3	116		1	120
	壺		5			5		5			5		23	8	31	
	甕 A		11			11		37			37		717		717	
	甕 B		2	0		2		15			15		103		103	
	鉢		4			4		6			6		10		10	
	その他					0					0		4		4	
	小計	0	66	0	0	66	0	68	0	0	68	3	973	8	1	985
灯火具		14			14		4			4	1	10			11	
火具		3	39			42	13	29			42	24	81		105	
化粧具		1			1		1			1		3	2		5	
神仏具		44	11		55		10	6		16		14	8		22	
喫煙具		0			0		1			1		1			1	
調度具		8	0		8		10	1		11		42	3		45	
蓋		59	64		123		23	13		36		28	14		42	
合計		21	407	326	0	754	38	447	163	0	648	200	2066	295	3	2564

第13表 S D 025出土陶磁器類集計表



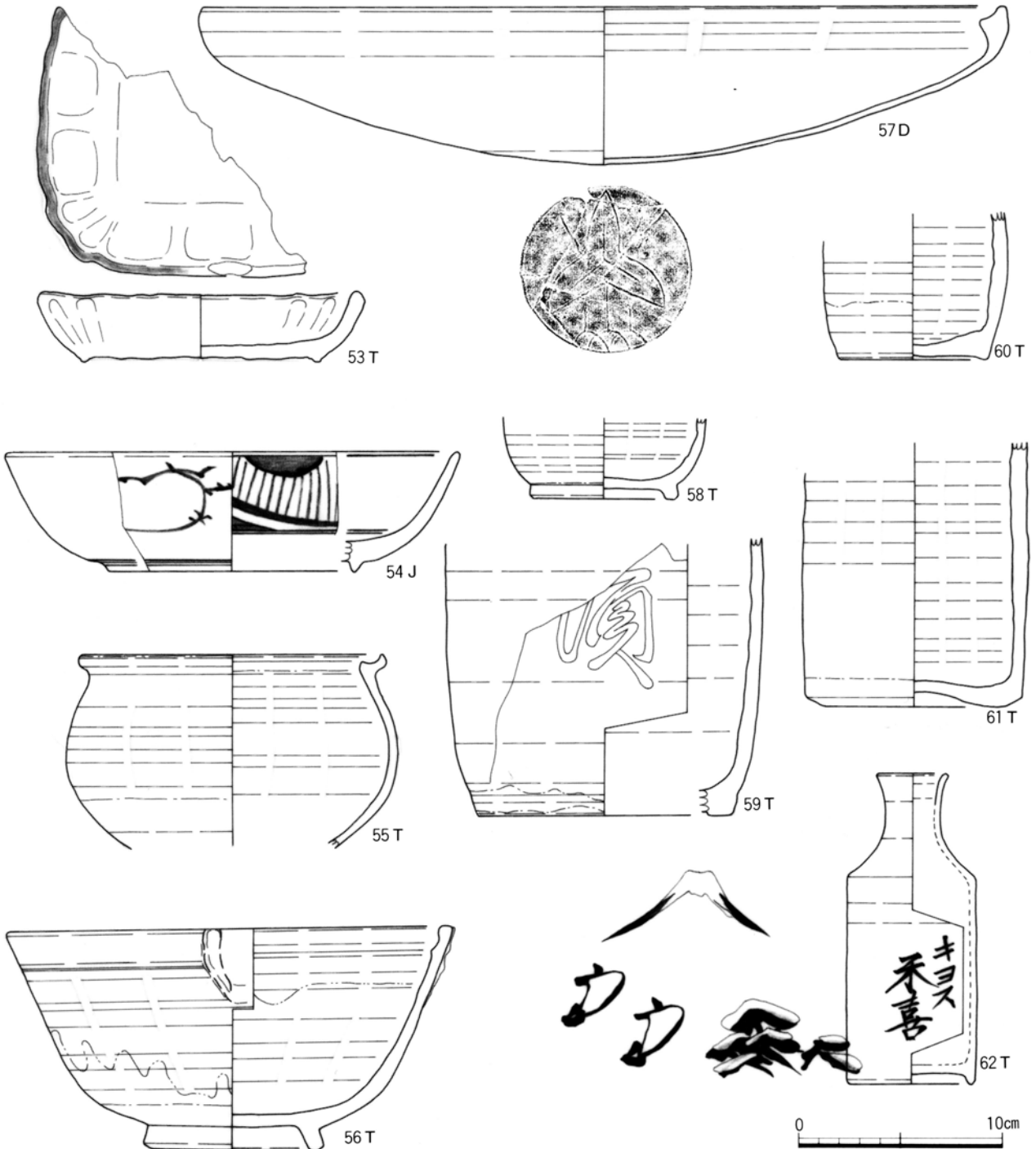
遺物 番号	調査地点		用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
22	91B	SD 025	供膳具	椀	天目椀	-	11.4	-	-	鉄釉	鉄釉	瀬・美	大室V期 (16世紀末)	E-057
23	91C	〃	〃	〃	丸椀	-	-	-	4.5	-	青磁	肥前	青磁染付、三ツ銀古文・三重方形枠内に「高江」、19世紀代	E-058
24	〃	〃	〃	〃	〃	-	12.1	-	-	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵・鉄絵、宝珠文、19世紀前半～中	E-059
25	91B	〃	〃	〃	〃	-	-	-	3.7	灰釉	灰釉	〃	鉄絵、柳文か	E-060
26	91C	〃	〃	〃	端反椀	5.6	11.2	-	4.4	-	-	〃	染付、竹文か、19世紀中	E-061
27	91B	〃	〃	小椀	〃	4.7	8.3	-	3.0	-	-	〃	染付、飛雲文・鶴文・変形寿文、見込みにもチシ痕あり、19世紀中	E-062
28	〃	〃	〃	椀	〃	5.2	10.2	-	4.2	-	-	〃	染付、草花文・蝶文、19世紀中	E-063
29	91C	〃	〃	〃	〃	5.0	8.5	-	3.2	-	-	肥前か	染付、渦巻文、19世紀中	E-064
30	〃	〃	〃	〃	広東椀	6.0	10.8	-	5.4	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵、梅花文、19世紀前半	E-065
31	91B	〃	〃	〃	〃	6.2	11.0	-	5.8	-	-	肥前	染付、団扇文、19世紀代	E-066
32	91C	〃	〃	〃	〃	5.2	9.0	-	5.1	白磁	白磁	瀬・美	19世紀中～後半	E-067
33	〃	〃	〃	小椀	丸椀	5.5	7.8	-	3.0	青磁	青磁	肥前	青磁、19世紀中	E-068
34	〃	〃	〃	〃	〃	-	8.4	-	-	白磁	白磁	〃	〃	E-069
35	〃	〃	〃	〃	〃	-	-	-	4.2	-	-	〃	染付、底部に変形「大明年製」、19世紀代	E-070
36	〃	〃	〃	〃	〃	-	7.1	-	-	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵・白泥、梅花文か、再生織部、19世紀初	E-071
37	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	6.6	-	2.2	-	-	〃	染付、草花文、19世紀中	E-072
38	〃	〃	〃	〃	筒椀	-	7.2	-	-	-	-	肥前	染付、菊花散し文、19世紀前半	E-073
39	〃	〃	〃	〃	〃	-	-	-	4.0	-	-	〃	染付、五弁花(手描き)、18世紀後半	E-074
40	91B	〃	〃	〃	〃	5.7	6.6	-	3.7	-	-	〃	染付、菊花文・幾何文・五弁花(コシニヤク印)、1780～1810	E-075
41	〃	〃	〃	〃	丸椀	2.9	5.8	-	2.6	-	透明釉	肥前か	王冠付、菊唐草文・山水文・変形寿、19世紀中～後半	E-076

第41図 近世の遺物 (5) S D 025① (1:3)



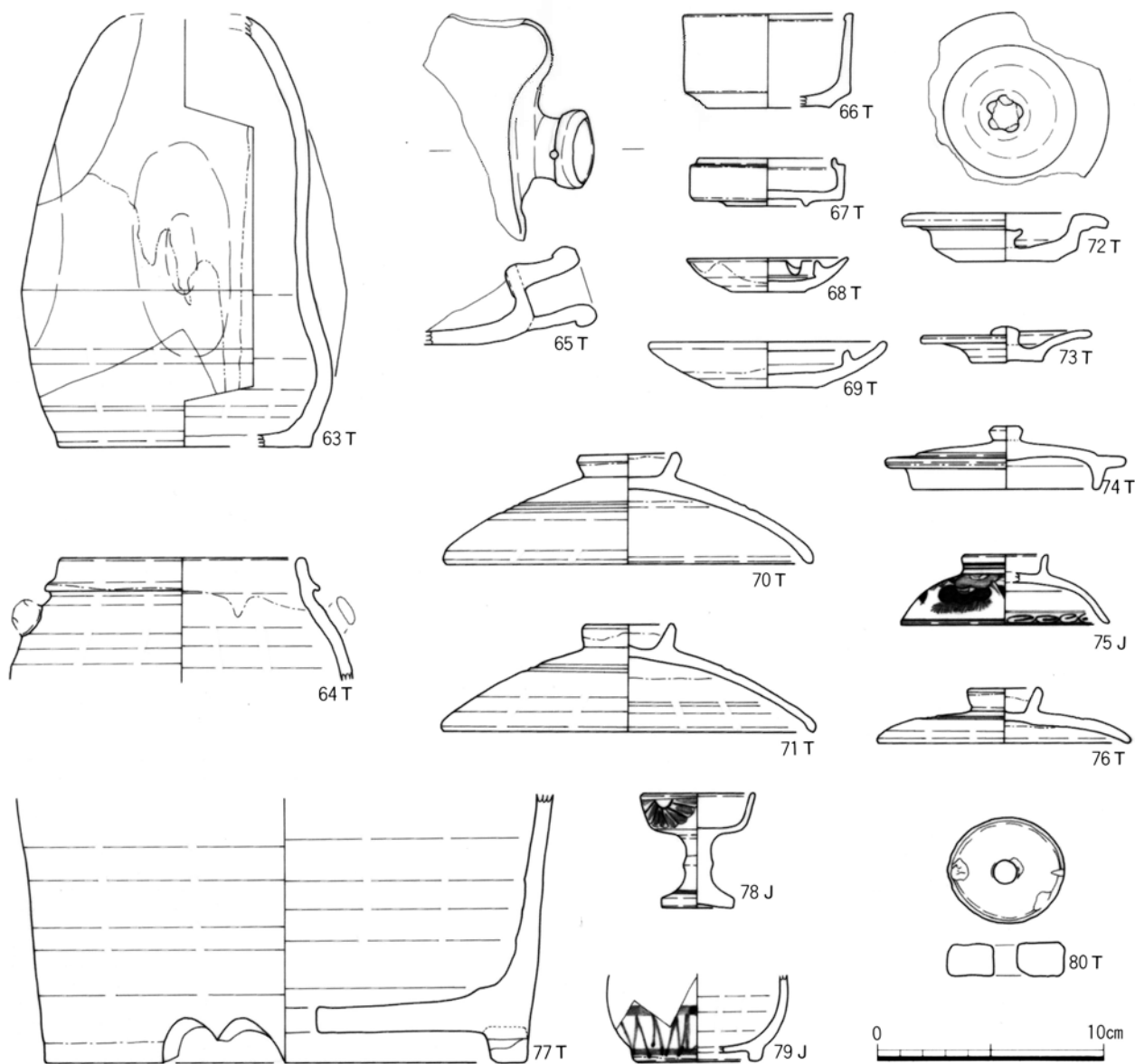
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)			釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号	
	調査区	遺構	用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面				外 面
42	91C	SD 025	供膳具	皿	丸皿	3.0	13.8	—	8.9	—	—	肥前	染付,唐草文,蛇ノ目凹型高台,19世紀代	E-077
43	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	14.2	—	7.4	—	—	〃	染付(鉄須と鉄釉),草花文,見込み蛇ノ目軸刺 ぎ,19世紀前半	E-078
44	91B	〃	〃	〃	〃	4.3	11.2	—	3.4	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵,梅花文	E-079
45	91C	〃	〃	〃	端反皿	2.7	13.2	—	8.4	〃	〃	〃	鉄絵,草花文,高台内に墨書	E-080
46	91B	〃	〃	〃	その他	—	—	—	6.3	〃	〃	〃	呉須絵,草花文(型紙摺絵)	E-081
47	〃	〃	〃	〃	丸皿	3.1	12.9	—	7.0	〃	〃	〃	呉須絵,唐草文・梅花文,高台内にトチン痕	E-082
48	〃	〃	〃	〃	〃	3.4	15.0	—	8.2	—	—	肥前	染付,岩文,蛇ノ目凹型高台, 焼き継ぎ番号(朱書き)三三三,19世紀	E-083
49	91C	〃	〃	〃	ひだ,棧花皿	2.5	10.0	—	5.6	—	—	瀬・美	染付,晋文・千字文・五弁花(手書き),11箇, 19世紀中	E-084
50	〃	〃	〃	〃	型打皿	1.4	6.1	—	2.0	白磁	白磁	〃	蛸唐草文,19世紀中～後半	E-085
51	〃	〃	〃	〃	ひだ,棧花皿	5.1	27.3	—	15.8	—	—	肥前	染付,牡丹唐草文・山水樓閣文,口縁部に焼 き継ぎの痕,18世紀前半	E-086
52	〃	〃	〃	〃	丸皿	—	26.4	—	—	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵,馬の目皿	E-087

第42図 近世の遺物(6) S D 025②(1:3)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備 考	登録 番号
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
53	91B SD 025	供膳具	鉢	織部	3.4	-	-	-	長石釉	長石釉	瀬・美	志野, 口鑄, 17世紀初	E-088
54	91C	〃	〃	丸鉢	5.8	21.7	-	11.8	-	-	〃	染付, 唐草文, 19世紀中	E-089
55	〃	調理具	鍋, 釜	行平	-	14.5	-	-	灰釉	灰釉	〃	外側下部に煤付着	E-090
56	〃	〃	鉢	片口	10.8	21.3	-	8.0	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-091
57	〃	〃	鍋, 釜	焙烙	7.7	38.7	-	-	-	-	不明	外面煤付着, 底部に沢湯文	E-092
58	〃	貯蔵具	瓶	德利A	-	-	-	6.8	-	灰釉	瀬・美	高台部釉拭き取りか	E-093
59	〃	〃	〃	德利E	-	-	-	12.2	-	〃	〃	釘引き「須」の文字	E-094
60	91B	〃	〃	〃	-	-	-	7.2	-	〃	〃		E-095
61	〃	〃	〃	〃	-	-	-	11.0	8.8	鉄釉	鉄釉		E-096
62	91C	調理具	〃	爛德利A	15.2	3.3	6.3	5.9	透明釉	透明釉	〃	長石釉・鉄絵, 山水文・「キヨス米喜」か	E-097

第43図 近世の遺物 (7) S D 025③ (1:3)



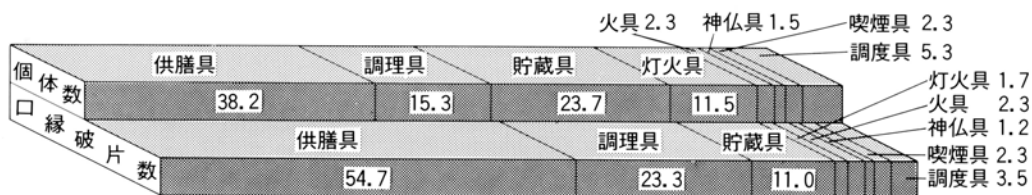
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
63	91B	SD 025	貯蔵具	瓶	德利C	—	—	14.2	11.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	べかこん德利	E-098
64	〃	〃	〃	壺	蓋付壺	—	10.6	—	—	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉剥き取り, 御黒壺か?	E-099
65	〃	〃	火具	その他	その他	4.3	—	—	—	—	—	〃	十能	E-100
66	〃	〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	4.2	7.4	—	5.4	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉拭き取り	E-101
67	〃	〃	〃	〃	蓋物B	2.1	6.0	6.8	3.6	〃	〃	〃	口縁部釉拭き取り	E-102
68	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.5	7.0	—	3.2	鉄釉	—	〃	底部回転ヘラ削り	E-103
69	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	10.2	—	4.6	透明釉	透明釉	〃	重ね焼きの剥離痕(同じ物の重ね焼きか)	E-104
70	91C	〃	その他	蓋	蓋E	4.9	16.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	線刻3本	E-105
71	〃	〃	〃	〃	〃	4.7	16.2	—	—	〃	〃	〃	線刻2本	E-106
72	91B	〃	〃	〃	蓋B	2.1	9.1	—	—	ケズリ	鉄釉	〃	壺の蓋か?	E-107
73	91C	〃	〃	〃	蓋A	1.6	7.4	—	—	—	灰釉	〃	口縁周辺に鉄釉	E-108
74	91B	〃	〃	〃	蓋D	2.8	8.2	10.6	—	—	〃	〃	土瓶の蓋か?, 口縁部に煤付着	E-109
75	91C	〃	〃	〃	蓋E	3.1	9.1	—	—	—	—	〃	染付, 牡丹文・渦巻文・19世紀中	E-110
76	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	11.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	線刻3本	E-111
77	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	20.8	—	〃	〃	高台に切込み3ヶ所あり	E-112
78	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	5.0	4.8	—	3.0	—	—	〃	色絵(朱彩・金彩), 花文, 19世紀後葉	E-113
79	〃	〃	神仏具	瓶	神酒德利A	—	—	—	5.2	—	—	肥前	染付, 網目文か, 18世紀後半	E-114
80	91B	〃	調度具	その他	その他	1.5	—	5.1	—	—	—	不明	戸車, 1.2×1.3cmの穴, 周辺部摩滅痕	E-115

第44図 近世の遺物(8) S D 025④(1:3)

SD 002 本遺構の時期は、19世紀中葉に比定される。

91D1 区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で 872点、接合前口縁破片数で 176点、個体数は 12.08個体と少量ではあるが、江戸時代後期の区画溝として注目される。供膳具が4.17個体・38.2%と減少し、貯蔵具・灯火具・喫煙具・調度具が2.58個体・23.7%、1.25個体・11.5%、0.25個体・2.3%、0.58個体・5.3%と多くを占めている。

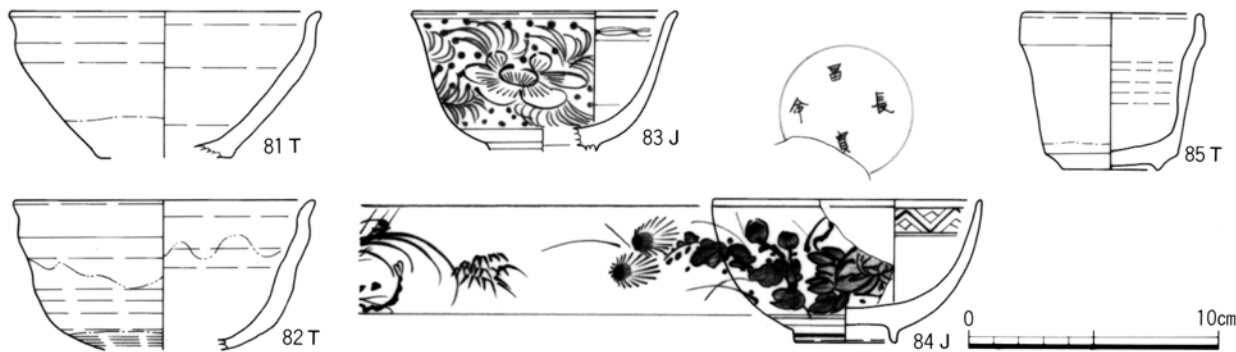
また、土師質製品と陶磁器類の割合では、土師質製品が同時期であるSD 025と同様で 2.8%と少量となり、これに対して陶磁器類がそれぞれ72.4%・24.8%となっている。



第45図 SD 002出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数							
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		13	17		30		31	21		52		138	26		164	
	小椀		5	4		9		8	6		14		23	6		29	
	皿	0	8	1		9	9	9	1		19	10	29	8		47	
	鉢		2	0		2		5	4		9	1	41	4		46	
	その他					0					0		1			1	
	小計	0	28	22	0	50	9	53	32	0	94	11	232	44	0	287	
調理具	鍋、釜	2	1		0	3	16	3		1	20	59	13		4	76	
	鉢		1			1		4			4	10			10		
	搦鉢		4			4		14			14	40			40		
	瓶		12			12		1			1	5	2		7		
	その他		0			0		1			1	2			2		
	小計	2	18	0	0	20	16	23	0	1	40	59	70	2	4	135	
貯蔵具	瓶		24			24		2			2		36			36	
	壺	0	0			0	1	1			2	1	5		6		
	甕A		6			6		13			13		267		267		
	甕B		0			0		1			1		35		35		
	鉢		1			1		1			1		1		1		
	小計	0	31	0	0	31	1	18	0	0	19	1	344	0	0	345	
灯火具			12	3		15		1	2		3		3	2	5		
火具		0	3			3	1	3			4	6	47	3	56		
化粧具						0					0				0		
神仏具				2		2			2		2		3	4	7		
喫煙具		2	1			3	1	3			4	1	4	1	6		
調度具			6	1		7		4	2		6		13	2	15		
蓋			6	8		14		2	2		4		14	2	16		
合計			4	105	36	0	145	28	107	40	1	176	78	730	60	4	872

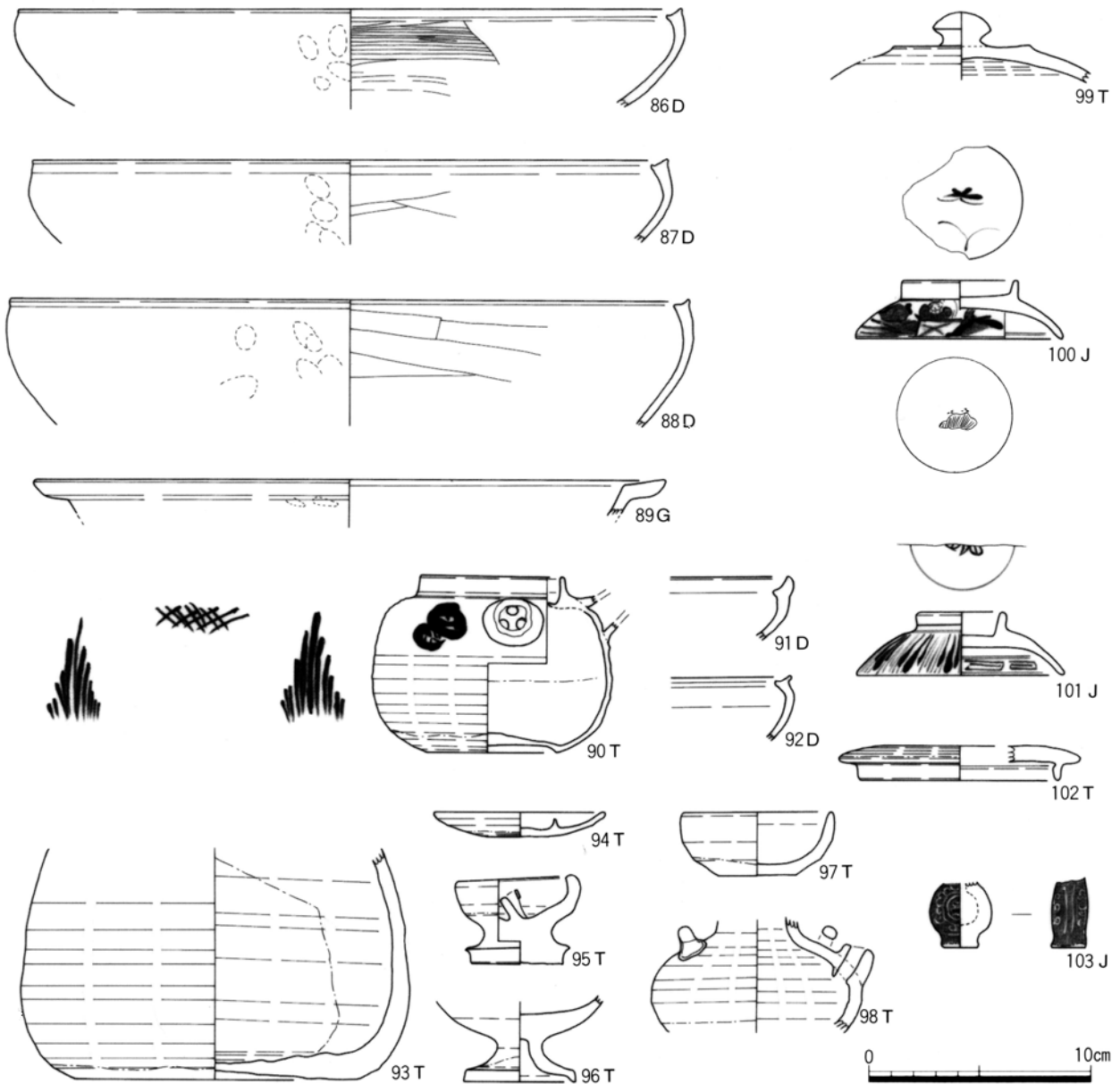
第14表 SD 002出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	調査区	遺構	用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
					器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
81	91D1	SD 002	供膳具	椀	天目椀	-	12.2	-	-	-	鉄釉	鉄釉	瀬・美	高台脇鉄化粧, 大窯Ⅱ期	E-116
82	〃	〃	〃	〃	その他	-	11.8	-	-	-	〃	〃	〃	うのふ軸流し掛け	E-117
83	〃	〃	〃	〃	端反椀	-	10.4	-	-	-	-	-	〃	染付, 花文, 19世紀代	E-118
84	〃	〃	〃	〃	丸椀	5.7	10.5	-	4.0	-	-	-	〃	染付, 花樹文・「富貴長命」, 19世紀代	E-119
85	〃	〃	〃	小椀	その他	6.2	6.9	-	3.8	灰釉	灰釉	〃	碁笥底	E-120	

第46図 近世の遺物 (9) SD 002① (1:3)

外町遺物



遺物 番号	調査地点	器種			法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号		
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面	
86	91D1	SD 002	調理具	鍋, 釜	焙烙	-	29.3	-	-	-	指押え	不明	外面に煤付着	E-121
87	〃	〃	〃	〃	〃	-	28.1	-	-	ナデ	〃	〃	外面に煤付着	E-122
88	〃	〃	〃	〃	〃	-	30.1	-	-	ヨコハケ	〃	〃	外面に煤付着	E-123
89	〃	〃	〃	〃	鍋	-	27.4	-	-	-	〃	〃	外面に煤付着	E-124
90	〃	〃	〃	瓶	急須	7.9	6.4	-	5.8	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 銅緑釉, 胎部から底部に煤付着	E-125
91	〃	〃	〃	鍋, 釜	焙烙	-	37.6	-	-	ヨコハケ	指押え	不明	外面に煤付着	E-126
92	〃	〃	〃	〃	〃	-	29.6	-	-	-	〃	〃	外面に煤付着	E-127
93	〃	〃	火具	鉢	火鉢	-	-	-	12.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕, 内部油煙付着	E-128
94	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.1	7.6	-	2.2	白磁	白磁	〃	19世紀代	E-129
95	〃	〃	〃	乗燭	Ⅱ類	3.8	5.3	-	4.1	鉄釉	鉄釉	〃	底部回転糸切痕, 底部にトチン痕	E-130
96	〃	〃	神仏具	仏飯器	-	-	-	-	5.0	灰釉	灰釉	〃		E-131
97	〃	〃	調度具	餌鉢	餌鉢	2.8	6.6	-	3.5	鉄釉	鉄釉	〃	柿釉か	E-132
98	〃	〃	〃	水指	その他	-	-	9.4	-	〃	〃	〃	鉄化粧	E-133
99	〃	〃	その他	蓋	その他	-	-	-	-	灰釉	灰釉	〃		E-134
100	〃	〃	〃	〃	蓋E	2.6	9.1	-	-	-	-	肥前	つまみ径5.0cm, 染付, 蝶文・山水文か	E-135
101	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	9.8	-	-	-	-	瀬・美	つまみ径3.9cm, 染付, 条線文	E-136
102	〃	〃	〃	〃	その他	1.6	10.4	-	8.9	ナデ	灰釉	〃		E-137
103	〃	〃	喫煙具	その他	その他	-	-	-	1.5	-	-	中国	鼻煙壺, 染付, 唐草文・寿文. 最大幅2.7cm, 最大厚1.6cm	E-138

第47図・近世の遺物 (10) S D 002② (1:3)

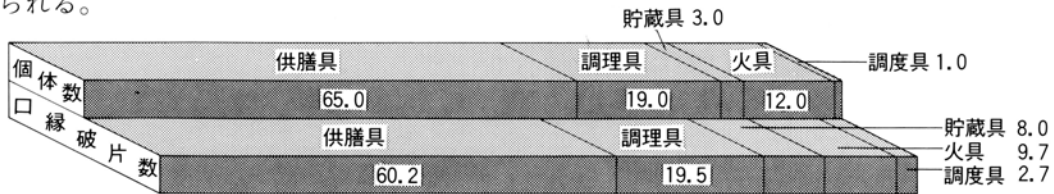
その他の溝合計

全調査区で検出された溝の内、遺構で掲載した溝以外から出土した遺物については、総破片数で454点、接合前口縁破片数で117点、個体数は8.58個体となり、出土遺物量は意外と少ない。化粧具・喫煙具は出土しておらず、供膳具が5.42個体・65.0%、調理具が1.58個体・19.0%、貯蔵具が0.25個体・3.0%、火具が1.00個体・12.0%、調度具が0.08個体・1.0%、蓋が0.25個体となっており、灯火具と神仏具は破片だけが出土している。これを、近世の用途組成の平均値(P33)と比較してみると、供膳具はよく似た数値を示しているが、貯蔵具・調度具は大幅に減少しており、調理具・火具はそれぞれ1.7倍・2.6倍に増加している。

器種別にみても、供膳具では椀対皿の比率が1.38：1となっており、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構ほどではないが、椀対皿の比率が逆転することが確認された。調理具では、鍋・釜類の占める割合が68.4%と増加している。他の遺構と比較すると、火具の占める割合も高くなっている。

また、土師質製品と陶磁器類の割合では、土師質製品が6.8%と低くなっており、これに対して陶磁器類では、陶器製品が42.7%であるが、磁器製品が49.5%と平均値(30.4%)を越えて増加していることが確認される。これは、19世紀中葉の溝であるSD 025やSD 002とほぼ同様の結果を見せており、材質において磁器製品の占める割合が増えていることがわかる。このことは、19世紀前葉～中葉にかけて次第に磁器製品の生産量増大と普及、消費の増大が進んだことを大きく反映しているものといえよう。

なお、次に図示した遺構の時期については、91D1区で検出されたSD 001は19世紀前葉、92B1区で検出されたSD 011は19世紀中葉～後葉、同じく92B1区で検出されたSD 014は19世紀中葉と考えられる。



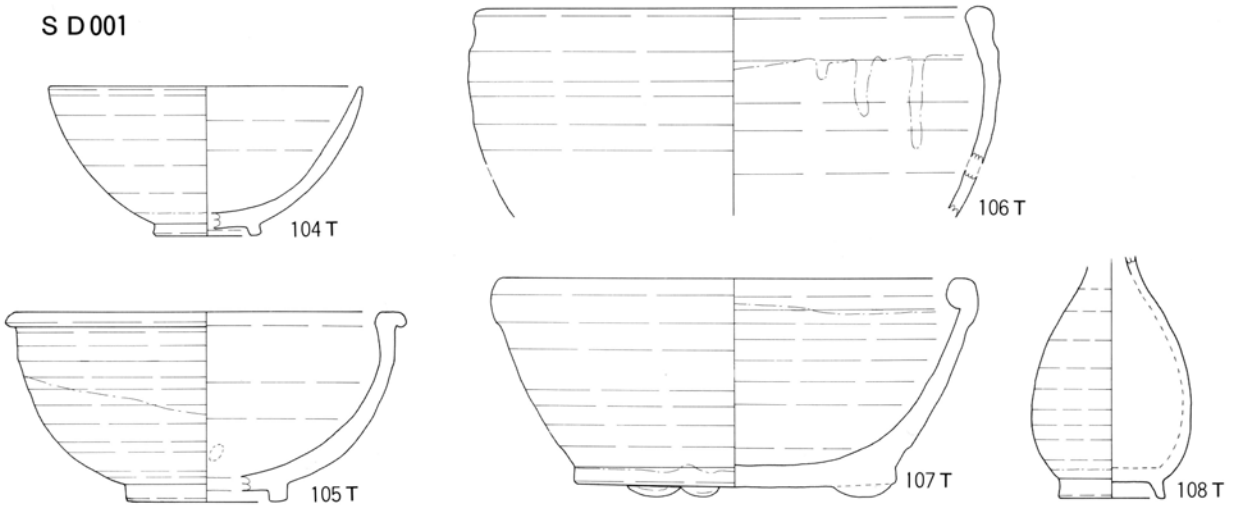
第48図 その他の溝合計陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		6	21		27	18	21		39		57	40		97	
	小椀		1	8		9	1	5		6		1	7		8	
	皿		7	19		26	10	7		17	25	21	12		58	
	鉢		2	1		3	3	3		6		14	4		18	
	その他					0				0					0	
小計		0	16	49	0	65	0	32	36	0	68	25	93	63	0	181
調理具	鍋、釜	0	12		1	13	12	2		15	37	11		4	52	
	鉢		4			4		4		4		16			16	
	播鉢		2			2		2		2		10			10	
	瓶		0			0		1		1		2	1		3	
	その他					0				0					0	
小計		0	18	0	1	19	12	9	0	1	22	37	39	1	4	81
貯蔵具	瓶					0				0		13			13	
	壺					0				0		4			4	
	甕A		3			3		8		8		108			108	
	甕B		0			0		1		1	2	7			9	
	鉢					0				0				1	1	
	その他					0				0					0	
小計		0	3	0	0	3	0	9	0	0	9	2	132	1	0	135
灯火具					0					0		1			1	
火具		5	7			12	3	8		11	10	24			34	
化粧具						0				0					0	
神仏具						0				0		3	3		6	
喫煙具						0				0					0	
調度具		1	0			1	1	2		3	2	7			9	
蓋		1	0	2		3	1	2	1	4	1	3	3		7	
合計		7	44	51	1	103	17	62	37	1	117	77	302	71	4	454

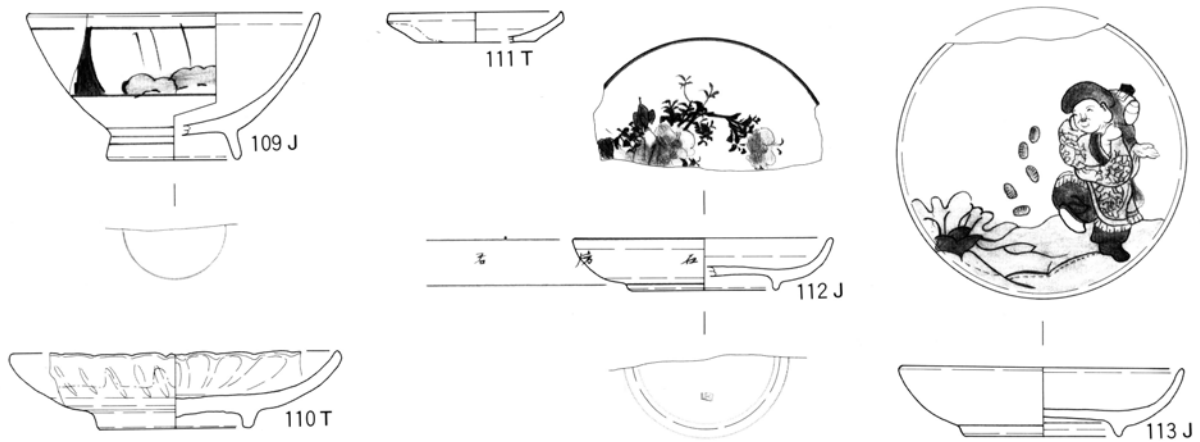
第15表 その他の溝合計陶磁器類集計表

外町遺跡

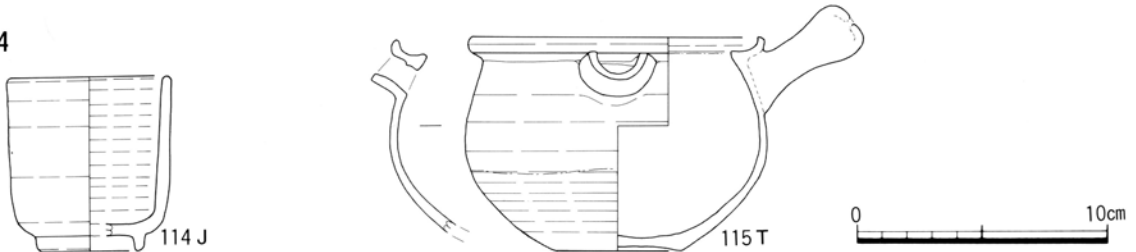
S D 001



S D 011



S D 014



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
104	91D1	SD 001	供膳具	椀	平椀	6.0	12.3	-	4.1	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 柳文か, 18世紀末	E-139
105	〃	〃	調理具	鉢	片口	7.6	15.0	-	6.1	〃	〃	〃	見込みにトチン痕, 高台部に煤付着	E-140
106	〃	〃	〃	〃	その他	-	19.8	-	-	〃	〃	〃	〃	E-141
107	〃	〃	火具	鉢	火鉢	8.7	18.3	-	12.8	鉄釉	鉄釉	〃	口縁上部に重ね焼きの剥離痕	E-142
108	〃	〃	調理具	瓶	爛德利A	-	-	6.4	4.2	-	灰釉	〃	〃	E-143
109	92B1	SD 011	供膳具	椀	平椀	5.8	11.4	-	5.2	-	-	〃	染付	E-144
110	〃	〃	〃	皿	菊皿	3.0	12.8	-	5.9	灰釉	灰釉	〃	丸ノミで調整, 断面にスス付着	E-145
111	〃	〃	〃	〃	丸皿	1.2	6.8	-	4.6	〃	ナデ	〃	底部回転糸切痕	E-146
112	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	10.2	-	5.8	-	-	〃	染付	E-147
113	〃	〃	〃	〃	〃	2.7	11.2	-	6.2	-	-	〃	染付	E-148
114	〃	SD 014	供膳具	小椀	筒椀	6.9	6.2	-	3.9	白磁	白磁	〃	〃	E-149
115	〃	〃	調理具	鍋, 釜	行平	8.5	11.5	-	5.1	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉剥ぎ, 底部スス付着	E-150

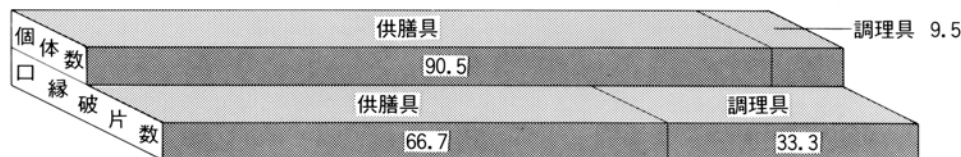
第49図 近世の遺物 (11) その他の溝 (1:3)

土坑

SK 240 本遺構の時期は、16世紀末～17世紀初頭と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で64点、接合前口縁破片数で15点、個体数は1.75個体と少ないが、城下町期の遺構として注目される。供膳具が1.58個体・90.5%とほとんどを占め、調理具が0.17個体・9.5%、他に貯蔵具・喫煙具・蓋が破片のみ出土している。志野の小椀・丸皿から時期を決定したが、大窯Ⅱ期（16世紀中葉）の播鉢も出土している。

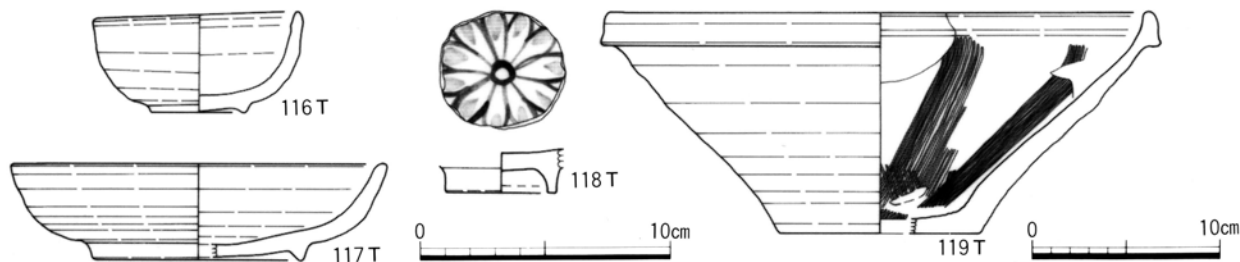
また、材質において皿や鍋などの土師質製品の占める割合が19.0%と他の同時期の遺構に比べて高くなっている。陶磁器類の占める割合は、陶器製品が81.0%となっており、磁器製品の出土は見られない。



第50図 SK 240出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀					0					0					8	
	小椀		12			12		4		4		5			5		
	皿	3	0			3	3	2		5	4	8			12		
	鉢		4			4		1		1		2			2		
	その他					0				0					0		
	小計	3	16	0	0	19	3	7	0	0	10	4	23	0	0	27	
調理具	鍋、釜	1				1	3			3	21	6			27		
	鉢					0				0				0			
	播鉢		1			1		2		2		2		2			
	瓶					0				0				0			
	その他					0				0				0			
小計	1	1	0	0	2	3	2	0	0	5	21	8	0	0	29		
貯蔵具	瓶					0				0		3			3		
	壺					0				0				0			
	甕A					0				0				0			
	甕B					0				0		3		3			
	鉢					0				0				0			
	その他					0				0				0			
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6		
灯火具					0				0					0			
火具					0				0					0			
化粧具					0				0					0			
神仏具					0				0					0			
喫煙具					0				0			1		1			
調度具					0				0					0			
蓋					0				0			1		1			
合計			4	17	0	0	21	6	9	0	0	15	25	39	0	0	64

第16表 SK 240出土陶磁器類集計表



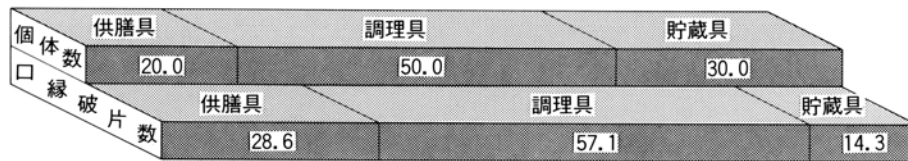
遺物番号	調査地点	遺構	用途	器種	器形	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号	
						器高	口径	胴径	底径	内面				外面
116	92B2	SK 240	供膳具	小椀	丸椀	3.9	8.1	-	3.7	長石釉	長石釉	瀬・美	志野, 17世紀前半	E-151
117	〃	〃	〃	皿	丸皿	3.8	14.9	-	8.3	〃	〃	〃	志野か, 17世紀前半	E-152
118	〃	〃	〃	鉢	織部	-	-	-	4.4	灰釉	灰釉	〃	鉄絵・赤土, 織部	E-153
119	〃	〃	調理具	播鉢	その他	11.7	28.4	-	10.5	鉄釉	鉄釉	〃	底部回転糸切痕, 錆蝕, 大窯Ⅱ期	E-154

第51図 近世の遺物 (12) SK 240 (119は1:4, 他は1:3)

S K 260 本遺構の時期は、17世紀末～18世紀初頭と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で20点、接合前口縁破片数で7点、個体数0.83個体と少ないが、江戸時代前期または中期の遺構として注目される。供膳具が0.17個体・20.0%、調理具が0.42個体・50.0%、貯蔵具が0.25個体・30.0%を占め、日常的な生活に関連する遺物だけが出土している。このことより、供膳具に分類された椀や皿の出土がかなり少ないとはいえ、生活に密着した土坑であると思われる。

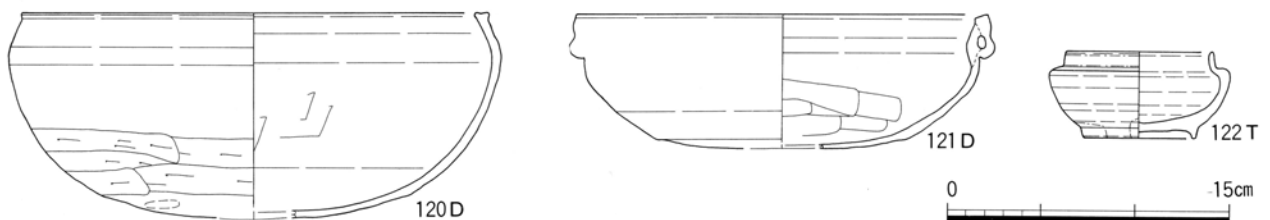
また、材質面においては、内耳鍋がまとめて出土しているため、土師質製品の占める割合が50.0%と高くなっている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が50.0%で、磁器製品は破片で1点出土しているのみに留まっている。



第52図 S K 260出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		2			2		2			2		3	1		4	
	小椀					0					0					0	
	皿					0					0	1				1	
	鉢					0					0					0	
	その他					0					0					0	
	小計	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2	1	3	1	0	5	
調理具	鍋・釜	5				5	4				4	8				8	
	鉢					0				0						0	
	搦鉢					0				0						0	
	瓶					0				0						0	
	その他					0				0						0	
	小計	5	0	0	0	5	4	0	0	0	4	8	0	0	0	8	
貯蔵具	瓶					0				0						0	
	壺					0				0						0	
	甕A					0				0		5				5	
	甕B					0				0		1				1	
	鉢		3			3		1		1		1				1	
	その他					0				0		1				0	
	小計	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1	0	7	0	0	7	
灯火具					0					0						0	
火具					0					0						0	
化粧具					0					0						0	
神仏具					0					0						0	
喫煙具					0					0						0	
調度具					0					0						0	
蓋具					0					0						0	
合計			5	5	0	0	10	4	3	0	0	7	9	10	1	0	20

第17表 S K 260出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
120	92B2	SK 260	調理具	鍋・釜	内耳鍋	-	24.8	26.2	-	ナデ・ケズリ	ケズリ	不明	足付内耳鍋	E-155
121	〃	〃	〃	〃	〃	-	22.0	22.7	-	ケズリ	〃	〃		E-156
122	〃	〃	貯蔵具	鉢	蓋物B	4.6	7.7	9.7	6.0	鉄化粧+灰釉	鉄化粧+灰釉	瀬・美	口縁部釉剥ぎ取り、尾呂の時期	E-157

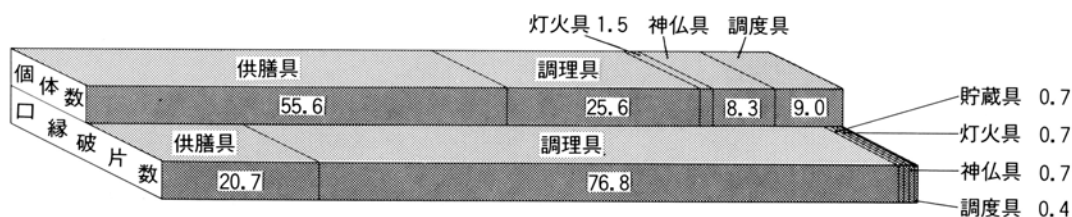
第53図 近世の遺物 (13) S K 260 (1:4)

S K 289 本遺構の時期は、18世紀後葉～18世紀末と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 649点、接合前口縁破片数では 285点、個体数は 11.08個体で、江戸時代中期の遺構として注目される。供膳具が6.17個体・55.6%、調理具が2.83個体・25.6%、灯火具が0.17個体・1.5%、神仏具が0.92個体・8.3%、調度具が1.00個体・9.0%となっており、貯蔵具・火具・喫煙具は出土しているが、化粧具・蓋類は全く出土していない。全体の平均値（P33）と比較してみると、調理具・神仏具・調度具がそれぞれ 2.3倍・3.1倍・2.3倍と比率が増えているのに対し、供膳具・灯火具が減少しているのが、この遺構の特徴であるように思われる。そして、名古屋城三の丸遺跡におけるこの時期の器種組成の内、椀対皿が1：2の割合で出土していたのに対して、この遺構では1.61：1とその比率が逆転するほど皿の出土量が極端に少ない。また、調理具においても、名古屋城三の丸遺跡における鍋・釜対挿鉢の比率が1：2であるのに対して、ここでは33：1となっていて、極端に挿鉢の出土量が少ないことも読み取ることができる。

また、材質面においては、土師質製品の占める割合が36.8%と高くなっており、その67.3%を鍋・釜類が占めている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が63.2%とやはり高く、磁器製品は1点も出土していない。

これらの点から、本遺構は近世の遺構であるとはいえ、その用途組成は、前時代である戦国時代のものに近い数値を示しているものといえる。

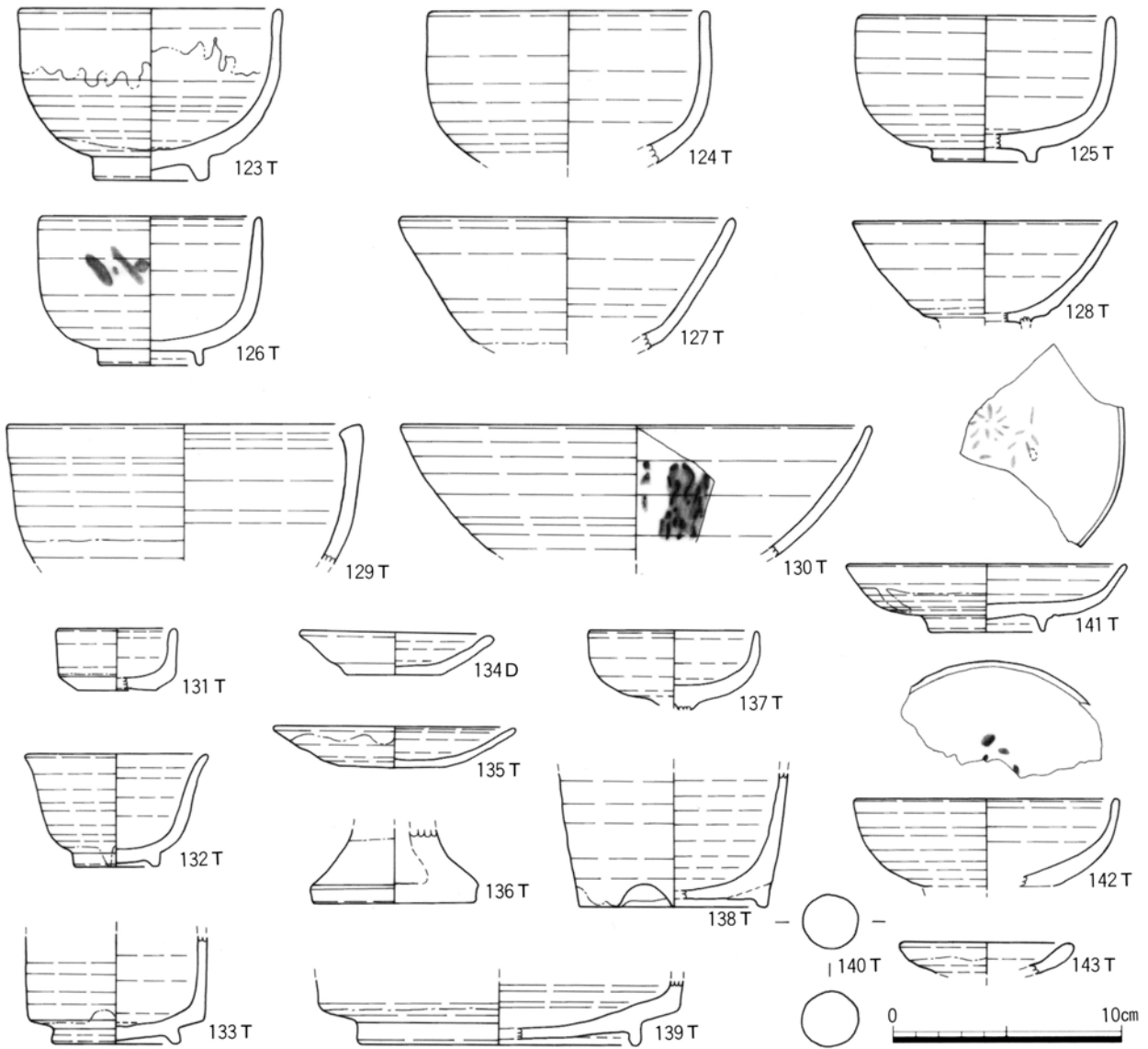


第54図 S K 289出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		32			32		28			28		84			84
	小椀		5			5		2			2		2			2
	皿	16	7			23	6	18			24	11	32			43
	鉢		14			14		5			5		12			12
	その他					0					0		1			1
調理具	小計	16	58	0	0	74	6	53	0	0	59	11	131	0	0	142
	鍋・釜	33				33	212				212	407	1			408
	鉢		0			0		4			4		5			5
	挿鉢		1			1		3			3		18			18
	瓶					0					0		1			1
貯蔵具	小計	33	1	0	0	34	212	7	0	0	219	407	25	0	0	432
	瓶壺					0					0		7			7
	甕A					0					0		3			3
	甕B		0			0		2			2		12			12
	鉢					0					0					0
灯火具	小計	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	55	0	0	55
	火具		2			2		2			2		5			5
	化粧具					0					0		5			5
	神仏具		11			11		2			2		2			2
	喫煙具					0					0		1			1
調度具	蓋		12			12		1			1		7			7
	その他					0				0						0
	合計	49	84	0	0	133	218	67	0	0	285	418	231	0	0	649

第18表 S K 289出土陶磁器類集計表

外町遺跡



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 薬 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号	
		用 途	器 種	器 形	器 高	口 径	胴 径	底 径	内 面	外 面				
123	92B2 SK 289	供膳具	椀	丸椀	7.4	11.2	-	4.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	尾呂茶椀 灰釉流し掛け、削り出し高台	E-158	
124	〃	〃	〃	〃	-	11.9	-	-	灰釉	灰釉	〃	〃	E-159	
125	〃	〃	〃	〃	6.4	10.8	-	4.4	〃	〃	〃	高台畳付部分に使用による摩滅痕	E-160	
126	〃	〃	〃	〃	6.5	9.4	-	4.4	〃	〃	〃	呉須絵	E-161	
127	〃	〃	〃	平椀	-	14.3	-	-	〃	〃	〃	〃	E-162	
128	〃	〃	〃	〃	-	11.4	-	-	〃	〃	〃	〃	E-163	
129	〃	〃	鉢	丸鉢	-	15.2	-	-	〃	〃	〃	〃	E-164	
130	〃	〃	鉢	平鉢	-	20.2	-	-	〃	〃	〃	鉄絵・摺絵	E-165	
131	〃	〃	調度具	餌鉢	2.7	5.1	-	3.4	〃	〃	〃	底部回転糸切痕、底部に焼けた痕	E-166	
132	〃	〃	供膳具	小椀	端反椀	4.9	7.7	-	3.6	〃	〃	〃	E-167	
133	〃	〃	貯蔵具	瓶	その他	-	-	7.8	5.4	〃	〃	〃	汁次、火を受け灰釉が白泥化	E-168
134	〃	〃	供膳具	皿	その他	1.9	8.1	-	4.1	指ナデ	指ナデ	不明	ロクロ成形、底部回転糸切痕	E-169
135	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	1.8	10.3	-	4.5	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みに重ね焼きの剝離痕(径5.2cm)	E-170
136	〃	〃	〃	乗燭	Ⅱ類	-	-	-	6.9	-	灰釉+鉄釉	〃	底部回転糸切痕	E-171
137	〃	〃	神仏具	仏飯器	-	-	7.2	-	-	灰釉	灰釉	〃	口縁部に煤附着	E-172
138	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	-	-	-	8.1	ナデ	〃	〃	底部に切込み、底部にトチン痕	E-173
139	〃	〃	その他	その他	その他	-	-	-	12.0	灰釉	〃	〃	底部に焼けた痕	E-174
140	〃	〃	〃	〃	〃	-	-	-	-	-	不明	〃	陶丸、長径2.4cm、短径2.3cm、重さ13.8g	E-175
141	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	3.0	12.0	-	5.0	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・摺絵か、見込みにトチン痕	E-176
142	〃	〃	〃	〃	〃	-	11.3	-	-	〃	〃	〃	鉄絵・呉須絵、梅花文か	E-177
143	〃	〃	〃	〃	〃	-	7.4	-	-	〃	〃	〃	〃	E-178

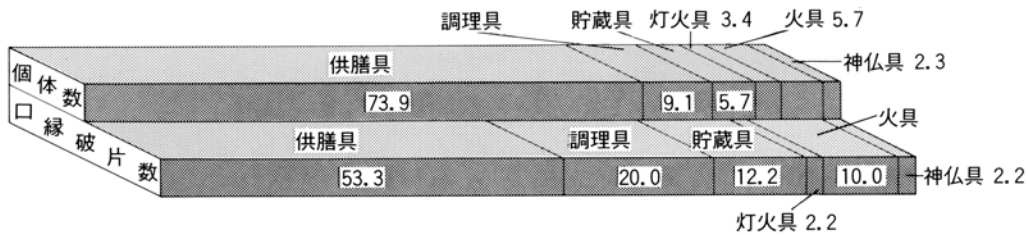
第55図 近世の遺物 (14) S K 289 (1:3)

S K 228 本遺構の時期は、18世紀末と比定される。

91D2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 376点、接合前口縁破片数では92点、個体数は7.58個体と少量である。同時期の前掲の S K 289とは、やや異なった組成比率や割合をしている。供膳具が5.42個体・73.9%、調理具が0.67個体・9.1%、貯蔵具が0.42個体・5.7%となり、供膳具の占める割合がかなり高くなっているが、全体としては近世の組成の平均値（P33）とよく似た値を示している。他に火具が0.42個体・5.7%と、その比率がやや増加している。また、器種の組成でも、椀対皿の比率が2.69：1となっており、皿の出土量が少ないことがわかる。調理具においても、播鉢の出土量が非常に少ないことを読み取ることができる。名古屋城三の丸遺跡における近世陶磁器類の組成と本遺跡の組成が大きく食い違ってくるのが、単に都市に暮らす武士階級と農村に暮らす民衆の生活の格差によって生じてくるものであるのではないだろうか。

また、破片ではあるが、蓋類・化粧具・調度具が僅かに出土していることも付け加えておく。

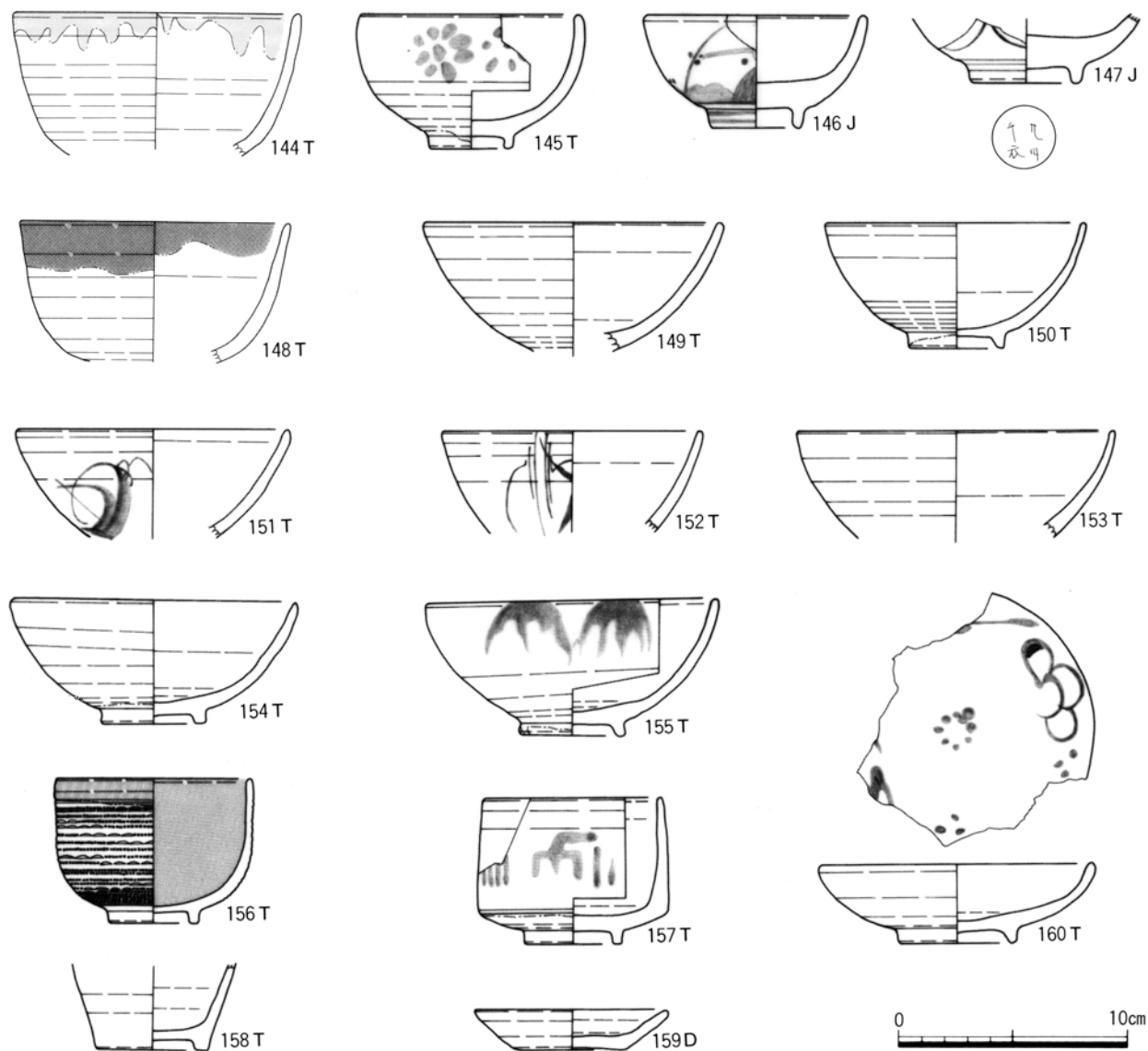
さらに、材質面においては、土師質製品が、14.3%と高い割合を占めており、この時期の遺構としてはこの位の値を示すのかも知れない。これに対して陶磁器類は、陶器製品が80.2%と依然多く、磁器製品が5.5%しか出土していない。



第56図 S K 228出土陶磁器類の用途組成

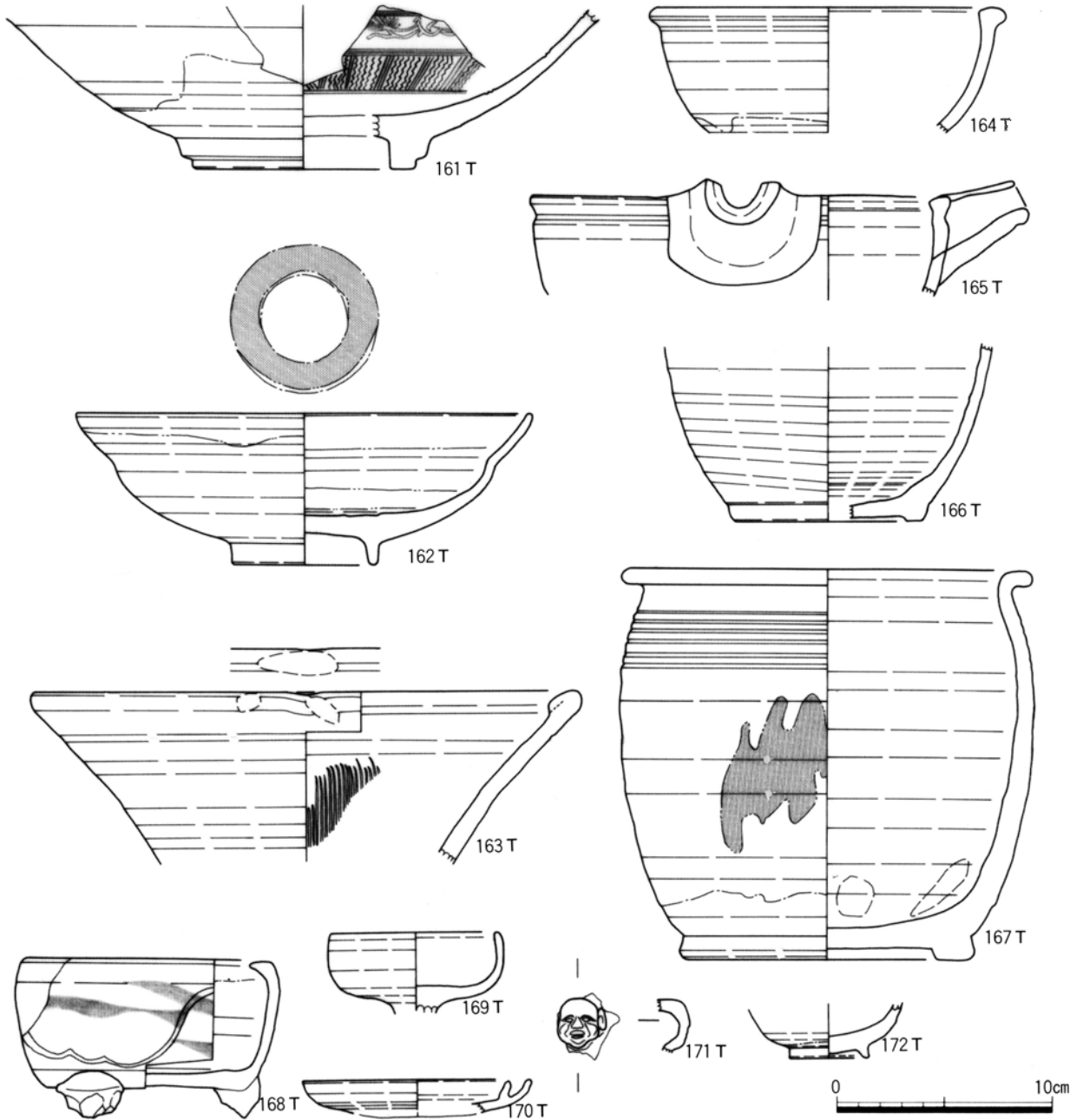
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		36	5		41		32	2		34		71	6		77	
	小椀		2			2		4			4		7			7	
	皿		10	6	0	16	1	4	1		6	1	7	1		9	
	鉢			6		6		4			4		48			48	
	その他					0					0					0	
	小計		10	50	5	0	65	1	44	3	0	48	1	133	7	0	141
調理具	鍋、釜		3			3		13			13		31			31	
	鉢			5		5		5			5		11			11	
	播鉢					0		0			0		2		5	7	
	瓶					0		0			0		1			1	
	その他					0		0			0					0	
	小計		3	5	0	0	8	13	5	0	0	18	31	14	0	5	50
貯蔵具	瓶			1		1		2			2		13			13	
	壺					0		0			0		1			1	
	甕 A			0		0		6			6		98			98	
	甕 B			1		1		1			1		16			16	
	鉢			3		3		2			2		3			3	
	その他					0		0			0					0	
	小計		0	5	0	0	5	0	11	0	0	11	0	131	0	0	131
灯火具				3		3		2			2		2			2	
火具			0	5		5	2	7			9	5	40			45	
化粧具						0					0		1			1	
神仏具				2		2		2			2		2			2	
喫煙具						0					0					0	
調度具						0					0		2			2	
蓋				3		3		2			2		2			2	
合計			13	73	5	0	91	16	73	3	0	92	37	327	7	5	376

第19表 S K 228出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
144	91D2	SK 228	供膳具	椀	丸椀	—	12.2	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け, 尾呂茶椀	E-179
145	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	9.3	—	3.4	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-180
146	〃	〃	〃	〃	〃	5.9	9.4	—	3.9	—	—	肥前	染付, 岩に梅樹文, 18世紀後半	E-181
147	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.6	—	—	肥前系	染付, 丸文・高台内一重圈線に「大明年製」, 高台鈔融着, 18世紀前半~中	E-182
148	〃	〃	〃	〃	〃	—	13.6	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	うのふ釉流し掛け	E-183
149	〃	〃	〃	〃	平椀	—	12.7	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-184
150	〃	〃	〃	〃	〃	5.4	11.1	—	4.1	〃	〃	〃		E-185
151	〃	〃	〃	〃	〃	—	11.6	—	—	〃	〃	〃	鉄絵, 柳文	E-186
152	〃	〃	〃	〃	〃	—	10.9	—	—	〃	〃	〃	鉄絵, 柳文	E-187
153	〃	〃	〃	〃	〃	—	13.6	—	—	〃	〃	〃		E-188
154	〃	〃	〃	〃	〃	5.4	12.1	—	4.3	〃	〃	〃		E-189
155	〃	〃	〃	〃	〃	5.9	12.5	—	4.3	〃	〃	〃	呉須絵, 笹文	E-190
156	〃	〃	〃	小椀	丸椀	6.3	8.3	—	3.9	緑釉	緑釉+灰釉	〃		E-191
157	〃	〃	〃	〃	筒椀	6.3	7.6	—	4.1	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 源氏香文	E-192
158	〃	〃	〃	〃	そば猪口	—	—	—	4.6	〃	〃	〃		E-193
159	〃	〃	〃	皿	その他	1.7	8.2	—	4.7	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切痕	E-194
160	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	3.4	11.6	—	4.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 梅花文, 口縁一部に油煙付着	E-195

第57図 近世の遺物 (15) S K 228① (1:3)



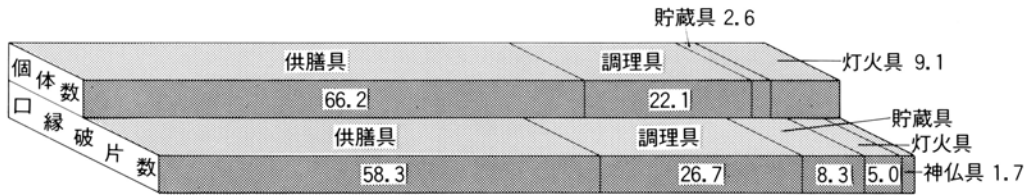
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
161	91D2	SK 228	供膳具	鉢	折縁鉢	-	-	-	10.1	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	三島手, 白泥象嵌唐草文	E-196
162	〃	〃	〃	〃	その他	6.9	20.6	-	6.5	〃	〃	肥前	白泥による刷毛目, 輪壳部分に鉄化粧	E-197
163	〃	〃	調理具	播鉢	V類	-	24.8	-	-	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数17本, 1cmに4本, 18世紀初	E-198
164	〃	〃	〃	鉢	片口	-	15.7	-	-	灰釉	灰釉	〃		E-199
165	〃	〃	〃	〃	〃	-	18.8	-	-	鉄釉	鉄釉	〃		E-200
166	〃	〃	貯蔵具	瓶	徳利A	-	-	-	8.5	ナデ	鉄釉	〃		E-201
167	〃	〃	〃	甕B	甕	18.0	18.0	-	13.0	灰釉	灰釉	〃	鉄釉流し掛けか, 見込みにトチン痕あり	E-202
168	〃	〃	神仏具	香炉	筒型	7.2	11.2	-	9.2	長石釉	長石釉	〃	鉄絵	E-203
169	〃	〃	〃	仏飯器	-	-	7.5	-	-	灰釉	灰釉	〃		E-204
170	〃	〃	灯火具	皿	灯臺	-	10.4	-	-	鉄釉	鉄釉	〃		E-205
171	〃	〃	調度具	水指	その他	-	-	-	-	指押え	灰釉	〃	水滴か	E-206
172	〃	〃	供膳具	小椀	丸椀	-	-	-	3.6	灰釉	灰釉	〃		E-207

第58図 近世の遺物 (16) SK 228② (1:3)

S K 223 本遺構の時期は、18世紀末と比定される。

91D2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 161点、接合前口縁破片数では61点、個体数は7.42個体と遺物量は少ないが、前掲のS K 228と同時期で、供膳具などの日常的な生活に関連する遺物群が高い割合を占めている。供膳具が4.25個体・66.2%と多く、調理具が1.42個体・22.1%、貯蔵具が0.17個体・2.6%であり、他に灯火具が0.58個体・9.1%と高い割合を示している。

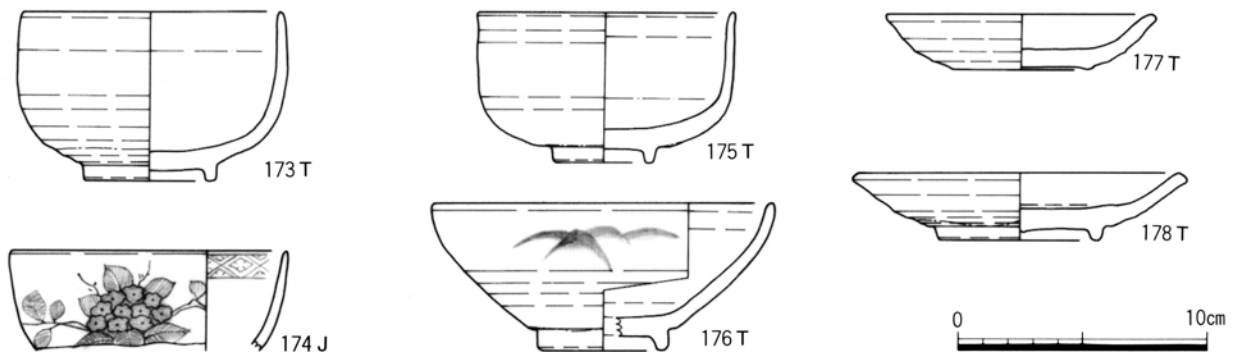
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が9.0%で、全て皿だけで占められている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が87.6%とやはり高く、磁器製品は3.4%にすぎない。



第59図 S K 223出土陶磁器類の用途組成

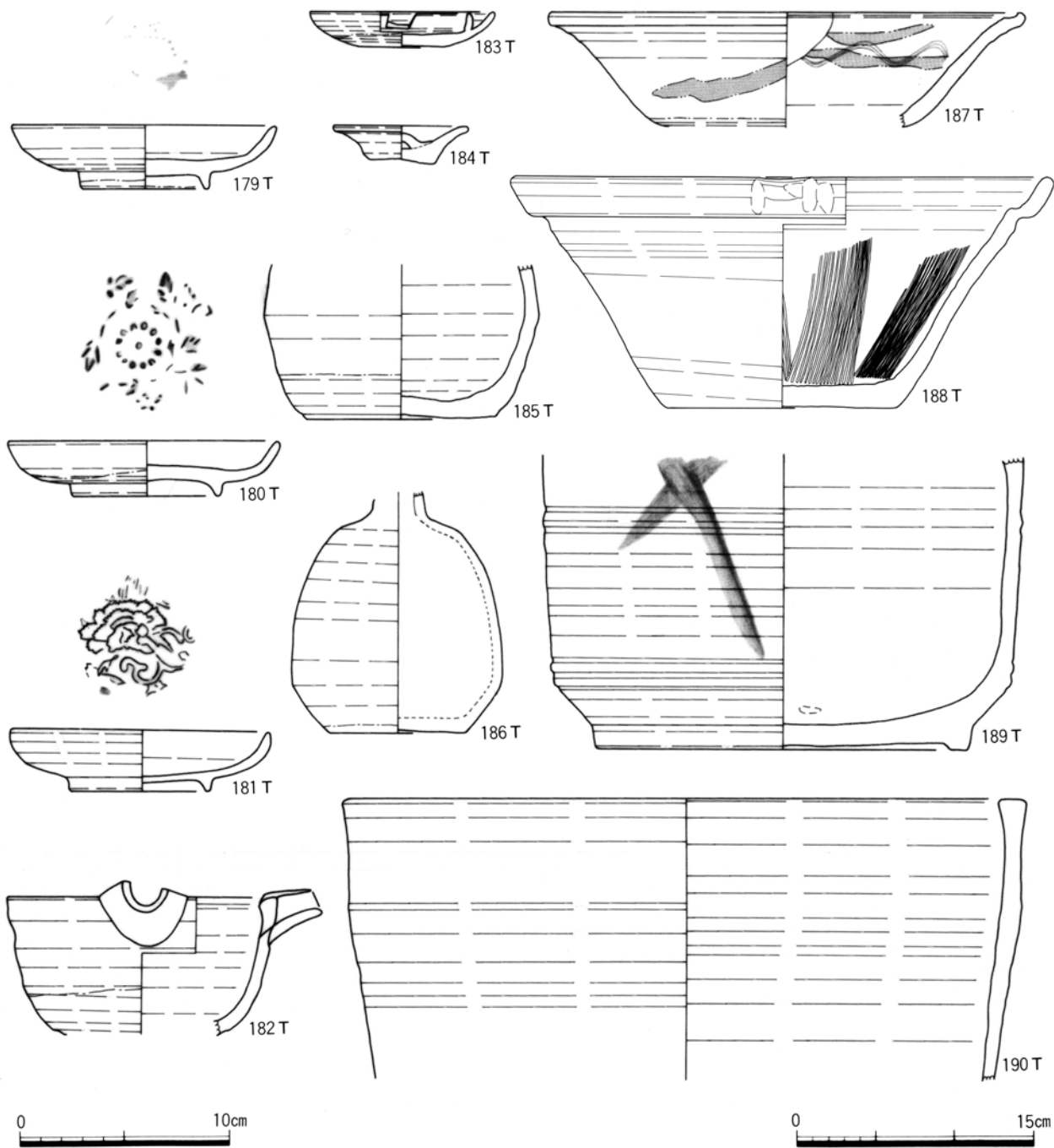
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数							
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	碗		18	3		21		12	2		14		27	2		29	
	小碗					0					0					0	
	皿	8	20			28	8	10			18	11	16			27	
	鉢		2			2		3			3		6			6	
	その他					0					0					0	
	小計	8	40	3	0	51	8	25	2	0	35	11	49	2	0	62	
調理具	鍋・釜					0					0	12				12	
	鉢		5			5		4			4		5			5	
	搦鉢		12			12		12			12		22			22	
	瓶					0					0					0	
	その他					0					0					0	
	小計	0	17	0	0	17	0	16	0	0	16	12	27	0	0	39	
貯蔵具	瓶					0					0		6			6	
	壺		0			0		1			1		7			7	
	甕 A					0					0		23			23	
	甕 B		2			2		4			4		15			15	
	鉢					0					0					0	
	その他					0					0					0	
	小計	0	2	0	0	2	0	5	0	0	5	0	51	0	0	51	
灯火具			7			7		3			3		3			3	
化粧具						0					0		3			3	
神仏具			0			0		1			1	1	1			2	
喫煙具						0					0					0	
調度具						0					0					0	
蓋				12		12		1			1		1			1	
合計			8	78	3	0	89	8	51	2	0	61	24	135	2	0	161

第20表 S K 223出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種	用途		法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径			
173	91D2 SK 223	供膳具	碗	丸碗	6.8	10.2	-	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美	E-208
174	〃	〃	〃	〃	-	10.8	-	-	-	-	肥前	染付, 割小菱・花樹文 E-209
175	〃	〃	〃	〃	6.0	10.0	-	4.0	灰釉	灰釉	瀬・美	E-210
176	〃	〃	〃	平碗	5.9	13.4	-	4.9	〃	〃	〃	呉須絵, 笹文 E-211
177	〃	〃	皿	丸皿	2.2	10.6	-	5.4	長石釉	長石釉	〃	内外面に砂融着, 高台に重ね焼きの剝離痕 E-212
178	〃	〃	〃	〃	2.7	12.6	-	6.3	灰釉	灰釉	〃	見込み蛇ノ目釉剥ぎ E-213

第60図 近世の遺物 (17) S K 223① (1:3)



遺物 番号	調査地点		用途	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構		器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
179	91D2	SK 223	供膳具	皿	丸皿	3.0	12.2	—	5.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	E-214
180	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	12.6	—	6.9	〃	〃	〃	鉄絵・型紙摺絵, 花樹文	E-215
181	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	12.0	—	6.5	〃	〃	〃	呉須絵・型紙摺絵, 花樹文	E-216
182	〃	〃	調理具	鉢	片口	—	12.6	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-217
183	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.7	8.5	—	4.0	鉄釉	鉄釉	〃	内外面に油煙付着, 外面胎部に重ね焼きの剥離痕	E-218
184	〃	〃	その他	蓋	蓋A	1.6	6.3	—	3.0	ナデ	ナデ	〃	底部回転糸切痕, 自然釉かかる	E-219
185	〃	〃	貯蔵具	瓶	德利E	—	—	12.8	8.8	〃	灰釉	〃	〃	E-220
186	〃	〃	〃	〃	德利B	—	—	9.8	6.3	—	鉄釉	〃	底部にトチン痕	E-221
187	〃	〃	供膳具	鉢	端反鉢	—	29.6	—	—	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	緑釉筆散らし	E-222
188	〃	〃	調理具	搦鉢	Ⅵ類	14.5	33.6	—	14.3	鉄釉	鉄釉	〃	罫目数17本, 1cmに3~4本, 底部回転糸切痕	E-223
189	〃	〃	調度具	水甕	水甕	—	—	—	23.4	灰釉	灰釉	〃	鉄絵	E-224
190	〃	〃	貯蔵具	甕B	半胴A	—	40.0	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-225

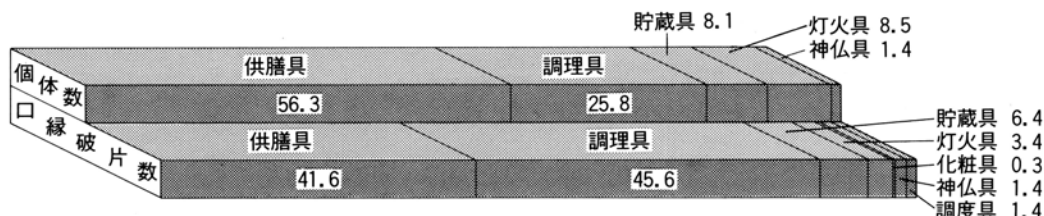
第61図 近世の遺物 (18) S K 223② (187~190は1:4, 他は1:3)

その他の土坑（下面）合計

91D区と92B区の下面で検出された土坑とピットから出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数で1,116点、接合前口縁破片数では302点、個体数は26.83個体で、ほぼ18世紀中葉～18世紀末頃と思われる遺構が多く、同時期のSD 202・SK 289・SK 228・SK 223とも、組成の比率や割合が数値の増減はあるもののよく似た値を示している。供膳具が13.83個体・56.3%と多く、調理具が6.33個体・25.8%、貯蔵具が2.00個体・8.1%、灯火具が2.08個体・8.5%、神仏具が0.33個体・1.4%、蓋類が2.25個体、他に化粧具・調度具が出土しており、喫煙具は出土していない。全体の平均値（P33）と比較してみると、調理具・灯火具の比率がそれぞれ2倍以上に増えており、供膳具以外の用途の陶磁器類は逆に減少している。

また、器種の組成では、供膳具で椀対皿が1.15：1と比率は近づいてはいるが、依然椀の方が高くなっている。鉢の出土量が少ないことも注意する必要がある。調理具では鍋・釜対播鉢が、2.33：1と播鉢の出土量がやはり少ない傾向にある。

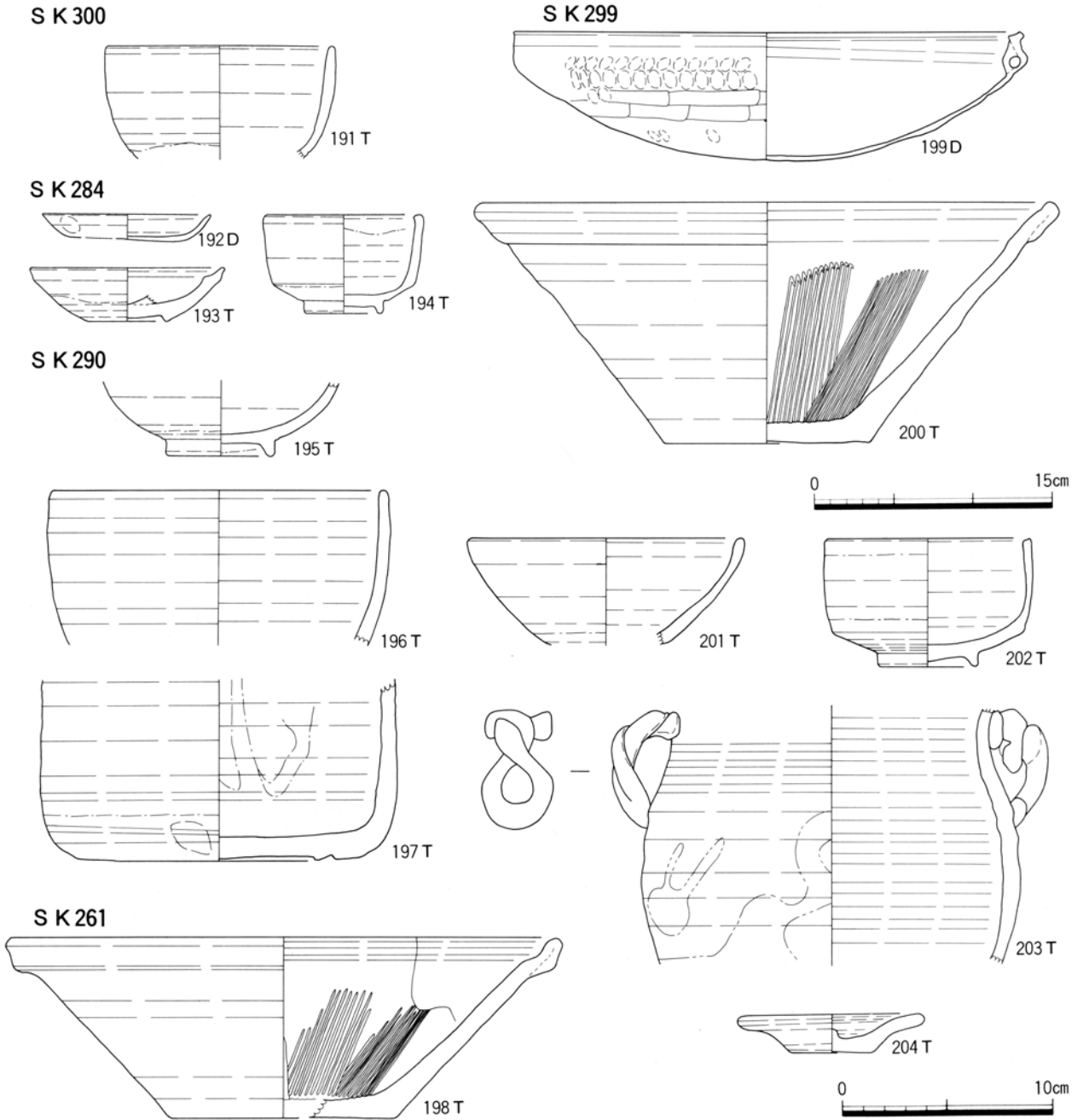
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が21.7%と全体の平均値（9.7%）よりかなり高く、鍋・釜類58.6%、皿類35.7%がその大部分を占めている。これに対して、陶磁器類の占める割合は、陶器製品が75.2%と高い比率を示しており、磁器製品は3.1%にとどまっている。



第62図 その他の土坑（下面）合計陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		73	8		81	57	5		62	112	7			119	
	小椀		3			3	5			5	14	2			16	
	皿	25	48	0		73	13	28	3	44	49	65	3		117	
	鉢		9			9	12			12	2	57			59	
	その他					0				0					0	
	小計	25	133	8	0	166	13	102	8	123	51	248	12	0	311	
調理具	鍋・釜	41	1			42	101	1		102	462	3			465	
	鉢		16			16		9		9	14				14	
	播鉢		18			18		24		24	58				58	
	瓶					0				0	2				2	
	その他					0				0	1				1	
	小計	41	35	0	0	76	101	34	0	135	462	78	0	0	540	
貯蔵具	瓶		3			3		1		1	28				28	
	壺	1	8			9	3	4		7	3	10			13	
	甕A		3			3		4		4	142				142	
	甕B		3			3		4		4	28				28	
	鉢		6			6		3		3	4	1			5	
	その他					0				0					0	
	小計	1	23	0	0	24	3	16	0	19	3	212	1	0	216	
灯火具		3	22			25	1	9		10	1	10			11	
化粧具				0		0			1	1			1		1	
神仏具			2	2		4		4		4		6	1		7	
喫煙具						0				0					0	
調度具			0			0		4		4		10			10	
蓋			27			27		6		6	1	14			15	
合計		70	242	10	0	322	118	175	9	0	302	520	581	15	0	1116

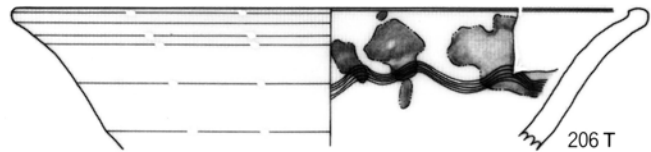
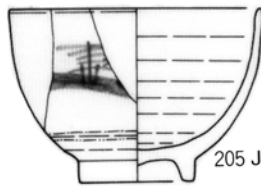
第21表 その他の土坑（下面）合計陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 薬 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号
		用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
191	92B2 SK 300	供膳具	椀	丸椀	—	11.0	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-226
192	〃 SK 284	〃	皿	その他	1.3	8.1	—	5.6	ナデ	指押え・ナデ	不明	ロク口成形	E-227
193	〃	灯火具	鉢	灯明皿	2.6	9.3	—	3.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	基筒底	E-228
194	〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	4.9	7.5	—	3.7	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉拭き取り	E-229
195	〃 SK 290	供膳具	椀	丸椀	—	—	—	5.0	〃	〃	〃	高台畳付部分に使用による摩減痕	E-230
196	〃	調理具	鉢	捏ね鉢	—	15.3	—	—	〃	〃	〃		E-231
197	〃	調理具	その他	筒型	—	—	16.6	9.4	鉄釉	鉄釉	〃		E-232
198	〃 SK 261	調理具	搦鉢	V類	8.5	25.4	—	10.5	〃	〃	〃	底部回転糸切痕, 柵目11本, 1cm単位に4本	E-233
199	〃 SK 299	〃	鍋, 釜	焙烙	7.9	31.7	—	—	ナデ	指押え・ケズリ	不明	内耳2ヶ所, 柵で穿穴	E-234
200	〃	〃	搦鉢	VI類	14.9	35.7	—	12.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕, 柵目12本, 1cm単位に3本	E-235
201	〃	供膳具	椀	平椀	—	12.6	—	—	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 笹文か	E-236
202	〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	6.0	9.4	—	4.6	〃	〃	〃	口縁部外側釉剥ぎ取り	E-237
203	〃	調理具	水指	水指	—	—	17.8	—	鉄釉	〃	〃	灰釉流し掛け	E-238
204	〃	その他	蓋	蓋A	1.8	8.7	—	—	ナデ	灰釉	不明	底部回転糸切痕	E-239

第63図 近世の遺物 (19) その他の土坑 (下面) ① (198・199は1:4, 他は1:3)

S K 210



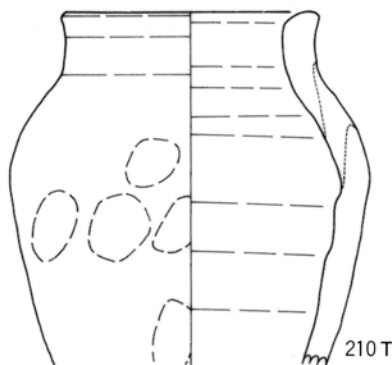
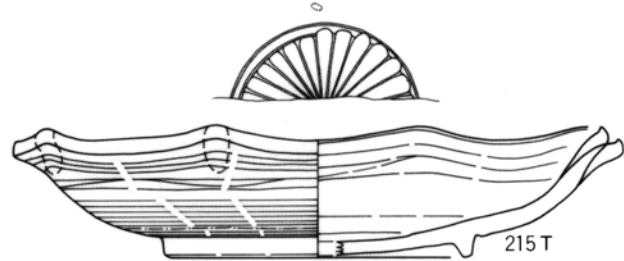
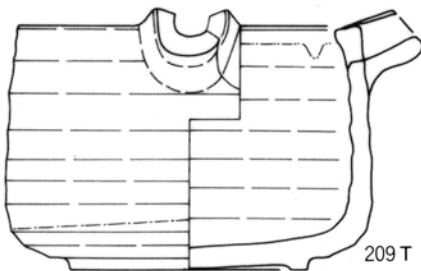
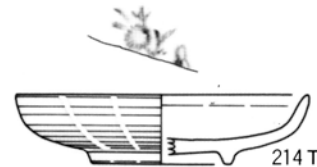
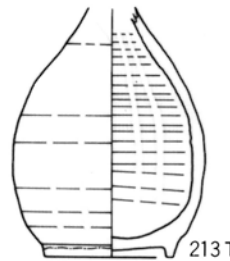
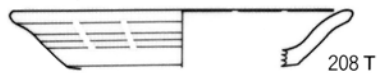
S K 211



S K 220



S K 217



S K 219



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 葉 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号
		用 途	器 種	器 形	器 高	口 径	胴 径	底 径	内 面	外 面			
205	91D2 SK 210	供膳具	椀	丸椀	7.2	10.4	-	4.6	-	-	肥前	染付、山水文、高台脇に鉄化粧、高台に砂懸 着、1640-1650	E-240
206	〃	〃	鉢	端反鉢	-	24.9	-	-	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	瀬・美	黄瀬戸鉢、具須筆散らし	E-241
207	〃 SK 211	灯火具	皿	灯明皿	2.2	10.1	-	6.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切痕、口縁一部に油煙付着	E-242
208	〃 SK 217	〃	〃	〃	-	13.9	-	-	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁一部に油煙付着	E-243
209	〃	調理具	鉢	片口	9.7	13.3	-	9.3	鉄化粧	鉄釉	〃	17世紀中	E-244
210	〃	貯蔵具	壺	無蓋壺	-	-	14.3	-	ケズリ	指押え	常滑	焼き締め、外面に自然釉かかる	E-245
211	〃 SK 220	供膳具	椀	平椀	-	-	-	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、柳文	E-246
212	〃	〃	〃	腰折椀	-	-	-	4.2	〃	〃	〃		E-247
213	〃	貯蔵具	瓶	徳利A	-	-	7.6	5.1	ナデ	〃	〃		E-248
214	〃	供膳具	皿	丸皿	2.7	11.5	-	5.5	灰釉	〃	〃	呉須絵・型紙摺絵、花樹文か	E-249
215	〃	〃	鉢	稜花鉢	5.3	23.3	-	12.0	鉄釉	鉄釉	不明	押印・菊花文、見込み・高台にトチン痕	E-250
216	〃 SK 219	〃	皿	丸皿	2.1	12.0	-	6.6	長石釉	長石釉	瀬・美		E-251
217	〃	その他	蓋	蓋A	2.5	9.3	-	5.0	ナデ	ナデ	不明	外面に自然釉かかる、回転糸切痕	E-252

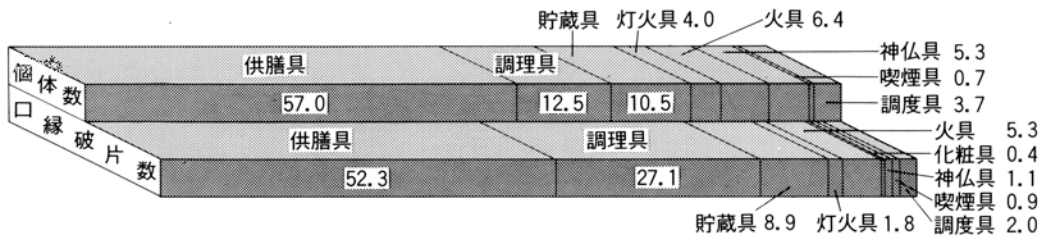
第64図 近世の遺物 (20) その他の土坑 (下面) ② (1:3)

その他の土坑（上面）合計

全ての調査区の上面で検出された土坑とピットから出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数で 3,785点、接合前口縁破片数は 1,011点、個体数は 78.17個体で、ほぼ19世紀前葉～19世紀中葉と思われる遺構が多く、同時期の S D 002・S D 025とも、組成の比率や割合が数値の増減はあるもののよく似た値を示している。供膳具が 41.58個体・57.0%と多く、調理具が9.08個体・12.5%、貯蔵具が7.67個体・10.5%、灯火具が2.92個体・4.0%、火具が4.67個体・6.4%、化粧具が 0.00個体、神仏具が3.83個体・5.3%、喫煙具が0.50個体・0.7%、調度具が2.67個体・3.7%、蓋類が5.25個体となっており、全体の平均値（P33）と比較してみると、火具・神仏具・喫煙具の比率が上がっている他はよく似た数値を示している。

また、器種の組成では、供膳具で椀対皿が 3.77：1となり、椀の占める割合が高くなる傾向がある。鉢の出土量が全体的に少ないことも、特色の1つとしてあげることができる。調理具では鍋・釜対播鉢が、2.85：1となっており、さらにその比率が広がっている。

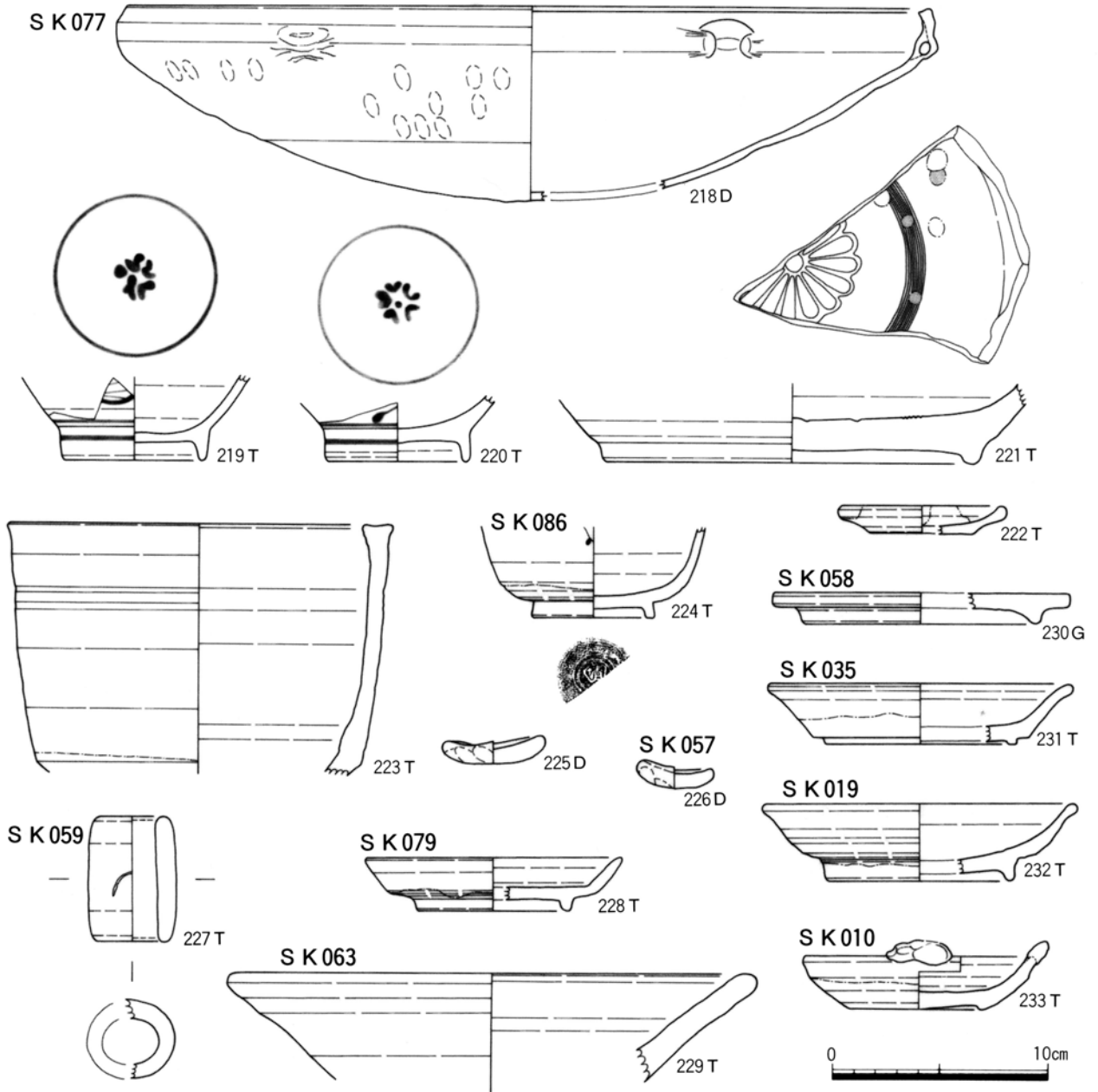
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が 6.6%と全体の平均値（9.6%）よりも減少しているが、鍋・釜類と皿類が74.2%とその大半を占めている。これに対して、陶磁器類の占める割合は、陶器製品が49.3%とやや減少し、磁器製品が43.5%と全体の平均値（30.4%）を大きく上まっている。さらに、その他の材質である軟質陶器や瓦質の製品も 0.6%出土している。



第65図 その他の土坑（上面）合計陶磁器類の用途組成

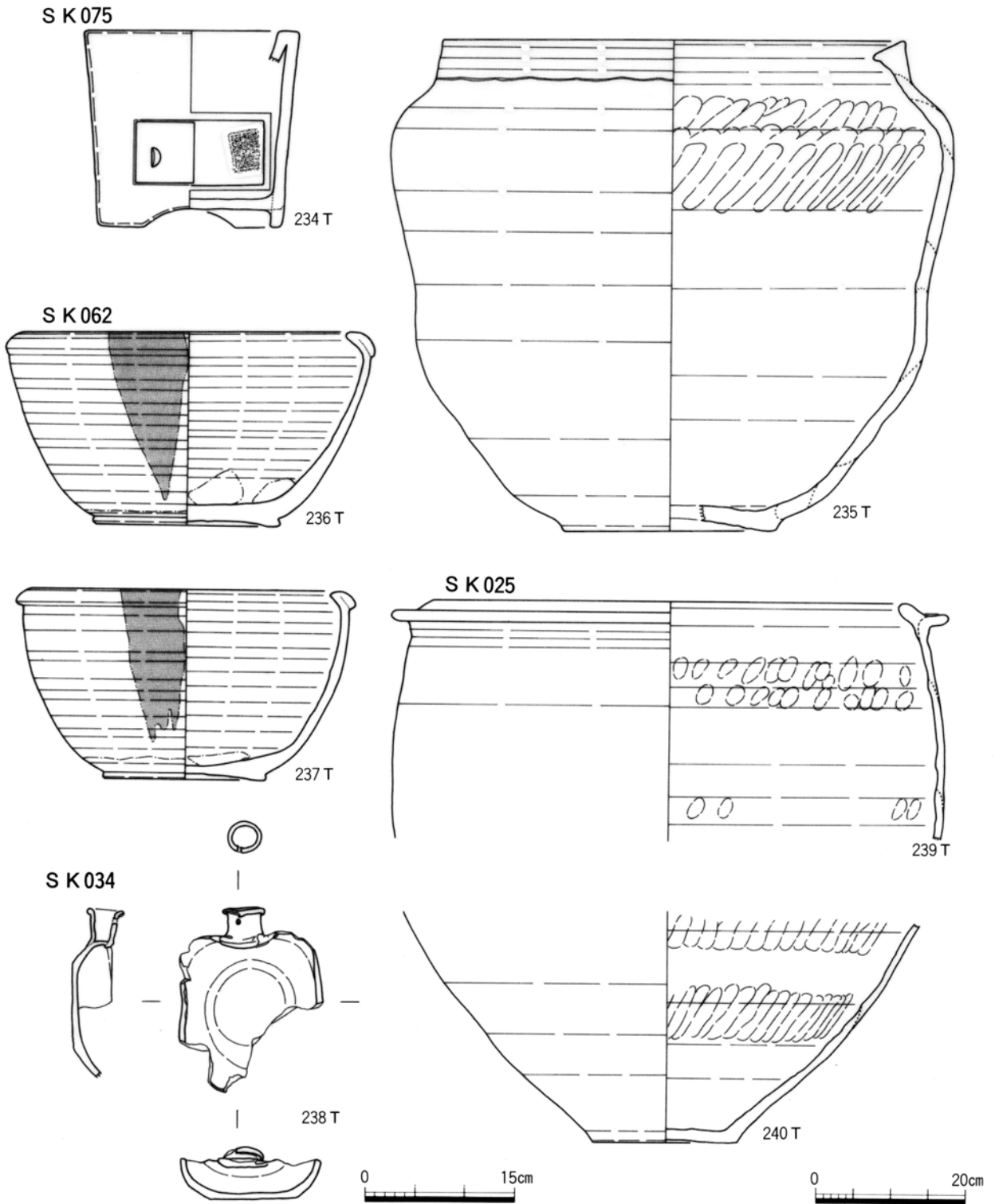
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他	土器	陶器	磁器	その他			
供膳具	椀	85	170		255	1	155	143		299		497	267		764	
	小椀	17	90		107		18	27		45		32	42		74	
	皿	23	19	54	96	15	61	46		122	43	149	62		254	
	鉢		20	18	38		37	11		48		60	49		109	
	その他		3		3		1			1		1	1		2	
小計	23	144	332	0	499	16	272	227	0	515	43	739	421	0	1203	
調理具	鍋・釜	23	14		37	144	19		5	168	557	69		9	635	
	鉢		31		31		47			47		117			117	
	播鉢		13		13		38			38		152			152	
	瓶		18	9	27		7	4		11		52	13		65	
	その他		1		1		3			3		4			4	
小計	23	77	9	0	109	144	114	4	5	267	557	394	13	9	973	
貯蔵具	瓶		25		57		4			4		164			164	
	壺		7		7		7			7		58	1		59	
	甕 A		17		17		39			39		874			874	
	甕 B	1	34		35	1	26			27	2	123			125	
	鉢		3	4	7		6	4		10		12	6		18	
	その他		1		1		1			1		1			1	
小計	1	87	4	0	92	1	83	4	0	88	2	1232	7	0	1241	
灯火具			35		35		5	13		18		8	19		27	
火具		8	44		56		13	37		52		44	128		174	
化粧具			0		0			4		4		10			11	
神仏具			7	39	46		5	6		11		9	13		22	
喫煙具		1	5		6		1	8		9		15			16	
調度具		2	29	1	32		2	16	2	20		66	7		75	
蓋		4	34	23	63		4	18	4	27		33	4	2	43	
合計		62	462	408	6	938	186	570	247	8	1011	661	2645	466	13	3785

第22表 その他の土坑（上面）合計陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備 考	登録 番号	
		用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
218	92B1 SK 077	調理具	鍋・釜	焙烙	8.9	36.7	—	—	—	指押え	不明	内耳3ヶ所、櫛で穿穴	E-253	
219	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.3	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵、丸文か	E-254	
220	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.3	〃	〃	〃	呉須絵、団扇文か	E-255	
221	〃	〃	〃	端反鉢	—	—	—	16.8	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、櫛描きによる同心円 と菊花の押印。見込みにトチン痕	E-256	
222	〃	〃	灯火具	皿	1.3	7.4	7.8	4.8	灰釉	—	〃	底部回転糸切痕	E-257	
223	〃	〃	貯蔵具	甕B	—	17.2	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	口縁部にトチン痕	E-258	
224	〃 SK 086	供膳具	碗	丸碗	—	—	—	5.5	灰釉	灰釉	関西か	呉須絵、高台内部に押印	E-259	
225	〃	〃	〃	皿	その他	1.0	4.3	—	—	指押え・ナデ	指押え・ナデ	不明	非ロクロ成形	E-260
226	〃 SK 057	〃	〃	〃	1.4	3.0	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-261	
227	〃 SK 059	その他	その他	その他	5.8	—	4.0	—	—	—	〃	土錘、重さ40.7g	E-262	
228	〃 SK 079	灯火具	皿	灯明皿	2.5	10.5	—	6.8	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕、高台より胎部にかけて魚 けた痕	E-263	
229	〃 SK 063	火具	鉢	火桶	—	23.3	—	—	—	タタキ	常滑	—	E-264	
230	〃 SK 058	その他	蓋	蓋G	1.5	13.4	—	10.5	指ナデ	ヘラ削り	不明	火消し壺の蓋、内面に煤付着	E-265	
231	91D1 SK 035	供膳具	皿	稜皿	2.9	13.7	—	8.8	灰釉	灰釉	瀬・美	—	E-266	
232	〃 SK 019	〃	〃	丸皿	3.6	14.0	—	8.3	〃	〃	〃	見込み・高台置付部分に重ね焼きの剝離痕	E-267	
233	〃 SK 010	灯火具	皿	灯明皿	2.4	10.4	—	5.9	鉄釉	鉄釉	〃	口縁一部と外面に油煙付着	E-268	

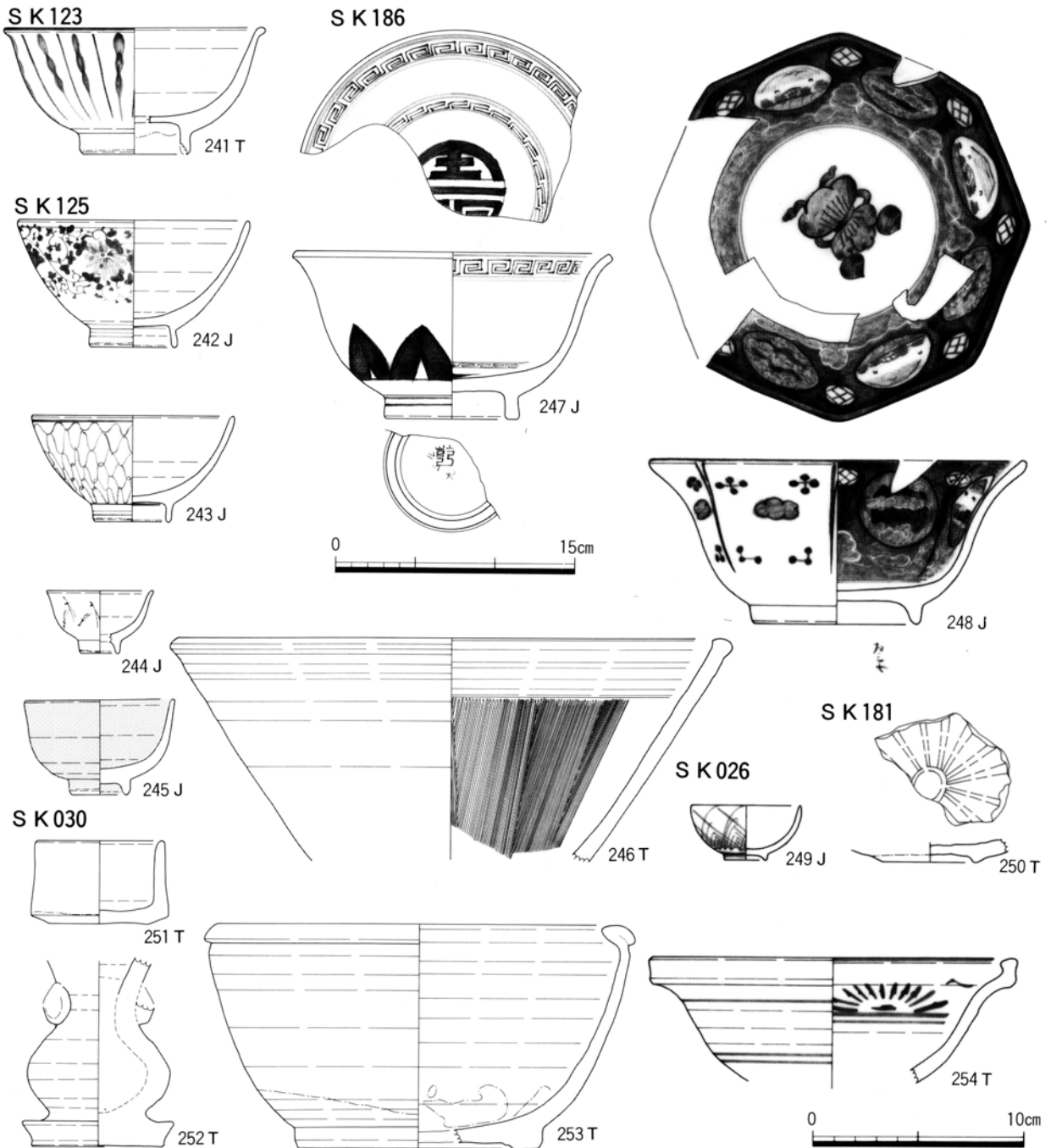
第66図 近世の遺物(21) その他の土坑(上面)①(1:3)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
234	92B2	SK 075	火具	鉢	こん炉A	-	-	-	-	-	-	不明	押印	E-269
235	〃	〃	貯蔵具	甕A	Ⅱ類	49.4	46.4	-	21.8	指押え・ナデ	ナデ	常滑	焼き締め	E-270
236	〃	SK 062	調理具	鉢	捏ね鉢	19.4	32.9	36.4	17.9	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉流し掛け, 見込みに釉剥き取り	E-271
237	〃	〃	〃	〃	〃	19.0	31.0	33.8	15.9	〃	〃	〃	銅緑釉流し掛け, 見込みに釉剥き取り	E-272
238	91D1	SK 034	火具	その他	その他	5.2	-	-	-	鉄釉	鉄釉	不明	十能	E-273
239	〃	SK 025	貯蔵具	甕A	Ⅳ類	-	-	-	-	指押え・ナデ	ナデ	常滑	240と同一個体	E-274
240	〃	〃	〃	〃	〃	-	-	-	19.4	〃	〃	〃	239と同一個体	E-275

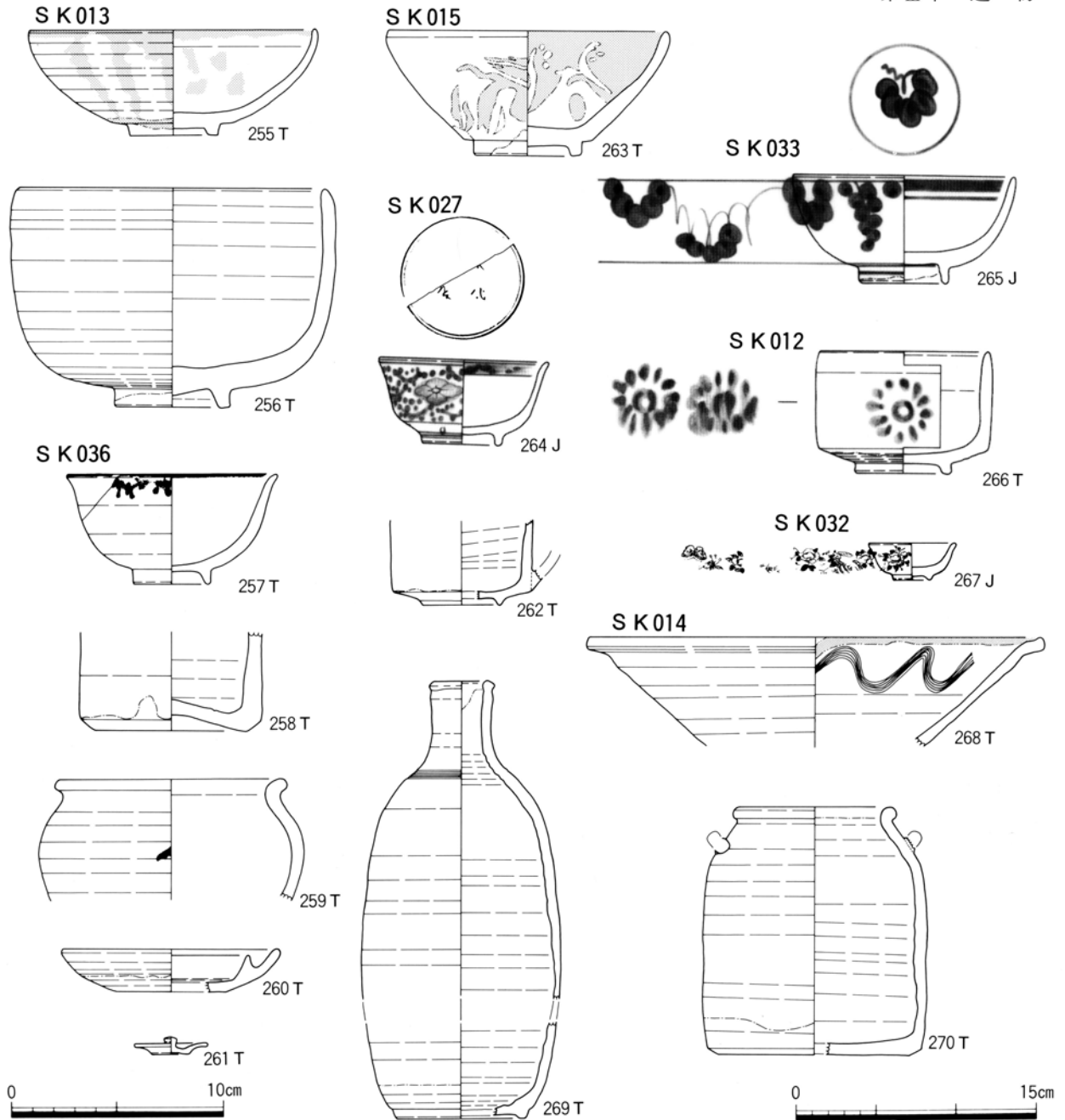
第67図 近世の遺物 (22) その他の土坑 (上面) ② (234~238は1:6, 他は1:8)

外町遺跡



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉葉・調整等		産 地	備 考	登録 番号
		用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
241	91C SK 123	供膳具	椀	端反椀	6.0	12.1	—	—	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵・鉄絵，口鏼，麦藁手文	E-276
242	〃 SK 125	〃	〃	丸椀	6.0	10.7	—	4.0	—	—	〃	染付（摺絵と手書き），花草草文	E-277
243	〃 〃	〃	〃	〃	5.1	9.4	—	3.5	—	—	〃	染付，一重網目文，高台内に砂目痕	E-278
244	〃 〃	〃	小椀	端反椀	2.9	5.0	—	1.7	—	—	〃	染付，折れ松葉文，19世紀中葉	E-279
245	〃 〃	〃	〃	丸椀	4.5	6.9	—	2.5	青磁	青磁	〃	高台置付に鉄鏼	E-280
246	〃 〃	調理具	播鉢	匚類	—	34.1	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	櫛目31本，1cm単位に5本	E-281
247	91B SK 186	供膳具	鉢	端反鉢	7.9	14.6	—	6.1	—	—	肥前	染付，連弁文・雷文，焼き継ぎ痕，幕末期	E-282
248	〃 〃	〃	〃	型打鉢	7.8	17.6	—	7.8	—	—	〃	唐付，山本文・雲文，寛政し文，焼き継ぎ痕， 慶應寺の技法，18世紀末—19世紀初	E-283
249	91D1 SK 026	〃	小椀	丸椀	2.6	5.1	—	2.0	—	—	肥前か	染付	E-284
250	91B SK 181	〃	皿	その他	—	—	—	4.4	灰釉	灰釉	瀬・美	碁笥底	E-285
251	91D1 SK 030	調度具	餌鉢	餌鉢	3.9	5.8	—	4.6	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-286
252	〃 〃	〃	花生	壺型	—	—	—	6.1	ナデ	ナデ	〃	胎部に油煙付着	E-287
253	〃 〃	調理具	鉢	捏ね鉢	14.0	25.3	—	15.1	灰釉	灰釉	〃	見込みに釉剥ぎ	E-288
254	〃 〃	〃	鍋・釜	鍋	—	17.0	—	—	〃	〃	〃	鉄絵，口化粧・花文か	E-289

第68図 近世の遺物 (23) その他の土坑 (上面) ③ (246・253は1:4, 他は1:3)



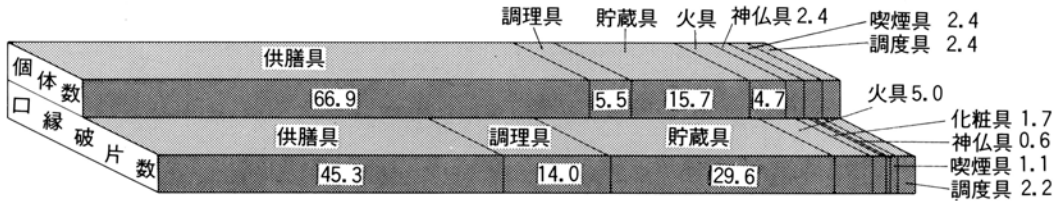
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号
		用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
255	91D1 SK 013	供膳具	椀	平椀	5.0	13.2	—	4.1	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-290
256	〃	〃	〃	丸椀	10.3	14.1	—	5.3	灰釉	灰釉	瀬・美		E-291
257	〃 SK 036	〃	〃	端反椀	5.2	9.8	—	3.6	〃	〃	〃	鉄絵, 口化粧	E-292
258	〃	貯蔵具	瓶	その他	—	—	—	7.0	鉄釉	鉄釉	不明	底部鉄化粧	E-293
259	〃	〃	壺	無蓋壺	—	10.4	—	—	〃	〃	瀬・美		E-294
260	〃	灯火具	皿	灯臺	2.0	10.1	—	5.0	〃	〃	〃	内径7.2cm, 胎部に重ね焼きの剥離痕	E-295
261	〃	その他	蓋	蓋A	0.8	3.4	—	1.7	ナデ	ナデ	不明	つまみ径0.6cm	E-296
262	〃	調度具	鉢	鉢	—	—	—	3.6	〃	鉄釉	瀬・美		E-297
263	〃 SK 015	供膳具	椀	平椀	4.9	13.0	—	5.0	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-298
264	〃 SK 027	〃	小椀	端反椀	4.1	8.2	—	3.9	—	—	瀬・美	染付, 見込み「成化」製・花唐草文	E-299
265	〃 SK 033	〃	椀	丸椀	5.3	10.8	—	4.1	—	—	〃	染付, 葡萄文	E-300
266	〃 SK 012	〃	〃	筒椀	6.0	8.2	—	4.5	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-301
267	〃 SK 032	〃	小椀	端反椀	1.7	4.0	—	1.7	—	—	〃	染付(刷絵), 草花文・蝶文	E-302
268	〃 SK 014	〃	鉢	端反鉢	—	28.2	—	—	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢, 緑釉筆散し, 18世紀末	E-303
269	〃	貯蔵具	瓶	德利E	—	3.4	12.3	7.9	ナデ	灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-304
270	〃	〃	壺	蓋付壺	15.5	9.2	—	11.9	〃	鉄釉	瀬・美	口縁上部に重ね焼きの剥離痕	E-305

第69図 近世の遺物 (24) その他の土坑 (上面) ④ (268~270は1:4, 他は1:3)

その他の遺構合計

全調査区で検出されたS X記号の遺構から出土した遺物の合計で、出土した遺物は破片数で 641点、口縁破片数は 183点あり、個体数は 11.83個体である。供膳具が7.08個体・66.9%、調理具が0.58個体・5.5%、貯蔵具が1.67個体・15.7%、火具が0.50個体・4.7%、化粧具が0.00個体、神仏具が0.25個体・2.4%、喫煙具が0.25個体・2.4%、調度具が0.25個体・2.4%、蓋類が1.25個体となっており、灯火具は破片のみが出土している。用途の組成は、ほぼ全体の平均値（P33）に近い値を読み取れるが、鍋・釜類は0.08個体と少なく、調理具は半減し、喫煙具が0.50個体と多くなっている。

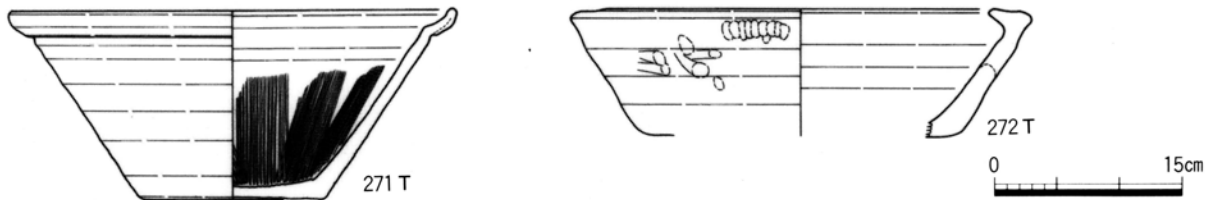
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、それぞれ 4.2%・73.2%・22.5%となっており、土師質製品・磁器製品ともに比率が低く、陶器製品が多い。



第70図 その他の遺構合計陶磁器類の用途組成

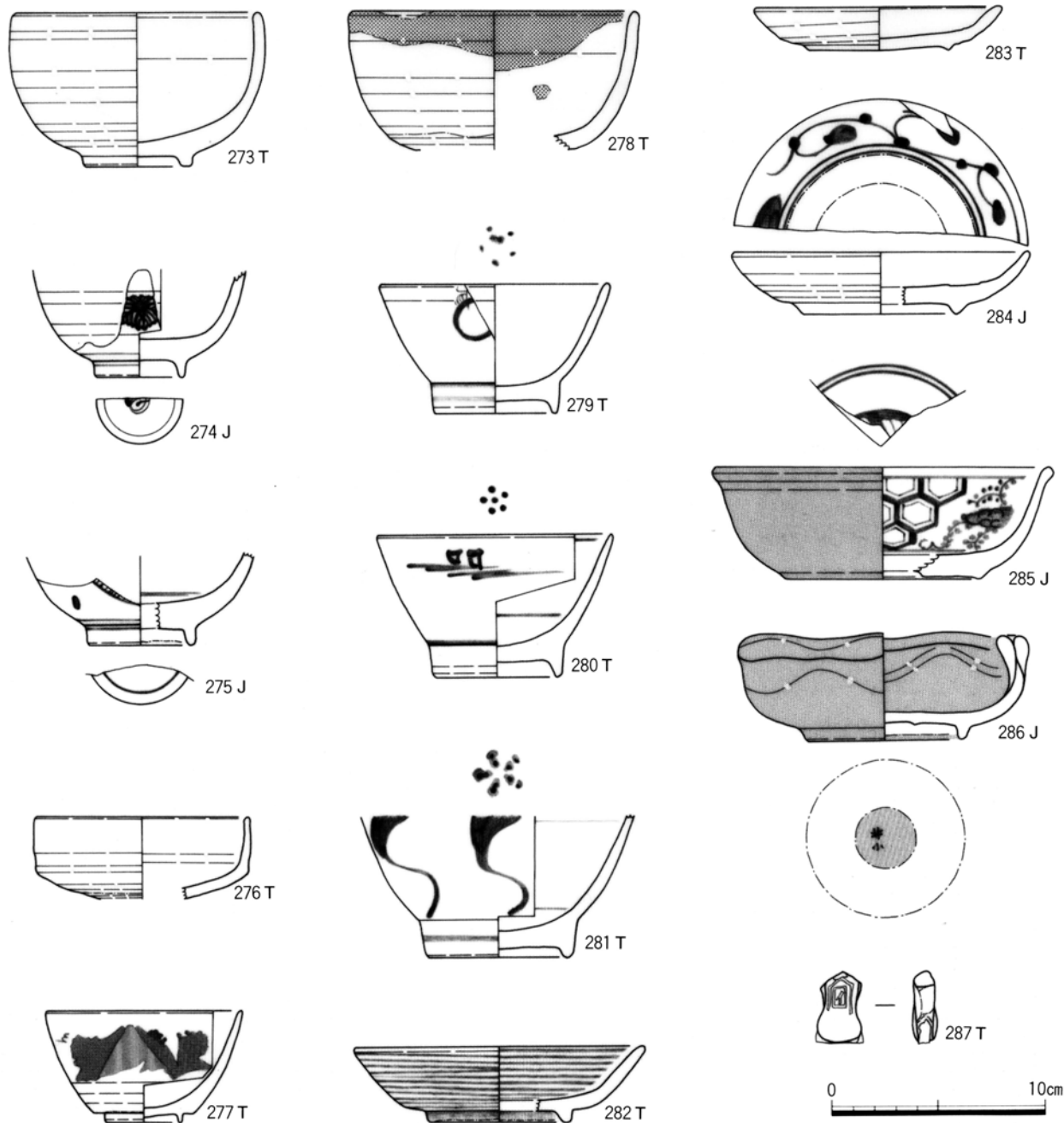
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	
供膳具	椀		32	9		41		30	13		43		81	38		119	
	小椀		3	8		11		4	6		10		4	11		15	
	皿	0	18	7		25	3	14	4		21	8	35	4		47	
	鉢		0	8		8		3	4		7		5	4		9	
	その他					0											
	小計	0	53	32	0	85	3	51	27	0	81	8	125	57	0	190	
調理具	鍋・釜	0	1			1	6	1		1	8	27	5		1	33	
	鉢		0			0		5			5		11			11	
	播鉢		6			6		12			12		77			77	
	瓶					0					0		1			1	
	その他					0					0					0	
	小計	0	7	0	0	7	6	18	0	1	25	27	94	0	1	122	
貯蔵具	瓶		0			0		1			1		21			21	
	壺		3			3		2			2	1	5			6	
	甕A		14			14		39			39		189			189	
	甕B		1			1		5			5	1	34			35	
	鉢					0					0		7			7	
	その他		2			2		6			6		6			6	
	小計	0	20	0	0	20	0	53	0	0	53	2	262	0	0	264	
灯火具						0					0		3			3	
火具		4	2			6	2	7			9	11	21			32	
化粧具			0			0		3			3		6			6	
神仏具			3			3		1			1		1			1	
喫煙具			3			3		3			3		5			5	
調度具			3			3		4			4	1	12	1		14	
蓋		2	13			15	1	3			4	1	3			4	
合計			6	104	32	0	142	12	143	27	1	183	50	532	58	1	641

第23表 その他の遺構合計陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種			法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号	
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
271	92B2 SX 202	調理具	播鉢	Ⅵ類	15.0	35.5	—	14.4	鉄釉	鉄釉	瀬・美	標目数16本：1cmに4本、底部回転糸切痕、内面に使用による摩滅。	E-306
272	ク	火具	鉢	火桶	10.2	30.6	—	—	ナデ	指押え・ナデ	常滑		E-307

第71図 近世の遺物 (25) その他の遺構① (S X 202) (1:6)

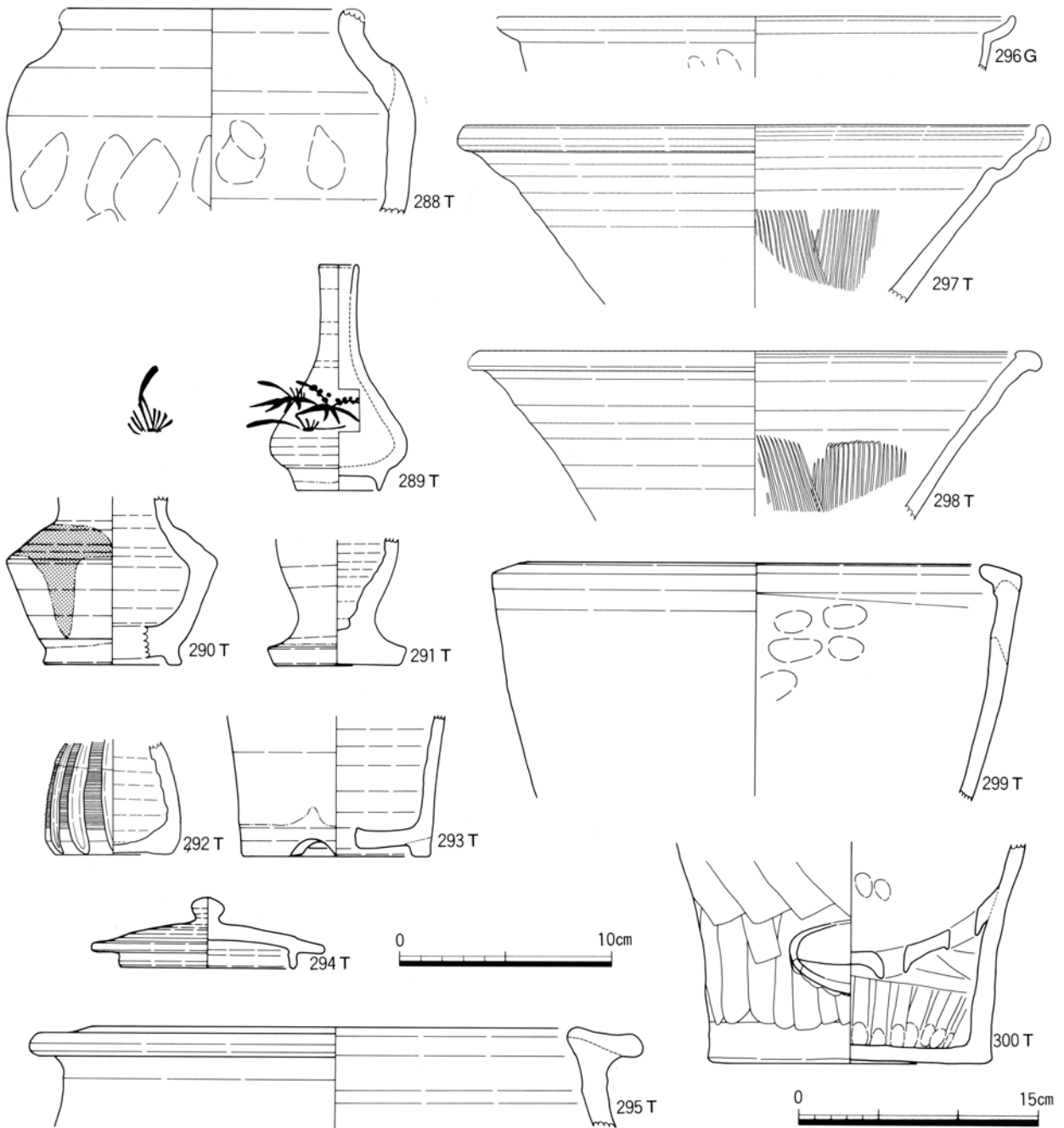


0 10cm

遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
273	92B2	SX 201	供膳具	椀	丸椀	7.3	11.1	—	4.8	灰釉	灰釉	瀬・美	高台豊付部分にトチン痕、重ね焼きの剝離痕	E-308
274	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.0	—	—	肥前	染付、鳥文(コンニャク印)・高台内に調福、高台に砂融着、18世紀前半—中	E-309
275	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.7	—	—	〃	染付、丸文、高台に砂融着、18世紀後半	E-310
276	〃	〃	〃	〃	腰折椀	—	9.8	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-311
277	〃	〃	〃	〃	平椀	5.2	9.1	—	3.6	〃	〃	信楽	色絵(金・銀・朱)、17世紀末か	E-312
278	〃	〃	〃	〃	丸椀	—	13.1	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け	E-313
279	〃	〃	〃	〃	広東椀	6.0	10.5	—	5.6	灰釉	灰釉	〃	呉須絵・鉄絵、五弁花(コンニャク印)・宝珠文	E-314
280	〃	〃	〃	〃	〃	6.6	10.8	—	5.6	〃	〃	〃	呉須絵、五弁花(コンニャク印)	E-315
281	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.4	〃	〃	〃	呉須絵、五弁花(コンニャク印)・ねじり花文	E-316
282	〃	〃	〃	皿	丸皿	3.5	13.2	—	6.4	白泥+灰釉	白泥+灰釉	〃	白泥による刷毛目	E-317
283	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	11.5	—	6.6	長石釉	長石釉	〃	見込みにトチン痕	E-318
284	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	13.7	—	7.2	—	—	肥前	染付、鳥文、見込み蛇ノ目軸刺ぎ、重ね焼きの剝離痕(径約7.2cm)、18世紀後半	E-319
285	〃	〃	〃	鉢	その他	5.2	15.5	—	9.0	—	青磁	〃	青磁染付、亀甲・梅樹文・三ツ銀杏文、蛇ノ目凹形高台、18世紀後半	E-320
286	〃	〃	〃	〃	〃	4.8	12.8	—	7.3	青磁	〃	〃	蛇ノ目凹形高台、焼き離れ痕、高台内に朱書き「舟小」か、18世紀後半	E-321
287	〃	〃	調理具	その他	その他	—	—	—	—	—	鉄釉	瀬・美	押印・卸皿の柄か	E-322

第72図 近世の遺物(26) その他の遺構②(SX 201)(1:3)

外町遺跡



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
288	92B2	SX 201	貯蔵具	壺	無蓋壺	—	13.2	—	—	指押え・ナデ	指押え・ナデ	常滑		E-323
289	〃	〃	神仏具	瓶	神酒徳利A	10.6	1.8	6.4	3.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 松竹梅文	E-324
290	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	9.7	6.3	鉄釉	鉄釉	〃	灰釉流し掛け	E-325
291	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.6	ケズリ	灰釉	〃	底部回転糸切痕, 底部使用による摩滅痕	E-326
292	〃	〃	喫煙具	灰落し	—	—	—	—	5.4	ナデ	灰釉+鉄釉	〃	底部回転糸切痕, へらによる筋彫り, 口縁部敲打痕	E-327
293	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	8.6	〃	灰釉	〃	高台に切り込み, 高台置付部分にトチン痕	E-328
294	〃	〃	その他	蓋	蓋D	3.3	10.7	—	8.1	〃	鉄釉	〃	つまみ径1.5cm, 灰釉流し掛けか	E-329
295	〃	〃	貯蔵具	甕A	V類	—	29.8	—	—	〃	指押え・ナデ	常滑		E-330
296	〃	〃	調理具	鍋, 釜	鍋	—	32.2	—	—	〃	指押え	不明	外面煤付着	E-331
297	〃	〃	〃	播鉢	V類	—	36.2	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数15本, 1cmに4本	E-332
298	〃	〃	〃	〃	〃	—	33.8	—	—	〃	〃	〃	櫛目数21本, 1cmに3本	E-333
299	〃	〃	火具	鉢	火鉢	—	28.8	—	—	指押え・ナデ	ナデ	常滑	内面煤付着	E-334
300	〃	〃	〃	〃	蚊いぶし	—	—	—	17.5	指押え	ケズリ	〃	内面煤付着	E-335

第73図 近世の遺物 (27) その他の遺構③ (S X 201) (294~300は1:4, 他は1:3)

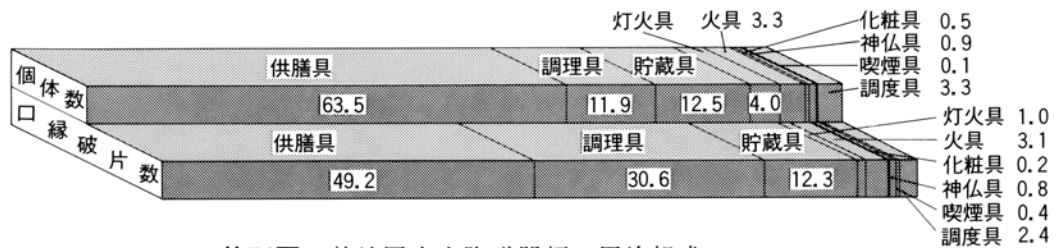
整地層の出土遺物合計

91D区と92B区にみられた整地層から出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数は10,701点、接合前口縁破片数は2,899点、個体数は181.08個体であり、全出土遺物の3分の1～4分の1を占めている。供膳具は107.83個体・63.5%、調理具は20.17個体・11.9%、貯蔵具は21.25個体・12.5%、灯火具は6.83個体・4.0%、火具は5.58個体・3.3%、化粧具は0.83個体・0.5%、神仏具は1.58個体・0.9%、喫煙具は0.17個体・0.1%、調度具は5.58個体・3.3%、他に蓋類が11.25個体となっている。数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

また、器種の組成では、供膳具で椀対皿が1.39：1と全体の比率よりやや低く、土師質の皿を灯火具に含めると1.70：1となり、やや平均値に近づく。さらに、皿対鉢は2.87：1となり、全体の比率（3.90：1）よりも鉢の出土量の増加が目立っている。調理具においては、搗鉢の占める割合が鍋・釜類とほぼ同等となっており、多くの搗鉢が整地の際に一括投棄されたものと考えられる。

材質の面から見てみると、土師質製品が9.1%、陶磁器類では陶器製品が65.2%、磁器製品が25.3%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質の製品が0.5%となっており、多少の増減はあるが全体の平均値（P33）によく似た値を示している。

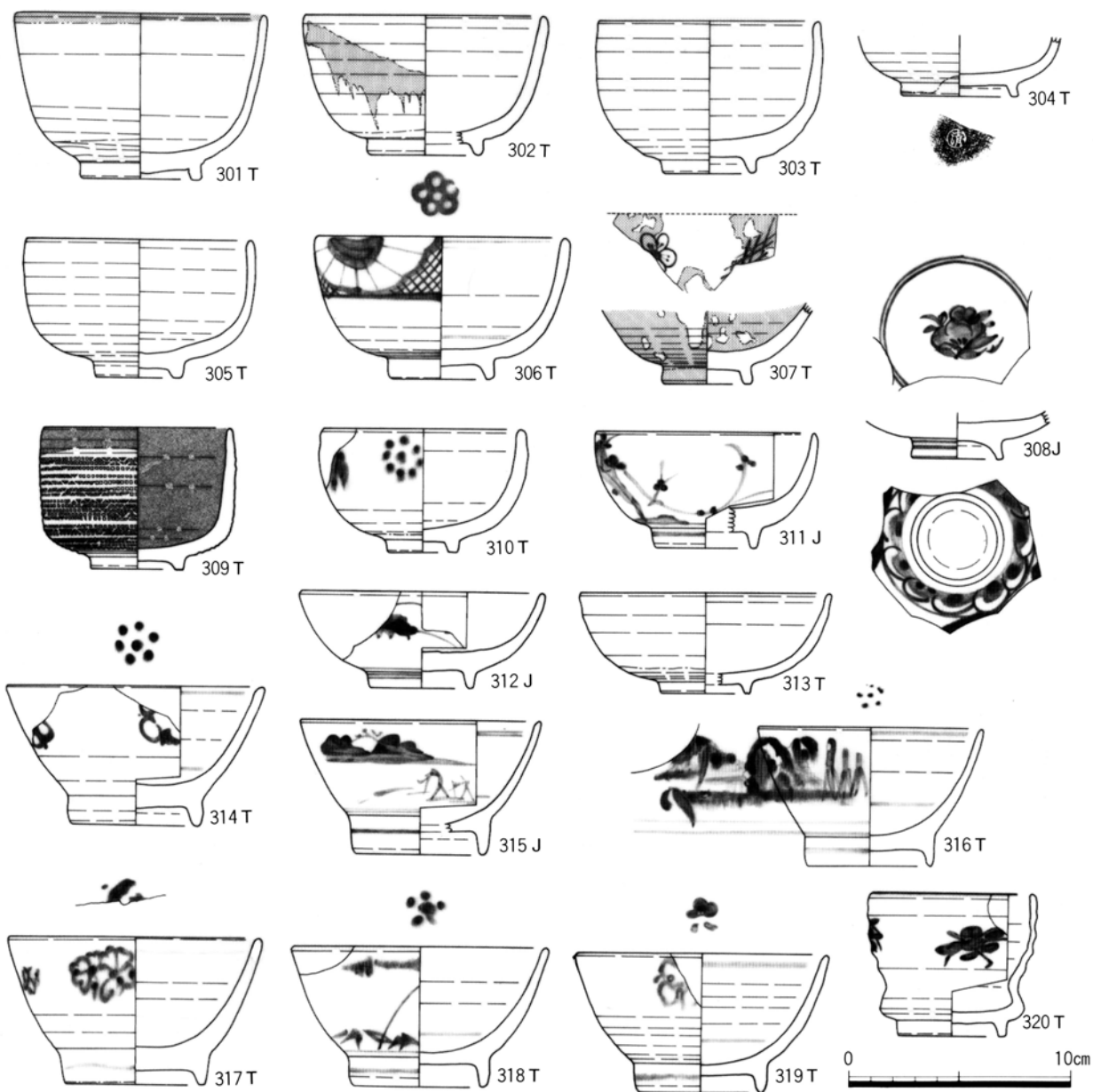
出土遺物から整地層の時期については、一部古いものも含まれているとはいえ、ほぼ18世紀末～19世紀前葉と想定される。従って、この時期に、大規模な整地事業を伴う人為的造成が行われたものと考えられる。



第74図 整地層出土陶磁器類の用途組成

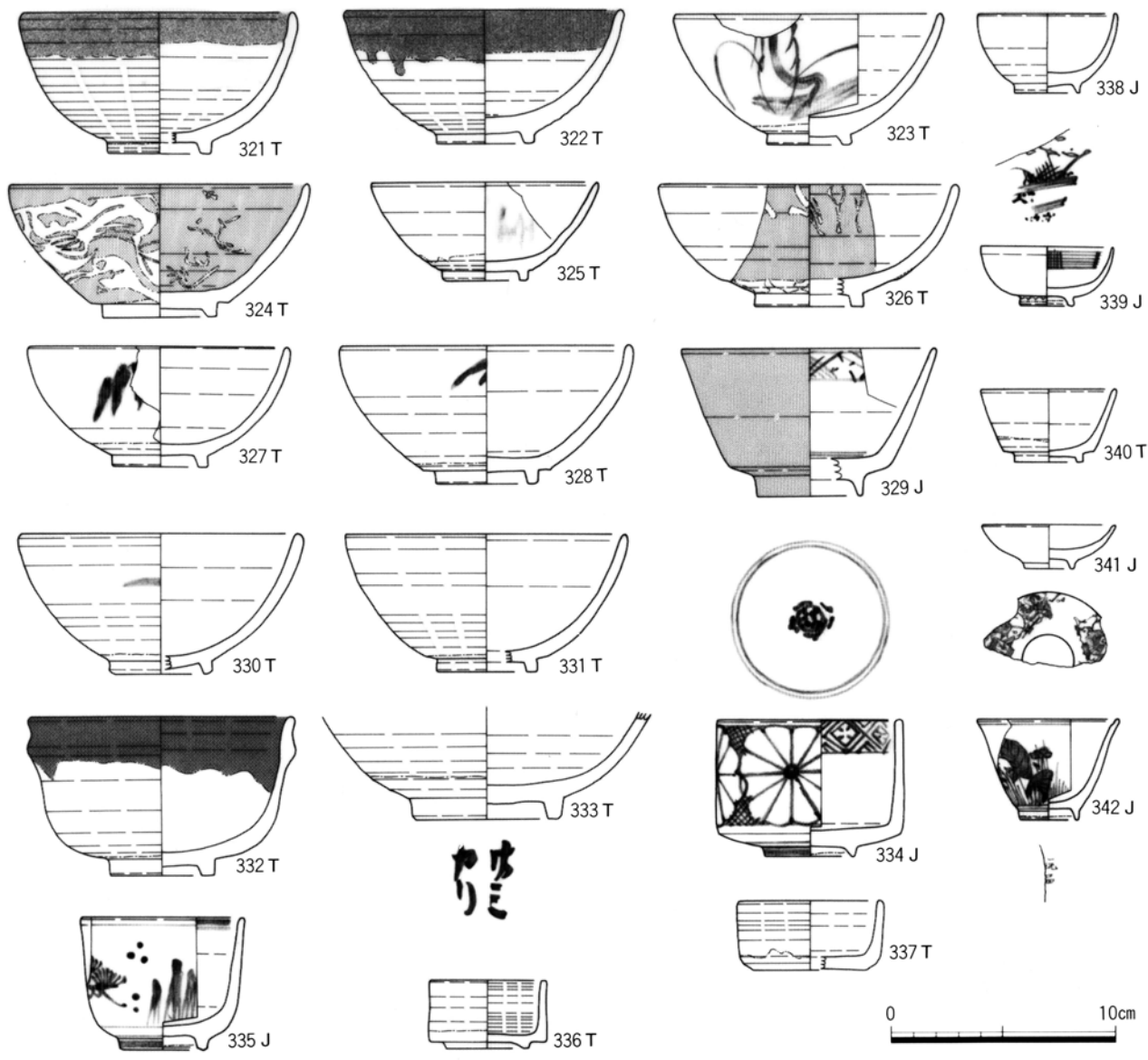
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀	291	268			559	467	292			759	1443	575		2	2020
	小椀	33	64	0	0	97	30	57	1	88	68	489	1		558	
	皿	94	276	103	0	473	38	320	85	1	444	220	585	154	2	961
	鉢		120	38	7	165		83	14	6	103		272	35	16	323
	その他					0					0		1			1
	小計	94	720	473	7	1294	38	900	448	8	1394	220	2369	1253	21	3863
調理具	鍋・釜	53	23		3	79	385	24		8	417	1374	115		20	1509
	鉢		56			56		90			90		234			234
	搗鉢		76			76		340			340		691			691
	瓶		26			26		17			17		54			54
	その他		5			5		3			3		12	1		13
	小計	53	186	0	3	242	385	474	0	8	867	1374	1106	1	20	2501
貯蔵具	瓶		97			97		14			14		342	2		344
	壺		22			22		13			13	1	90			91
	甕A		58			58		201			201		2729			2729
	甕B		46			46		97			97		410			410
	鉢		11	19		30		11	5		16		27	9		36
	その他		2	0		2		7	1		8		11	1		12
	小計	0	236	19	0	255	0	343	6	0	349	1	3609	12	0	3622
灯火具		5	63	14		82	2	26	1		29	13	53	2		68
火具		30	37	0		67	42	45	1		88	73	194	1	1	269
化粧具			2	8		10		4	1		5		10	4		14
神仏具			15	4		19		17	7		24		43	28		71
喫煙具		0	2			2	1	9			10	1	19	4		24
調度具		7	47	13		67	3	60	6		69	11	151	15		177
蓋		9	108	18		135	9	41	14		64	9	63	20		92
合計		198	1416	549	10	2173	480	1919	484	16	2899	1702	7617	1340	42	10701

第24表 整地層出土陶磁器類集計表



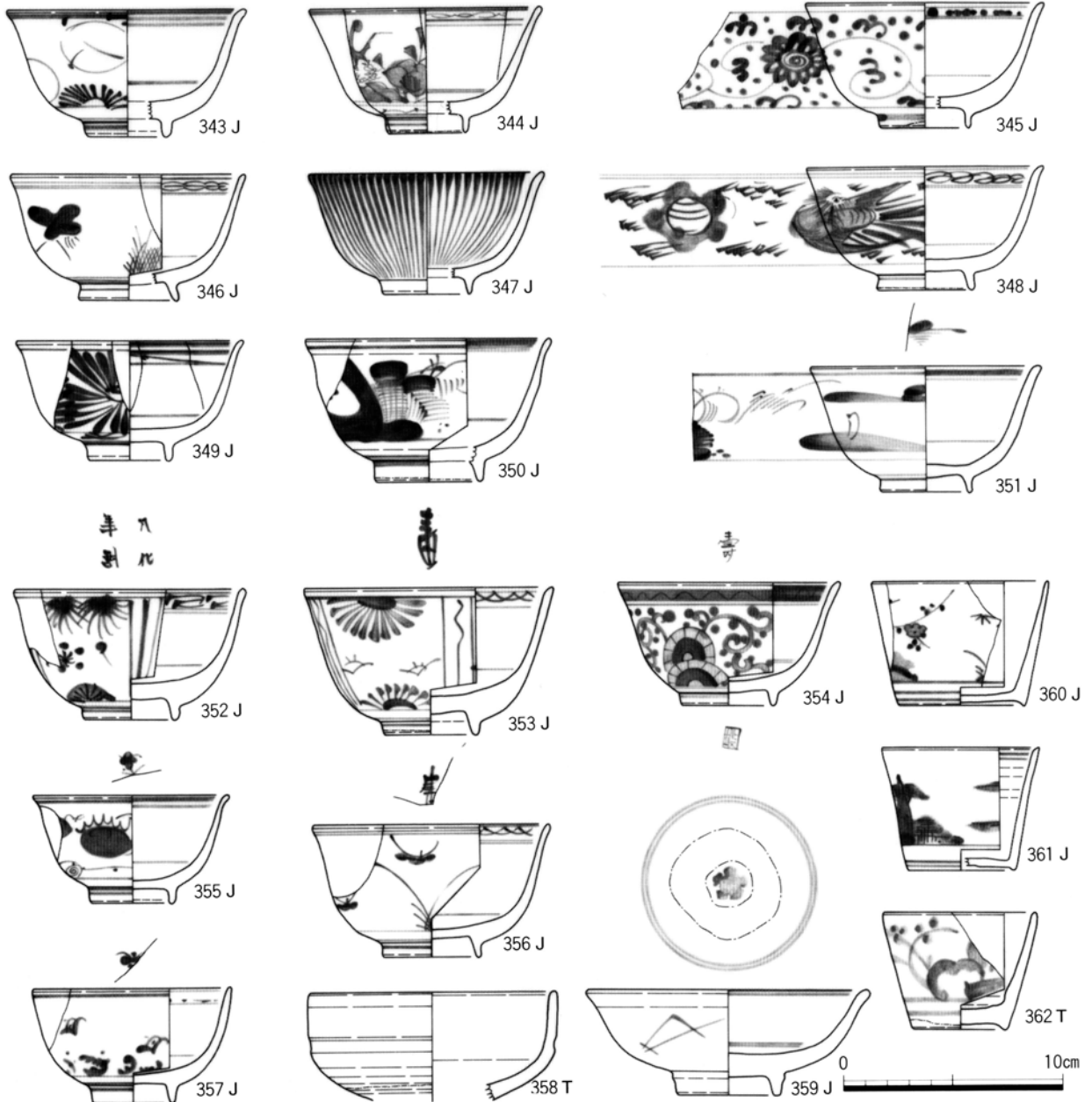
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
301	92B2	整地層	供膳具	椀	丸椀	7.5	11.0	—	5.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部灰釉, 高台鉄化粧	E-336
302	〃	〃	〃	〃	〃	6.3	10.7	—	4.9	〃	〃	〃	灰釉流し掛け	E-337
303	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	9.8	—	4.7	灰釉	灰釉	〃	〃	E-338
304	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.1	〃	〃	関西か	高台内に押印	E-339
305	91D2	〃	〃	〃	〃	6.2	10.0	—	3.8	〃	〃	瀬・美	〃	E-340
306	92B2	〃	〃	〃	〃	6.4	11.0	—	4.3	〃	〃	〃	呉須絵, 菊花散し文か	E-341
307	91D2	〃	〃	〃	〃	—	—	—	3.9	白泥+透明釉	白泥+透明釉	関西	鉄絵, 梅花文	E-342
308	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.0	—	—	肥前	染付, 草花文, 18世紀後半	E-343
309	〃	〃	〃	〃	筒椀	6.4	8.5	—	4.1	鉄釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	鎧茶椀, 高台にトチン痕	E-344
310	〃	〃	〃	〃	丸椀	5.6	8.9	—	3.0	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-345
311	〃	〃	〃	〃	〃	5.2	9.8	—	4.5	—	—	肥前	染付, 岩に梅花文, 18世紀後半	E-346
312	〃	〃	〃	〃	〃	4.3	10.8	—	4.5	—	—	〃	染付, 海老文か, 見込み蛇ノ目軸刺ぎ, 高台 跡蔵書, 18世紀中一葉	E-347
313	〃	〃	〃	〃	〃	4.5	11.1	—	3.8	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-348
314	〃	〃	〃	〃	広東椀	6.7	11.4	—	5.6	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印), 梅花文	E-349
315	〃	〃	〃	〃	〃	6.0	10.7	—	5.8	—	—	〃	染付, 山水文か, 19世紀前半	E-350
316	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	10.0	—	5.5	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印), 山水文, 雲に飛鳥文	E-351
317	92B2	〃	〃	〃	〃	6.6	11.1	—	5.8	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印), 花文	E-352
318	91D2	〃	〃	〃	〃	6.2	11.4	—	5.7	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印), 竹笹文	E-353
319	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	11.1	—	5.4	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印), 梅花文	E-354
320	〃	〃	〃	〃	小椀	6.4	7.2	—	4.8	長石釉	長石釉	〃	鉄絵, 口化粧	E-355

第75図 近世の遺物(28) 整地層①(1:3)



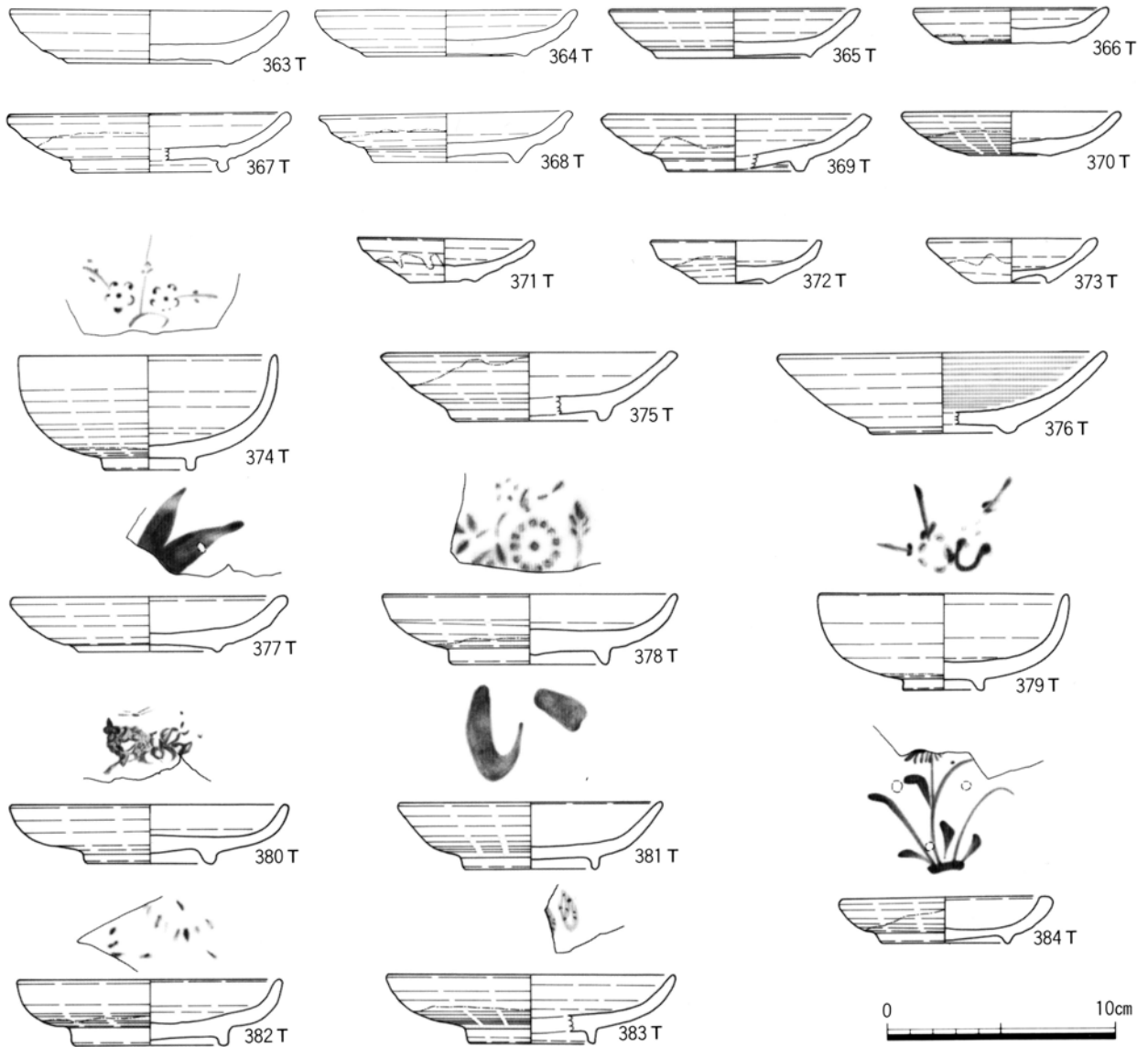
遺物 番号	調査地点 調査区	器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登録 番号	
		遺構	用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面				外 面
321	91D2	整地層	供膳具	椀	平椀	6.3	11.8	—	4.5	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄釉流し掛け	E-356
322	〃	〃	〃	〃	〃	6.0	12.0	—	4.2	鉄釉	鉄釉	〃	鉛釉流し掛け, 口縁部に重ね焼きの剥離痕	E-357
323	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	11.7	—	3.8	透明釉	透明釉	〃	鉄絵, 柳文	E-358
324	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	13.0	—	5.0	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	刷毛目文	E-359
325	92B2	〃	〃	〃	〃	5.3	9.9	—	3.5	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	E-360
326	91D2	〃	〃	〃	〃	5.4	12.8	—	4.7	白泥+灰釉	白泥+灰釉	〃	刷毛目文	E-361
327	92B2	〃	〃	〃	〃	5.3	11.3	—	4.1	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 笹文	E-362
328	91D2	〃	〃	〃	〃	6.1	12.6	—	4.4	〃	〃	〃	呉須絵, 笹文	E-363
329	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	11.1	—	4.6	—	青磁	肥前	青磁染付, 割小菱, 高台畳付部分に砂付着, 18世紀後半	E-364
330	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	12.1	—	3.8	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 笹文	E-365
331	〃	〃	〃	〃	〃	6.1	12.2	—	4.4	〃	〃	〃	〃	E-366
332	〃	〃	〃	〃	その他	7.0	11.3	—	4.5	鉄釉	鉄釉	〃	うのふ釉流し掛け	E-367
333	〃	〃	〃	〃	丸椀	—	—	—	6.2	〃	〃	〃	見込みにトチン痕, 墨書「ホミカリ」	E-368
334	〃	〃	〃	小椀	筒椀	6.0	7.9	—	4.0	—	—	肥前	染付, 割小菱・見込み五弁花(手書き)・ 菊花散じ文, 1780~1810	E-369
335	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	7.1	—	3.7	—	—	瀬・美	染付, 松竹梅文, 1820~1860	E-370
336	92B2	〃	〃	〃	〃	3.0	5.0	—	3.6	透明釉	透明釉	〃	〃	E-371
337	〃	〃	調度具	餌鉢	餌鉢	3.0	6.2	—	5.0	長石釉	長石釉	〃	〃	E-372
338	91D2	〃	供膳具	小椀	丸椀	3.6	6.2	—	2.9	白磁	白磁	肥前	白磁, 高台砂融着, 17世紀末~18世紀前半	E-373
339	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	5.9	—	2.4	—	—	瀬・美	上絵付(青絵), 草花文か?	E-374
340	〃	〃	〃	〃	平椀	3.2	6.0	—	3.1	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-375
341	92B2	〃	〃	〃	〃	1.9	5.8	—	2.1	—	—	〃	染付(プリント), 七福神か	E-376
342	91D2	〃	〃	〃	端反椀	4.4	6.2	—	2.5	—	—	〃	染付, 蓮花に鶴文	E-377

第76図 近世の遺物 (29) 整地層② (1:3)



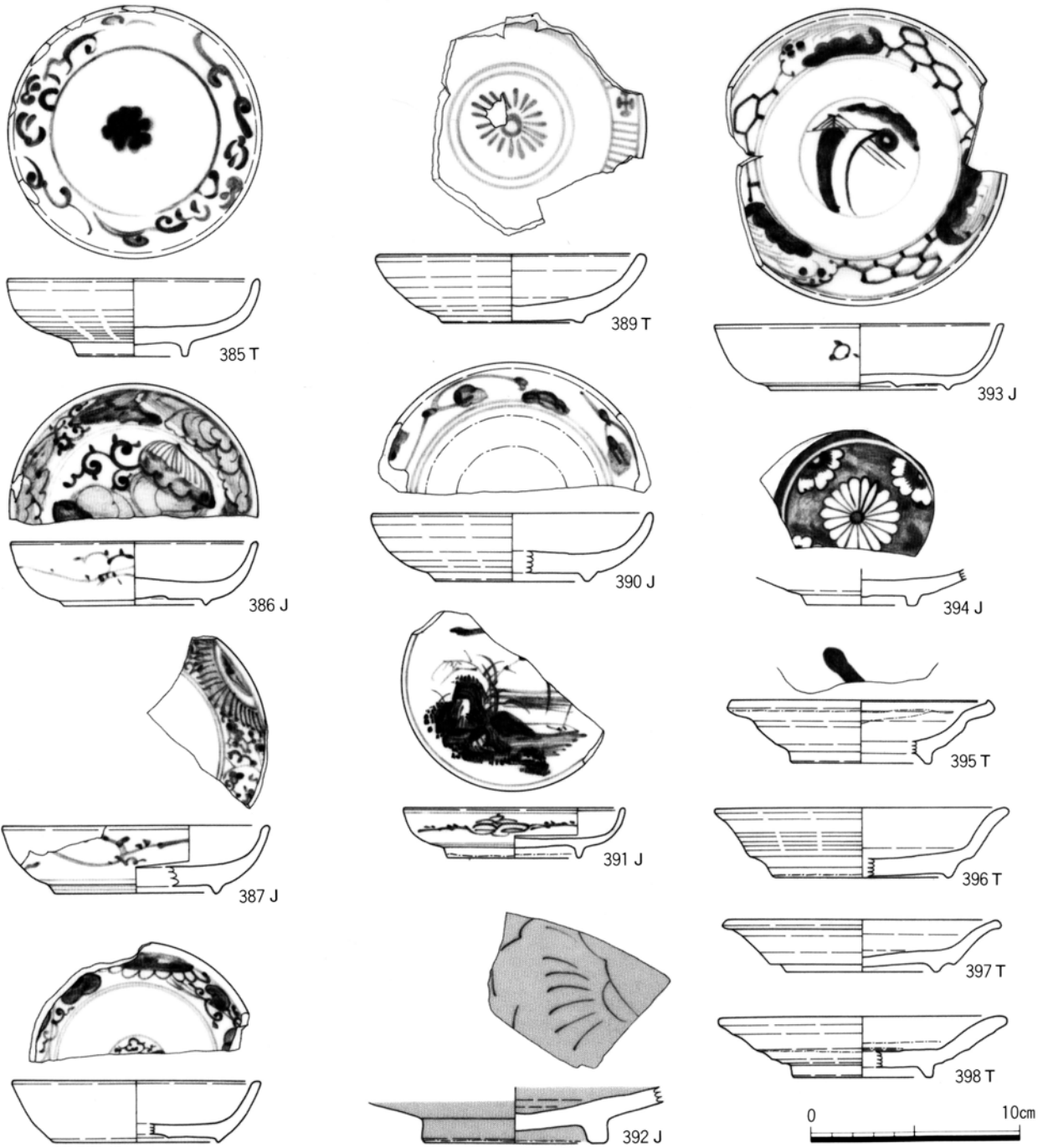
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	種 器種	形 器形	法 量 (cm)			釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号		
					器高	口径	胴径	底径	内 面				外 面	
343	91D2	整地層	供膳具	椀	端反椀	5.8	10.7	—	3.4	—	—	瀬・美	染付, 花文・丸文	E-378
344	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.4	—	3.4	—	—	〃	陶胎染付?, 草花文・唐草文	E-379
345	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.8	—	4.0	—	—	〃	染付, 花唐草文	E-380
346	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	10.5	—	4.4	—	—	〃	染付, 草文・蝶文	E-381
347	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	10.5	—	3.8	—	—	〃	染付, 麦藁手, 焼き継ぎ痕	E-382
348	〃	〃	〃	〃	〃	5.6	10.7	—	4.4	—	—	九谷か	染付, 宝珠・鳳凰文, 見込みに「壽」	E-383
349	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	10.2	—	3.7	—	—	瀬・美	染付, 花文, 見込みに変形文字	E-384
350	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	11.0	—	4.8	—	—	〃	染付, 山水文	E-385
351	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.4	—	4.0	—	—	〃	染付, 草花文, 岩に波濤文	E-386
352	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	10.2	—	4.1	—	—	肥前か	染付, 松竹梅文・見込みに「大化年製」	E-387
353	〃	〃	〃	〃	〃	6.6	11.2	—	4.2	—	—	瀬・美	染付, 菊花・草花文・見込み寿	E-388
354	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	9.9	—	4.2	—	—	〃	染付, 唐草文?, 見込みに「壽」	E-389
355	〃	〃	〃	〃	〃	4.9	8.7	—	3.7	—	—	〃	染付, 宝珠文・草花文	E-390
356	〃	〃	〃	〃	〃	6.1	10.6	—	4.4	—	—	〃	染付, 草文・蝶文・見込みに変形寿	E-391
357	〃	〃	〃	〃	丸椀	5.2	8.9	—	3.8	—	—	〃	染付	E-392
358	〃	〃	〃	〃	腰折椀	—	11.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	〃	E-393
359	〃	〃	〃	〃	端反椀	4.8	12.6	—	4.6	—	—	肥前	染付, 五弁花(コシニヤク印)・折桂松葉, 見込み蛇ノ目細刺さ, 高台彫刺, 18世紀後半	E-394
360	〃	〃	〃	小椀	そば猪口	5.6	8.0	—	5.8	—	—	〃	染付, 松竹梅文, 18世紀前半~中	E-395
361	〃	〃	〃	〃	〃	5.6	7.1	—	4.8	—	—	肥前系	染付, 山水文, 蛇ノ目凹形高台	E-396
362	〃	〃	〃	〃	〃	5.3	6.8	—	4.2	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 岩に梅樹文	E-397

第77図 近世の遺物 (30) 整地層③ (1:3)



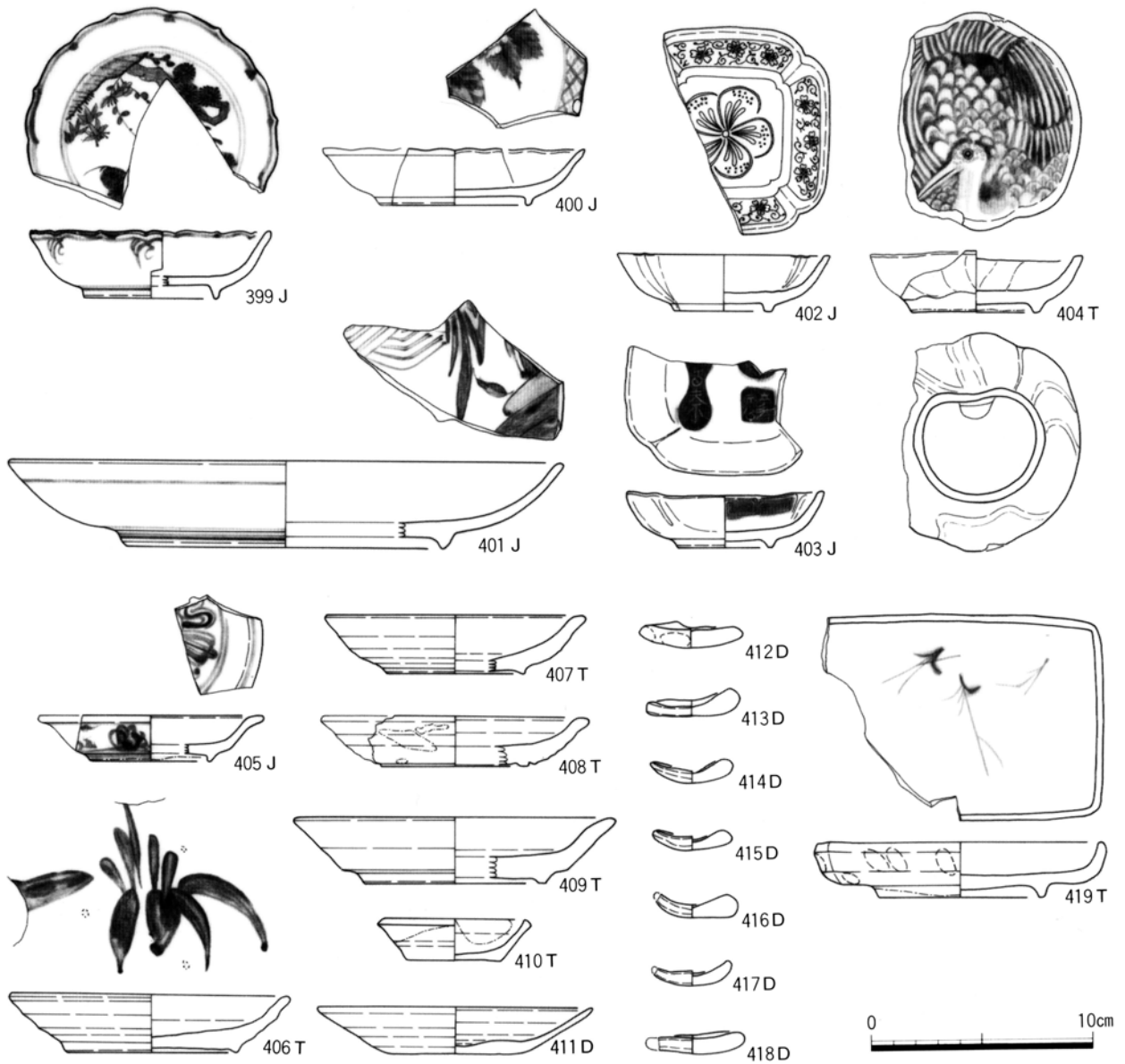
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
363	91D2	整地層	供膳具	皿	丸皿	2.4	12.0	—	7.2	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台内部にトチン痕	E-398
364	92B2	〃	〃	〃	〃	2.1	11.1	—	7.0	〃	〃	〃	高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕	E-399
365	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	10.6	—	6.6	灰釉	灰釉	〃	見込みと高台内にトチン痕、重ね焼きの剝離痕	E-400
366	〃	〃	〃	〃	〃	1.6	9.4	—	5.1	長石釉	長石釉	〃	〃	E-401
367	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	12.2	—	6.3	灰釉	灰釉	〃	見込み・高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕 (径約2.6cm)	E-402
368	91D2	〃	〃	〃	〃	2.1	10.3	—	6.2	〃	〃	〃	見込み・高台部分に重ね焼きの剝離痕 (径約6.2cm)	E-403
369	92B2	〃	〃	〃	〃	2.5	11.2	—	5.8	〃	〃	〃	見込み・高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕 (径約6.2cm)	E-404
370	91D2	〃	〃	〃	〃	1.9	9.4	—	3.7	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-405
371	〃	〃	〃	〃	〃	1.9	7.6	—	2.8	〃	〃	〃	高台部分に重ね焼きの剝離痕	E-406
372	〃	〃	〃	〃	〃	1.9	7.3	—	3.1	〃	〃	〃	碁笥底	E-407
373	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	7.2	—	3.3	〃	〃	〃	碁笥底	E-408
374	〃	〃	〃	〃	〃	5.0	11.1	—	4.0	〃	〃	〃	呉須絵・鉄絵、梅樹文	E-409
375	〃	〃	〃	〃	〃	3.0	12.4	—	6.3	〃	〃	〃	見込み・高台部分に重ね焼きの剝離痕	E-410
376	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	14.1	—	6.1	白泥+灰釉	〃	〃	刷毛目文、見込みにトチン痕	E-411
377	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	11.7	—	6.2	長石釉	長石釉	〃	鉄絵・紫文、見込み・高台内にトチン痕、高台畳付部分に剝離痕	E-412
378	〃	〃	〃	〃	〃	3.1	12.7	—	6.6	灰釉	灰釉	〃	鉄絵・摺絵、草花文、見込み・高台部分にトチン痕	E-413
379	〃	〃	〃	〃	〃	4.2	10.8	—	3.5	〃	〃	〃	呉須絵・鉄絵、梅樹文	E-414
380	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	11.9	—	5.4	〃	〃	〃	呉須絵	E-415
381	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.3	—	5.7	〃	〃	〃	呉須絵、「い」	E-416
382	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.3	—	6.4	〃	〃	〃	鉄絵・摺絵、梅花文か	E-417
383	92B2	〃	〃	〃	〃	3.0	12.4	—	5.4	〃	〃	〃	鉄絵	E-418
384	91D2	〃	〃	〃	〃	2.0	8.9	—	5.5	〃	〃	〃	呉須絵、草花文	E-419

第78図 近世の遺物 (31) 整地層④ (1:3)



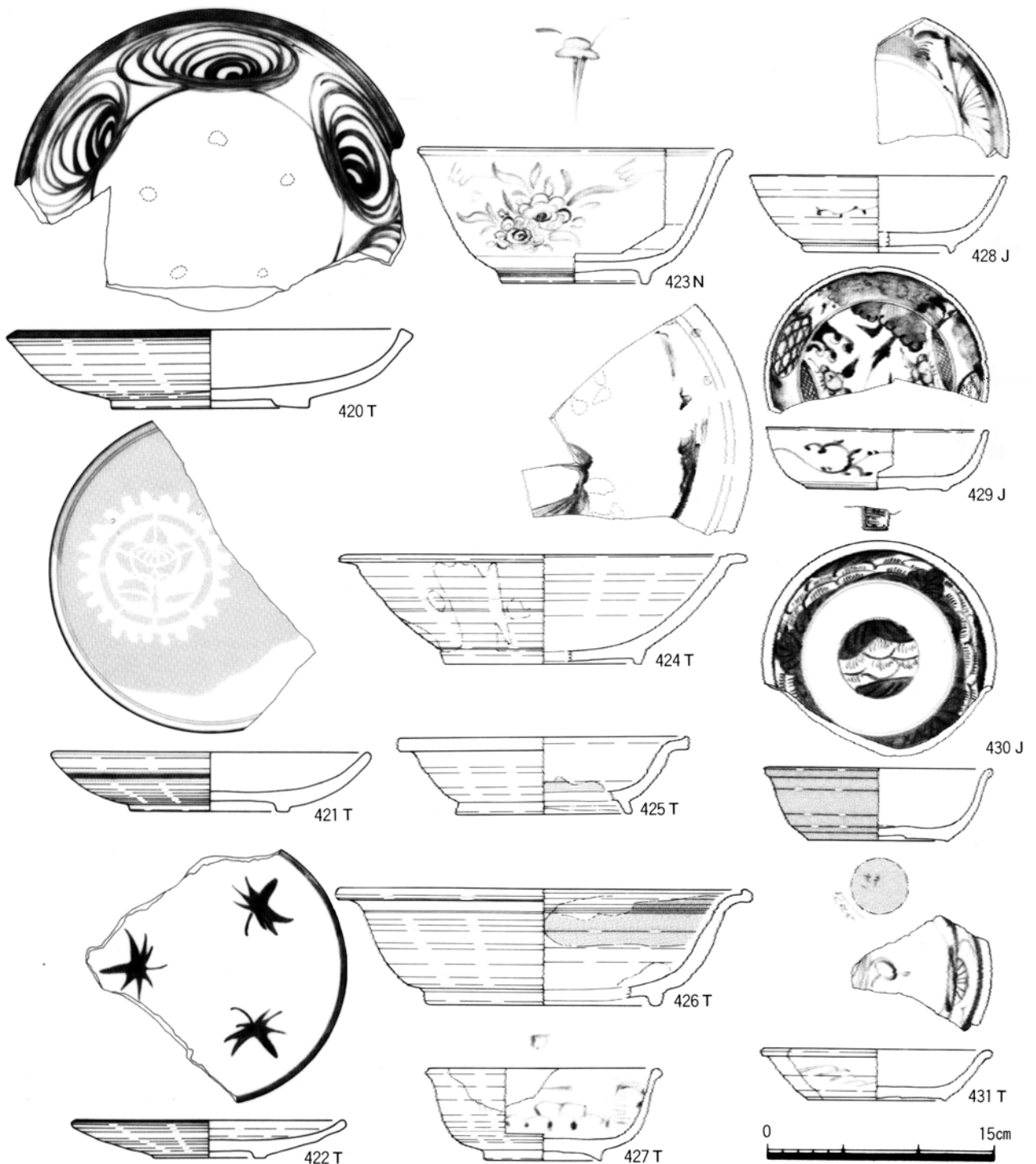
遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉葉・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
385	91D2	整地層	灯火具	皿	灯明皿	3.7	11.8	—	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 唐草文, 口縁部油煙付着	E-420
386	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	3.1	11.7	—	6.7	—	—	肥前か	染付, 牡丹唐草文, 蛇ノ目凹形高台, 19世紀代	E-421
387	〃	〃	〃	〃	〃	3.2	12.4	—	7.7	—	—	肥前	染付, 牡丹唐草文・唐草文・高台内に一重圓線・ 淺継ぎ痕(断面に淺付着), 18世紀中～末	E-422
388	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.7	—	7.8	—	—	瀬・美	染付, 蛇ノ目凹形高台, 19世紀中	E-423
389	92B2	〃	〃	〃	〃	3.3	12.5	—	6.5	灰釉	灰釉	〃	鉄絵	E-424
390	91D2	〃	〃	〃	〃	3.3	13.2	—	7.3	—	—	肥前	染付, 草花文, 見込み蛇ノ目軸刺ぎ, 18世紀 後半	E-425
391	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	10.5	—	6.3	—	—	瀬・美	染付, 山水文・花唐草文, 19世紀前半	E-426
392	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	8.5	青磁	青磁	肥前	青磁大皿, 陰刻, 1630~1640	E-427
393	〃	〃	〃	〃	〃	3.2	13.7	—	8.4	—	—	肥前系	染付, 山水文か, 蛇ノ目凹形高台, 19世紀代	E-428
394	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.1	—	—	肥前	染付, 菊花文, 高台砂融着, 1610~1630	E-429
395	92B2	〃	〃	〃	折縁皿	3.0	12.3	—	6.6	灰釉	指ナデ	瀬・美	鉄絵	E-430
396	91D2	〃	〃	〃	稜皿	3.3	13.8	—	8.2	〃	灰釉	〃	見込みにトチン痕	E-431
397	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	12.8	—	7.2	〃	〃	〃	見込み・高台内部にトチン痕	E-432
398	〃	〃	〃	〃	丸皿	2.9	13.1	—	6.5	〃	〃	〃	輪禿皿, 見込みに重ね焼きの剝離痕	E-433

第79図 近世の遺物 (32) 整地層⑤ (1:3)



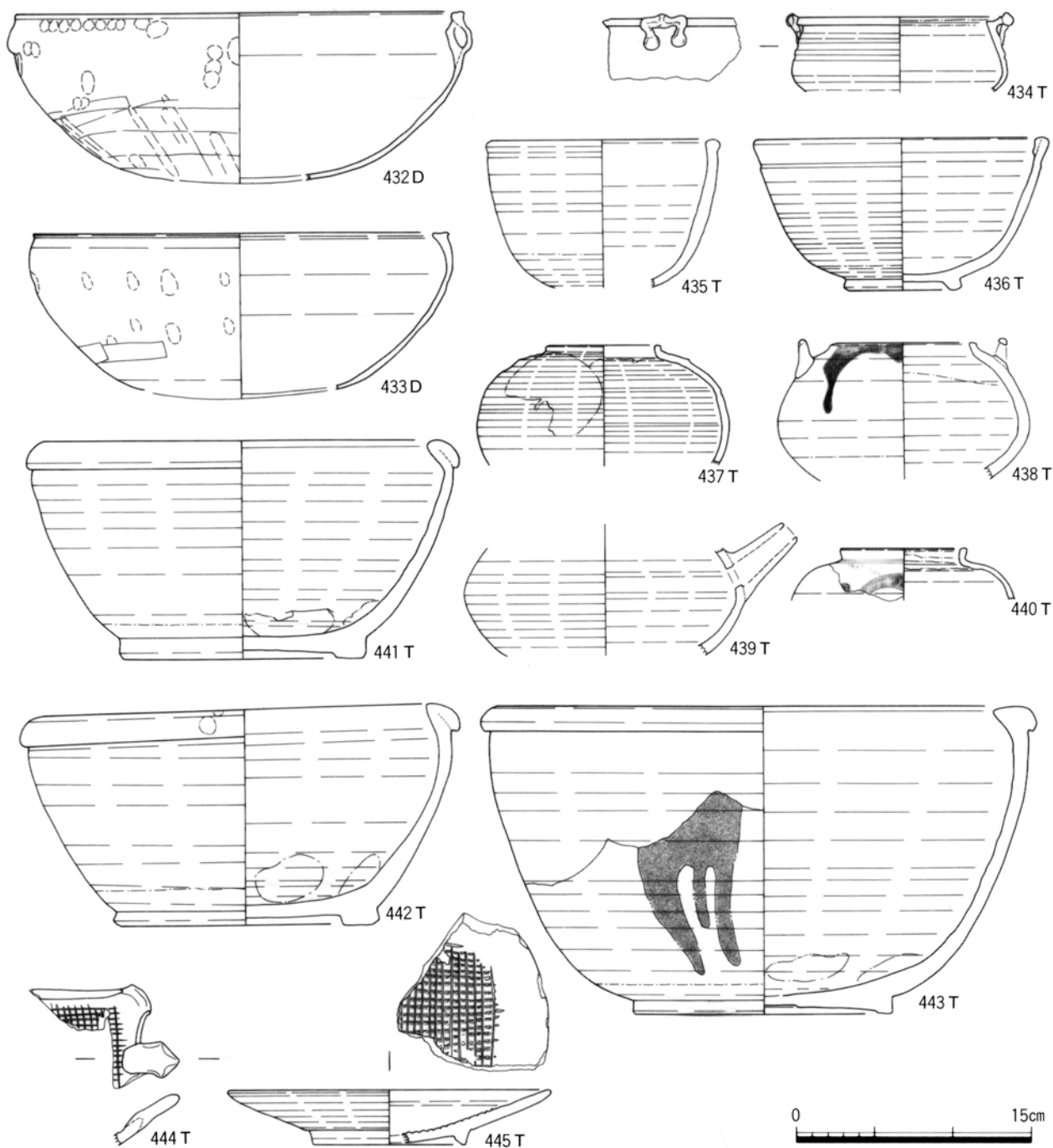
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
399	91D2	整地層	供膳具	皿	型打皿	3.0	10.5	—	5.9	—	—	瀬・美	染付, 松竹梅文, 口化粧, 19世紀前半	E-434
400	92B2	〃	〃	〃	ひだ・稜花皿	2.5	11.6	—	6.5	—	—	〃	染付	E-435
401	〃	〃	〃	〃	丸皿	3.9	24.4	—	14.1	—	—	肥前	染付	E-436
402	91D2	〃	〃	〃	型打皿	—	—	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	ねじ梅文	E-437
403	92B2	〃	〃	〃	〃	2.3	8.6	—	4.2	—	—	肥前	染付	E-438
404	91D2	〃	〃	〃	〃	2.6	—	—	5.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	鶴文, 付高台	E-439
405	92B2	〃	〃	〃	端反皿	2.1	9.8	—	5.3	—	—	肥前	染付	E-440
406	91D2	〃	〃	〃	丸皿	2.6	12.2	—	7.5	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵・笹文, 見込み・高台内にトチン痕	E-441
407	92B2	〃	〃	〃	〃	2.7	11.4	—	6.0	灰釉	灰釉	〃	〃	E-442
408	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	11.3	—	6.5	長石釉	長石釉	〃	高台豊付部分に重ね焼きの剝離痕	E-443
409	91D2	〃	〃	〃	稜皿	3.0	14.0	—	8.0	灰釉	灰釉	〃	見込み・高台にトチン痕	E-444
410	〃	〃	〃	〃	その他	1.8	6.3	—	4.2	〃	〃	〃	底部回転糸切痕	E-445
411	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	12.0	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形, 底部回転糸切痕	E-446
412	92B2	〃	〃	〃	〃	1.2	5.0	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-447
413	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	3.8	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-448
414	〃	〃	〃	〃	〃	0.6	3.3	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-449
415	〃	〃	〃	〃	〃	0.9	3.1	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-450
416	〃	〃	〃	〃	〃	1.1	3.1	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-451
417	91D2	〃	〃	〃	〃	1.1	3.7	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-452
418	92B2	〃	〃	〃	〃	1.0	—	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-453
419	91D2	〃	〃	〃	型打皿	2.5	—	—	7.2	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 折れ松葉文, 長径12.6cm, 短径9.1cm	E-454

第80図 近世の遺物 (33) 整地層⑥ (1:3)



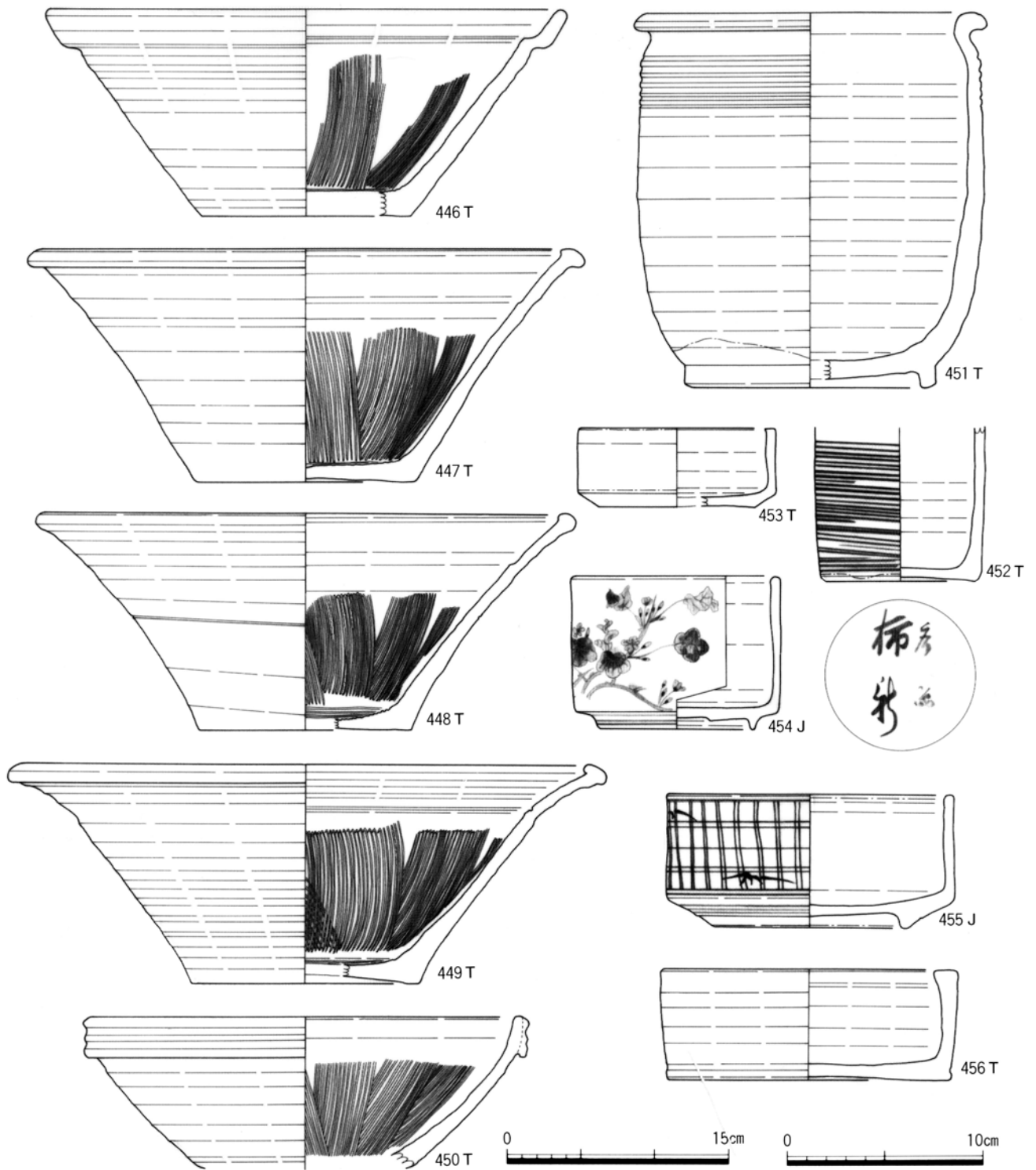
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
420	91D2	整地層	供膳具	皿	丸皿	5.2	25.4	—	13.0	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵、馬の目文、見込みにトチン痕	E-455
421	〃	〃	〃	〃	〃	4.0	20.7	—	10.3	灰釉	灰釉	〃	鉄絵、吹き墨、橘文か	E-456
422	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	17.7	—	7.4	長石釉	長石釉	〃	呉須絵、楓文か	E-457
423	〃	〃	〃	鉢	端反鉢	9.0	20.3	—	9.7	〃	〃	〃	鉄絵・呉須絵、牡丹文か	E-458
424	〃	〃	〃	〃	折縁鉢	7.2	25.8	—	12.9	灰釉	灰釉	〃	鉄絵・黍文、緑釉筆散し、笠原鉢	E-459
425	〃	〃	〃	〃	端反鉢	5.1	18.8	—	11.4	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、見込みにトチン痕	E-460
426	〃	〃	〃	〃	〃	7.7	26.8	—	15.0	〃	〃	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、口縁部に剝離痕	E-461
427	〃	〃	〃	〃	その他	6.1	15.0	—	7.5	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、亀甲文・梅樹文・源氏香文、19世紀中	E-462
428	〃	〃	〃	〃	丸鉢	5.1	16.8	—	9.8	—	—	肥前系	塗付、草花文か・唐草文、焼き継ぎ痕、18世紀後半～19世紀初	E-463
429	〃	〃	〃	皿	丸皿	4.0	14.6	—	9.2	—	—	肥前	塗付、蛇籠・牡丹・波文、唐草文、蛇ノ目凹形高台、口縁部に切り込み痕、18世紀後半	E-464
430	〃	〃	〃	鉢	その他	4.8	15.1	—	9.2	—	青磁	〃	青磁塗付、花卉文、蛇ノ目凹形高台、焼き継ぎ痕、18世紀後半	E-465
431	〃	〃	〃	皿	その他	3.4	14.9	—	9.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、蛇ノ目凹形高台、19世紀前半	E-466

第81図 近世の遺物 (34) 整地層⑦ (1:4)



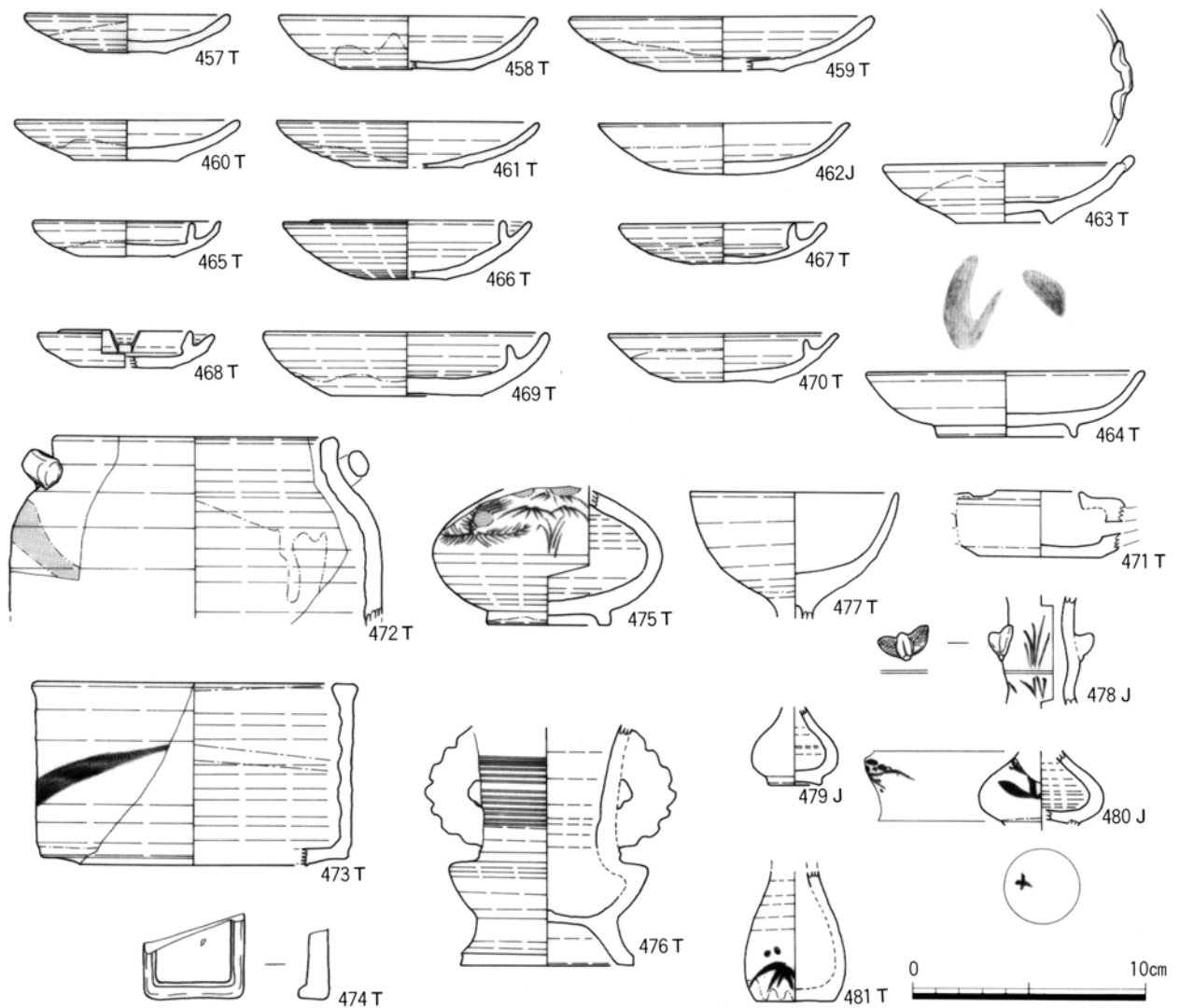
遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
432	92B2	整地層	調理具	鍋, 釜	内耳鍋	-	28.5	-	-	横ハケ	指押え・ナデ	不明	外面に煤付着	E-467
433	〃	〃	〃	〃	〃	-	26.4	-	-	〃	指押え・ナデ	〃	外面に煤付着	E-468
434	91D2	〃	〃	鍋	片口	-	12.9	-	-	灰釉	灰釉	瀬・美	胎部に煤付着	E-469
435	92B2	〃	〃	鉢	片口	-	14.1	-	-	〃	〃	〃	〃	E-470
436	91D2	〃	〃	〃	〃	9.7	18.2	-	6.9	〃	〃	〃	〃	E-471
437	〃	〃	〃	瓶	土瓶	-	7.0	16.0	-	透明釉	鉄化粧+透明釉	〃	白泥	E-472
438	〃	〃	〃	〃	〃	-	8.7	16.2	-	灰釉	灰釉	〃	底部に煤付着	E-473
439	〃	〃	〃	〃	〃	-	-	18.0	-	ナデ	鉄釉	〃	〃	E-474
440	〃	〃	〃	〃	〃	-	8.0	-	-	透明釉	白泥+透明釉	〃	呉須絵	E-475
441	〃	〃	〃	鉢	捏ね鉢	13.9	25.2	-	15.2	灰釉	灰釉	〃	見込みに釉刺ぎ(5カ所)	E-476
442	〃	〃	〃	〃	〃	13.9	24.0	-	16.1	〃	〃	〃	見込みに釉刺ぎ(5カ所), 見込みと口縁部にナデ, 緑釉筆致し	E-477
443	〃	〃	〃	〃	〃	19.6	33.0	-	16.3	〃	〃	〃	鉄釉流し掛け, 見込みに釉刺ぎ, 底部に剥離痕	E-478
444	〃	〃	〃	その他	卸皿	-	-	-	-	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-479
445	92B2	〃	〃	〃	〃	3.5	20.1	-	9.6	〃	〃	〃	内側に煤付着	E-480

第82図 近世の遺物 (35) 整地層⑧ (1:4)



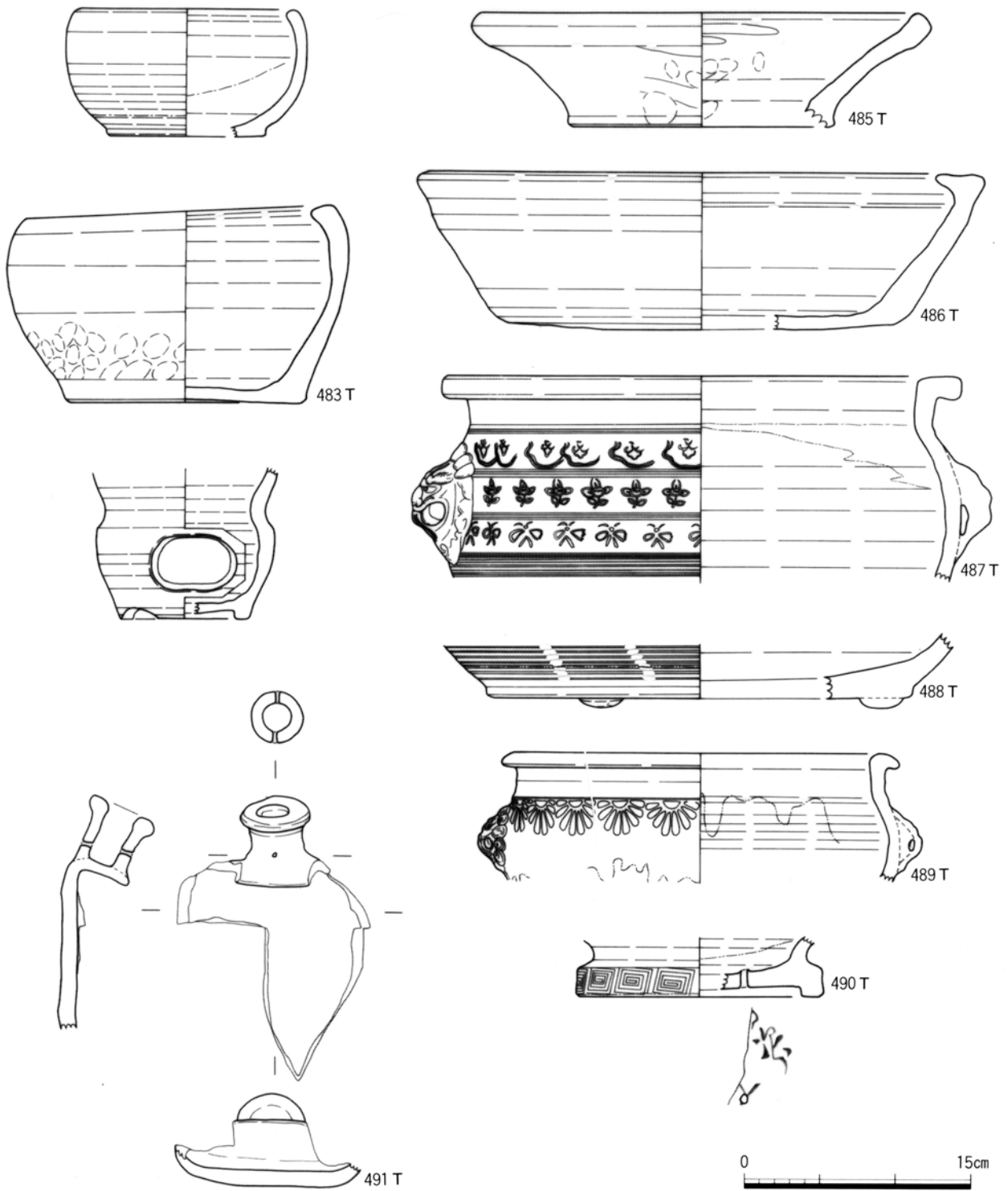
遺物 番号	調査地点 調査区	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面				
446	91D2	整地層	調理具	搦鉢	Ⅵ類	14.0	34.6	—	14.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数17本, 1cmに4本, 底部回転糸切痕	E-481
447	〃	〃	〃	〃	Ⅶ類	15.7	35.8	—	14.5	〃	〃	〃	櫛目数21本, 1cmに4本, 底部にトチン痕	E-482
448	〃	〃	〃	〃	〃	14.6	35.5	—	14.3	〃	〃	〃	櫛目数23本, 1cmに5本	E-483
449	〃	〃	〃	〃	〃	14.9	38.2	—	15.2	〃	〃	〃	櫛目数26本, 1cmに4本, 底部にトチン痕	E-484
450	〃	〃	〃	〃	〃	—	21.8	—	—	〃	〃	〃	櫛目数14本, 1cmに4本	E-485
451	〃	〃	貯蔵具	甕B	甕	19.1	16.6	17.6	12.0	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-486
452	〃	〃	〃	瓶	德利E	—	—	8.6	7.6	灰釉	白泥+灰釉	〃	白泥による刷毛目, 墨書, 底部に重ね焼きの 別離痕	E-487
453	〃	〃	〃	鉢	蓋物A	4.0	9.9	—	7.9	〃	灰釉	〃	〃	E-488
454	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	10.2	—	7.7	—	—	肥前	染付, 草花文, 蛇ノ目凹形高台	E-489
455	〃	〃	〃	〃	〃	7.0	14.3	—	9.6	—	—	肥前系	染付, 二重格子に莨文, 口縁部釉剥ぎ, 19世 紀前半	E-490
456	〃	〃	〃	〃	その他	5.7	14.6	—	14.1	鉄釉	—	常滑か	〃	E-491

第83図 近世の遺物 (36) 整地層⑨ (446~450は1:4, 他は1:3)



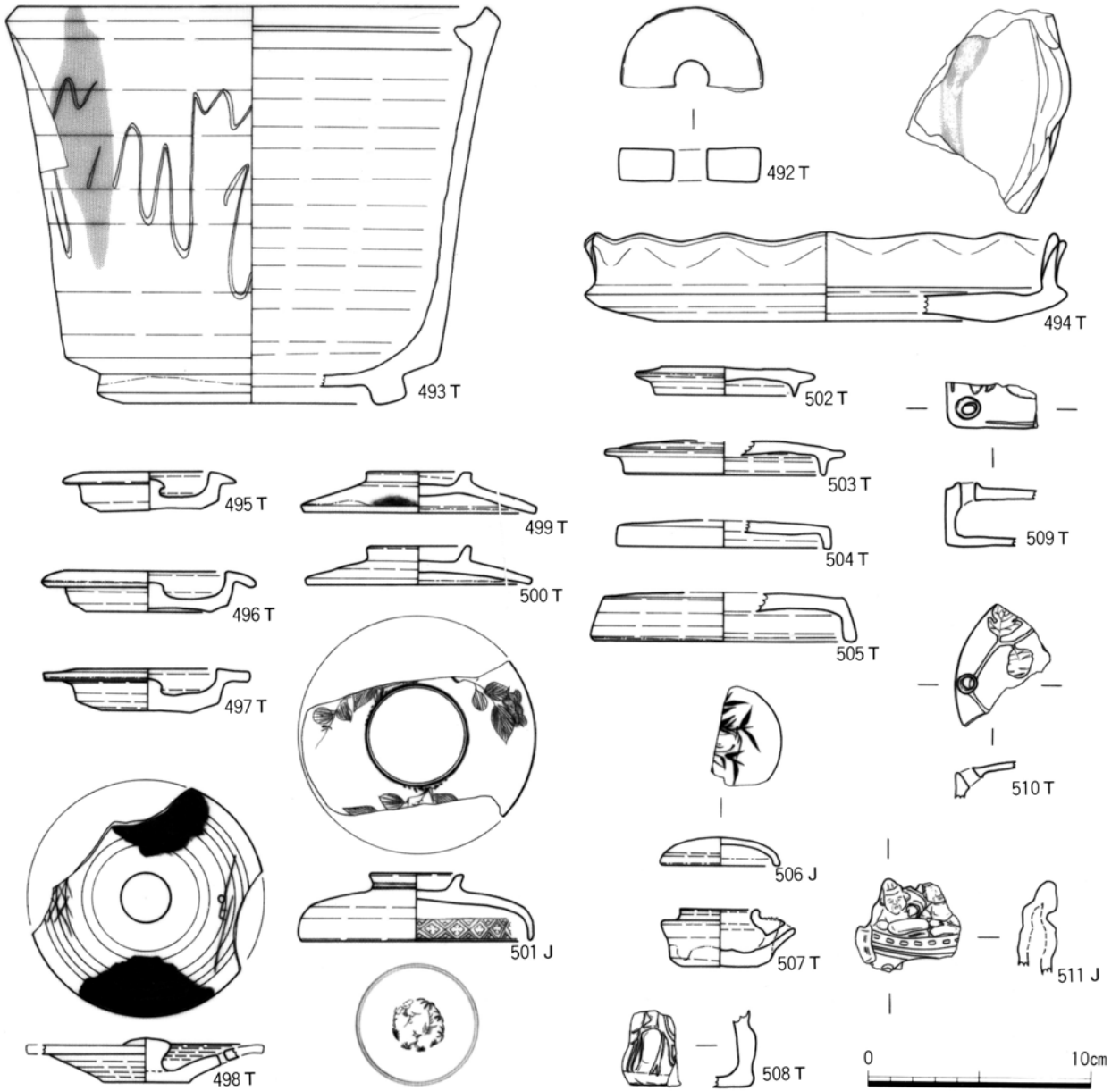
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
457	91D2	整地層	灯火具	皿	灯明皿	1.6	8.6	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美		E-492
458	92B2	〃	〃	〃	〃	2.3	10.8	—	5.5	鉄釉	鉄釉	〃	見込み部分に重ね焼きの剝離痕 (径約4.0cm)	E-493
459	91D2	〃	〃	〃	〃	2.3	12.8	—	5.2	〃	〃	〃	見込み・胎部に重ね焼きの剝離痕 (径約5.2cm)	E-494
460	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	9.4	—	4.6	〃	〃	〃	見込み重ね焼きの剝離痕 (径約3.8cm)	E-495
461	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	11.1	—	4.7	灰釉	灰釉	〃	見込みに重ね焼きの剝離痕	E-496
462	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	10.7	—	2.8	白磁	白磁	肥前系		E-497
463	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.2	—	4.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-498
464	〃	〃	〃	〃	〃	2.8	11.8	—	5.8	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 「い」, 口縁部に油煙付着	E-499
465	〃	〃	〃	〃	灯蓋	1.5	8.0	—	4.0	鉄釉	鉄釉	〃		E-500
466	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.5	—	3.4	〃	ケズリ	〃	口縁部・胎部に重ね焼きの剝離痕 (径約8.1cm)	E-501
467	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	8.6	—	2.8	〃	鉄釉	〃	胎部に重ね焼きの剝離痕 (径約5.9cm)	E-502
468	92B2	〃	〃	〃	〃	1.6	7.5	—	4.0	〃	〃	〃	内口径5.5cm, 見込み部分に採付着, 外側胎部に重ね焼きの剝離痕 (径5.5cm)	E-503
469	91D2	〃	〃	〃	〃	2.8	11.9	—	6.4	〃	〃	〃	胎部に重ね焼きの剝離痕 (径約9.0cm)	E-504
470	92B2	〃	〃	〃	〃	2.1	9.7	—	4.1	〃	〃	〃	内外側の胎部に重ね焼きの剝離痕 (同じ灯明皿の重ね焼きか)	E-505
471	91D2	〃	〃	乗燭	その他	2.8	3.7	—	5.3	灰釉	灰釉	〃		E-506
472	92B2	〃	貯蔵具	壺	蓋付壺	—	11.8	15.9	—	鉄釉	鉄釉+灰釉	〃		E-507
473	〃	〃	神仏具	香炉	筒形	7.8	12.5	—	9.7	指ナデ	灰釉	〃	鉄絵	E-508
474	91D2	〃	調度具	その他	その他	1.8	3.6	4.3	—	灰釉	〃	不明	陶硯, 底部にトチン痕	E-509
475	〃	〃	化粧具	壺	髪油壺	—	—	9.8	5.2	ナデ	〃	瀬・美	鉄絵, 松竹梅文	E-510
476	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	—	7.3	〃	鉄釉	〃		E-511
477	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	—	8.4	—	—	鉄釉	〃	〃		E-512
478	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	—	—	ナデ	透明釉	肥前	染付, 貼付文	E-513
479	〃	〃	神仏具	瓶	神酒徳利B	—	—	3.7	2.2	〃	青磁	〃	底部鉄化粧	E-514
480	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	5.3	—	〃	透明釉	〃	染付, 梅樹文, 墨書「ナ」	E-515
481	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	4.3	3.3	—	灰釉	瀬・美	呉須絵, 笹文, 底部回転糸切痕	E-516

第84図 近世の遺物 (37) 整地層⑩ (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
482	91D2	整地層	火具	鉢	火鉢	8.4	14.4	—	10.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-517
483	〃	〃	〃	〃	〃	12.7	20.1	—	15.5	ナデ	指押え・ナデ	常滑か		E-518
484	〃	〃	〃	〃	その他	—	—	10.6	8.5	—	—	不明	高台部に切込み	E-519
485	92B2	〃	〃	〃	火桶	7.6	23.2	—	16.4	指押え・ナデ	指押え・ナデ	常滑		E-520
486	〃	〃	〃	〃	〃	10.4	36.2	—	25.6	指押え	指押え	瀬・美		E-521
487	91D2	〃	〃	〃	瓶掛	—	31.0	—	—	鉄釉+鉄化粧	鉄釉	瀬・美	貼付文・押印	E-522
488	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	27.6	鉄化粧	鉄釉+鉄化粧	〃		E-523
489	〃	〃	〃	〃	〃	—	24.2	26.8	—	銅緑釉+鉄釉	銅緑釉+鉄釉	〃	貼付文・押印	E-524
490	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	16.0	鉄釉	銅緑釉	〃	重文: 高台内に重ね焼きの痕 (径約12.2cm), 重文	E-525
491	〃	〃	〃	その他	その他	—	—	—	—	〃	鉄釉	〃	十能, 重ね焼きの剥離痕 (径約9.2cm)	E-526

第85図 近世の遺物 (38) 整地層⑪ (1:4)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
492	91D2	整地層	調度具	その他	その他	1.5	—	—	—	—	—	不明	戸車。最大径6.2cm、内径1.5cm。使用による 摩滅痕	E-527
493	〃	〃	〃	水甕	水甕	17.7	20.9	—	11.6	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕	E-528
494	〃	〃	〃	水指	水盤	3.9	21.2	—	15.0	長石釉	長石釉	〃	緑釉筆散し	E-529
495	〃	〃	その他	蓋	蓋B	1.7	7.7	—	4.5	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-530
496	92B2	〃	〃	〃	〃	1.8	9.6	—	5.6	ヘラ削り	〃	〃	〃	E-531
497	91D2	〃	〃	〃	〃	1.9	9.2	—	4.2	鉄釉	ケズリ	〃	口縁部に煤付着	E-532
498	〃	〃	〃	〃	蓋I	2.0	10.6	—	3.9	ナデ	灰釉	〃	鉄絵、底部回転糸切痕、つまみ径2.1cm	E-533
499	〃	〃	〃	〃	蓋E	1.9	10.3	—	—	灰釉	〃	〃	つまみ径4.6cm	E-534
500	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	10.0	—	—	〃	〃	〃	つまみ径4.4cm	E-535
501	〃	〃	〃	〃	〃	3.1	10.3	—	—	—	—	肥前	つまみ径4.1cm。染付、割小壺・松竹梅文・ 草花文	E-536
502	〃	〃	〃	〃	蓋G	1.2	8.0	—	6.2	ナデ	灰釉	瀬・美	〃	E-537
503	92B2	〃	〃	〃	その他	—	10.4	—	8.8	灰釉	指ナデ	〃	〃	E-538
504	91D2	〃	〃	〃	蓋F	1.2	9.5	—	—	ナデ	灰釉	〃	〃	E-539
505	92B2	〃	〃	〃	〃	2.2	11.5	—	10.4	灰釉	〃	〃	口縁部釉剥ぎ	E-540
506	91D2	〃	〃	〃	〃	1.3	5.2	—	—	—	—	肥前	染付、草本文か、19世紀初	E-541
507	〃	〃	調度具	水指	その他	2.6	3.3	—	3.3	鉄釉	鉄釉+鉄化粧	瀬・美	底部回転糸切痕、水注	E-542
508	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	指押え	灰釉	〃	水滴、型打ち	E-543
509	〃	〃	〃	〃	〃	2.8	—	—	—	〃	〃	〃	水滴、型打ち、穴径1.2cm	E-544
510	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	灰釉	〃	〃	水滴、型打ち	E-545
511	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	透明釉	〃	水滴、型打ち	E-546

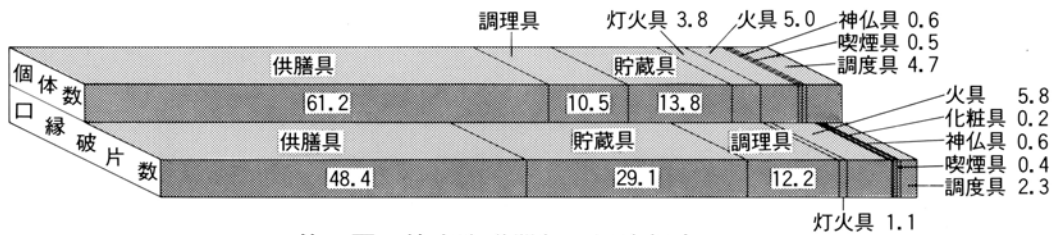
第86図 近世の遺物 (39) 整地層⑫ (1:3)

検出遺物合計

全ての調査区の包含層より出土した遺物を「検出」として扱う。出土した遺物の合計は、総破片数で 5,680点、接合前口縁破片数は 1,458点、個体数は 82.00個体である。供膳具は 44.75個体・61.2%、調理具は7.67個体・10.5%、貯蔵具は 10.08個体・13.8%、灯火具は2.75個体・ 3.8%、火具は 3.67個体・ 5.0%、化粧具は0.00個体、神仏具は0.42個体・ 0.6%、喫煙具は0.33個体・ 0.5%、調度具は3.42個体・ 4.7%であり、他に蓋類が8.92個体出土している。化粧具や神仏具を除き、多少の数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

また、器種の組成では、供膳具で椀対皿が1.53：1となっており、全体での比率（1.69：1）に近い数値を示している。

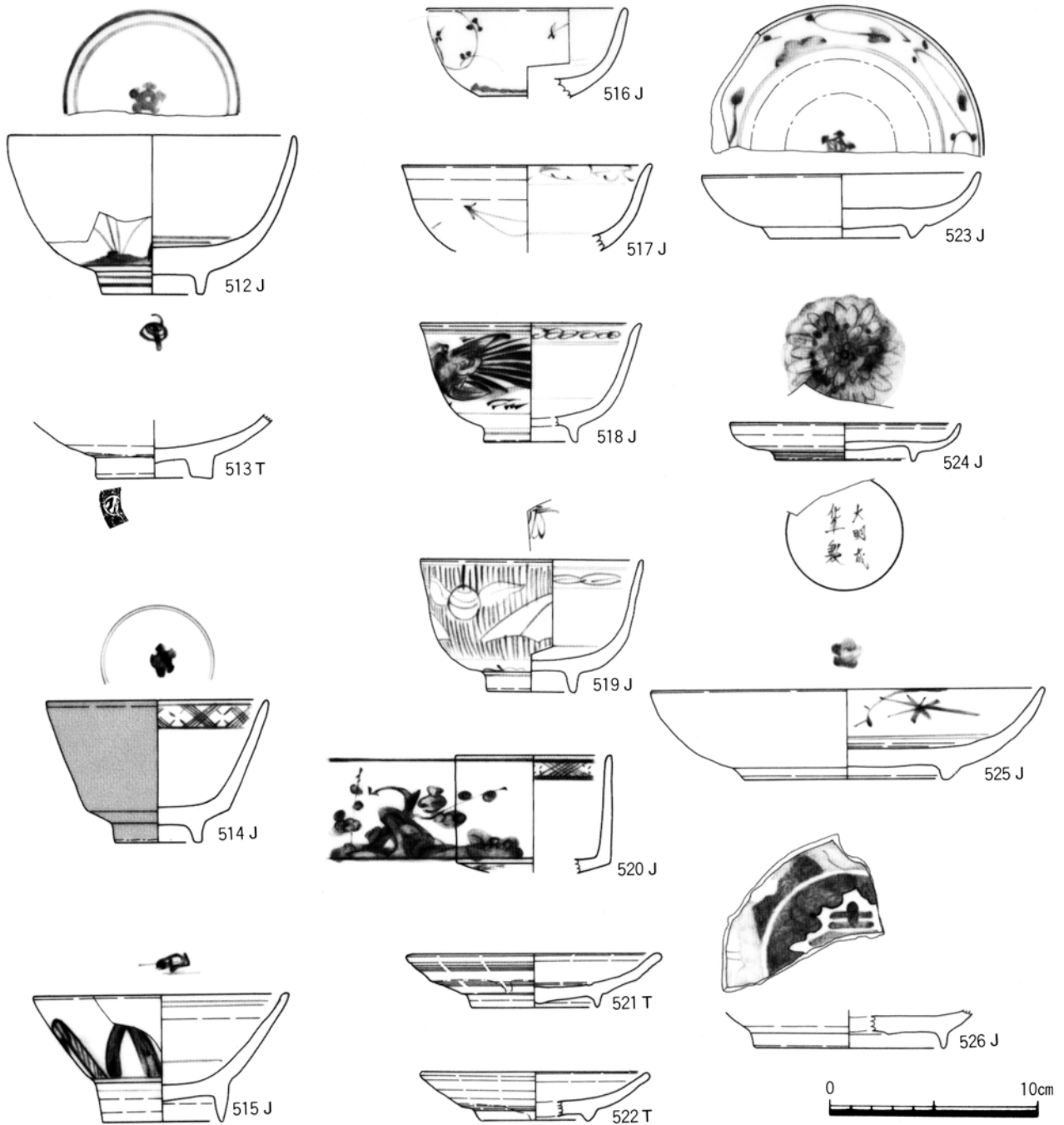
材質の面からも、土師質製品が10.5%、陶磁器類では、陶器製品が64.0%、磁器製品が25.3%となっていて、多少の数値の増減はあるが、全体の平均値（土師質： 9.6%・陶器：59.6%・磁器：30.4%）によく似た数値である。その他の材質としたものが 0.2%出土している。



第87図 検出陶磁器類の用途組成

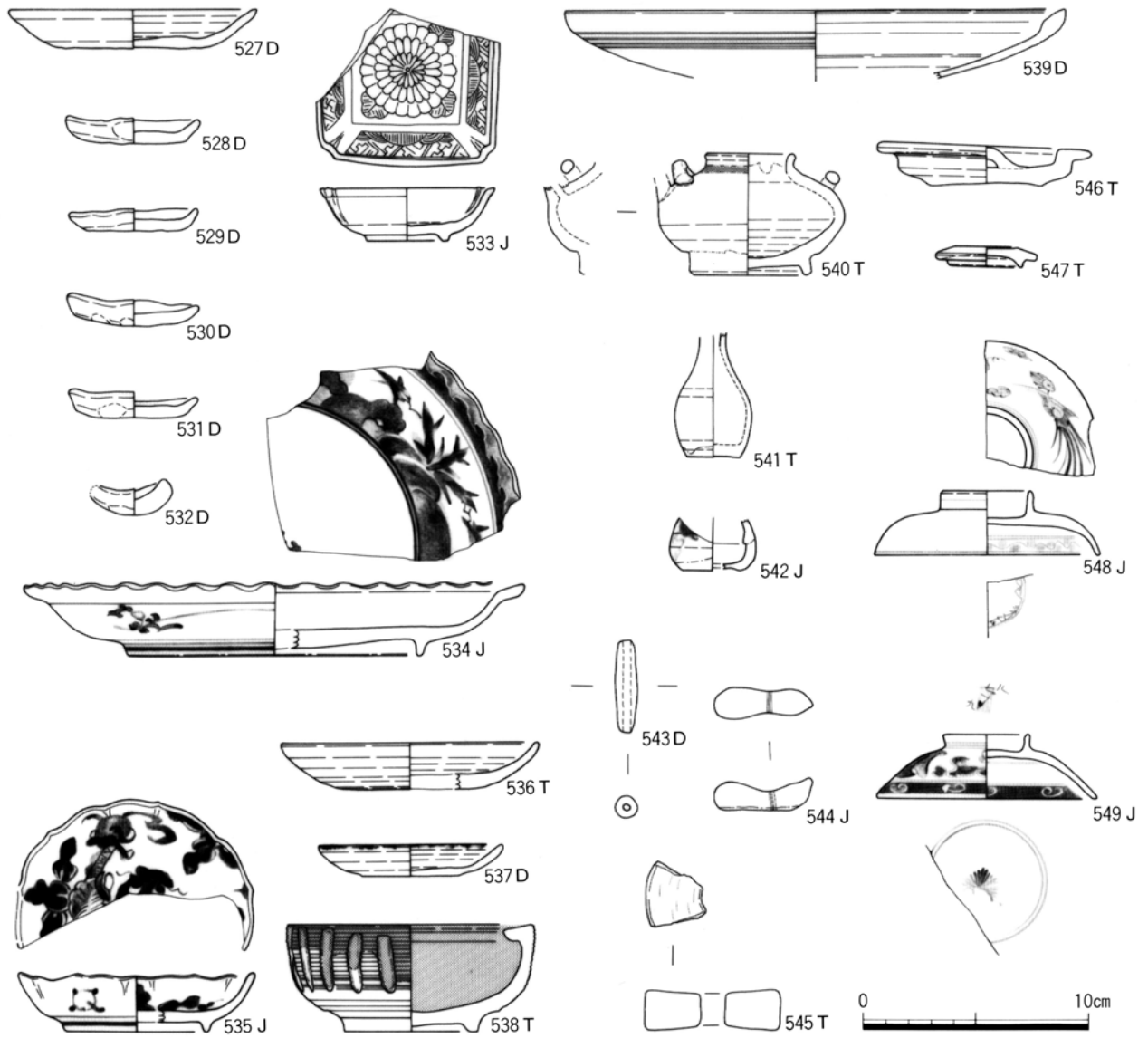
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数				総破片数						
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		130	113		243		246	131		377		704	305		1010
	小椀		13	57		70		24	52		76		68	71		139
	皿	76	81	47		204	31	121	38		190	119	301	66		486
	鉢		10	10		20		28	15		43		114	37	1	152
	その他					0					0		7			7
小計		76	234	227	0	537	31	419	236	0	686	119	1194	479	2	1794
調理具	鍋、釜	12	23			35	236	17		6	259	484	162		15	661
	鉢		8			8		20			20		100			100
	搦鉢		24			24		110			110		319			319
	瓶		11	12		23		18	1		19		97	8		105
	その他		2			2		4			4		6			6
小計		12	68	12	0	92	236	169	1	6	412	484	684	8	15	1191
貯蔵具	瓶		45			45		11			11		291	2		293
	壺		7	0		7		12	2		14		79	3		82
	甕A		48			48		117			117		1636			1636
	甕B		12			12		20			20		179	1		180
	鉢		9	0		9		10	1		11		18	1		19
	その他					0					0		1			1
小計		0	121	0	0	121	0	170	3	0	173	0	2204	7	0	2211
灯火具			33	0		33		15	1		16	2	23	1		26
火具		14	28		2	44	15	63		4	82	47	142		8	197
化粧具			0	0		0		1	2		3		6	4		10
神仏具			5	0		5		4	4		8	2	26	14		42
喫煙具			4			4		5			5		8			8
調度具		1	40		0	41	1	30		1	32	17	122	4	3	146
蓋		0	97	10		107	1	30	10		41	1	36	18		55
合計		103	630	249	2	984	284	906	257	11	1458	672	4445	535	28	5680

第25表 検出陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 種			法 量 (cm)				釉葉・調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
			用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
512	91D2	検Ⅱ	供膳具	椀	丸椀	7.6	13.5	—	4.8	—	—	肥前	染付・五弁花(コンニャク印)・渦福, 18世紀中~末	E-547
513	91D1	検Ⅰ	〃	〃	その他	—	—	—	5.5	鉄釉	鉄釉	不明	高台置付部分に押印	E-548
514	91D2	検Ⅱ	〃	〃	平椀	6.8	10.4	—	4.1	—	青磁	肥前	青磁染付・割小髷・見込み五弁花(コンニャク印), 18世紀中~末	E-549
515	91D1	検Ⅰ	〃	〃	広東椀	6.2	12.0	—	5.7	—	—	瀬・美	染付・連弁文・見込みに岩に波濤文, 1820~ — 寛文	E-550
516	〃	〃	〃	〃	丸椀	—	9.4	—	—	—	—	肥前	染付, 岩に梅花文, 18世紀中~末	E-551
517	91D2	検Ⅱ	〃	〃	端反椀	—	11.9	—	—	—	—	〃	染付, 折れ松葉文, 18世紀中~末	E-552
518	91B	検Ⅰ	〃	〃	〃	5.7	10.5	—	4.4	—	—	瀬・美	染付, 19世紀中	E-553
519	91D1	〃	〃	〃	〃	6.3	10.5	—	4.3	—	—	関西	染付・条線に宝珠文・見込み寿文, 19世紀中 — 天明	E-554
520	91D2	検Ⅱ	〃	小椀	筒椀	—	7.4	—	—	—	—	肥前	染付, 梅樹文・割小菱, 18世紀末~1810	E-555
521	92B1	検Ⅰ	〃	皿	丸皿	2.6	11.8	—	6.0	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み部分にトチン痕(高台径約6.0cm)	E-556
522	〃	〃	〃	〃	〃	2.3	10.7	—	5.1	〃	〃	〃	高台から胎部にかけて火を受けている	E-557
523	91D2	検Ⅱ	〃	〃	〃	3.1	13.2	—	6.9	—	—	肥前	染付・草花文・見込み五弁花(コンニャク印)・ 見込み蛇ノ目軸割き, 18世紀後半	E-558
524	91D1	検Ⅰ	〃	〃	〃	1.8	10.9	—	6.6	—	—	瀬・美	染付・牡丹文・高台内一重条線に「大明成化 年製」, 19世紀代	E-559
525	〃	〃	〃	〃	〃	4.4	18.6	—	9.8	—	—	肥前	染付・五弁花(コンニャク印)・見込み蛇ノ 目軸割き, 18世紀後半	E-560
526	91C	〃	〃	〃	その他	—	—	—	9.0	—	—	〃	染付・蛇ノ目凹型高台・焼継ぎ痕, 19世紀中 以降	E-561

第88図 近世の遺物(40) 検出①(1:3)



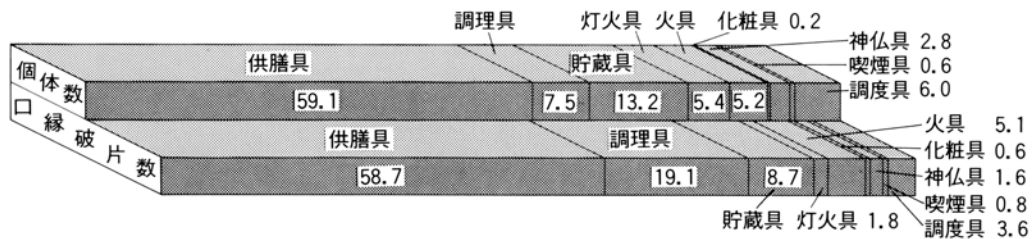
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
527	91D2	検Ⅱ	供膳具	皿	その他	1.7	10.8	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形	E-562
528	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.8	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-563
529	〃	〃	〃	〃	〃	1.0	5.6	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-564
530	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.7	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-565
531	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.6	—	—	—	〃	〃	非ロクロ成形	E-566
532	91D1	検Ⅰ	〃	〃	〃	1.6	2.5	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-567
533	〃	〃	〃	〃	型打皿	2.3	7.6	—	3.6	白磁	白磁	瀬・美	陶刻、菊花文、高台置付部分に重ね焼きの刺 彫痕、19世紀代	E-568
534	91D2	検Ⅱ	〃	〃	ひだ・稜皿	3.2	22.0	—	13.0	—	—	肥前	染付、墨弾き、波文、岩に草花文・唐草文、 高台内部に鈔着、1690-1730	E-569
535	91B	検Ⅰ	〃	〃	型打皿	2.5	10.4	—	6.2	—	—	〃	染付、口縁部に焼継痕あり、18世紀末-19世 紀初	E-570
536	92B1	〃	〃	〃	丸皿	2.1	11.1	—	4.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部に油煙付着	E-571
537	91D2	検Ⅱ	灯火具	皿	灯明皿	1.4	8.1	—	4.3	指ナデ	指ナデ	不明	口縁部に油煙付着	E-572
538	91D1	検Ⅰ	喫煙具	灰落し	—	4.7	10.6	—	5.9	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	ハラによる筋彫り、高台置付部分にトチン痕	E-573
539	〃	〃	調理具	鍋、釜	焙烙	—	22.8	—	—	ナデ	—	不明	—	E-574
540	92B1	〃	調度具	水指	その他	5.4	3.8	8.2	4.9	ナデ	鉄釉	瀬・美	水注	E-575
541	91D1	検Ⅰ	神仏具	瓶	神酒徳利B	—	—	3.4	2.3	—	灰釉	〃	底部回転糸切痕	E-576
542	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	3.8	2.5	指押え	—	〃	色絵か	E-577
543	91C	〃	調度具	その他	その他	4.1	0.4	1.0	—	—	—	不明	土錘	E-578
544	92B1	〃	〃	〃	〃	1.5	—	—	—	—	褐釉	瀬・美	箸置、長さ4.4cm、最大幅1.4cm	E-579
545	91C	〃	〃	〃	〃	1.8	—	—	—	灰釉	灰釉	〃	戸車	E-580
546	91D1	〃	その他	蓋	蓋G	1.7	9.6	—	4.8	ナデ	〃	〃	底部回転糸切痕	E-581
547	92B1	〃	〃	〃	蓋B	0.8	4.3	—	3.1	ナデ	灰釉・ナデ	〃	—	E-582
548	〃	〃	〃	〃	蓋E	2.9	10.0	—	4.0	—	—	〃	染付、松竹梅文・飛雲飛鳥文、19世紀代	E-583
549	91B	〃	〃	〃	〃	2.9	9.7	—	3.8	—	—	〃	染付、焼き継ぎ痕、墨弾き、19世紀中	E-584

第89図 近世の遺物 (41) 検出② (1:3)

その他遺物合計

全ての調査区の表土層や壁など、遺構や整地層、検出以外から出土した遺物を全て「その他」として扱った。出土した遺物の合計は、総破片数が 6,661点、接合前口縁破片数は 1,951点、個体数は181.67個体である。供膳具は 94.17個体・59.1%、調理具は 11.92個体・7.5%、貯蔵具は 21.08個体・13.2%、灯火具は8.58個体・5.4%、火具は8.25個体・5.2%、化粧具は0.33個体・0.2%、神仏具は4.50個体・2.8%、喫煙具は0.92個体・0.6%、調度具は9.50個体・6.0%であり、他に蓋類が 22.42個体出土している。「その他」だけでも、全出土遺物の4分の1近くが出土しており、遺構から出土した遺物の少なさがわかる。調理具を除けば、多少の数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

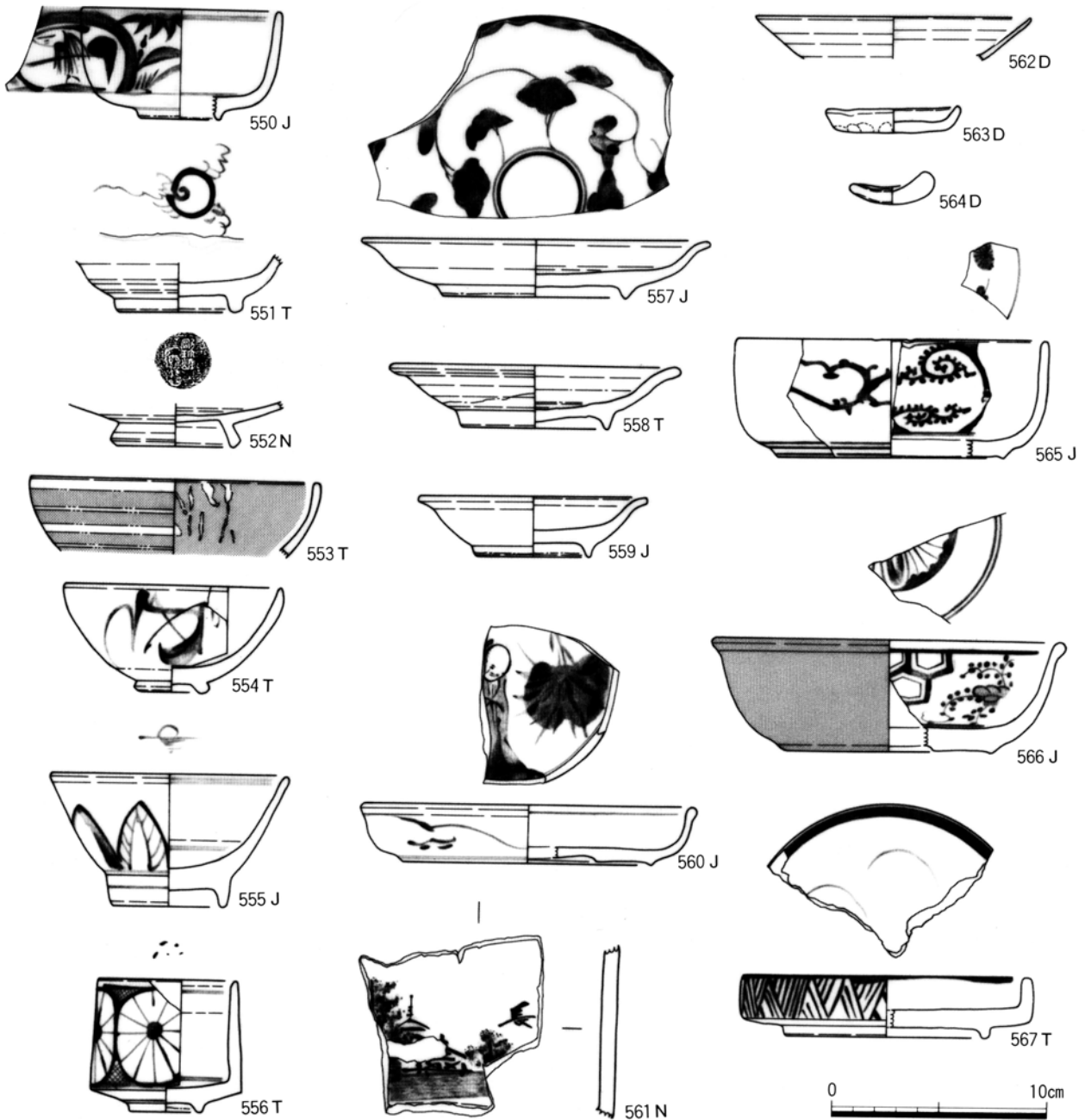
材質の面から見てみると、土師質製品が 8.3%、陶磁器類では陶器製品が53.2%、磁器製品が37.8%となっており、磁器製品の全体に占める割合が高く、この数値が整地層や検出とともに全体の平均値を大きく引き上げている。従って、他の遺跡と用途・器種の組成を比較する場合、この部分の数値を除いた遺構出土のみで考える必要がある。(小嶋廣也)



第90図 その他陶磁器類の用途組成

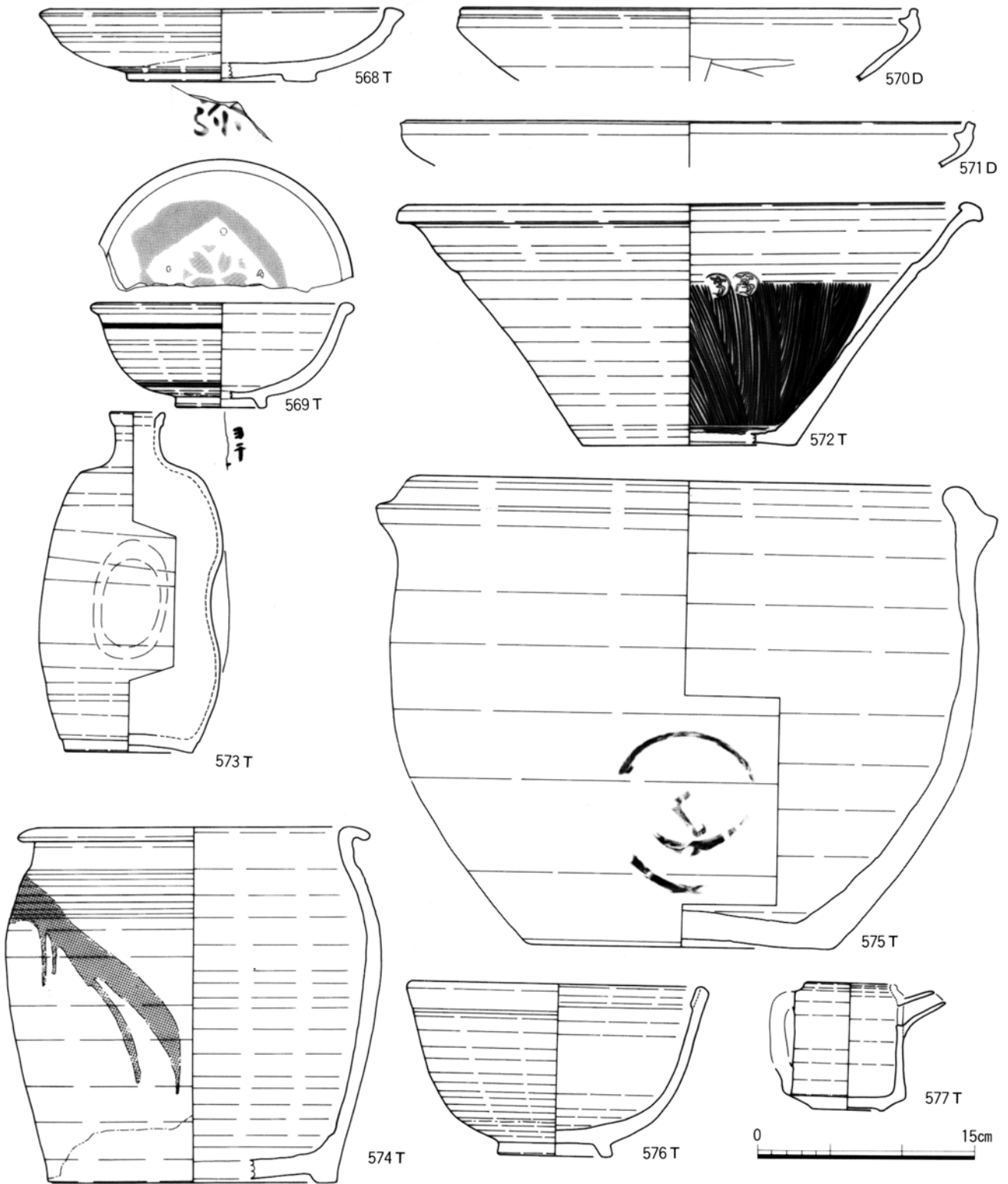
用途	器種	接合後口縁残存率				接合前口縁破片数					総破片数					
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		154	286		440		297	251	1	549		1017	445	1	1463
	小椀		68	164		232		45	78		123		80	113		193
	皿	49	148	198		395	27	206	110	3	346	99	464	170	3	736
	鉢		20	43		63		27	41		68		163	59		222
	その他					0					0			10		10
	小計	49	390	691	0	1130	27	575	480	4	1086	99	1724	797	4	2624
調理具	鍋、釜	16	12			28	146	25		4	175	375	137		6	518
	鉢		57			57		73			73		237			237
	搦鉢		28			28		85			85		490			490
	瓶		30			30		20			20		134	11		145
	その他					0					0		4			4
	小計	16	127	0	0	143	146	203	0	4	353	375	1002	11	6	1394
貯蔵具	瓶		143			143		18			18		377	5		382
	壺		20			20		16			16		86			86
	甕 A		41			41		72			72		1030			1030
	甕 B		24			24		39			39		253			253
	鉢		20	5		25		13	2		15		22	2		24
	その他					0					0	1				1
	小計	0	248	5	0	253	0	158	2	0	160	1	1768	7	0	1776
灯火具		19	82	2		103	10	22	1		33	14	29	3		46
火具		57	41		1	99	46	48		1	95	116	260		1	377
化粧具			0	4		4		6	5		11		8	7		15
神仏具		0	16	38		54	4	14	11		29	4	29	39		72
喫煙具			11	0		11		12	3		15		18	1		19
調度具	蓋	27	78	9		114	14	52	1		67	27	154	8		189
	蓋	14	167	76	12	269	10	62	28	2	102	18	93	36	2	149
合計		182	1160	825	13	2180	257	1152	531	11	1951	654	5085	909	13	6661

第26表 その他陶磁器類集計表



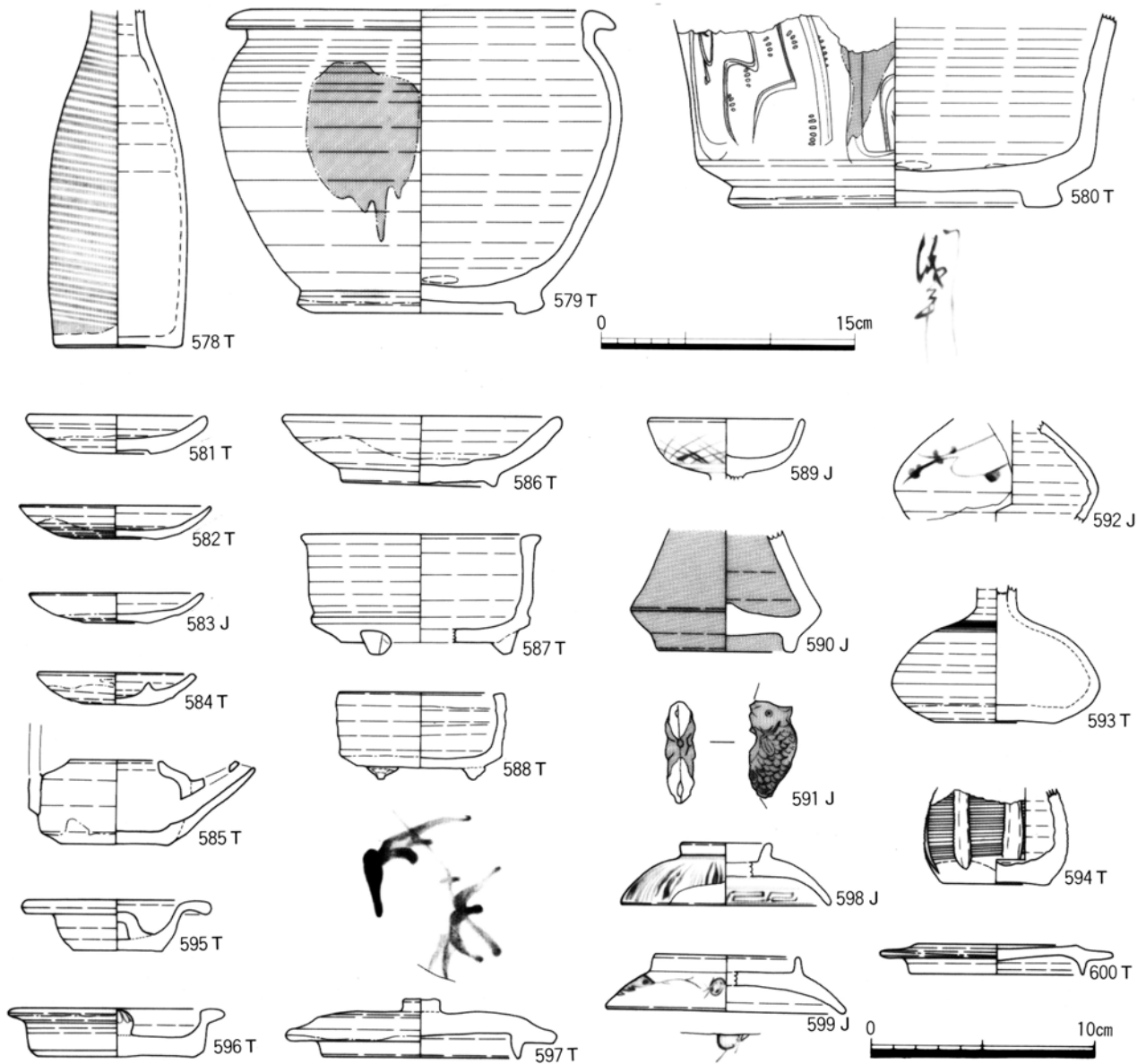
遺物 番号	調査地点 遺構	用途	器種		法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
			器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
550	91D 南トレンチ	供膳具	椀	丸椀	5.1	9.0	—	3.6	—	—	瀬・美	染付, 竹の子握り文, 19世紀前半	E-585
551	〃 表土	〃	〃	〃	—	—	—	5.4	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 宝珠文	E-586
552	92B	〃	〃	その他	—	—	—	5.3	透明釉	透明釉	不明	見込みに押印	E-587
553	91D 南トレンチ	〃	〃	平椀	—	13.0	—	—	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目文	E-588
554	〃	〃	〃	〃	4.9	9.9	—	3.2	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 柳文, 18世紀後半	E-589
555	〃	〃	〃	広東椀	6.1	10.8	—	5.1	—	—	〃	染付, 連弁文・岩に波濤文, 19世紀中～幕末	E-590
556	〃	〃	〃	筒椀	6.1	6.4	—	3.3	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 菊花散し文, 見込み五弁花	E-591
557	92B 北壁	〃	皿	端反皿	2.7	15.8	—	8.4	—	—	中国	化粧掛け, 染付, 草花文, 墨弾き, 高台置付部分に砂懸着, 17世紀代(明末～清初)	E-592
558	91D 表土	〃	〃	〃	2.9	13.0	—	6.7	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-593
559	〃 南トレンチ	〃	〃	〃	2.8	10.4	—	5.2	青磁	青磁	〃	青磁皿, 19世紀代	E-594
560	〃	〃	〃	丸皿	2.8	13.1	—	9.4	—	—	肥前系	染付, 樹下唐人文・唐草文, 蛇ノ目凹形高台, 重ね焼きの割離痕(径約6.7cm), ハマ痕, 18世紀末～19世紀初	E-595
561	92B 南壁	〃	〃	その他	—	—	—	—	—	—	不明	化粧掛け, 鉄絵	E-596
562	91D 表土	〃	〃	〃	—	12.5	—	—	ナデ	ナデ	〃	ロクロ成形	E-597
563	〃	〃	〃	〃	1.2	6.0	—	5.0	〃	指押え	〃	非ロクロ成形	E-598
564	〃	〃	〃	〃	1.5	3.3	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-599
565	〃 北トレンチ	〃	鉢	丸鉢	5.6	14.2	—	10.4	—	—	肥前	染付, 見込み松竹梅文・柳唐草文・唐草文, 蛇ノ目凹形高台, 18世紀中～末	E-600
566	〃 南トレンチ	〃	〃	その他	5.2	16.0	—	9.4	—	青磁	肥前系	青磁染付, 亀甲・梅樹文・三ツ銀杏文, 蛇ノ目凹形高台, 重ね焼きの割離痕(径約8.4cm), 18世紀後半	E-601
567	92B 表土	〃	〃	織部	2.9	13.0	—	9.2	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵, 高台置付部分使用による摩滅痕	E-602

第91図 近世の遺物 (42) その他① (1:3)



遺物 番号	調査地点		器種		法量 (cm)				釉葉・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面				外面
568	91D	南トレンチ	供膳具	皿	丸皿	5.0	23.4	—	12.4	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕、墨書「弥」	E-603
569	〃	〃	〃	鉢	その他	7.3	17.3	—	5.9	〃	〃	〃	須絵・型紙、吹き墨、見込みにトチン痕、墨書	E-604
570	〃	〃	調理具	鍋、釜	焙烙	—	31.0	—	—	ヨコハケ	—	不明	外面に煤付着	E-605
571	〃	〃	〃	〃	〃	—	38.6	—	—	—	—	〃	外面に煤付着	E-606
572	〃	〃	〃	播鉢	Ⅷ類	16.3	38.2	—	14.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美	磨目数23本、1cmに4本、押印「高」、底部にトチン痕	E-607
573	91C	〃	貯蔵具	瓶	德利D	23.6	3.6	13.0	8.7	〃	〃	〃	〃	E-608
574	92B	北壁	〃	甕B	甕	24.7	21.2	—	19.7	〃	〃	〃	灰釉流し掛け	E-609
575	〃	南壁	〃	甕A	Ⅳ類	32.4	36.8	—	20.4	—	—	常滑	〃	E-610
576	〃	〃	調理具	鉢	捏ね鉢	11.9	20.0	—	7.6	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕	E-611
577	〃	表土	貯蔵具	瓶	汁次B	8.8	5.7	—	4.8	鉄釉	鉄釉	〃	口縁部釉剥ぎ取り	E-612

第92図 近世の遺物 (43) その他② (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
578	92B	表土	貯蔵具	瓶	德利E	-	-	8.2	7.0	白泥+灰釉	灰釉	瀬・美	白泥による刷毛目文	E-613
579	〃	南壁	〃	甕B	甕	17.8	20.1	24.0	12.5	鉄釉	鉄釉	〃	灰釉流し掛け、見込みにトチン痕	E-614
580	91D	南トレンチ	調度具	水甕	水甕	-	-	-	18.2	灰釉	灰釉	〃	銅線釉流し掛け、見込みにトチン痕、墨書 (後章)	E-615
581	〃	表土	灯火具	皿	灯明皿	1.7	7.8	-	2.9	〃	〃	〃	口縁部に油煙附着、基筒底	E-616
582	〃	〃	〃	〃	〃	1.5	8.4	-	3.4	鉄釉	鉄釉	〃	見込みに重ね焼きの剝離痕(径約4.3cm)	E-617
583	〃	南トレンチ	〃	〃	〃	1.3	7.7	-	2.8	白磁	白磁	〃	〃	E-618
584	92B	南壁	〃	〃	灯蓋	1.4	6.8	-	3.0	灰釉	灰釉	〃	内口径2.9cm	E-619
585	〃	〃	〃	乗燭	その他	3.7	4.1	-	4.7	〃	〃	〃	注口部に油煙附着	E-620
586	〃	トレンチ	〃	皿	灯明皿	3.2	12.1	-	6.8	長石釉	長石釉	〃	見込み蛇ノ目刺ぎ、口縁部に煤附着	E-621
587	〃	南壁	神仏具	香炉	筒形	5.3	10.8	-	8.1	ナデ	〃	〃	〃	E-622
588	91D	南トレンチ	〃	〃	〃	〃	3.9	7.3	-	5.5	灰釉	〃	〃	E-623
589	〃	〃	〃	仏飯器	-	-	-	6.8	-	-	-	〃	足付き3カ所	E-624
590	〃	〃	調度具	花生	その他	-	-	8.4	6.0	青磁	青磁	肥前	青磁、高台に砂融着、17世紀末~18世紀中	E-625
591	〃	表土	〃	〃	壺型	-	-	-	-	-	青磁	〃	箸置か、底部に穿孔(径4mm)	E-626
592	〃	北トレンチ	化粧具	壺	髪油壺	-	-	9.1	-	ヘラ削り	-	肥前	染付、梅花文、18世紀	E-627
593	〃	表土	〃	〃	〃	-	-	-	-	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-628
594	〃	南トレンチ	喫煙具	灰落し	-	-	-	6.4	4.8	指ナデ	鉄釉	〃	櫛引き、ヘラによる筋彫り	E-629
595	〃	〃	その他	蓋	蓋B	2.3	8.4	-	4.0	ナデ	〃	〃	底部回転糸切痕	E-630
596	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	9.6	-	6.9	ケズリ・ナデ	〃	〃	〃	E-631
597	92B	表土	〃	〃	蓋G	1.3	10.5	10.7	7.8	ヘラ削り	灰釉	〃	〃	E-632
598	〃	西壁	〃	〃	蓋D	2.6	11.7	-	8.7	ナデ	〃	〃	つまみ径1.7cm、呉須絵、笹文	E-633
599	91D	南トレンチ	〃	〃	蓋E	2.8	9.2	-	3.9	-	-	〃	染付、雷文・条線文、19世紀中	E-634
600	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.5	-	6.4	-	-	肥前系	染付、1780~1840	E-635

第93図 近世の遺物 (44) その他③ (578~580は1:4, 他は1:3)

5. 加工円盤

本遺跡の遺構や整地層の中から、小型で周囲を打ち欠き調整あるいは研磨されて円形に加工された陶片が多数出土している。以下、これらを加工円盤と称して、その概略を見ていきたい。

加工円盤は、総計で 172点出土しており、91B 区の S D 025で13点出土した以外、居住域と思われる91D 区と92B 区から集中して出土している。今回の統計処理では、疑わしいものは全て除外した。重量は、それぞれの器種や材質により異なるが、形態としては、径が 2.5cm前後の小型のもの、3.5cm前後の中型のもの、それ以上の大型のもの3種類があるようである。転用されている器種としては、調理具の播鉢の破片を加工しているものが47点(27.3%)と多く、貯蔵具である常滑産の甕Aの破片が35点(20.3%)、供膳具である椀の破片が31点(18.0%)、貯蔵具の甕Bの破片が18点(10.5%)、調理具の捏ね鉢の破片が13点(7.6%)であり、他に供膳具である皿・鉢、調理具である鍋・釜、貯蔵具である瓶・德利、火具である火鉢・瓶掛、神仏具である御神酒德利、調度具である水甕・手洗鉢、瓦類などの破片の使用も見られ、多種多様である。また、材質面から見てみると、陶器製品が 162点(94.2%)と最も多く、磁器製品・土師質製品・瓦類は少数である。

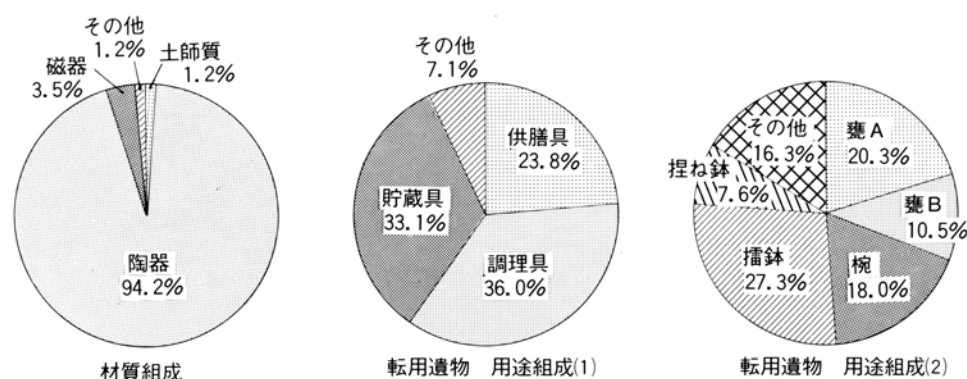
加工円盤の用途については、呪術具・冥銭・遊具・飛礫など様々な説があり、未だ定説はない。本遺跡における加工円盤については、出土状況や形態などから推定してみると、出土地点の大部分が居住域付近に限定されていること、多種多様な器種が利用されていることなどから、子供たちが投げて遊ぶ遊具であった可能性が高いものと考えられる。(小嶋廣也)

<参考文献>

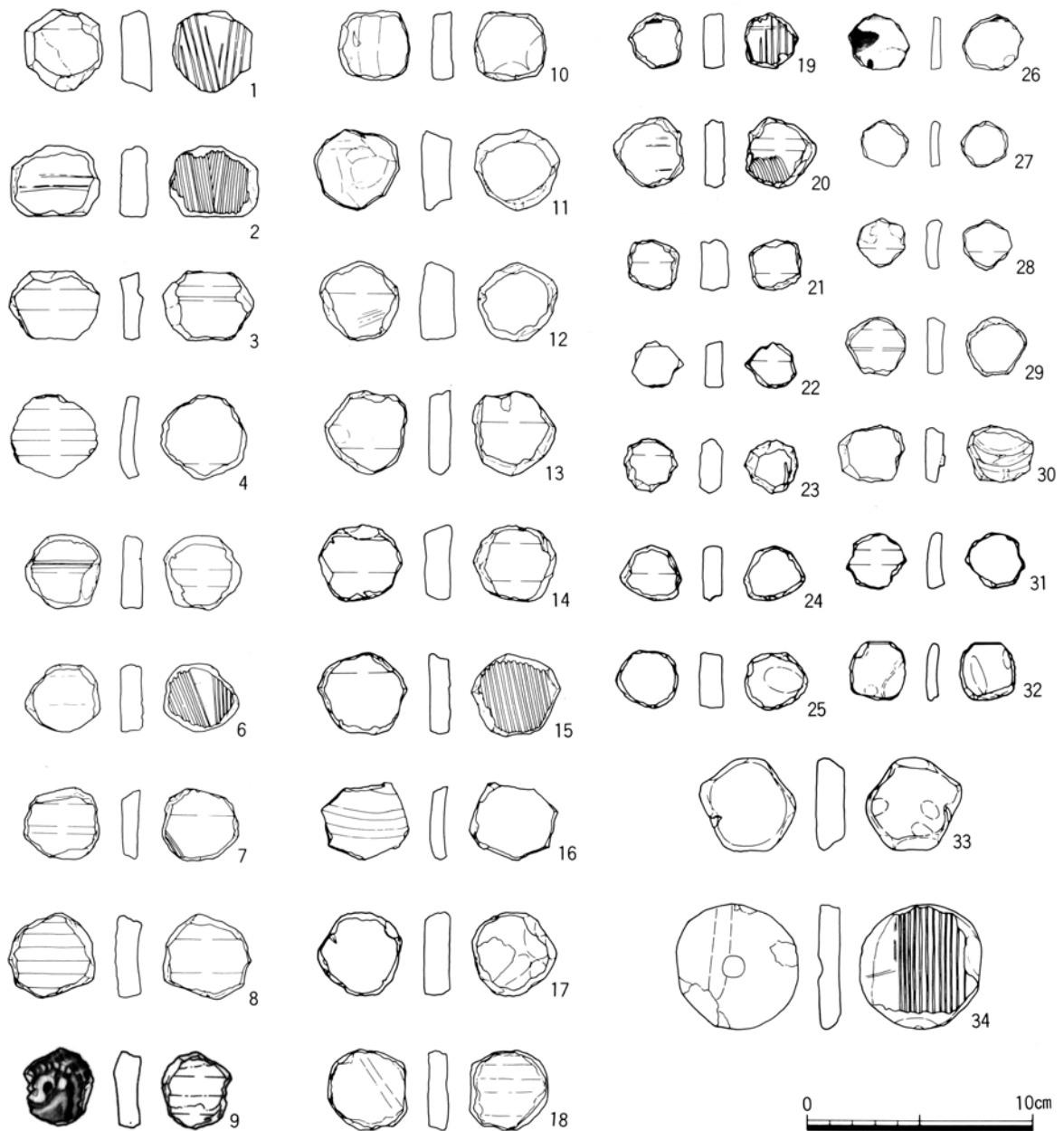
赤塚美智子 「第V章 考察 4. 加工円盤」 『土田遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987

調査区	91D1	91D2	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	92B2	92B1	92B1	92B1	92B1	92B2	92B2	91C	91C	92A	91B	91B	91D2	92B2	その他	計	
遺構番号	SD002	SD202	SK015	SK019	SK022	SK027	SK034	SK036	SD104	SE004	SK077	SK079	SK087	SK088	SK240	SK289	SK105	SX003	SK177	SD025	SK181	91D2	92B2	その他	計
甕 A	1		1	1				2			2			1		1			2		2	3	19	35	
甕 B								1									1			1	3	3	9	18	
椀		1						2				1	1						1		3	7	13	31	
播鉢	3				1	1	1	2	1	2									9		7	7	13	47	
捏ね鉢	1										2											4	6	13	
その他								1			1			1	1	1	1	1	1			5	15	28	
計	5	1	1	1	1	1	1	8	1	2	5	1	1	1	1	2	1	2	1	13	1	24	13	84	172

第27表 加工円盤出土遺構一覧表

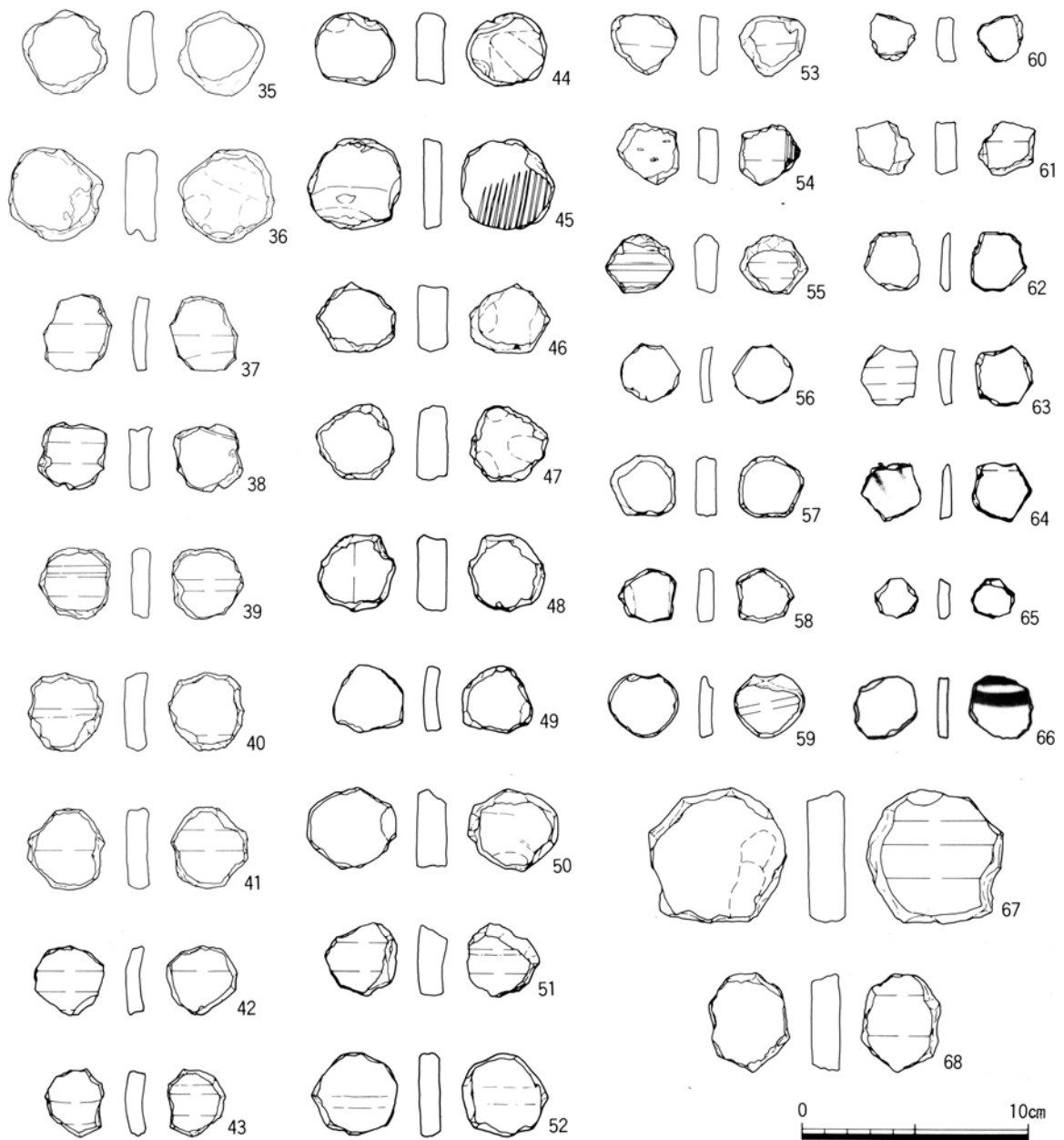


第94図 加工円盤材質・転用遺物組成図



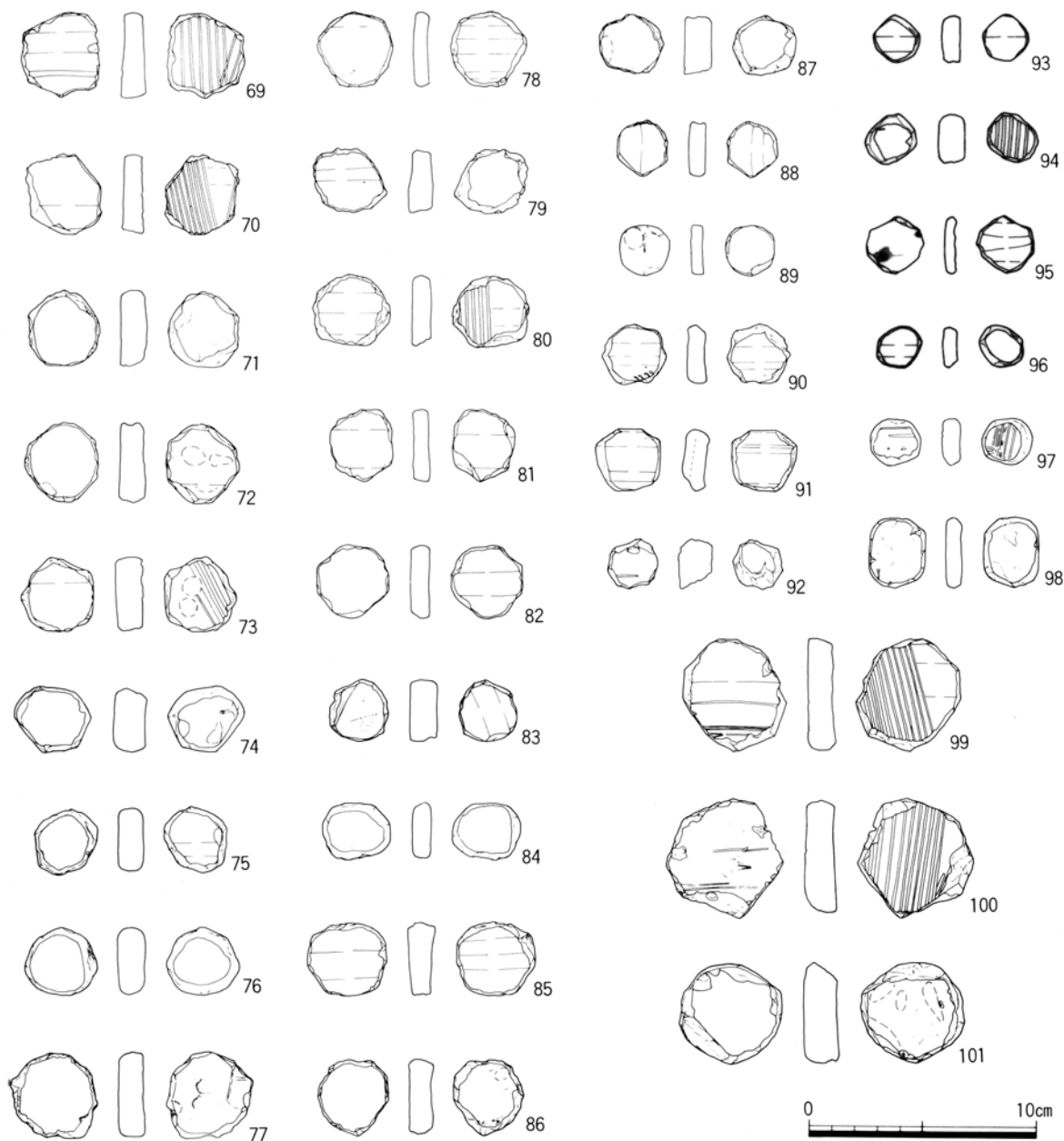
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)				釉葉等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)				釉葉等	備 考	登録 番号
		長径	短径	厚さ	重さ						長径	短径	厚さ	重さ			
1	91D1 SD002	3.7	3.4	1.3	18.8	鉄釉	挿鉢	E-636	18	91D 南トレンチ	3.5	3.4	0.9	14.1	灰釉	捏ね鉢	E-653
2	〃	3.9	3.1	1.2	20.2	〃	〃	E-637	19	91D1 SK027	2.5	2.3	0.9	6.4	鉄釉	挿鉢	E-654
3	〃	3.9	3.0	0.9	13.1	〃	〃	E-638	20	〃 SK036	3.1	3.0	0.9	10.0	〃	〃	E-655
4	〃 SK036	3.3	3.2	0.7	10.8	〃	椀	E-639	21	〃 SK022	2.2	2.2	1.2	7.7	〃	〃	E-656
5	91D2 整地層	3.3	3.3	1.0	13.5	〃	挿鉢	E-640	22	91D2 SX201	2.2	2.0	0.8	4.6	灰釉	椀	E-657
6	〃	3.3	3.1	1.0	11.4	〃	〃	E-641	23	〃 整地層	2.4	2.3	1.0	6.0	鉄釉	挿鉢	E-658
7	〃	3.4	3.3	0.8	10.8	〃	〃	E-642	24	〃	2.5	2.4	0.8	6.9	—	鉢	E-659
8	〃	3.9	3.7	1.0	19.5	〃	甕B-4	E-643	25	91D1 検 I	2.7	2.4	1.1	8.9	指押え	甕A	E-660
9	〃	3.5	2.8	1.1	13.0	〃	瓶掛	E-644	26	〃	2.6	2.4	0.4	3.7	—	染付椀	E-661
10	〃	3.2	3.0	1.0	12.4	灰釉	捏ね鉢	E-645	27	〃	2.1	2.0	0.4	2.1	鉄釉	椀	E-662
11	〃	3.7	3.5	1.3	22.0	—	甕A	E-646	28	91D 南トレンチ	2.2	2.1	0.7	3.0	灰釉	〃	E-663
12	〃	3.5	3.4	1.6	19.8	—	〃	E-647	29	〃	2.7	2.5	0.8	6.1	鉄釉	〃	E-664
13	〃	3.7	3.6	1.0	17.1	鉄釉	甕B-4	E-648	30	〃	2.9	2.5	1.0	6.7	ナデ	皿	E-665
14	〃	3.6	3.3	1.2	17.4	灰釉	捏ね鉢	E-649	31	〃	2.5	2.4	0.8	4.9	灰釉	椀	E-666
15	91D 南トレンチ	3.9	3.7	0.9	16.8	鉄釉	挿鉢	E-650	32	〃 表土	2.5	2.4	0.5	4.7	〃	〃	E-667
16	〃	3.6	3.2	0.7	10.3	〃	椀	E-651	33	91D1 検 I	4.1	4.1	1.2	22.8	指押え	甕A	E-668
17	〃	3.7	3.6	1.1	18.0	指押え	甕A	E-652	34	〃	5.6	5.3	1.0	39.3	鉄釉	挿鉢	E-669

第95図 近世の遺物 (45) 加工円盤① (1:3)



遺物 番号	調査地点		法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点		法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号
	調査区	遺構	長径	短径	厚さ	重さ					調査区	遺構	長径	短径	厚さ	重さ			
35	91D1	SD002	3.7	3.7	1.3	18.2	灰釉	捏ね鉢	E-670	52	91D	表土	3.7	3.6	0.9	15.1	鉄釉	甕B-4	E-687
36	〃	SK019	4.1	4.1	1.4	25.6	指押え	甕A	E-671	53	91D1	SK034	2.7	2.6	0.8	6.8	〃	挿鉢	E-688
37	〃	SK036	3.3	2.9	0.6	7.3	ナデ	瓶	E-672	54	〃	SK036	2.6	2.5	0.9	7.4	〃	〃	E-689
38	91D2	整地層	2.9	2.8	1.0	9.9	鉄釉	甕B-4	E-673	55	〃	〃	3.0	2.6	1.1	8.2	〃	甕B-4	E-690
39	〃	〃	3.1	3.1	0.8	9.7	〃	〃	E-674	56	91D2	整地層	2.6	2.4	0.4	4.2	透明釉	椀	E-691
40	〃	〃	3.4	3.3	1.0	11.9	灰釉	捏ね鉢	E-675	57	91D1	検I	2.8	2.6	0.9	9.3	鉄釉	甕B-4	E-692
41	〃	〃	3.6	3.2	0.9	14.0	〃	〃	E-676	58	〃	〃	2.4	2.3	0.7	5.7	〃	〃	E-693
42	〃	〃	3.1	3.0	0.7	7.5	鉄釉	椀	E-677	59	〃	〃	3.0	2.7	0.6	6.0	—	内耳鍋	E-694
43	〃	〃	3.0	2.5	0.8	7.4	〃	瓶掛	E-678	60	〃	〃	2.0	1.9	0.8	3.4	灰釉	椀	E-695
44	〃	〃	3.5	3.1	1.2	16.2	指押え	甕A	E-679	61	〃	〃	2.4	2.3	1.0	6.0	鉄釉	甕B-4	E-696
45	91D1	検I	4.0	4.0	0.8	17.1	鉄釉	挿鉢	E-680	62	91D	甬口レンヂ	2.6	2.4	0.4	3.3	灰釉	椀	E-697
46	〃	〃	3.5	3.4	1.3	15.2	指押え	甕A	E-681	63	〃	表土	2.5	2.4	0.6	4.5	〃	〃	E-698
47	〃	〃	3.2	3.1	1.3	14.3	〃	〃	E-682	64	〃	〃	2.5	2.4	0.5	3.4	〃	〃	E-699
48	〃	〃	3.3	3.3	1.3	17.7	—	手洗鉢	E-683	65	〃	〃	1.9	1.7	0.6	1.9	〃	〃	E-700
49	〃	〃	2.9	2.8	0.7	6.8	灰釉	椀	E-684	66	〃	〃	2.8	2.6	0.5	5.3	—	染付皿	E-701
50	91D	甬口レンヂ	3.9	3.5	1.3	21.1	指押え	甕A	E-685	67	91D1	検I	6.0	5.8	1.6	79.5	—	甕A	E-702
51	〃	〃	3.1	3.1	1.3	13.8	鉄釉	火鉢	E-686	68	91D	甬口レンヂ	4.3	3.4	1.3	25.0	灰釉	手洗鉢	E-703

第96図 近世の遺物 (46) 加工円盤② (1:3)



遺物 番号	調査地点		法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点		法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号
	調査区	遺構	長径	短径	厚さ	重さ					調査区	遺構	長径	短径	厚さ	重さ			
69	92B1	SE004	3.8	3.4	1.1	16.7	鉄釉	播鉢	E-704	86	92B	南壁	3.3	3.1	1.0	12.0	—	甕A	E-721
70	〃	〃	3.5	3.1	1.0	12.9	〃	〃	E-705	87	92B1	SK088	2.8	2.6	1.2	10.2	—	〃	E-722
71	〃	SK077	3.3	3.1	1.1	13.5	—	甕A	E-706	88	〃	SK079	2.5	2.2	0.7	5.0	灰釉	椀	E-723
72	〃	〃	3.5	3.2	1.2	13.0	—	〃	E-707	89	92B2	SK240	2.2	2.2	0.5	3.2	—	内耳鍋	E-724
73	92B2	整地層	3.2	3.2	1.2	15.6	鉄釉	播鉢	E-708	90	〃	整地層	2.8	2.6	0.8	6.7	鉄釉	播鉢	E-725
74	〃	〃	3.3	2.8	1.4	14.2	—	甕A	E-709	91	〃	〃	2.8	2.6	1.0	9.8	〃	〃	E-726
75	〃	〃	2.8	2.8	1.1	10.5	鉄釉	甕B-4	E-710	92	〃	〃	2.2	2.1	1.5	7.3	—	甕A	E-727
76	92B1	検I	3.2	3.0	1.2	12.8	—	甕A	E-711	93	〃	〃	2.0	2.0	0.8	4.2	鉄釉	甕B-4	E-728
77	〃	〃	3.7	3.6	1.2	18.0	—	〃	E-712	94	92B1	検I	2.3	2.1	1.2	6.8	〃	播鉢	E-729
78	〃	〃	3.3	3.3	0.6	9.6	灰釉	瓶	E-713	95	〃	〃	2.5	2.5	0.5	3.9	—	御神酒德利	E-730
79	92B2	検II	2.9	2.8	1.1	10.5	鉄釉	播鉢	E-714	96	92B2	検II	1.9	1.8	0.6	3.5	灰釉	椀	E-731
80	92B	北トレン	3.3	3.1	0.8	11.6	〃	〃	E-715	97	92B	南壁	2.2	2.1	0.8	4.3	鉄釉	播鉢	E-732
81	〃	北壁	3.2	2.7	0.8	7.4	〃	〃	E-716	98	〃	北壁	3.1	2.5	0.7	7.5	灰釉	椀	E-733
82	〃	北壁	3.2	3.2	0.8	12.4	灰釉	水甕	E-717	99	92B2	整地層	4.8	4.5	1.2	30.7	鉄釉	〃	E-734
83	〃	表土	2.7	2.6	1.2	11.9	鉄釉	甕B-4	E-718	100	〃	SD209	5.1	4.9	1.4	40.1	〃	播鉢	E-735
84	〃	北壁	3.0	2.4	0.8	7.7	—	甕A	E-719	101	〃	SK289	4.4	4.4	1.5	34.3	—	甕A	E-736
85	〃	北壁	3.5	3.2	1.2	14.6	灰釉	椀	E-720										

第97図 近世の遺物(47) 加工円盤③ (1:3)

6. 瓦類

出土した瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、棧瓦、平瓦、鬼瓦の6種類である。軒棧瓦が主体を占める。鬼瓦については、良好な資料の出土が見られなかったため、図示はしていない。また、刻印のある瓦は、破片資料から抽出したものである。

以下、種類別にその詳細を見ていきたい。

軒丸瓦（1～4） すべて連珠三つ巴紋である。珠文の数は推定で1は13個、2～4は12個である。

巴の巻き込み方向も1のみ右巻きで、他はすべて左巻きである。珠文径と巴頭が小さく尾が長いタイプ（1・2）と、珠文径と巴頭が大きく尾が短いタイプ（3・4）の2つのタイプがある。

軒平瓦（5） 瓦当文は、中心飾りに3葉と3つの珠点を置き、左右に唐草文を配している。

軒平部（6～12） 平部のみ残存しているもので、軒平瓦か軒棧瓦の平部である。

軒棧瓦（13～22） 丸部が左側にあるもの（13～21）と、右側にあるもの（22）がある。前者には瓦当径の大（13・14）、中（15～20）、小（21）の3種があり、大は珠文数が8個、中は12個、小は11個である。小のものは1点のみしか認められていないが、丸部は中と同じで、平部の文様が異っている。平部との組合せの傾向として、瓦当径の大きなものには11・12のような文様がつけられ、中の瓦当径のものには、おそらく7のような文様の平部が組み合わされていたと思われる。

丸部（23～28） 軒丸部のみの残存であるが、軒丸瓦か軒棧瓦のいずれかである。巴の巻き込み方向に左右の別がある。左巻きのもの（23～26）は珠文数が12個で、巴径、巴頭の大きさ、尾の長さ、珠文径などに違いがある。右巻きのもの（27・28）は、2点とも小振りで珠文数は10個で、巴径や珠文径も小さなつくりである。

棧瓦（29・30） 2点とも、頭に切り込みをもつものである。

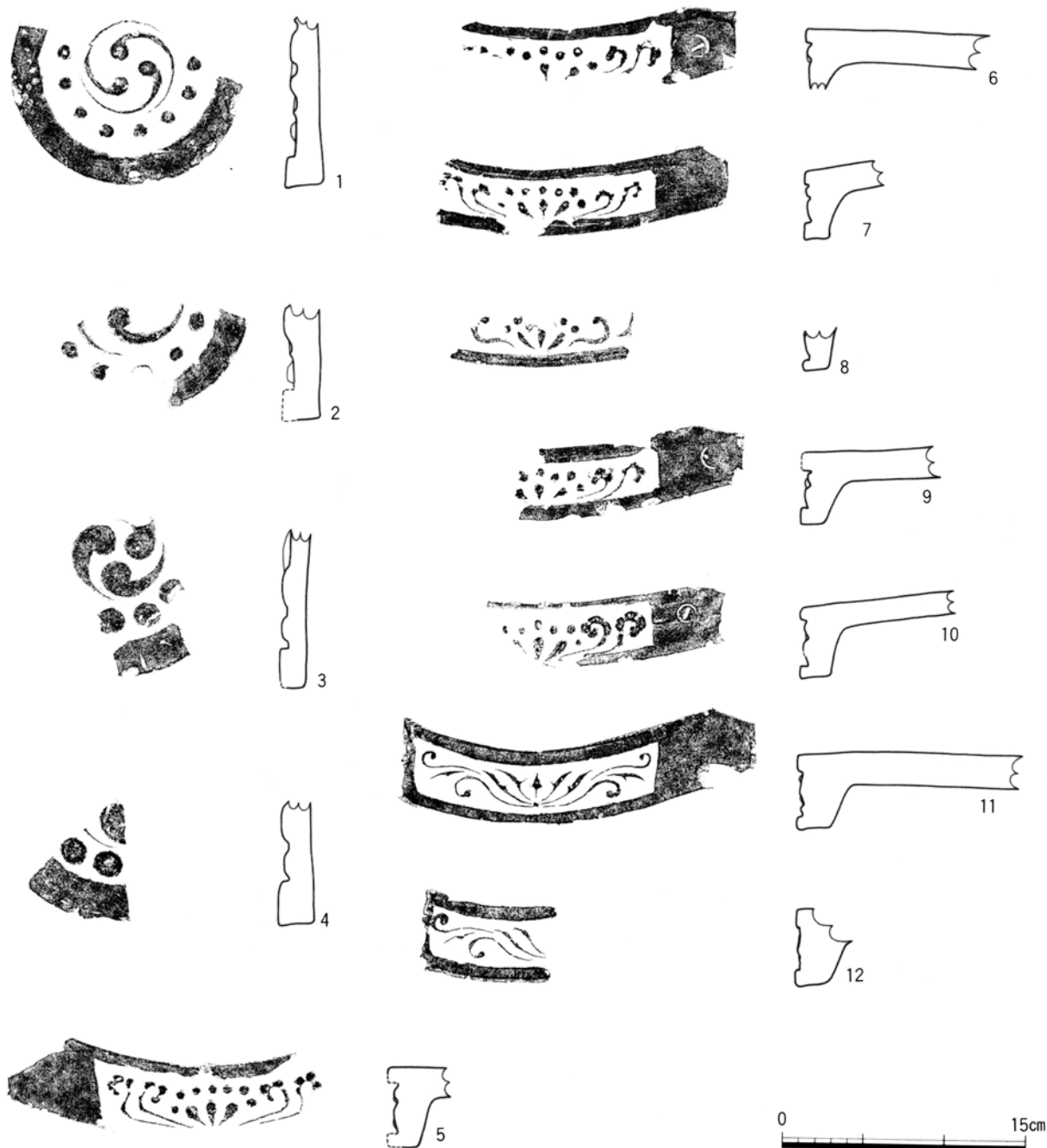
丸瓦（31・32） 凹部に、布製紐痕や棒状圧痕が全体にわたって見られる。側縁部の面取り角度が内側に傾斜している。凸面は、体部に篋磨きが施されている。

刻印のある瓦（33～38） 破片資料からの抽出のため、詳細は不明であるが、ここでは主な6点を図示した。33～37は平瓦、棧瓦の木口にあり、38は文様面に捺されている。文様面に刻印のある例としては、他に6・9・10がある。9は判別困難なものであるが、丸に二の字が捺されている。33は製作者の姓名と思われる「知多小八□長」という印が捺されている。製作者の刻印とすれば、供給元を示す資料として注目される。34・35のような刻印が最も多く、丸に一の文様である。36・37の山に本、38の丸に本は屋号ではないかと考えられる。

（伊藤直子）

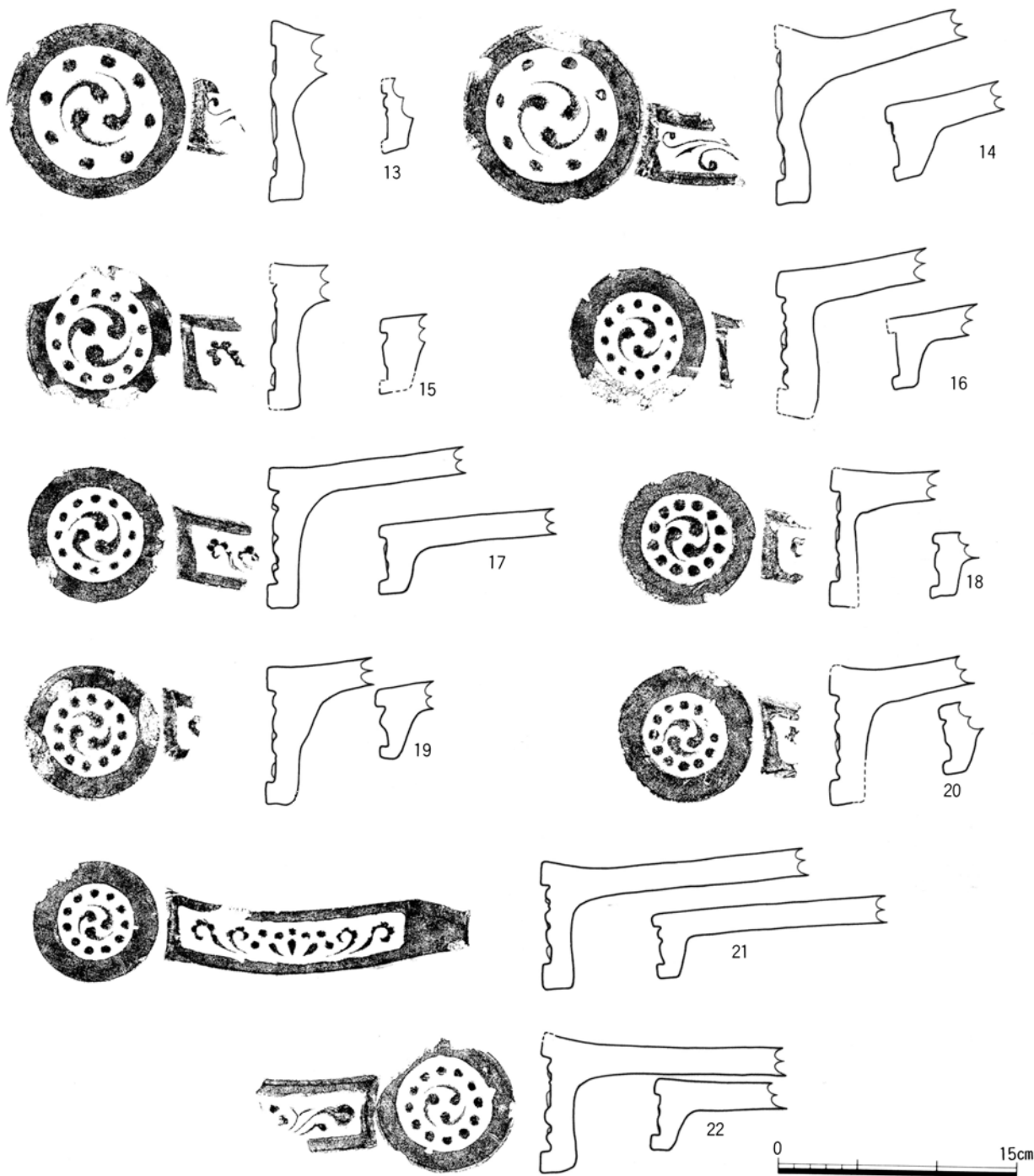
<参考文献>

『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 1990



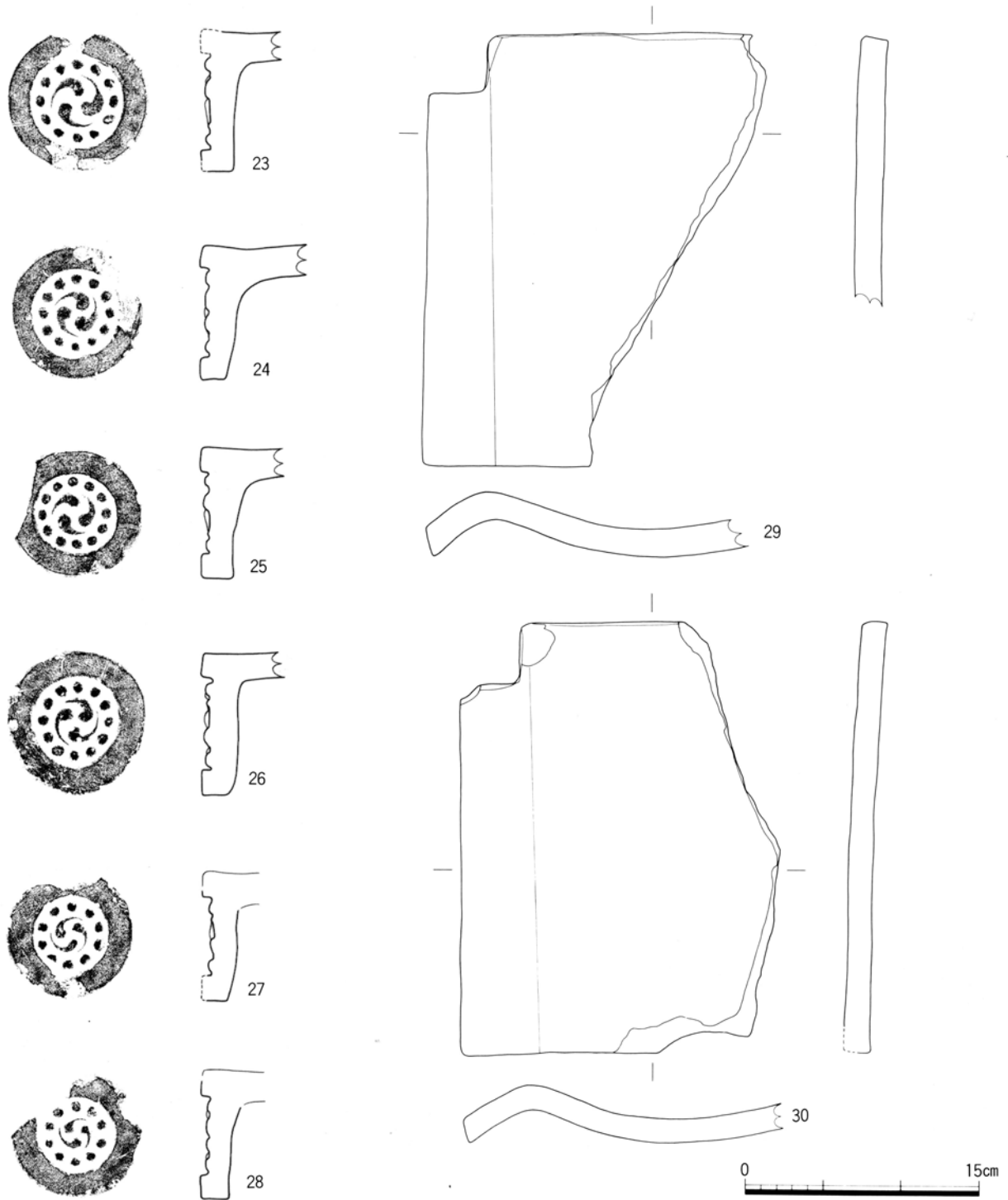
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類	軒丸部 (cm)				軒平部 (cm)				備考	登録 番号		
			径	内区径	珠文径	珠文数	巴径	幅	内区幅	厚さ			内区厚	
1	91D1 SK020	軒丸瓦	14.5	10.5	1.1	(8)	6.2	-	-	-	-		E-737	
2	〃 検I	〃	-	-	1.4	(5)	-	-	-	-	-		E-738	
3	91D2 整地層	〃	-	-	1.4	(3)	6.0	-	-	-	-		E-739	
4	〃 〃	〃	-	-	1.9	(2)	-	-	-	-	-		E-740	
5	〃 〃	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	4.9	3.1		E-741	
6	〃 〃	軒平部	-	-	-	-	-	-	-	4.6	3.0	軒平瓦か軒棧瓦, 刻印	E-742	
7	〃 SK240	〃	-	-	-	-	-	-	13.5	4.3	2.5	〃	E-743	
8	91D1 検I	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	〃	E-744	
9	91C SD024	〃	-	-	-	-	-	-	-	4.5	2.4	〃, 刻印	E-745	
10	91D1 検I	〃	-	-	-	-	-	-	-	4.3	2.9	〃, 〃	E-746	
11	91D2 SK240	〃	-	-	-	-	-	-	21.6	14.8	4.7	2.8	軒棧瓦	E-747
12	〃 〃	〃	-	-	-	-	-	-	-	4.8	2.7	〃	E-748	

第98図 近世の遺物 (48) 瓦類① (1:4)



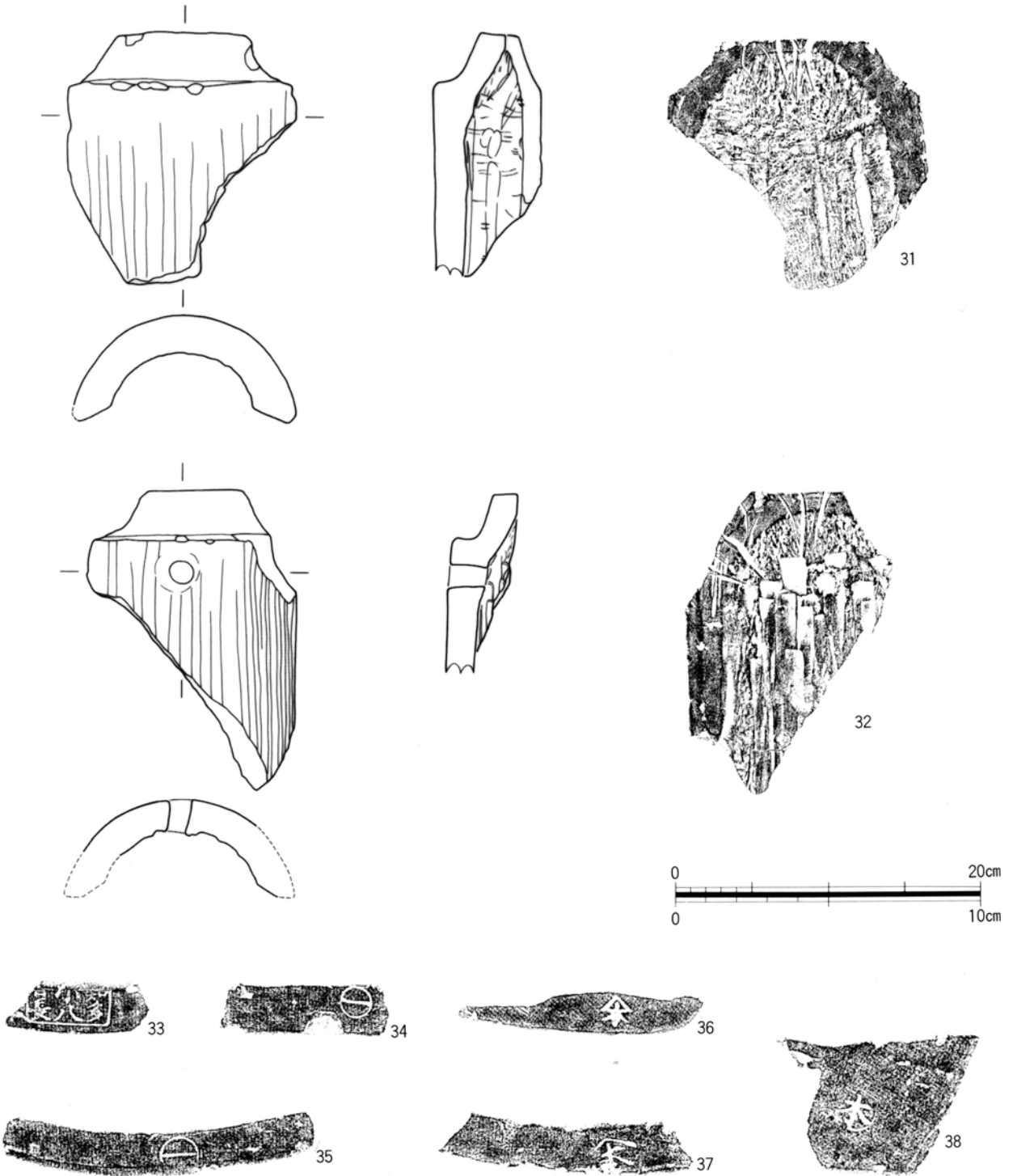
遺物 番号	調査地点		種類	軒丸部 (cm)					軒平部 (cm)				備考	登録 番号
	調査区	遺構		径	内区径	珠文径	珠文数	巴径	幅	内区幅	厚さ	内区厚		
13	91D1	SK014	軒棧瓦	11.5	8.2	1.2	8	5.0	-	-	4.7	2.8		E-749
14	〃	SD002	〃	11.6	8.3	1.1	8	5.1	-	-	4.7	2.8		E-750
15	〃	検I	〃	9.3	6.7	0.9	12	4.3	-	-	4.8	3.1		E-751
16	91D2	整地層	〃	8.9	6.0	0.9	12	3.1	-	-	4.5	2.9		E-752
17	91D1	SK019	〃	8.9	5.9	0.9	12	3.6	-	-	4.3	2.6		E-753
18	〃	SE002	〃	8.8	5.7	0.9	12	3.1	-	-	4.2	2.6		E-754
19	91D2	整地層	〃	8.7	5.8	0.9	12	3.1	-	-	4.2	2.5		E-755
20	91D1	SD002	〃	8.9	5.3	0.9	12	2.6	-	-	4.5	2.6		E-756
21	91D2	整地層	〃	8.2	4.9	0.8	11	3.7	19.5	14.0	4.2	2.5		E-757
22	91D1	SD002	〃	8.9	6.0	0.9	12	-	-	-	4.5	2.6		E-758

第99図 近世の遺物 (49) 瓦類② (1:4)



遺物 番号	調査地点		種 類	軒 丸 部 (cm)				軒 平 部 (cm)				備 考	登録 番号	
	調査区	遺 構		径	内区径	珠文径	珠文数	巴 径	幅	内区幅	厚 さ			内区厚
23	91D2	整地層	軒丸部	9.0	6.1	0.9	12	—	—	—	—	—		E-759
24	〃	〃	〃	8.8	5.8	1.0	12	—	—	—	—	—		E-760
25	〃	〃	〃	8.4	5.3	0.8	12	—	—	—	—	—		E-761
26	〃	〃	〃	9.4	5.9	1.0	12	—	—	—	—	—		E-762
27	〃	〃	〃	8.3	5.0	0.8	10	—	—	—	—	—		E-763
28	〃	〃	〃	8.3	4.9	0.9	10	—	—	—	—	—		E-764
29	〃	〃	棧瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	最大長20.5cm, 最大幅27.8cm, 厚さ1.9cm	E-765
30	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 20.2cm, 〃 27.6cm, 〃 1.6cm	E-766

第100図 近世の遺物 (50) 瓦類③ (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	種類	軒丸部 (cm)				軒平部 (cm)				備考	登録 番号	
			径	内区径	珠文径	珠文数	巴径	幅	内区幅	厚さ			内区厚
31	91D2	整地層	丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	最大長16.4cm, 最大幅14.8cm, 厚さ2.5cm	E-767
32	〃	〃	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 19.8cm, 〃 13.8cm, 〃 2.0cm	E-768
33	91D1	SK014	平か椀	-	-	-	-	-	-	-	-	刻印「知多小八□長」	E-769
34	〃	SK036	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 「丸に一」	E-770
35	91D2	SK240	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 「 〃 」	E-771
36	〃	整地層	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 「山に本」	E-772
37	〃	〃	〃	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 「 〃 」	E-773
38	〃	〃	軒平部	-	-	-	-	-	-	-	-	〃 「丸に本」	E-774

第101図 近世の遺物 (51) 瓦類④ (31・32は1:4, 他は1:2)

7. 人形・ミニチュア類

本項で対象とする遺物は、土師質・陶質・磁質の人形類とミニチュア類に限定し、陶磁器類の分類に含まれるものについては、その用途に準じて他項（4. 陶磁器類）において扱うものとする。また、出土地点を確定し得る資料が少量であったため、空間的な広がりあるいは集中を捉えるまでには至らなかった。形状を確認することのできたものは、人形類32点、ミニチュア類8点、その他（人形類やミニチュア類と限定できない小型製品）が23点で、総数にして63点であった。材質面から見てみると、土師質が大部分を占める。胎土の色調では淡橙色が多く、これと橙色とが4分の3を占め、残りはほとんどが白色系である。素地に施釉や着彩をしていたことがわかるものもあるが、本来どの程度の割合でそうした手が加えられていたかは明らかではない。

（1）人形類

人形類は土製品が主で、他に陶製、磁製のものがある。人物・動物を祖形とし、その多くは型起しによって成形されている。人形4点（7～10）は、手捻りである。型起しのものについては、型押しの際に使用した雲母粉の付着や内面に指頭圧痕が確認できる。

これらについてモチーフによる分類を行うと、以下のようになる。人物をモチーフとしたものには神像も含め、大黒天（1・2）、恵比寿（3）、天神（4・5）、人型（6～10）がある。すべて、土師質である。1の大黒天は、打出の小槌を右手に持して袋を背負い、俵の上に乗っている。俵には、宝珠が描かれているが、胸部にも同形でやや小振りの宝珠と思われるものが描かれている。陰刻部分に墨が残ることから、墨入れされていた可能性がある。2の大黒天は、やや小型であるが、全面に朱彩が残っている。3の恵比寿は両手で鯛を抱えるもので、中空で底部に穿孔がある。4は檀上の座像で、天神あるいは雛人形の男雛とも考えられる。5は全体に透明釉、衣など部分的には緑釉が施されていたようである。6は型起しの人物像で、着物の左袖と裾以外を欠損しているため特定はできない。7は童子と考えられる。8・9は脚部の作り方から他の製品との組合せが想定される。10は座像で、人物ではなく猿を象った可能性もある。11は色絵の唐子座像で、部分的に赤の彩色が残っている。型起し成形で中空であり、18世紀前半の有田の製品である。

動物をモチーフにしたものには、鳥（12・13・14・18）、猿（15）、馬（16・17）があり、このうち18は、鳩笛の形態に似ている。12・15・18が磁製の他は、すべて土師質製品である。12は11と同様に18世紀前半の有田産磁製品で、鳥の羽が赤と黒の彩色で描かれている。13・14はどちらも中空で型起し成形であり、13は頭部～肩部、14は尾部のみの残存であるが、ほぼ同形態のものと思われる。15の三猿は、胡粉を塗り全体に赤茶色の顔料が塗られていたようである。16・17の馬は、どちらも型作りの前後二枚合わせで、16には馬の鞍の上に手捻りの人形が乗せられていたようである。また、尾は線刻によって表現されている。17も同様の馬であると考えられるが、細部については明かではない。18は透明釉が施され、尾の部分に笛の吹き口があったものと思われる。

（2）ミニチュア類

ここでミニチュア類として扱うのは、日常雑器や建造物を模倣した小型の製品であるが、原型とは

実際の使用方法が異なるものとする。

形態が明確なものには、日常雑器をモチーフとした蓋(19)、風炉(20)、植木鉢(21)がある。19の磁質の釜の蓋は型作りであり、胡粉を塗った上に黄色の彩色が施されていたようである。20の風炉は、型作りで内面には指撫でによる成形痕が見られる。底部外面に三足が付いていたと考えられる形跡があり、完形品では三足付きの風炉であったと思われる。21の植木鉢は、ろくろ成形で素焼きの陶器である。底部に径約6mmの孔があいている。建造物をモチーフとしたものとして家(22)があり、型起こしで対角線で二つ合わせになっている。

(3) その他

(1)・(2)に含まれないものとして、面(23・24)、面型(25)、土製の鈴(26~28)、六角形の台座(29)、扇型製品(30)、松の実を象った製品(31)が出土している。23は岡女を象った面であり、その緻密な胎土から京都伏見産であることがうかがわれる。裏面には左右に梁が渡されており、その中央にある穿孔は紐を通すため、あるいは金具に刺すためにあけられたのではないだろうか。24は帽子を被った翁の面で、目の部分に穿孔があり、目・眉・髪などに黒の彩色の痕が残っている。25の面型には、型を使用して面を作成した際の雲母粉が見られる。額に三本の皺が刻まれている。26・27・28は土鈴であり、表面に朱彩が残っている。内部に土玉が入ったものが2点ある。29の台座は上面に剝離痕が認められ、二段になった台座の周囲には型押しで付けられた文様が残されている。30は扇型に、型押しの日の出・松の木・岩が表現されているものだが、単独で存在していたとは考えがたい。31は白磁製で、欠損状態から他の製品の一部とも思われる。(伊藤直子)

<参考文献>

塩見青嵐 『伏見人形』 河原書店 1967

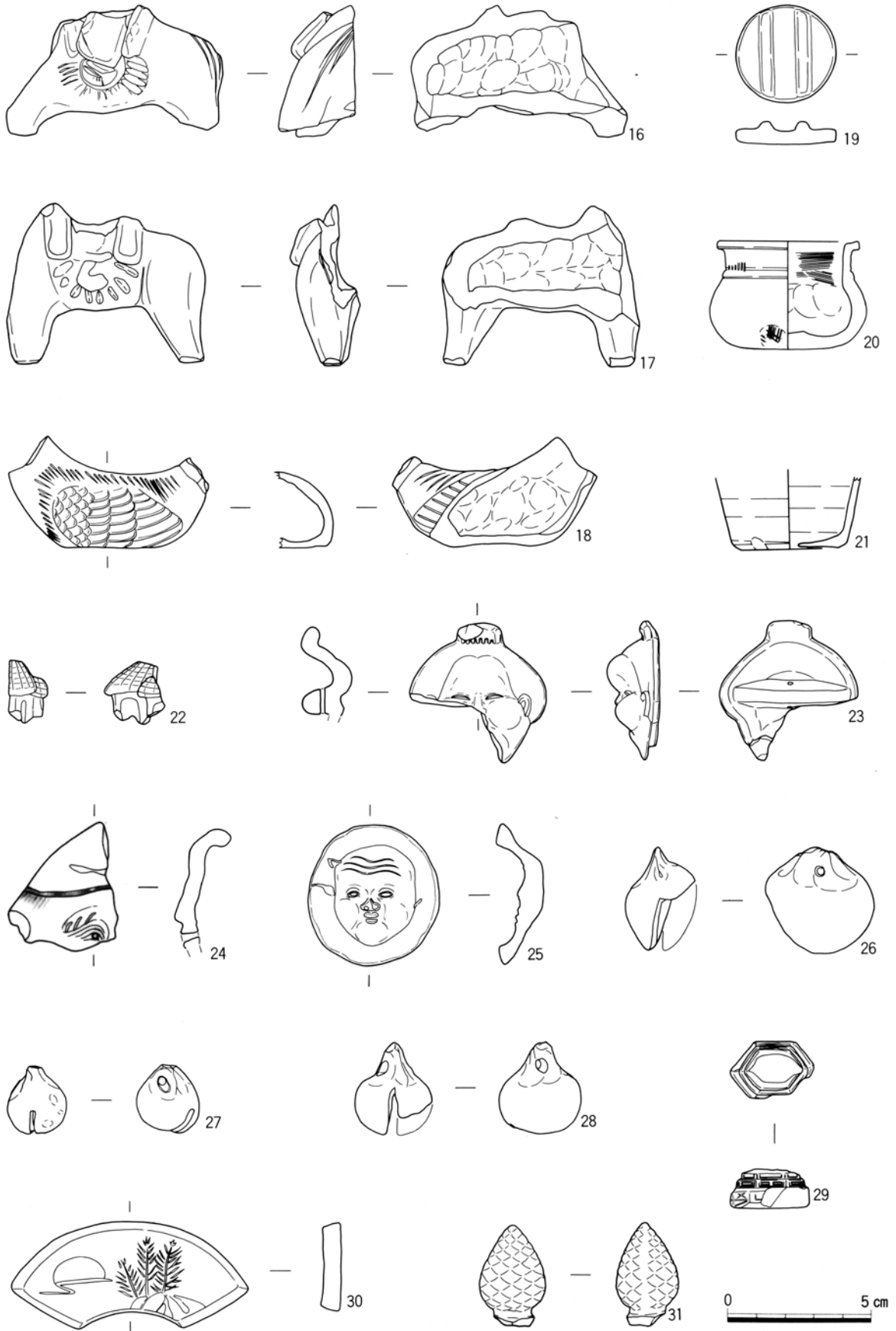
『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』 (助愛知県埋蔵文化財センター 1992)

遺物番号	調査区	地点	遺構	材質	釉薬	種類		成形技法	法量 (cm)			備考	登録番号
						種類	形状		高さ	最大幅	その他		
1	91B	SD025	土師質	—	—	人形類	大黒天	型作り	4.5	2.7	奥行1.7	墨入れか、底部穿孔	E-775
2	91D1	検Ⅰ	—	—	—	—	—	—	3.4	2.1	— 2.1	外面に雲母付着	E-776
3	92B	南壁	—	—	—	—	恵比寿	—	5.1	2.8	— 1.3	底部穿孔	E-777
4	91D1	SD002	—	透明釉	—	—	天神	—	3.2	3.7	— 0.8	緑釉かかる	E-778
5	92B2	整地層	—	—	—	—	—	—	2.5	3.0	— 1.6	底部穿孔	E-779
6	91D1	検Ⅰ	—	—	—	—	人型	—	3.8	3.4	— 1.5	底部穿孔	E-780
7	92B1	SK057	—	—	—	—	—	手捻り	3.2	2.3	— 1.3	—	E-781
8	—	SK077	—	—	—	—	—	—	4.1	3.4	— 1.6	馬乗りか	E-782
9	92B	トレンチ	—	—	—	—	—	—	3.3	3.0	— 1.9	—	E-783
10	—	南壁	—	—	—	—	—	—	4.2	3.2	— 1.8	—	E-784
11	91D2	SD202	磁質	透明釉	—	—	—	—	2.3	3.0	— 4.3	色絵(赤)	E-785
12	91D1	検Ⅰ	—	—	—	—	鳥	—	5.7	1.1	— 4.0	色絵(赤・黒)、鶏か	E-786
13	91D2	SX201	土師質	—	—	—	—	型作り	4.6	3.2	— 1.5	—	E-787
14	91B	SD025	—	—	—	—	—	—	3.1	3.0	— 4.2	底部穿孔	E-788
15	92B	表土	磁質	—	—	—	猿	—	2.9	4.6	— 2.5	赤茶色の彩色、三猿	E-789
16	91D2	SK228	土師質	—	—	—	馬	—	4.5	7.3	— 1.6	人乗せ	E-790
17	92B1	検Ⅰ	—	—	—	—	—	—	5.6	6.7	— 2.1	—	E-791
18	91D1	—	磁質	透明釉	—	—	鳥	—	3.8	7.1	— 3.3	鳩笛	E-792
19	—	—	—	—	—	ミニチュア類	蓋	—	1.9	3.4	厚さ0.7	黄色の彩色	E-793
20	—	SK011	土師質	—	—	—	風炉	—	3.7	5.5	底径3.0、口径4.9	三足付きか	E-794
21	91D2	整地層	陶質	—	—	—	植木鉢	ろくろ	2.5	5.0	底径3.4	—	E-795
22	92B1	SK068	土師質	—	—	—	家	型作り	2.2	1.9	— 1.3	—	E-796
23	92B	トレンチ	—	—	—	その他	岡女面	—	5.9	4.8	— 1.8	胎土はきめ細かく褐色	E-797
24	91C	SD025	—	—	—	—	翁面	—	4.2	3.8	—	眼・眉・髪等に黒彩色	E-798
25	92B1	SD011	—	—	—	—	面型	—	4.9	4.6	奥行0.9	内面に雲母粉を残す	E-799
26	91D2	整地層	—	—	—	—	土鈴	手捻り	3.7	3.2	—	赤色の彩色	E-800
27	92B2	—	—	—	—	—	—	—	2.4	2.1	—	赤色の彩色、土玉入り	E-801
28	—	—	—	—	—	—	—	—	3.3	2.8	—	土玉入り	E-802
29	91D1	SK011	—	—	—	—	台座	型作り	1.4	2.9	奥行1.9	六角形	E-803
30	91C	検Ⅰ	—	—	—	—	扇形製品	—	3.2	8.4	厚さ0.7	日の出・松の木・岩	E-804
31	92B1	SD011	磁質	透明釉	—	—	松の実	—	3.5	2.4	奥行2.4	—	E-805

第28表 人形・ミニチュア類観察表



第102図 近世の遺物 (52) 人形・ミニチュア類① (1:2)



第103図 近世の遺物 (53) 人形・ミニチュア類② (1:2)

8. 木製品

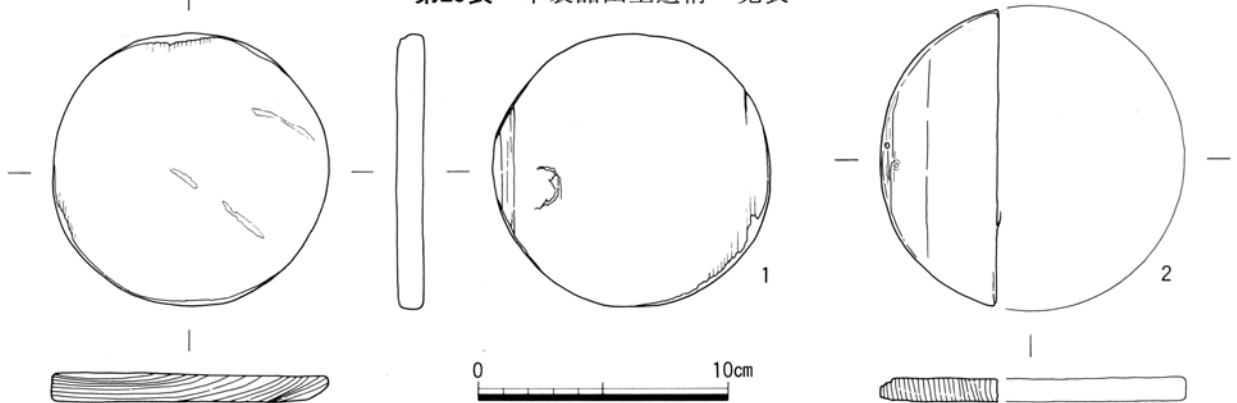
本遺跡の遺構や整地層などより出土した木製品は、用途不明のものまで含めると破片で48点ある。遺構より出土したものは少なく、また全体の点数も少ないために、木製品の詳細な分類は実施していない。出土した遺物は、下駄が11点、箸が4点、曲物の底が3点、椀・桶の横板・箱の一部が各2点、建具・扇・栓・刷毛などが各1点、不明のものが20点であり、他に漆片が91D2区で検出されたSK101・SK127から出土している。

1・2は曲物の底板で、径が10cm前後の小型品で、柄杓のようなものと想定される。側板も一部出土しており、かなり薄く削られ接合部分には桜の皮が用いられていたようである。3～5は下駄で、3・4は一木造り、5は差し歯のもので、焼印が見られる。全体的に、一木造りの下駄が多いように思われる。6は漆椀であり、黒漆が内外面に塗られてはいるが、文様のような加飾は見られない。7は箱の一部と思われるが、外面には黒漆が塗られ、上部には金具が取り付けられている。8は箸であり、他に同様の大きさのものが3本出土している。9は底部にピンのような金具があることから扇子の要の部分、10は刷毛の柄の部分と思われる。11は竹製で、用途は不明である。12は桶の側板と思われるが、その径の大きさから大型の製品であることが想定される。13は建具の一部と見られる。

今回の調査では、遺構より出土した木製品が少ないとはいえ、居住域と考えられる91D区や92B区の区画溝や井戸、水田の用水の溝などから多く出土している。 (小嶋廣也)

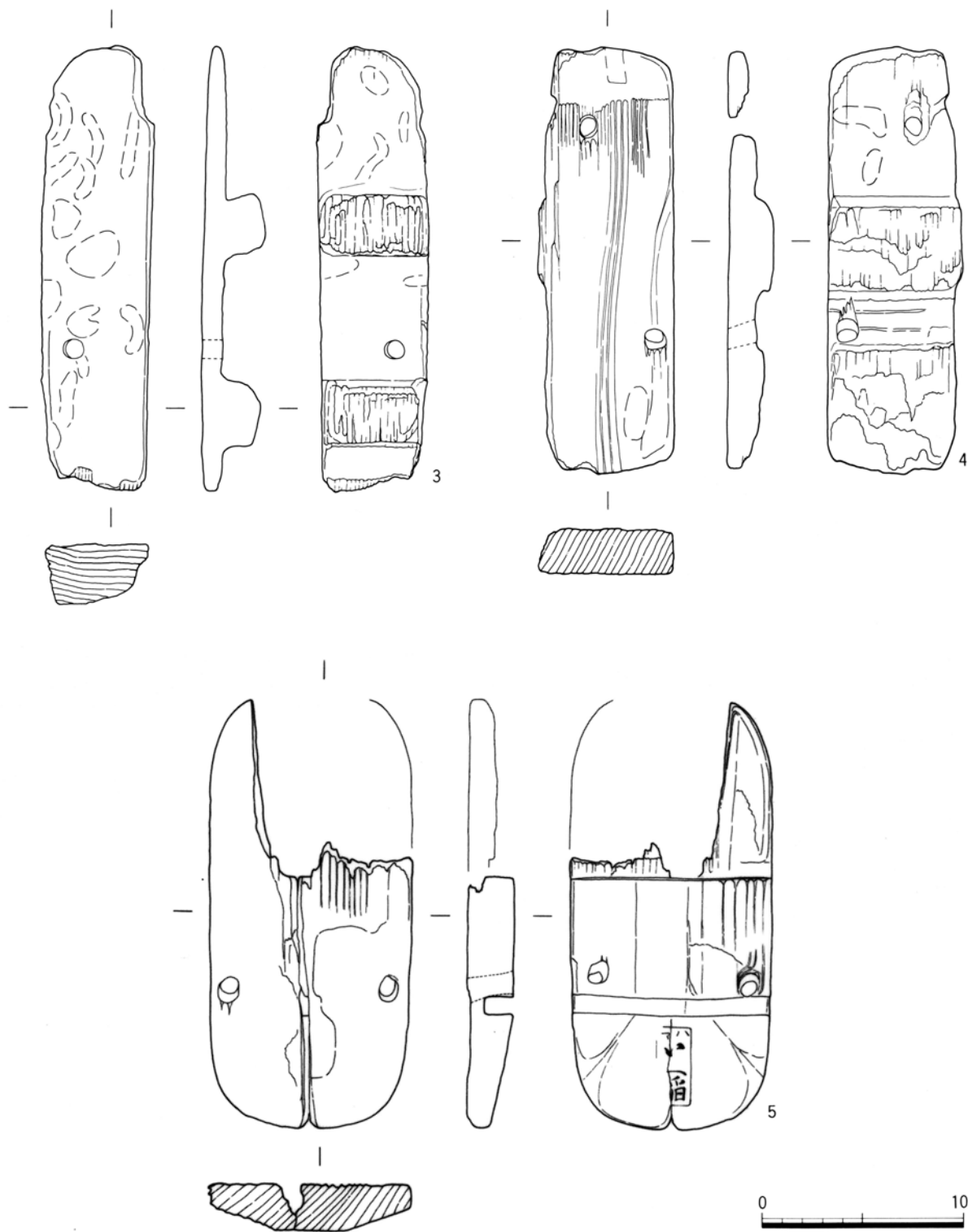
調査区	92B1	92B1	92B1	92B1	92B1	92B1	91C	91C	91D2	92B2	その他	計
遺構番号	SD011	SD014	SK086	SK090	SE004	SE006	SD025	SK125	整地層	整地層		
椀											2	2
箸										1	3	4
曲物							1		1		1	3
桶							1				1	2
下駄	3				1		2		2		3	11
箱								1			1	2
扇											1	1
刷毛											1	1
建具											1	1
栓											1	1
用途不明	2	1	1	2	1	2	2			1	8	20
計	5	1	1	2	2	2	6	1	3	2	23	48

第29表 木製品出土遺構一覧表



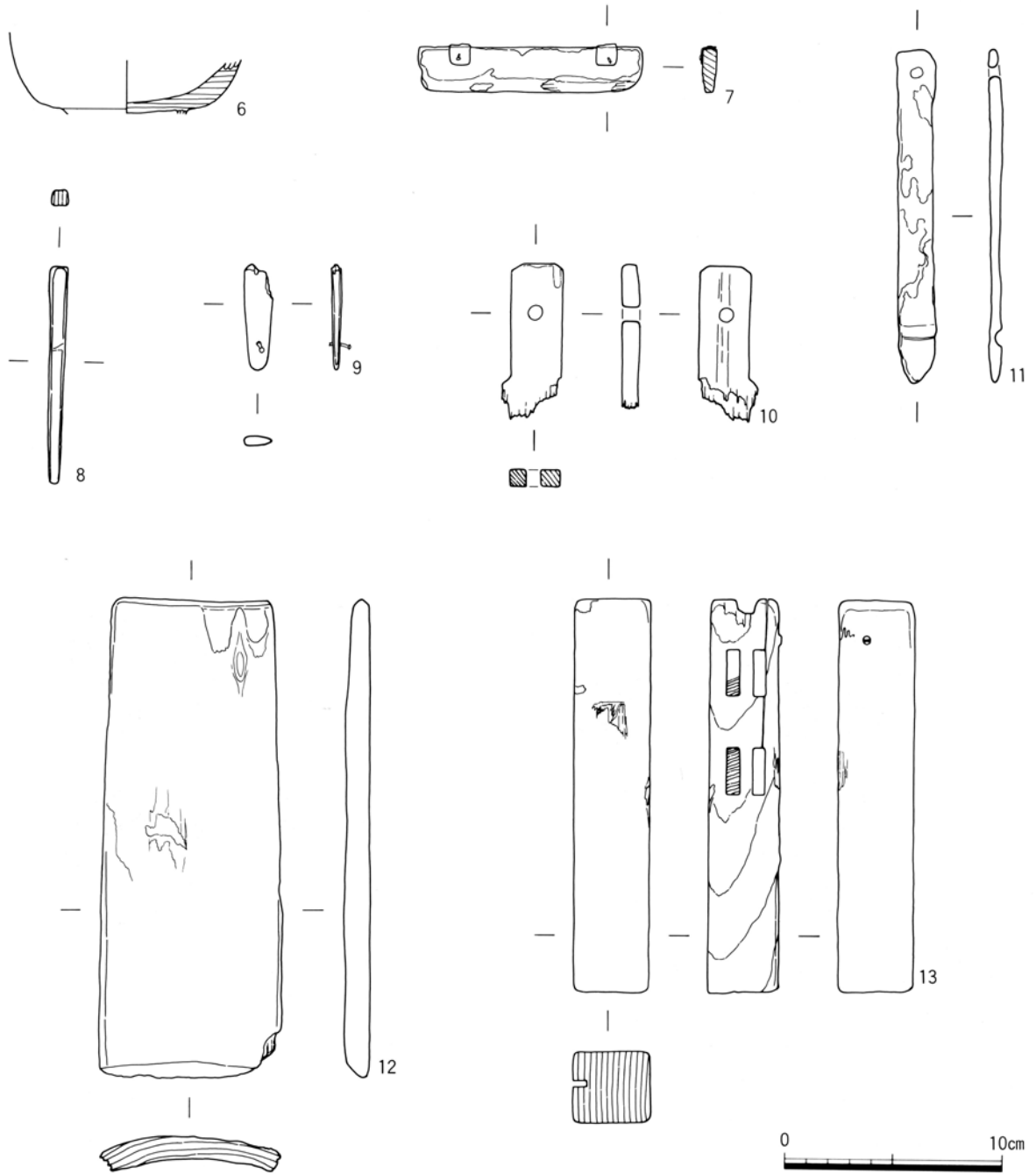
遺物番号	調査地点		種類	法量 (cm)			備考	登録番号
	調査区	遺構		長さ	幅	厚さ		
1	91D2	整地層	曲物の底	10.9	—	1.2		W-001
2	92B1	トレンチ	〃	12.3	—	1.0		W-002

第104図 近世の遺物 (54) 木製品① (1:3)



遺物 番号	調査地点		種類	法量 (cm)			備考	登録 番号
	調査区	遺構		長さ	幅	厚さ		
3	91C	SD025	下駄	21.8	—	2.9	一木造り	W-003
4	91D2	整地層	〃	20.8	—	2.2	一木造り	W-004
5	91D1	検I	〃	20.2	9.8	2.3	差し歯, 焼印	W-005

第105図 近世の遺物 (55) 木製品② (1:3)



遺物 番号	調査地点		種類	法量 (cm)			備考	登録 番号
	調査区	遺構		長さ	幅	厚さ		
6	91D	南トレンチ	漆碗	—	—	—	内外面黒漆	W-006
7	91C	SK125	箱	10.2	2.2	0.7	外面黒漆	W-007
8	91D	南トレンチ	箸	9.9	—	0.8		W-008
9	91D1	検Ⅰ	扇か	—	1.3	0.4		W-009
10	91D2	検Ⅱ	刷毛か	—	2.3	0.8		W-010
11	91C	SD025	不明	15.0	1.8	0.6		W-011
12	〃	〃	桶	21.8	8.3	1.2		W-012
13	91D1	検Ⅰ	建具	17.9	3.5	3.3		W-013

第106図 近世の遺物 (56) 木製品③ (1:3)

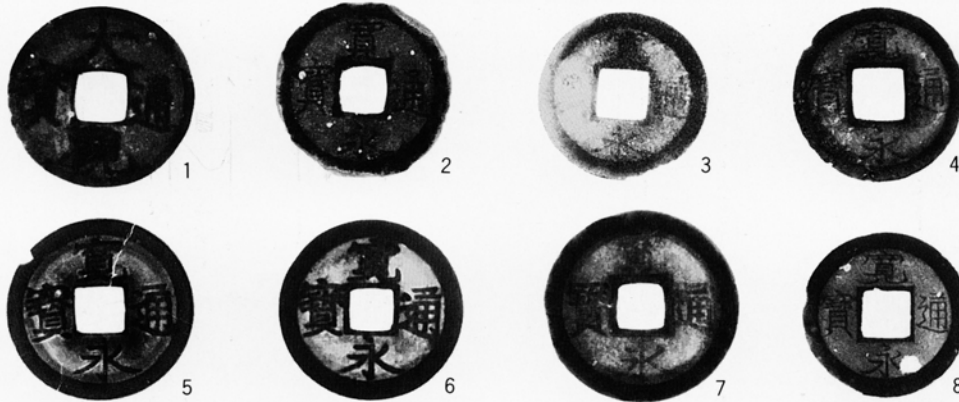
9. 金属製品

本遺跡の遺構や整地層などから出土した金属製品は、銅・真鍮製品が19点、鉄製の釘や針金、鎌の刃などが出土している。残念ながら鉄製品については、明確な形状を残しているものが非常に少ない。ここでは、銅・真鍮製品のみを扱うこととする。

銅・真鍮製品では、銭貨が15枚出土しており、1枚は大観通宝で、他は全て寛永通宝である。古寛永が7枚、新寛永が4枚で、判別できないものが3枚である。他に、煙管が2点あり、雁首・吸口が各1点ずつ出土している。9は真鍮製の雁首で、火皿がやや小さく脂返しの部分の湾曲がなくなっており、新しい時期のものと想定される。10は吸口で、ラウとの接合部分に段があり、やや古い時期のものと考えられる。11は半球状の形態をしており、用途は不明である。(小嶋廣也)

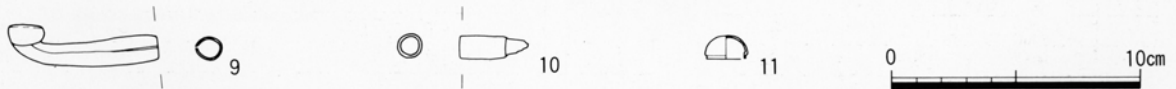
調査区	91D1	91D1	91D1	92B2	その他	計
遺構番号	SK019	SK021	SK036	整地層		
銭貨	大観通宝			1		1
	古寛永通宝	1	1		5	7
	新寛永通宝			1	3	4
	不明				3	3
煙管	雁首				1	1
	吸口				1	1
不明	1				1	2
計	2	1	1	2	13	19

第30表 金属製品出土遺構一覧表



遺物番号	調査地点		種類	材質	法量 (cm・g)			備考	登録番号
	調査区	遺構			径	孔径	重さ		
1	92B2	整地層	大観通宝	銅	2.4	0.7	2.9	北宋銭, 1107年初鑄	M-001
2	91D1	SK019	寛永通宝	〃	2.3	0.6	2.8	古寛永	M-002
3	〃	SK021	〃	〃	2.2	0.7	1.8	〃	M-003
4	〃	SK036	〃	〃	2.3	0.7	2.0	新寛永	M-004
5	〃	検I	〃	〃	2.5	0.6	2.0	古寛永	M-005
6	91D	トレンチ	〃	〃	2.4	0.6	2.2	〃	M-006
7	91D1	検I	〃	〃	2.5	0.6	3.0	新寛永	M-007
8	92B	トレンチ	〃	〃	2.2	0.7	2.3	〃	M-008

第107図 近世の遺物 (57) 金属製品① (1:1)



遺物番号	調査地点		種類	材質	法量 (cm・g)			備考	登録番号
	調査区	遺構			首の長さ	火皿径	高さ		
9	91D	南トレンチ	煙管 (雁首)	真鍮	6.0	1.4	2.2		M-009
10	92B2	整地層	〃 (吸口)	銅	1.1	-	-		M-010
11	91D1	SK019	不明	〃	高さ 0.9	径 1.6	-		M-011

第108図 近世の遺物 (58) 金属製品② (1:3)

10. 石・ガラス製品

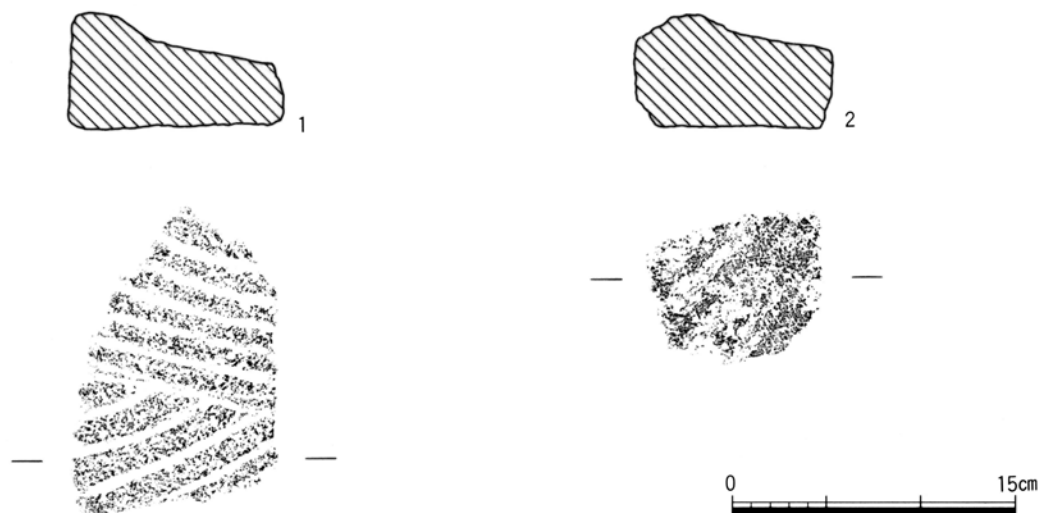
本遺跡の遺構や整地層などから出土した石・ガラス製品は78点あり、すべて石製品である。石製品では、砥石が58点と多く、硯が9点、石臼が8点、碁石（黒石のみ）が3点である。

1～3は、花崗岩製の石臼である。すべて上臼であり、上縁・くぼみが確認され、目が刻まれている。4～10は砥石で、頁岩製のものがほとんどであるが、6は泥岩製、9が砂岩製である。11は碁石で、頁岩（那智黒石）製の黒石で、他の1点も黒石であり、白石は出土していない。12～18は、硯で、頁岩製のものが多いが、14・16は泥岩製である。12・13には文字が刻まれ、「外町中」や「大」・「冬」と読み取れる。また、16では両面に使用痕が確認される。

ガラス製品については、明治以降の瓶類が多く、明確に江戸時代と断定できるものがないため、今回は図示していない。（小嶋廣也）

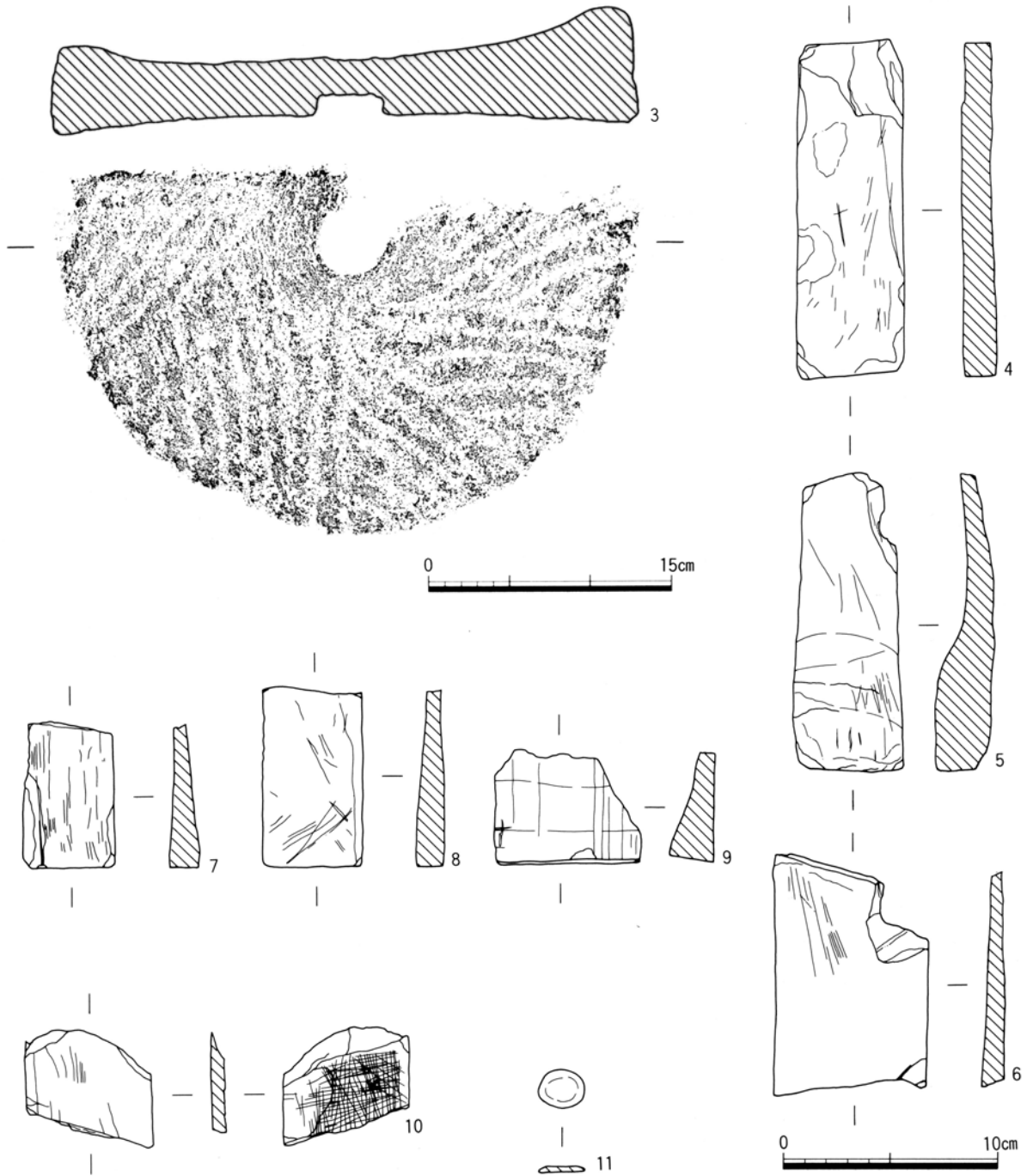
調査区	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D2	91D2	91D2	92B1	92B1	92B1	92B2	92B2	91C	91C	91B	91D	92B	その他	計
遺構番号	SD001	SK010	SK014	SK018	SK030	SK036	SK209	SK223	SK228	SD011	SD013	SE006	SK289	SE201	SD025	SK115	SD025	整地層	整地層		
石 臼	2							1										2		3	8
砥 石		1	1	1	1	3	1		2	1	1	2	1	1	1	1	2	12	8	17	58
硯		1																2	1	4	9
碁 石																	1			2	3
計	2	2	1	1	1	3	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	3	16	9	26	78

第31表 石製品出土遺構一覧表



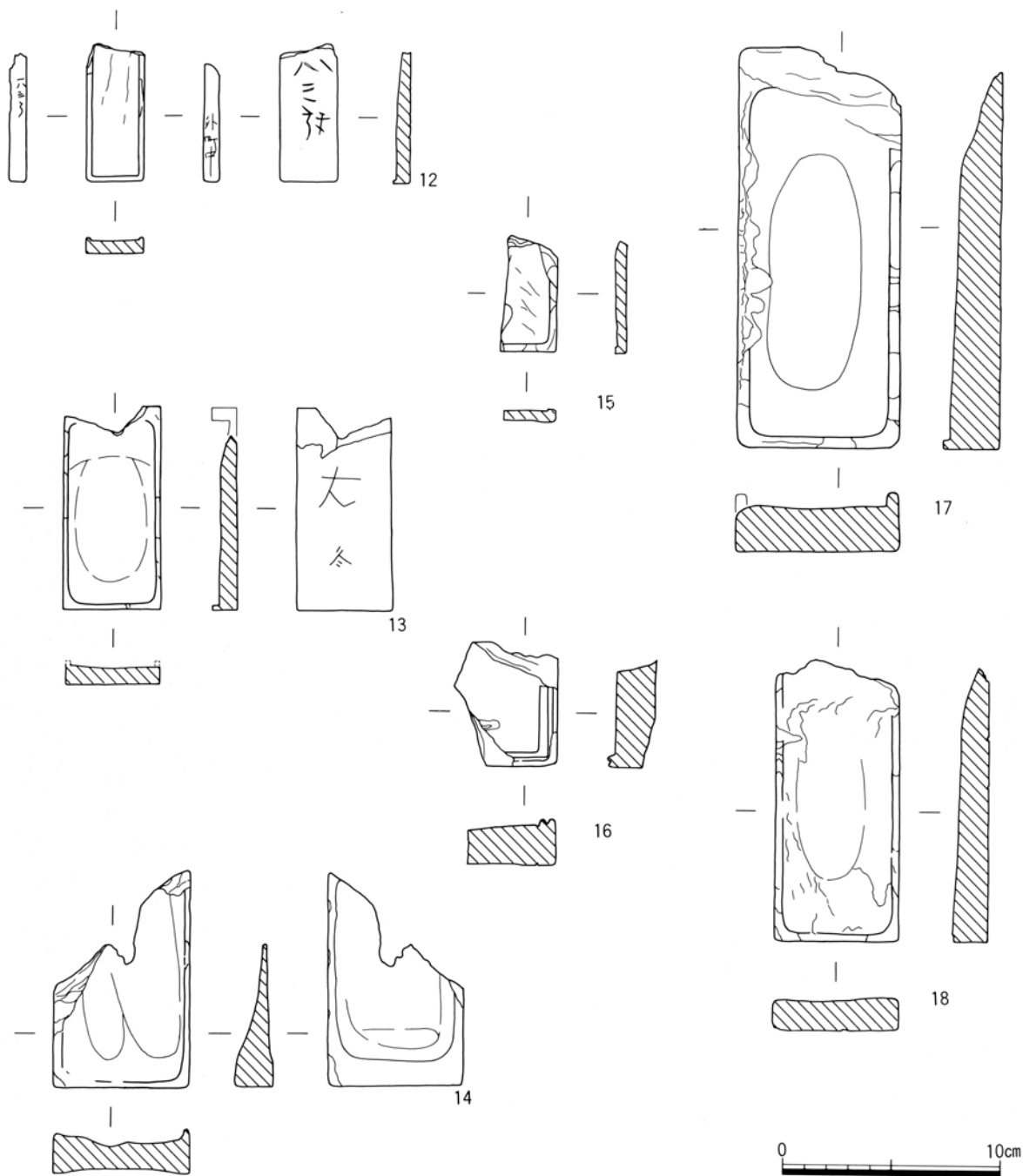
遺物番号	調査地点		種類	法量 (cm)			石材	備考	登録番号
	調査区	遺構		厚さ	長径	短径			
1	91D2	整地層	石臼	6.2	-	-	花崗岩	上臼	S-001
2	〃	SK223	〃	-	-	-	〃	〃	S-002

第109図 近世の遺物 (59) 石製品① (1:4)



遺物 番号	調査地点		種類	法量 (cm)			石材	備考	登録 番号
	調査区	遺構		厚さ	縦	横			
3	91D2	整地層	石臼	5.4	—	—	花崗岩	上臼, 径34.9cm	S-003
4	91D1	SK010	砥石	1.5	15.4	4.9	頁岩		S-004
5	91D2	検II	〃	2.6	—	5.1	〃		S-005
6	91B	SD025	〃	0.9	—	7.0	〃		S-006
7	91D1	検I	〃	1.3	—	4.1	泥岩		S-007
8	91D2	整地層	〃	1.3	—	4.6	頁岩		S-008
9	91B	SD025	〃	2.0	—	6.1	砂岩		S-009
10	91D	表土	〃	0.7	—	5.3	頁岩		S-010
11	91B	SD025	基石	0.3	—	—	那智黒石	黒色珪質頁岩, 黒石, 径2.1cm	S-011

第110図 近世の遺物 (60) 石製品② (3は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		種類	法 量 (cm)			石 材	備 考	登録 番号
	調査区	遺 構		厚さ	縦	横			
12	91D1	検 I	硯	0.8	—	2.7	頁岩	両側面・裏に刻文字あり	S-012
13	〃	SK010	〃	1.1	—	4.4	〃	裏に刻文字あり	S-013
14	〃	検 I	〃	2.0	—	6.2	泥岩	両面使用痕あり	S-014
15	〃	SK018	〃	0.6	—	—	頁岩		S-015
16	91D2	整地層	〃	2.0	—	—	泥岩	火山灰を含む	S-016
17	91D1	検 I	〃	2.6	—	7.5	頁岩		S-017
18	91D2	整地層	〃	1.7	—	5.7	〃		S-018

第111図 近世の遺物 (61) 石製品③ (1:3)

第IV章 科学分析



第IV章 科学分析 目次

第1節 ^{14}C 年代測定	107
第2節 出土木製品の樹種	108
第3節 胎土重鉍物分析	110

第1節 ^{14}C 年代測定

1. 試料

試料は、外町遺跡（愛知県西春日井郡新川町所在）の基盤層から出土した木片3点である（ ^{14}C - 1～3）。外町遺跡は、清洲城下町遺跡の外側にある中・近世の遺跡である。

今回は、基盤層の年代を知るために ^{14}C 年代測定を行い、さらに樹種同定も行った。

2. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3. 結果

結果は、以下の通りである。

試料No.	年代（1950年よりの年数）	Code No.	樹種同定結果
^{14}C - 1	$2390 \pm 80\text{y. B. P.}$ （440 B. C.）	GaK-16020	モミ属の一種
^{14}C - 2	$2560 \pm 80\text{y. B. P.}$ （610 B. C.）	GaK-16021	マツ属複維管束亜属の一種
^{14}C - 3	$2100 \pm 80\text{y. B. P.}$ （150 B. C.）	GaK-16022	モミ属の一種

4. 考察

測定の結果、2,560～2,100年前（いずれも±80年）となった。これらの年代は、縄文時代晩期後半に相当し、外町遺跡の基盤層とした年代観とどうであろうか。今回の試料は、遺跡の立地する地形・地理および試料採取位置の基本層序が知られていなかったため、年代観についての検討はできない。

第2節 外町遺跡より出土した木製品の樹種

1. 試料

外町遺跡は、愛知県西春日井郡新川町・清洲町に位置する中・近世の遺跡である。試料は、本遺跡の基盤層である砂層から出土した木片3点である。基盤層の年代は、放射性炭素 (^{14}C) 年代測定法により、約 2,600～2,100年前と考えられる。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柁目・板目の3断面の徒手切片を作成、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

3. 結果

試料はC-1、C-3がモミ属の一種に、C-2がマツ属複維管束亜属の一種に同定された。試料の細胞学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxylo* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1～15細胞高。

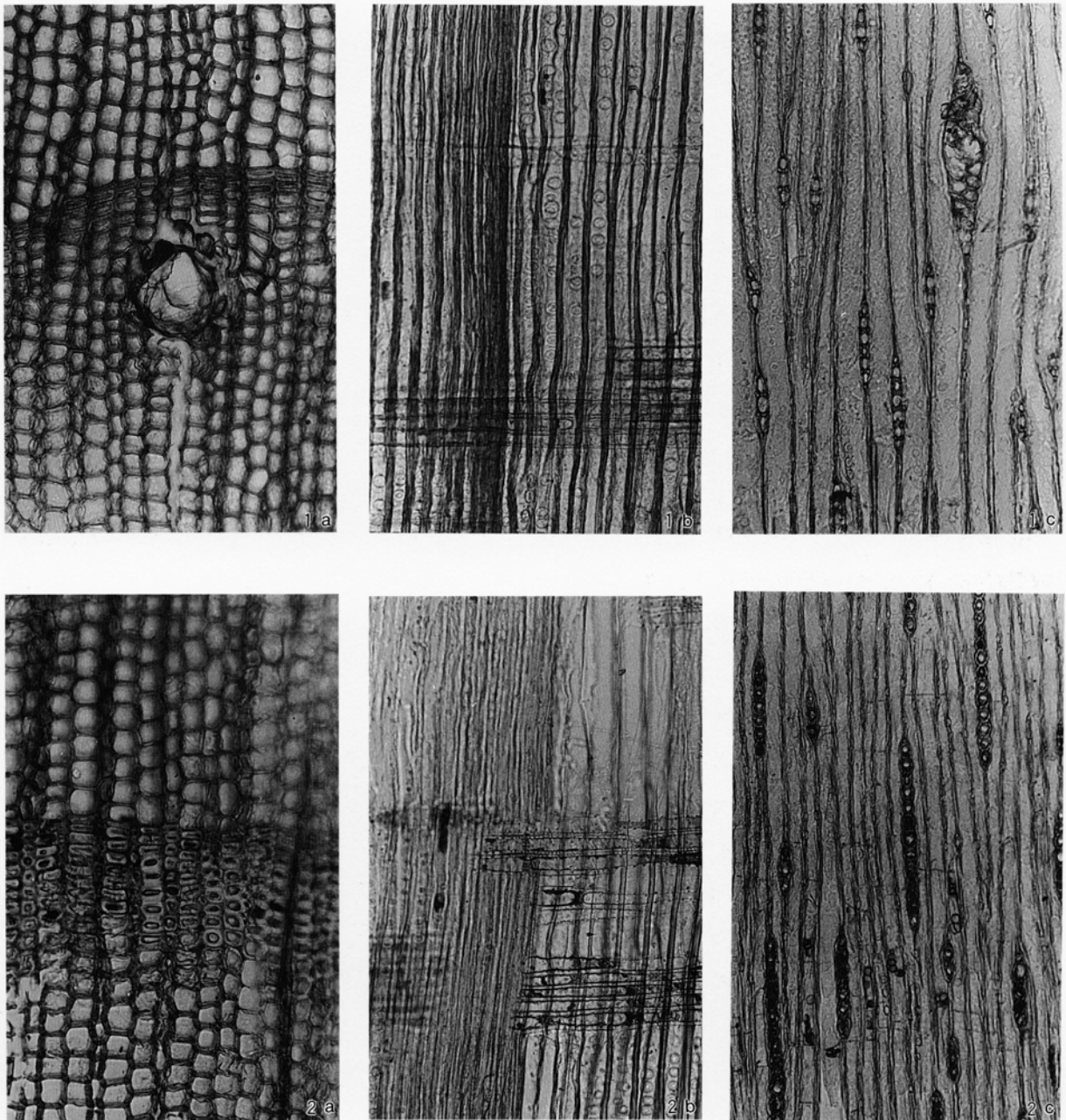
複維管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。

・モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は粗く、末端壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州(福島県以北)の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、アカト

ドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。



1. マツ属複維管束亜属の一種 (C-2) a (木口) ×77, b (柁目) ×77, c (板目) ×77
2. モミ属の一種 (C-1) a ×77, b ×77, c ×77

第112図 材の顕微鏡写真

第3節 胎土重鉍物分析

はじめに

外町遺跡では、江戸時代の美濃街道沿いの町屋の状況が発掘され、瀬戸・美濃産の陶磁器類が多量に出土している。さらに、在地とされている内耳鍋や焙烙などの土器も認められている。これら江戸時代の在地とされている土器は、その生産地や流通、時期的変遷など研究されてはいるが、陶磁器類などに比べると不明な部分はまだまだ多いといえる。

本分析は、在地とされている土器の鍋と焙烙の胎土の状況を把握し、そこから上記の問題について検討を行うことを目的とする。愛知県下の遺跡より出土した土器の胎土については、これまでの弥生土器から江戸時代の瓦に至るまでの多数の分析例から、ある程度の時代を越えた地域性が認められている。本分析でも主にこれらの結果との比較から考察を進める。また、出土例の豊富な近世遺跡における土師質皿や焙烙の胎土とも比較を行い、「在地」という意味の検証もしたい。

1. 試料

試料は、愛知県下5ヶ所の遺跡から出土した鍋または焙烙30点である。内訳は、外町遺跡10点（試料番号1～10）、清洲城下町遺跡5点（試料番号11～15）、名古屋城三の丸遺跡5点（試料番号16～20）、清水遺跡5点（試料番号21～25）、吉田城遺跡5点（試料番号26～30）である。地域的にみれば、外町遺跡と清洲城下町遺跡は濃尾平野中部地域であり、名古屋城三の丸遺跡は濃尾平野中東部、清水遺跡は西三河地域であり、吉田城遺跡は東三河地域とすることができる。

各試料の出土した調査区、遺構及び器種は、分析結果を呈示した第33表と第114図に併記する。

2. 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉍物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄措置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をポリタングステン製ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質などで同定の不可能な分子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉍物を呈示するにとどめる。

3. 分析結果

30点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは4点のみであった。これまでの重鉍物を十分に得られた試料の分量に比べて、今回の試料の分量は特に少ないとはいえない。したがって、今回の試料の胎土は、特に重鉍物の含量が少ないということをまず指摘できる。このような状況から、分

析結果は、ほとんど主な鉱物を呈示するだけになった。以下に各遺跡ごとに結果を述べる。(第33表・第114図)

(1) 外町遺跡試料

10点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは、試料番号6と7の2点のみである。また、試料番号2については、ほぼ100個に近いとみて組成を呈示する。試料番号2は、不透明鉱物が最も多く、少量の角閃石、ジルコン、ザクロ石を伴う。角閃石は、他の2鉱物よりもやや多い。この組成は、これまでの愛知県の土器胎土における「西三河型」に相当する。試料番号6は、「その他」が最も多いが、それを除けば斜方輝石が最も多く、少量の角閃石と不透明鉱物、微量の単斜輝石とザクロ石を含む。この組成は、いわゆる「両輝石型」であり、濃尾平野中部の土器に多いA類(平成5年報告朝日遺跡胎土分析)に相当するとみることができる。試料番号7も「その他」が非常に多いが、それを除けば不透明鉱物が少量含まれ、微量の斜方輝石、角閃石、酸化角閃石、ジルコンを伴う。不透明鉱物以外の鉱物が微量なため、「西三河型」にも「両輝石型」にも明瞭に分類することはできない。しかし、類似した組成は、勝川遺跡や月縄手遺跡など濃尾平野東部の遺跡から出土した土器に比較的多く認められる。

同定粒数100個未満の試料では、試料番号3、4、8、9の4点は、同定粒数が20個以下のため、主な鉱物を呈示することもしない。他の試料のうち、試料番号1は不透明鉱物、試料番号5は斜方輝石と不透明鉱物、試料番号10は斜方輝石、角閃石、ザクロ石、緑レン石をそれぞれ主な鉱物とする。これらの中で、試料番号5は「両輝石型」の傾向を示す可能性があるが、試料番号10の鉱物の組み合わせは、三河地域に多いものである。

(2) 清洲城下町遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号15は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料のうち、試料番号11、12、14の3点はザクロ石を主な鉱物とする。試料番号11では他に斜方輝石と角閃石、試料番号12では他にジルコンが呈示される。試料番号13は、酸化角閃石が主な鉱物である。

主な鉱物として呈示しなかった微量の鉱物も考慮すれば、ほとんどの試料に角閃石やジルコン、ザクロ石といった要素があることから、全体的な傾向としては、「西三河型」に近いといえる。

(3) 名古屋城三の丸遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号17は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料とも、角閃石とザクロ石を主な鉱物とする。さらに、試料番号18では不透明鉱物、試料番号19ではジルコンと不透明鉱物、試料番号20ではジルコンが呈示される。

主な鉱物の組み合わせからみれば、「西三河型」の傾向が非常に強く認められる結果である。

(4) 清水遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号25は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料とも、角閃石を主な鉱物とする。さらに、試料番号21ではジルコンとザクロ石、試料番号22ではザクロ石、試料番号24ではカンラン石と斜方輝石が呈示される。

外町遺跡

遺跡の位置と主な鉱物の組み合わせから、どの試料も「西三河型」の胎土に近いものであろう。試料番号24に認められるカンラン石も西三河地域の土器胎土に認められることがあり、同地域の自然堆積の粘土中にも含まれることが当社の分析により確かめられている。

(5) 吉田城遺跡

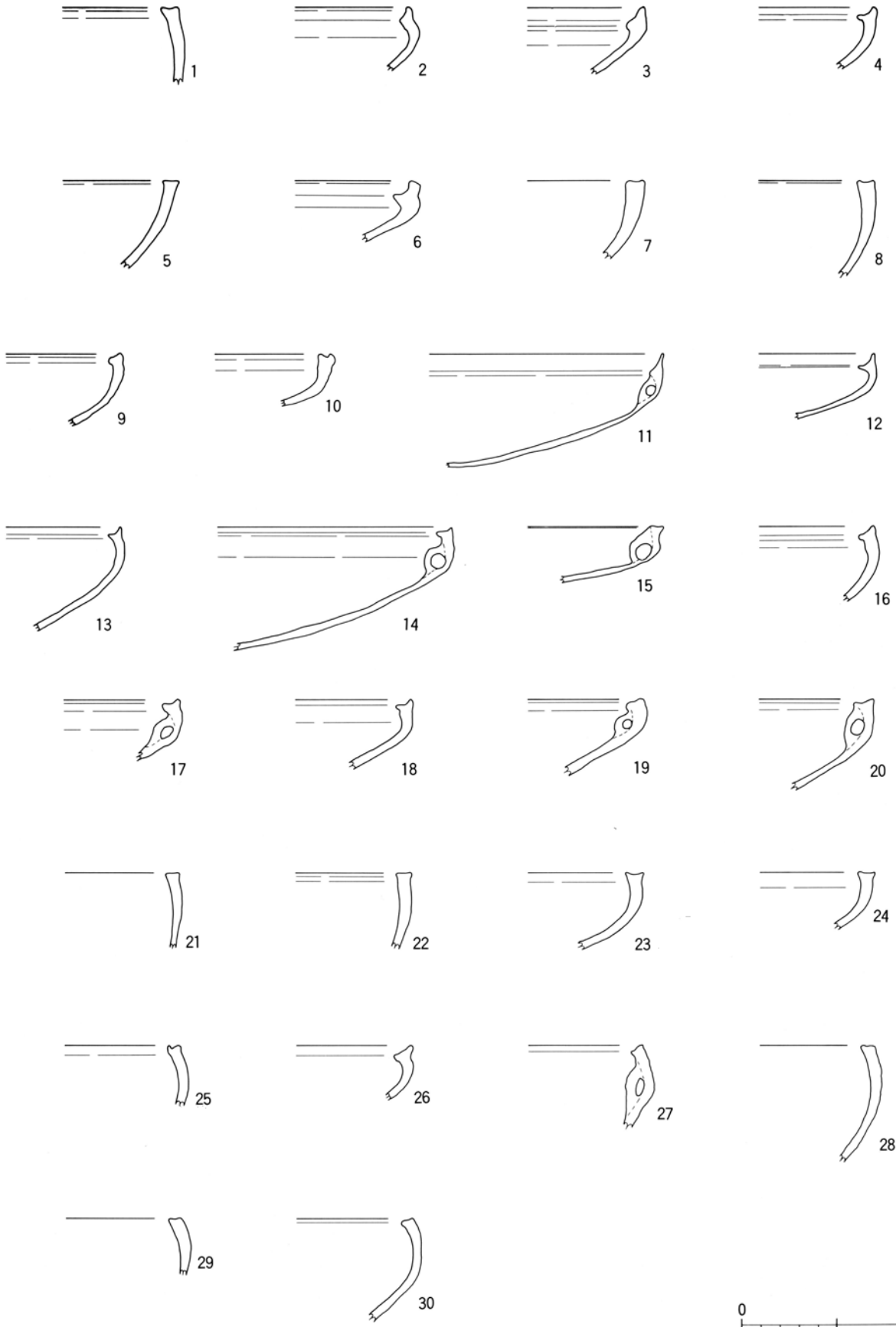
5点の試料のうち、同定粒数 100個以上を得られたのは、試料番号27の1点のみである。その組成は、「その他」が最も多いが、それを除けば酸化角閃石がやや多く、少量の斜方輝石と角閃石、微量のジルコンとザクロ石および不透明鉱物を含む。ここで、酸化角閃石も角閃石とみれば、この組成は「西三河型」に相当する。

同定粒数 100個未満の4点の試料は、全て不透明鉱物を主な鉱物とする。そのうち試料番号26、28、30の3点は角閃石が呈示され、さらに試料番号28と30の2点はザクロ石も呈示される。試料番号30は他に酸化角閃石も主な鉱物とする。試料番号29は、他にカンラン石を主な鉱物とする。

主な鉱物として呈示しなかった微量の鉱物も考慮すれば、ほとんどの試料に角閃石やジルコン、ザクロ石といった要素がある。またカンラン石については前述のような例があり、また酸化角閃石も試料番号27と同様に考えることができる。したがって、全体的な傾向としては、「西三河型」に近いといえる。さらに、試料番号28と30には、非常に微量の紅柱石が認められていることも「西三河型」に近いとされる要素である。

遺物 番号	調 査 地 点			材質	器種	法 量 (cm)				釉薬・調整等		備 考	時 期
	遺 跡 名	調査区	遺 構			器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
1	外町遺跡	I SS91B	SD025	土師質	鍋	—	19.0	19.7	—	—	指押痕	外面煤附着	19世紀中
2	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	38.0	38.8	—	—	—	〃	〃
3	〃	I SS91D	SD002	〃	〃	—	38.2	38.4	—	—	—	〃	〃
4	〃	〃	整地層	〃	〃	—	35.5	35.8	—	ナデ	指押痕	〃	18世紀末～19世紀
5	〃	〃	〃	〃	鍋	—	25.2	25.4	—	—	—	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	36.6	37.4	—	—	—	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	鍋	—	34.7	35.0	—	ナデ	指押痕	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	〃	—	29.4	—	—	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	34.8	35.2	—	—	〃	〃	〃
10	〃	〃	検Ⅱ	〃	〃	—	41.6	42.2	—	—	—	〃	〃
11	清洲城下町遺跡	I KJ61B	SK45下	〃	〃	5.9	35.4	—	—	—	—	〃	19世紀中
12	〃	〃	SK45	〃	〃	—	34.6	—	—	—	—	〃	〃
13	〃	I KJ89B	SX01	〃	〃	—	32.0	—	—	—	—	〃	18世紀後半
14	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	30.4	—	—	—	—	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃	—	30.0	—	—	—	—	〃	〃
16	名古屋城三の丸遺跡	Ⅱ NS91	SK101	〃	〃	—	48.8	49.4	—	ナデ	—	〃	19世紀中
17	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.3	34.6	—	〃	指押痕	〃	〃
18	〃	〃	SK333	〃	〃	—	31.5	31.8	—	〃	〃	〃	〃
19	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.2	34.6	—	—	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.3	—	—	—	〃	〃	〃
21	清水遺跡	Ⅲ SK90A	SK18上層	〃	鍋	—	28.5	29.0	—	—	—	〃	18世紀代
22	〃	〃	SK18中層	〃	〃	—	16.6	—	—	—	指押痕	〃	〃
23	〃	〃	SK18FⅠ層	〃	焙烙	—	30.0	—	—	—	〃	〃	〃
24	〃	〃	〃	〃	〃	—	27.9	—	—	—	—	〃	〃
25	〃	〃	SK18FⅡ層	〃	鍋	—	28.6	29.4	—	—	—	〃	〃
26	吉田城遺跡	Ⅳ TY90	SK01	〃	焙烙	—	34.8	35.0	—	—	指押痕	〃	19世紀前半
27	〃	〃	〃	〃	鍋	—	21.8	23.0	—	—	—	〃	〃
28	〃	〃	SD06	〃	〃	—	26.2	27.8	—	ナデ	指押痕	〃	〃
29	〃	〃	〃	〃	〃	—	26.8	28.0	—	〃	—	〃	〃
30	〃	〃	SD08	〃	焙烙	—	26.6	27.6	—	—	—	〃	19世紀代

第32表 分析遺物観察表



第113图 分析遗物实测图 (1:3)

4. 考察

今回の分析結果からは、胎土の重鉍物組成をこれまでの分析と同等に評価することはできないが、結果の項で述べた胎土のおおよその傾向に基づいて考察を進めたい。

本分析の試料は、いわゆる「在地」の土器といわれてきたものであるが、上記の胎土の傾向は、必ずしも厳密な意味での「在地」を示唆する結果とはいえない。濃尾平野中部に位置する外町遺跡での「在地」の範囲を尾張地域に想定するとすれば、在地の可能性の高い試料は、「両輝石型」の胎土を示す試料番号6と「両輝石型」に近いあるいはその傾向のある試料番号5と7ぐらいであり、他の試料は尾張地域産である可能性を指摘することができない。逆に試料番号2のように西三河地域からの搬入を示唆する試料が混在するのである。さらに、外町遺跡に近接する清洲城下町遺跡では、尾張地域産を示す「両輝石型」はほとんどなく、三河地域の胎土の傾向の強い試料のみとなっている。名古屋城三の丸遺跡では、西三河地域からの搬入品である可能性が高い試料ばかりであり、「両輝石型」の胎土を読み取ることはできない。一方、西三河地域にある清水遺跡の土器は、「西三河型」の傾向を示唆する胎土のものばかりであり、東三河地域にある吉田城遺跡の土器胎土からは、「西三河型」の傾向が窺える。これらの傾向が、近世の鍋や焙烙などの土製品をめぐるどのような事情を反映しているかは、現在ではまだ解析することができない。ただし、より詳細な地域単位でみれば、そこには地域間の流通があったといえる。さらに、今回の結果では、西三河地域を中心とした流通事情も示唆される。そして、外町、清洲城下町、名古屋城三の丸の3遺跡における胎土の違いは、その社会的な環境（例えば町屋や武家地）や時代によって、その流通事情に変化があったことを表している可能性が高い。ところで、当社の分析による近世の江戸の遺跡から出土した焙烙の胎土は、全て関東地方産の可能性の高いものであったが、その中で時代によって若干の組成の違いがあるという指摘もできた。すなわち、江戸の焙烙も関東という広がりで見れば「在地」で間違いはないのであるが、関東の中での産地の違いは存在し、消費地では時代によってその流通事情が異なっていたと考えられるのである。

以上のことから、これまで単に「在地」とされていた近世の鍋や焙烙などの土製品も、愛知県や関東という比較的広い地域でみるならば「在地」で片付けることもできようが、それよりも狭い地域（関東ならば県程度、愛知県ならば尾張と三河程度の広がり）を設定するならば、産地や流通事情の解析が重要となってくる。今後、近世のいわゆる「在地」の土器について、その編年が進展するようであれば、それに基づいた胎土分析をすることによって、より詳細な解析が可能となるであろう。また、遺跡や遺構の性格まで把握することも、胎土分析をより有意義なものとするための条件であるといえる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

*酸化角閃石は、自然には一般に火山岩中に産する鉍物である。はじめ普通角閃石（本文では角閃石としている）として晶出したものが噴火の後に酸化して生じたものとされており、約 800℃の加熱により変化する（黒田・諏訪，1983）。愛知県周辺の地質を考慮すれば、吉田城遺跡試料中の酸化角閃石が火山岩に由来する可能性は低い。それよりも、800℃という温度に注目すれば、土器焼成により

普通角閃石が変化した可能性が考えられる。焼成時の火のまわり具合などで、部分的に普通角閃石が変化するのではないだろうか。したがって、焼成前の素地を考える場合には、酸化角閃石も普通角閃石に入れて考える。

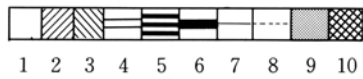
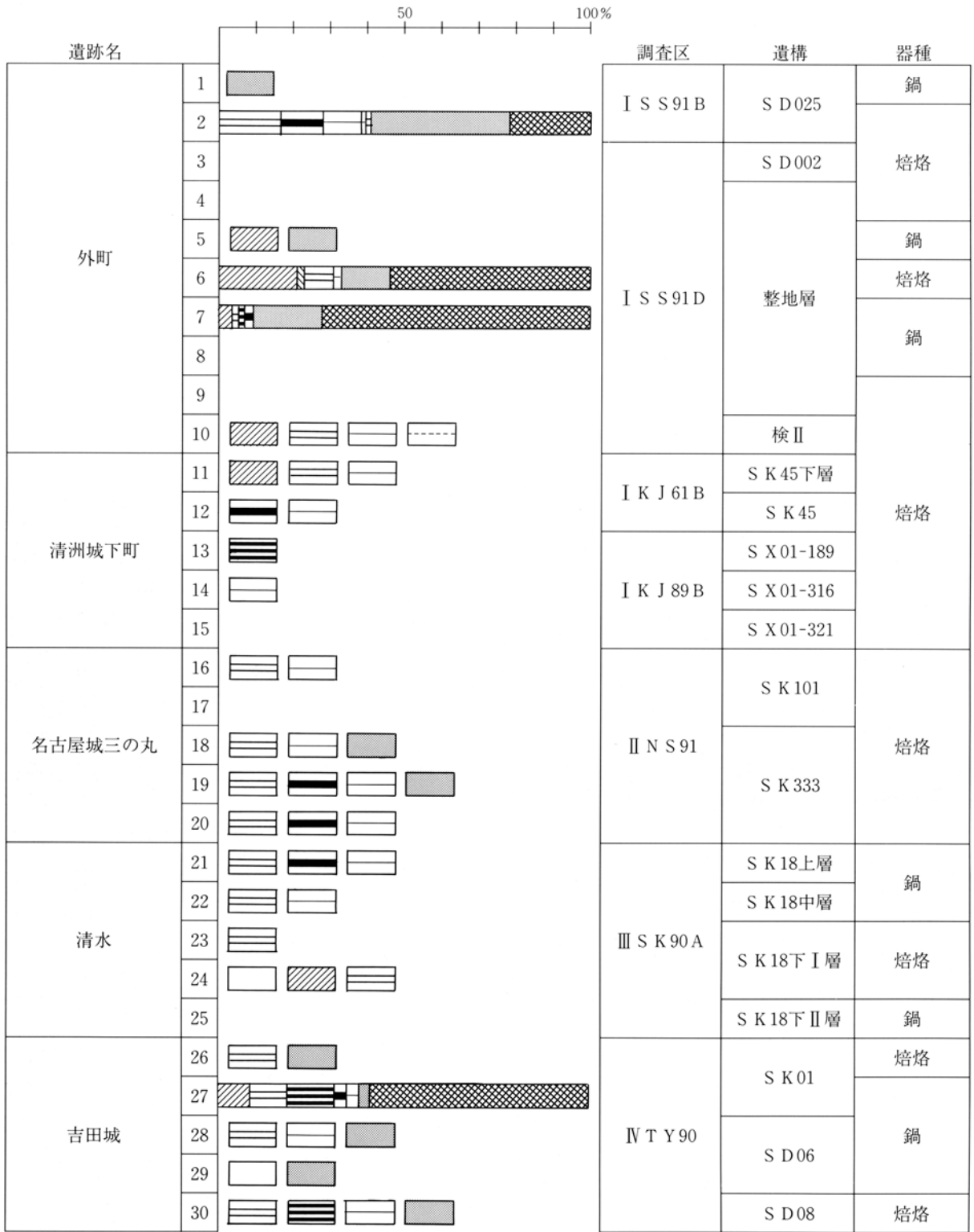
<参考文献>

黒田吉益・諏訪兼位 『偏光顕微鏡と造岩鉱物（第2版）』 P343 共立出版 1983

試料番号	重 鉍 物 組 成													重鉍物同定粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒柱石	褐色黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉍物	その他	
1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	23	27	53
2	0	0	0	16	0	0	0	11	10	1	1	36	21	96
3	0	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8	14
4	0	2	0	2	2	0	0	0	1	1	0	1	11	20
5	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12	18	36
6	0	21	2	8	0	0	0	0	2	0	0	13	54	100
7	0	4	0	2	2	0	0	3	0	0	1	21	83	116
8	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	4	6	15
9	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	15	19
10	0	3	0	2	1	0	0	0	2	5	0	1	11	25
11	0	4	1	6	0	0	0	0	6	0	0	1	11	29
12	0	1	0	1	0	0	0	7	4	1	0	0	56	70
13	0	0	0	2	4	0	0	1	1	0	0	0	21	29
14	0	0	0	0	0	0	0	3	6	1	0	3	50	63
15	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	12	16
16	1	2	0	9	0	0	0	3	8	0	0	1	39	63
17	0	1	0	2	1	0	2	0	2	0	0	0	11	19
18	0	0	1	7	0	0	0	3	7	0	0	7	9	34
19	0	1	0	17	0	0	3	5	4	2	0	6	37	75
20	0	1	0	3	1	0	0	2	11	2	0	0	57	77
21	0	1	0	4	0	0	0	5	7	0	0	0	12	29
22	0	0	0	8	0	0	0	1	5	0	0	0	7	21
23	0	1	0	18	0	0	0	0	0	0	0	3	2	24
24	5	6	0	8	0	0	0	1	1	1	0	4	6	32
25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6
26	0	0	0	7	0	0	0	1	1	0	2	5	4	20
27	0	10	0	11	15	0	0	4	4	0	1	3	67	115
28	5	4	3	8	0	1	0	2	8	0	0	14	6	51
29	6	1	3	1	1	0	0	0	2	0	0	4	7	25
30	1	3	0	7	5	2	0	3	8	0	0	12	43	84

第33表 胎土重鉍物分析結果

外町遺跡



(1. カンラン石 2. 斜方輝石 3. 単斜輝石 4. 角閃石 5. 酸化角閃石 6. ジルコン
7. ザクロ石 8. 緑レン石 9. 不透明鉍物 10. その他)

第114図 試料の胎土重鉍物組成

第V章 結 語

第V章 結 語 目次

第1節	グリッド別遺物出土状況 …	117
第2節	遺物組成 ……………	118
第3節	まとめ ……………	121

扉写真 「清洲總圖 其二」

『尾張名所圖會 下巻』（愛知県郷土資料刊行会 1973）P5より転載

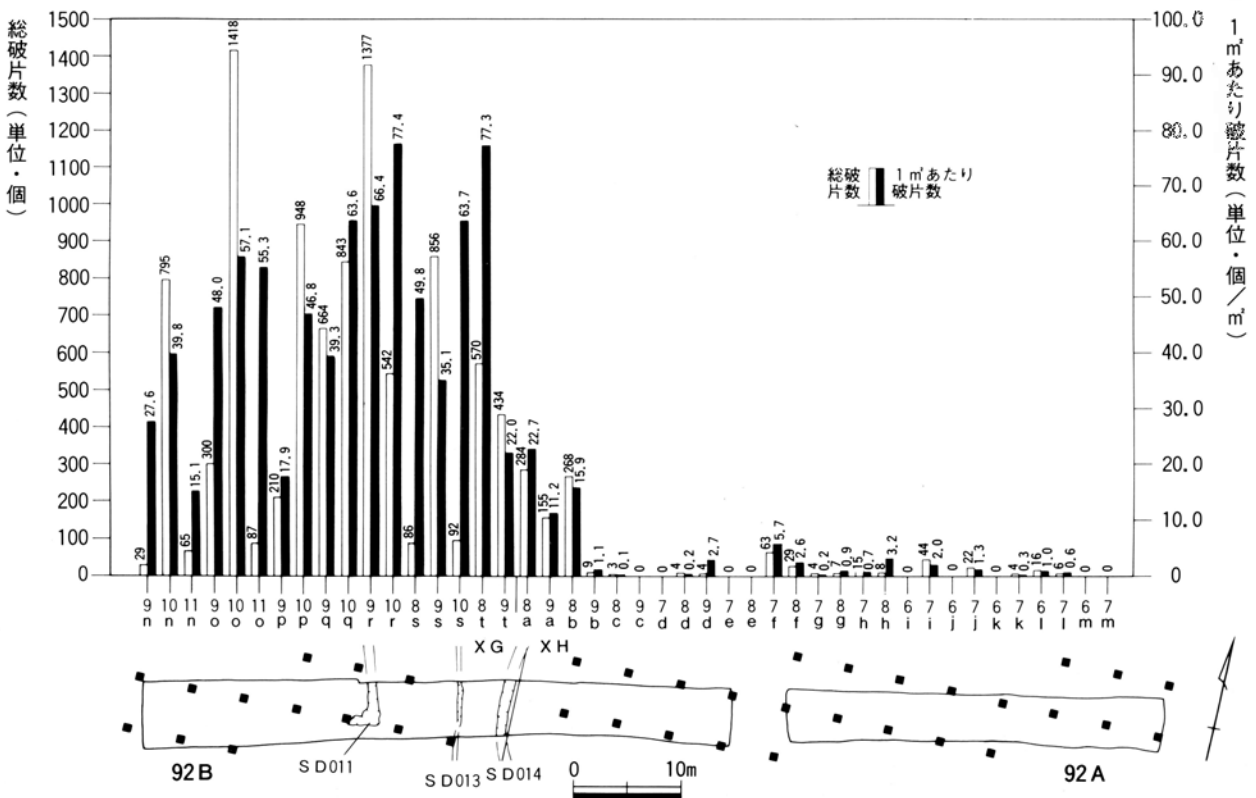
第1節 グリッド別遺物出土状況

今回の発掘調査において、6つの調査区より出土した遺物量は、27ℓ入りのコンテナで約300箱、破片総数で約4万点程になっている。その大半は、前述の通り近世陶磁器類と瓦類によって占められている。今回、遺構出土の遺物が少ないこと、明確に住宅を示す遺構を確認できなかったことなどから、居住域の範囲を限定することができなかったため、居住域を大量の出土遺物の出土状況から分析してみたい。ただし、その検証は、92A区と92B区の2つの調査区に限定して行う。

まず、92A区で出土した全遺物量は218点で、92B区より出土した全遺物量は10,043点におよび、92B区の遺物量の多さに気づく。これをグリッド毎に遺物の出土状況を見てみると、XH8a・9a付近を境にして、その東側では遺物の出土が極端に希薄になっていくことが見受けられる。このあたりは、既に畑地や田地であったことが確認されており、江戸時代を通じて人々の生活の痕跡を見ることはできない。しかし、畑地や田地の下からは鎌倉時代中頃と思われる溝やピットが確認されている。

また、1㎡あたりの出土遺物量とは、グリッド毎の総破片数を調査面積で割ったものであり、1㎡から何点の遺物が出土しているのかを表している。これによれば、XG8t・9tあたりまで出土量の多いことが分かる。

以上のことから、XG8t・9tあるいはXH8a・9a辺りを居住域の境とみることができよう。これを遺構と関連させて考えてみると、92B1区のXG9s・9t付近で検出された溝SD013及び、隣の調査区である91D1区の溝SD002を屋敷境の溝と捉えることができる。また、92B2区で確認されたSD209も、XG9r・9s・10r・10sに位置し、やはりこのあたりに屋敷地の境を想定することができよう。



第115図 グリッド別遺物出土状況図

第2節 遺物組成

1. はじめに

本報告書では、『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』を参考に、近世陶磁器類の分類・用途組成などを中心にまとめてきた。ただし、近世陶磁器類の平均値の出し方、分類や統計処理の方法をどのようにそろえていくのかなど、現状では検討すべき課題が多く残されている。今後、同様の分類・統計処理がによる結果が蓄積されていき、初めてデータとして利用することが可能となっていくものと思われる。すなわち、データの比較から、時期による遺物組成（例えば、用途・材質・産地など）の特徴や画期、社会的な階級や身分による格差などが明かとなっていくだろう。『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』においても、用途・材質・産地別にデータが紹介されており、同様の統計処理をすれば有効な資料を得ることができるものと思われる。本書に示した資料は、あくまで名古屋城三の丸地点の武士階級とは異なった一般の町人層の資料としての価値をもつものである。

本節で用いるのは、第Ⅲ章の遺物編で提示した各遺構出土の近世陶磁器類用途組成図と材質組成であり、それらをまとめたものが第116図と第117図（接合後口縁部残存率を全体の残存率で割った割合が示してある）である。全体とは近世陶磁器類の全出土遺物を示し、本遺跡における平均値を表している。整地層・SK（上面）合計・SK（下面）合計も参考資料としてあげてあるが、整地層からは全出土遺物の約3分の1が出土しており、整地が行われた時期である18世紀末～19世紀初頭を反映する資料と考えてもよい。SK（上面）合計・SK（下面）合計についても、それぞれ19世紀代と18世紀代を代弁する資料として見ておきたい。SK 240～SD 002については時期別に並べてある。それぞれの時期は、SK 240が16世紀末～17世紀初頭、SD 035が17世紀初頭、SD 209が17世紀中葉、SK 260が17世紀末～18世紀初頭、SD 202が18世紀後葉、SK 289が18世紀後葉～末、SK 228・SK 223が18世紀末、SD 025・SD 002が19世紀中葉となっている。

以下、用途と材質について年代を追って見ていくが、遺構より出土した遺物が少ないこともあり、これがそのまま近世における町屋の特徴を忠実に反映しているかどうかの検討は、今後の資料の増加に委ねるしかないが、1つの傾向を提示しておきたい。

2. 遺物の用途組成の推移

出土遺物の用途組成図（第116図）については、各遺構出土の遺物で用いたグラフをまとめたものであるが、ここでは化粧具・神仏具・喫煙具・調度具をその他の用途の遺物としてまとめて表示している。

全体として、各遺構より出土した遺物量が大きく違っているので、単純に比較することはできないが、供膳具・調理具・貯蔵具の割合が年代によって減少しているように見える。しかし、個体数（接合後口縁残存率の合計を12で割った値）自体は増加しているため、絶対量を考慮に入れて比較する必要があるといえよう。

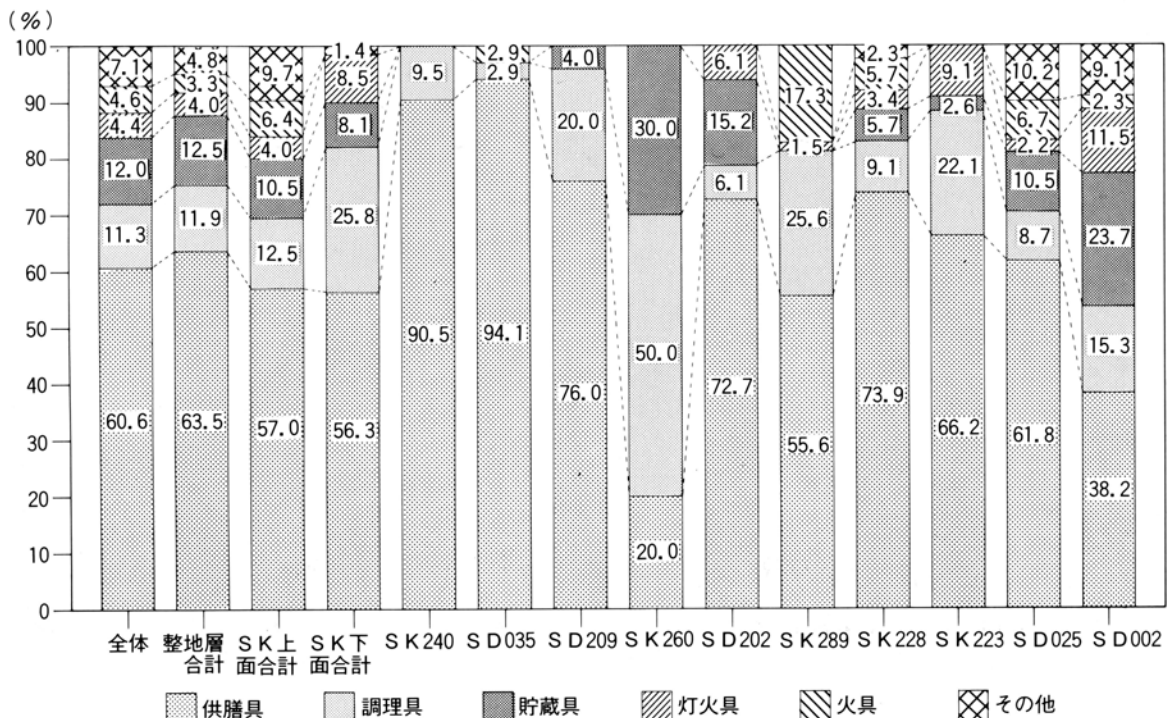
概ね17世紀代は、日常的な生活に関連する遺物群である供膳具・調理具・貯蔵具がその大半を占めている。これは、ある意味において近世の初期には、器種の細分化が進んでいないことを示している

ようにも解釈される。18世紀代になると、17世紀代に比べて出土遺物量が増加していく。17世紀代と比較して供膳具などの日常的な生活に関連する遺物群の占める割合が相対的に減少し、これに代わって灯火具や火具の割合が大きくなってきていることがわかる。出土量は少ないが、その他の用途の遺物もみることができる。19世紀代になると、さらに出土遺物量が急増し、供膳具・調理具・貯蔵具・灯火具・火具などの遺物の比率が相対的に減少し、その他の用途の遺物群の占める割合が増加していく。器種が、この時期になって多様化していることを示すものであろう。

3. 遺物の材質組成の推移

出土遺物の材質組成図（第117図）は、第III章の遺物編で各遺構毎に提示した集計表の個体数を材質毎に比率として示したものである。2と同様に、絶対量の変化は考慮に入れていない。

17世紀代では、土師質製品の占める割合が高く、磁器製品は破片だけが出土している。名古屋城三の丸遺跡では、磁器製品の占める割合が約10%前後を示しているが、この時期にはまだ高級品として流通し、町人層の生活の道具として利用されてはいなかったことを表わすものだろう。18世紀代には、土師質製品の占める割合が相対的に減少し、磁器製品の破片数が増加し始める。19世紀代になると、土師質製品が極端に減少し、磁器製品が急増していくことが読み取れる。土師質製品の比率の減少は、そのまま出土量の減少には結び付かず、量的には一定量を保持している状況にあり、安定した出土量を示しているものと思われる。また、磁器製品の比率の増加は、18世紀末に瀬戸で磁器の生産が開始されたことを反映しているものと思われる。19世紀代になると、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が1%弱出土してくる。



第116図 遺構別出土遺物の器種組成図

4. まとめと今後の課題

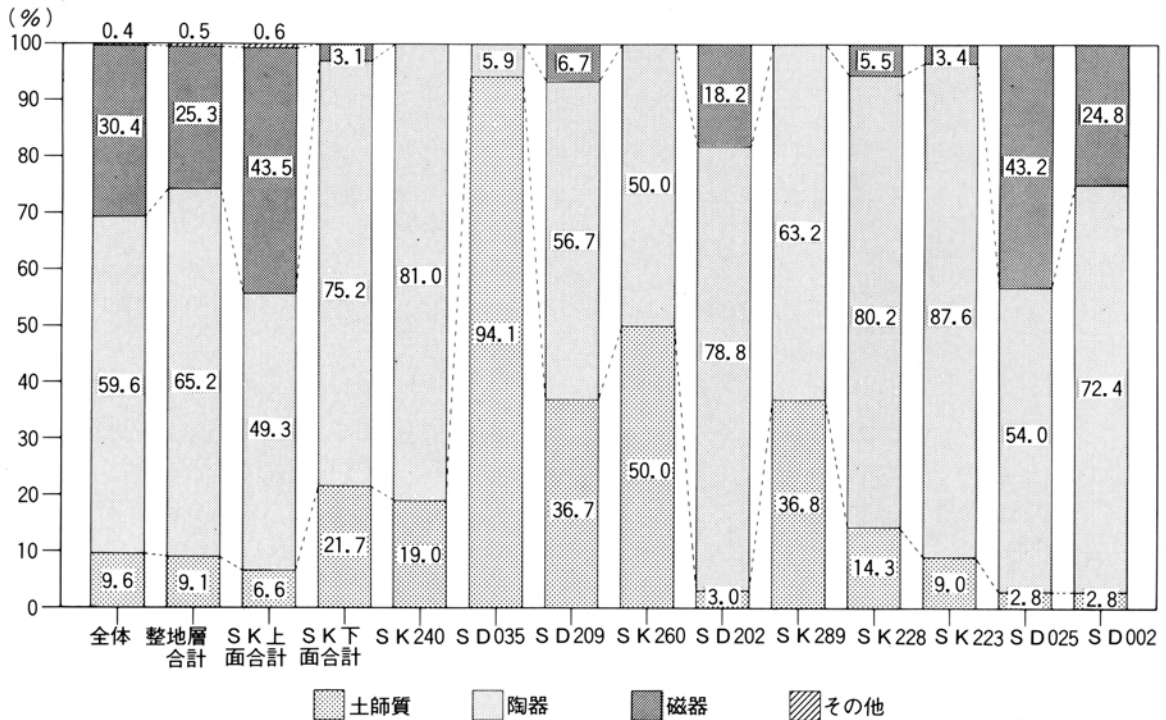
以上、年代毎に各遺構より出土した遺物の器種組成と材質組成について見てきた。名古屋城三の丸遺跡と同様に、本遺跡でも17世紀末～18世紀初頭と18世紀末～19世紀中葉に2つの画期を見出すことができるだろう。まず、17世紀末～18世紀初頭にかけては、灯火具・火具に分類される遺物の増加がみられる。また、18世紀末～19世紀中葉には、出土遺物量が増大し、その他に分類した化粧具・神仏具・喫煙具・調度具などの遺物や磁器製品が急増し、かつ軟質陶器類や瓦質製品が出てくる点に特色がある。これらの時期に、人々の生活において何等かの変化があったことを窺うことができる。

以上に示した結果は、今回の発掘調査の出土遺物によるものであり、本遺跡の全てにあてはまるものではないし、況や江戸時代の全ての遺跡にあてはまるものでもない。まだまだ、多くの問題点が残されている。例えば、器種分類で用いた用途についても、本当にその用途で利用されたのかという疑問は残されており、これからの検討が必要になってくる。また、遺構出土の遺物が少ないものを、単純に他の遺跡のデータと比較していいのか、絶対量の変化など、まだまだ多くの問題点を含んでいる。これらを解決していくためには、共通の分析法によるデータの比較が必要であろう。それによって、初めて名古屋城三の丸遺跡などの上級武士と他の遺跡の下級武士、本遺跡の町人層の社会生活の具体的な内容が、出土遺物から比較・検討されていくものと考えられる。

<参考文献>

遠藤才文編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』（助愛知県埋蔵文化財センター 1993）

遠藤才文 「名古屋城三の丸における陶磁器の消費動向」 『近世陶磁器の諸様相 第5回関西近世考古学研究大会 発表要旨』 1993



第117図 遺構別出土遺物の材質組成

第3節 まとめ

以上、今回の発掘調査の結果を項目毎に区分し、事実関係をでき得る限り詳細に報告してきた。最後に、明らかにし得た内容をまとめておきたい。

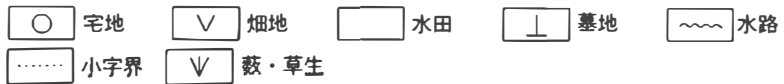
まず、遺構については、住居移転に伴う攪乱を多く受けており、しかも調査区が幅約5mと狭かったため、復元して遺構を捉えることは難しかった。しかし、『尾張名所図会』（本章扉写真）や「須ヶ口古図」（第119図）を見てみると、美濃街道に沿って屋敷が立ち並び、その裏手には畑地や田地在り展開している様子を窺うことができる。今回、屋敷地を明確に検出することはできなかったが、溝によって畑地や田地とは区分されていたようで、江戸時代を通じてこのような風景が広がっていたものと思われる。その他、江戸時代以前の清洲城下町期の溝・土坑、井戸なども検出されており、清洲城下町の外郭に外町が形成されていたこと、さらに、鎌倉時代中頃の土坑・ピットなども確認され、人々がこの地に生活しはじめた時期として、中世あるいは古代にまで遡ることが確認された。しかし、ここが居住域なのか墓域になるのかまではわからなかった。

遺物については、個々の遺物に関する記述を省略して、近世陶磁器類を主に用途によって分類し、遺構毎にその違いを明らかにしてきた。しかし、遺構より出土した遺物よりも整地層や包含層出土の遺物の方が多く、主眼であった各遺構や各時期の用途組成・材質組成の相違を明確にできたとはいえない。遺物の器種組成を見ることで、その遺構の性格を考える資料にするという当初の目的は、19世紀代については出土遺物量も多く実現できたと思われるが、17・18世紀代については、出土遺物量が少なく不十分なままで終わっている。名古屋城三の丸遺跡との比較・検討も不十分で、近世陶磁器類の器種組成・材質組成による相違、身分による遺物の格差という点が明確にできなかったこと、さらには、その記述が近世陶磁器類に終始し、その他の出土遺物である人形類・木製品・金属製品・石製品などに十分な検討を加えることができなかったことが残念である。全出土遺物の総合的な分析によって、上記の遺物を検討していく必要があり、これから近世遺跡の調査を行うにあたっては、同一の分析・統計方法をとることによって、他の近世遺跡と比較・検討できるデータが蓄積されていくことが強く希望される。近世遺跡における、分析方法の統一化が求められるのである。

近年、各地で近世遺跡の発掘調査が急増している。しかし、江戸時代を考古学の対象として発掘調査するようになったのは、まだここ数十年と浅い。これに対して、文献の分野においては、かなりの成果が示されてきている。いづれにおいても、近世の遺跡を調査する場合には、単に考古学の分野だけではなく、歴史学、文献史学、建築史、都市史など多くの学問領域の成果をも踏まえた上で、調査・整理を実施していかなければ当時の人々の生活の実相は解明できないと実感した。（小嶋廣也）

<参考文献>

『新川町の文化財 第一集』 新川町教育委員会 1987



第118図 地籍図（愛知県公文書館所蔵の明治17年の地籍字分全図の一部）

第119図